



Amazon EMR on EKS 開発ガイド

Amazon EMR



Amazon EMR: Amazon EMR on EKS 開発ガイド

Copyright © 2023 Amazon Web Services, Inc. and/or its affiliates. All rights reserved.

Amazon の商標およびトレードドレスは、顧客に混乱を招く可能性がある態様、または Amazon の信用を傷つけたり、失わせたりする態様において、Amazon のものではない製品またはサービスに関連して使用してはなりません。Amazon が所有していない他のすべての商標は、それぞれの所有者の所有物であり、Amazon と提携、接続、または後援されている場合とされていない場合があります。

Table of Contents

EKS での Amazon EMR とは	1
アーキテクチャ	2
概念	3
Kubernetes 名前空間	3
仮想クラスター	3
ジョブ実行	4
Amazon EMR コンテナ	4
コンポーネント間の連携の仕組み	4
はじめに	6
Spark アプリケーションの実行	7
ベストプラクティス	13
セキュリティ	13
Pyspark ジョブ送信	13
ストレージ	13
メタストア統合	14
Debugging	14
EKS での Amazon EMR に関する問題のトラブルシューティング	14
ノードの配置	14
パフォーマンス	14
コスト最適化	14
AWS Outposts を使用する	15
Docker イメージのカスタマイズ	16
Docker イメージをカスタマイズする方法	16
前提条件	17
ステップ 1: Amazon Elastic Container Registry (Amazon ECR) からベースイメージを取得する	17
ステップ 2: ベースイメージをカスタマイズする	18
ステップ 3: (オプション、ただし推奨) カスタムイメージを検証する	19
ステップ 4: カスタムイメージを公開する	20
ステップ 5: カスタムイメージを使用して Amazon EMR で Spark ワークロードを送信する	21
インタラクティブエンドポイントの Docker イメージをカスタマイズする	24
マルチアーキテクチャイメージを使用する	25
ベースイメージ URI を選択する方法	27

Amazon ECR レジストリアカウント	28
考慮事項	29
Flink ジョブの実行	31
Flink Kubernetes オペレータ	31
セットアップ	32
はじめに	33
Flink アプリケーションの実行	35
セキュリティ	37
オペレータのアンインストール	39
Native Kubernetes	40
セットアップ	41
はじめに	41
セキュリティ要件	44
モニタリング	45
Amazon Managed Service for Prometheus の使用	45
Flink UI の使用	47
モニタリング設定の使用	48
高可用性の使用	53
Autoscaler の使用	58
トラブルシューティング	60
Amazon EMR on EKS での Apache Flink のトラブルシューティング	61
サポートされているリリース	62
Spark ジョブの実行	63
StartJobRun	63
セットアップ	64
はじめに	87
Spark 演算子	90
セットアップ	90
はじめに	91
垂直的自動スケーリング	94
アンインストール	98
セキュリティ	99
spark-submit	109
セットアップ	109
はじめに	110
セキュリティ	111

ジョブ実行の管理	112
CLI を使用して管理する	112
Spark SQL スクリプトの実行	118
ジョブ実行状態	120
コンソールでジョブを表示する	121
一般的なジョブ実行エラー	121
ジョブ送信者分類の使用	128
概要	128
例	128
ジョブテンプレートの使用	132
ジョブ実行を開始するためのジョブテンプレートの作成と使用	132
ジョブテンプレートパラメータの定義	134
ジョブテンプレートへのアクセスの制御	136
ポッドテンプレートの使用	138
一般的なシナリオ	138
Amazon EMR on EKS でポッドテンプレートを有効にする	140
ポッドテンプレートフィールド	142
サイドカーコンテナの考慮事項	145
再試行ポリシーの使用	147
再試行ポリシーの設定	147
ポリシーステータスの取得	149
ジョブの監視	150
ドライバーログの検索	151
Spark イベントログのローテーションを使用する	151
Spark コンテナログのローテーションを使用する	152
垂直的自動スケーリングを使用する	154
セットアップ	155
はじめに	158
構成	159
レコメンデーションをモニタリングする	165
アンインストール	166
インタラクティブワークロードの実行	168
インタラクティブエンドポイントの概要	168
インタラクティブエンドポイントの前提条件	171
AWS CLI	171
eksctl	171

Amazon EKS クラスター	171
クラスターアクセスを許可する	172
サービスアカウントの IAM ロールの有効化	172
IAM ジョブ実行ロールを作成する	172
ユーザーにアクセス権を付与する	172
Amazon EKS クラスターを Amazon EMR に登録する	173
Load Balancer Controller	173
インタラクティブエンドポイントの作成	173
インタラクティブエンドポイントを作成する	174
カスタムパラメータを指定する	174
.....	176
インタラクティブエンドポイントのパラメータ	176
インタラクティブエンドポイントの設定	177
スパークジョブのモニタリング	177
カスタムポッドテンプレート	179
JEG ポッドのノードグループへのデプロイ	180
JEG の設定オプション	184
PySpark パラメータの変更	184
カスタムカーネルイメージ	185
インタラクティブエンドポイントのモニタリング	187
例	189
セルフホスト型 Jupyter Notebook を使用する	190
セキュリティグループの作成	190
インタラクティブエンドポイントを作成する	191
ゲートウェイサーバー URL を取得する	191
認証トークンを取得する	192
ノートブックをデプロイする	193
クリーンアップ	198
その他のオペレーション	199
.....	199
インタラクティブエンドポイントをリストする	200
インタラクティブエンドポイントを削除する	202
ジョブのモニタリング	203
Amazon CloudWatch Events でジョブをモニタリングする	203
CloudWatch Events で Amazon EMR on EKS を自動化する	204
例: Lambda を呼び出すルールを設定する	205

Amazon CloudWatch Events を使用して再試行ポリシーでジョブのドライバーポッドを監視する	206
仮想クラスターの管理	207
仮想クラスターを作成する	207
仮想クラスターを一覧表示する	209
仮想クラスターを説明する	209
仮想クラスターを削除する	209
仮想クラスターの状態	209
チュートリアル	210
Delta Lake の使用	210
Iceberg の使用	211
Spark RAPIDS の使用	212
Spark on Redshift の使用	216
Spark アプリケーションの起動	217
Amazon Redshift の認証	218
Amazon Redshift に対する読み書き	220
考慮事項	222
Volcano の使用	223
概要	223
インストール	223
送信: Spark オペレータ	224
送信: spark-submit	226
YuniKorn の使用	227
概要	228
クラスターを作成する	228
YuniKorn をインストールする	230
送信: Spark オペレータ	230
送信: spark-submit	233
セキュリティ	13
ベストプラクティス	237
最小特権の原則を適用する	237
エンドポイントのアクセスコントロールリスト	237
カスタムイメージの最新のセキュリティ更新プログラムを入手する	238
ポッドの認証情報アクセスを制限する	238
信頼できないアプリケーションコードを分離する	238
ロールベースのアクセスコントロール (RBAC) の許可	238

ノードグループの IAM ロールまたはインスタンスプロファイルの認証情報へのアクセスを制限する	239
データ保護	239
保管中の暗号化	240
転送中の暗号化	243
Identity and Access Management	243
対象者	244
アイデンティティを使用した認証	245
ポリシーを使用したアクセスの管理	248
Amazon EMR on EKS で IAM を使用する方法	251
サービスリンクロールの使用	258
Amazon EMR on EKS の管理ポリシー	262
Amazon EMR on EKS でのジョブ実行ロールの使用	262
アイデンティティベースポリシーの例	265
タグベースのアクセスコントロールのポリシー	268
トラブルシューティング	271
ログ記録とモニタリング	273
CloudTrail ログ	273
コンプライアンス検証	276
耐障害性	276
インフラストラクチャセキュリティ	277
構成と脆弱性の分析	277
インターフェイス VPC エンドポイント	277
Amazon EMR on EKS の VPC エンドポイントポリシーの作成	278
クロスアカウントアクセス	281
前提条件	282
クロスアカウントの Amazon S3 バケットまたは DynamoDB テーブルにアクセスする方法	282
リソースのタグ付け	287
タグの基本	287
リソースのタグ付け	288
タグの制限	289
AWS CLI および Amazon EMR on EKS API を使用してタグを処理する	289
トラブルシューティング	14
PVC ジョブの失敗	291
検証	291

パッチ	292
手動パッチ	295
垂直自動スケーリングの失敗	297
403 Forbidden エラー	298
名前空間が見つからない	298
Docker 資格情報エラー	298
Spark オペレータの失敗	299
Helm チャートのインストール時の失敗	299
サポートされていないファイルシステム例外	299
サービスエンドポイントとクォータ	301
サービスエンドポイント	301
Service Quotas	302
リリースバージョン	304
6.14.0 リリース	305
リリース	305
リリースノート	306
機能	308
emr-6.14.0-latest	308
emr-6.14.0-20231005	308
6.13.0 リリース	308
リリース	309
リリースノート	310
機能	311
emr-6.13.0-latest	312
emr-6.13.0-20230814	312
6.12.0 リリース	312
リリース	313
リリースノート	313
機能	315
emr-6.12.0-latest	315
emr-6.12.0-20230701	315
6.11.0 リリース	316
リリース	316
リリースノート	316
機能	318
emr-6.11.0-latest	318

emr-6.11.0-20230509	319
6.10.0 リリース	319
emr-6.10.0-latest	322
emr-6.10.0-20230624	322
emr-6.10.0-20230421	322
emr-6.10.0-20230403	322
emr-6.10.0-20230220	323
6.9.0 リリース	323
emr-6.9.0-latest	326
emr-6.9.0-20230624	326
emr-6.9.0-20221108	326
6.8.0 リリース	327
emr-6.8.0-latest	331
emr-6.8.0-20230624	331
emr-6.8.0-20221219	331
emr-6.8.0-20220802	332
6.7.0 リリース	332
emr-6.7.0-latest	334
emr-6.7.0-20230624	334
emr-6.7.0-20221219	334
emr-6.7.0-20220630	334
6.6.0 リリース	335
emr-6.6.0-latest	336
emr-6.6.0-20230624	336
emr-6.6.0-20221219	337
emr-6.6.0-20220411	337
6.5.0 リリース	337
emr-6.5.0-latest	339
emr-6.5.0-20221219	339
emr-6.5.0-20220802	339
emr-6.5.0-20211119	339
6.4.0 リリース	340
emr-6.4.0-latest	341
emr-6.4.0-20221219	341
emr-6.4.0-20210830	342
6.3.0 リリース	342

emr-6.3.0-最新	343
emr-6.3.0-20220802	344
emr-6.3.0-20211008	344
emr-6.3.0-20210802	344
emr-6.3.0-20210429	344
6.2.0 リリース	345
emr-6.2.0-最新	346
emr-6.2.0-20220802	346
emr-6.2.0-20211008	347
emr-6.2.0-20210802	347
emr-6.2.0-20210615	347
emr-6.2.0-20210129	348
emr-6.2.0-20201218	348
emr-6.2.0-20201201	348
5.36.0 リリース	348
emr-5.36.0-latest	350
emr-5.36.0-20221219	350
emr-5.36.0-20220620	350
emr-5.36.0-20220525	351
5.35.0 リリース	351
emr-5.35.0-latest	352
emr-5.35.0-20221219	352
emr-5.35.0-20220802	353
emr-5.35.0-20220307	353
5.34 リリース	353
emr-5.34.0-latest	354
emr-5.34.0-20220802	355
emr-5.34.0-20211208	355
5.33.0 リリース	355
emr-5.33.0-最新	357
emr-5.33.0-20221219	357
emr-5.33.0-20220802	357
emr-5.33.0-20211008	358
emr-5.33.0-20210802	358
emr-5.33.0-20210615	358
emr-5.33.0-20210323	358

5.32.0 リリース	359
emr-5.32.0-最新	360
emr-5.32.0-20220802	360
emr-5.32.0-20211008	361
emr-5.32.0-20210802	361
emr-5.32.0-20210615	361
emr-5.32.0-20210129	362
emr-5.32.0-20201218	362
emr-5.32.0-20201201	362
ドキュメント履歴	363

EKS での Amazon EMR とは

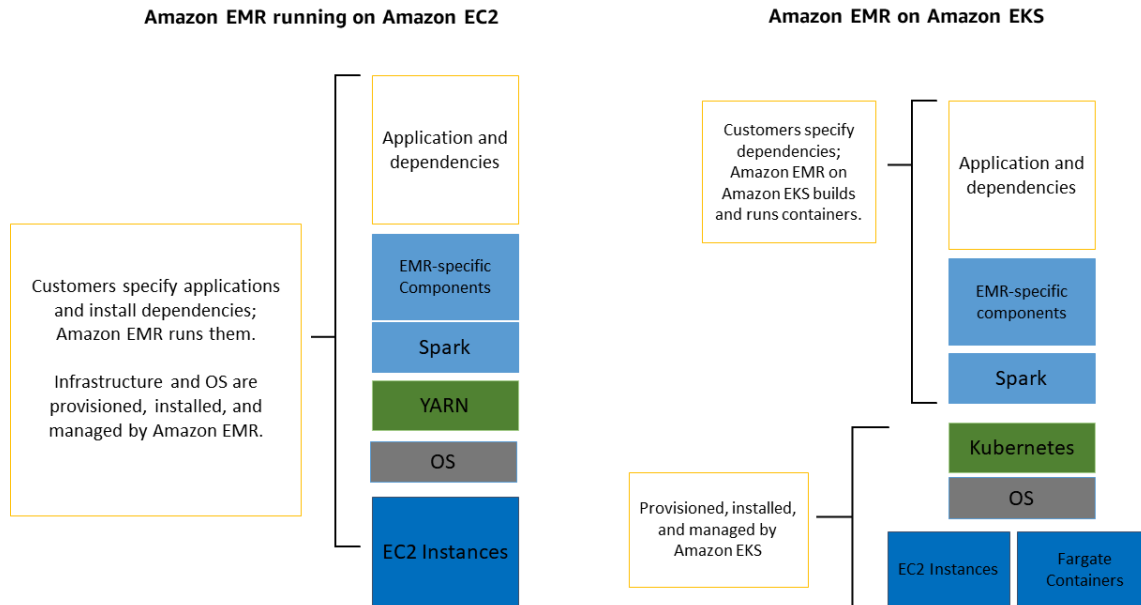
Amazon EMR on EKS には、Amazon Elastic Kubernetes Service (Amazon EKS) でオープンソースのビッグデータフレームワークを実行できる Amazon EMR のデプロイオプションが用意されています。Amazon EMR on EKS ではオープンソースアプリケーションのコンテナが自動的に構築、設定、管理されるため、ユーザーは分析ワークロードの実行に集中できます。

Amazon EMR を既に使用しているユーザーは、Amazon EMR ベースのアプリケーションを他のタイプのアプリケーションと共に同じ Amazon EKS クラスター上で実行できるようになります。さらに、このデプロイオプションを使用するとリソース使用率が向上し、複数のアベイラビリティーゾーンにわたるインフラストラクチャ管理が簡素化されます。Amazon EKS でビッグデータフレームワークを既に実行している場合は、Amazon EMR を使用してプロビジョニングと管理を自動化し、Apache Spark をより迅速に実行できるようになります。

Amazon EMR on EKS を使用すると、チームはより効率的にコラボレーションでき、大量のデータをより簡単かつ費用対効果の高い方法で処理できます。

- インフラストラクチャをプロビジョニングしなくても、共通のリソースプールでアプリケーションを実行できます。[Amazon EMR Studio](#) と AWS SDK または AWS CLI を使用して、EKS クラスターで実行されている分析アプリケーションを開発、送信、診断できます。Amazon EMR on EKS でスケジュールされたジョブは、セルフマネージドの Apache Airflow または Amazon Managed Workflows for Apache Airflow (MWAA) を使用して実行できます。
- インフラストラクチャチームは、共通のコンピューティングプラットフォームを一元管理して、Amazon EMR ワークロードを他のコンテナベースのアプリケーションと統合できます。一般的な Amazon EKS ツールを使用してインフラストラクチャ管理を簡素化し、さまざまなバージョンのオープンソースフレームワークを必要とするワークロードに共有クラスターを利用できます。さらに、Kubernetes クラスターの管理と OS のパッチ適用が自動化されるため、運用上のオーバーヘッドを削減できます。Amazon EC2 と AWS Fargate を使用して複数のコンピューティングリソースを有効にし、パフォーマンス、運用、財務上の要件を満たすことができます。

次の図は、Amazon EMR の 2 つの異なるデプロイモデルを示しています。



トピック

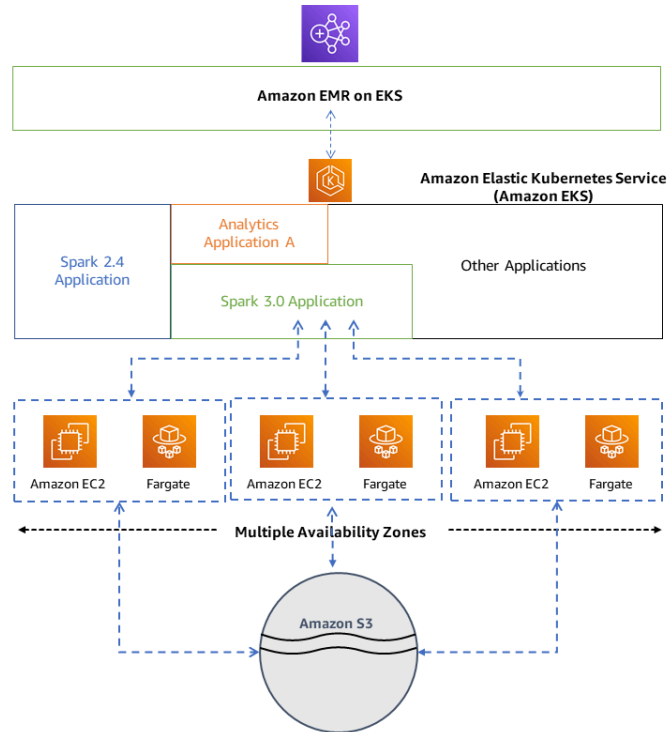
- [アーキテクチャ](#)
- [概念](#)
- [コンポーネント間の連携の仕組み](#)

アーキテクチャ

Amazon EMR on EKS では、アプリケーションとそれが実行されるインフラストラクチャが疎結合されます。各インフラストラクチャレイヤーで、後続レイヤーのオーケストレーションが提供されます。ユーザーが Amazon EMR にジョブを送信する際のジョブ定義には、アプリケーション固有のパラメータがすべて含まれます。Amazon EMR はこれらのパラメータを使用して、デプロイするポッドとコンテナを Amazon EKS に指示します。Amazon EKS は、ジョブの実行に必要な Amazon EC2 と AWS Fargate のコンピューティングリソースをオンラインにします。

このようなサービスの疎結合により、安全に分離された複数のジョブを同時に実行できます。また、異なるコンピューティングバックエンドで同じジョブをベンチマークしたり、複数のアベイラビリティゾーンにジョブを分散して可用性を向上させたりすることもできます。

次の図は、Amazon EMR on EKS が他の AWS サービスと連携する仕組みを示しています。



概念

Kubernetes 名前空間

Amazon EKS では、クラスターリソースを複数のユーザーとアプリケーションに分割するために Kubernetes 名前空間が使用されます。これらの名前空間はマルチテナント環境の基盤です。Kubernetes 名前空間では、Amazon EC2 または AWS Fargate をコンピューティングプロバイダーとして使用できます。この柔軟性により、ジョブを実行する際のパフォーマンスやコストについてさまざまなオプションを選択できます。

仮想クラスター

仮想クラスターとは、Amazon EMR が登録されている Kubernetes 名前空間です。Amazon EMR では、仮想クラスターを使用してジョブを実行し、エンドポイントをホストします。複数の仮想クラスターを同じ物理クラスターでバックアップできますが、各仮想クラスターは EKS クラスター上の 1 つの名前空間にマッピングされます。仮想クラスターでは、請求に適用されるアクティブなリソースや、サービスの外部でライフサイクル管理を必要とするアクティブなリソースは作成されません。

ジョブ実行

ジョブ実行とは、Amazon EMR on EKS に送信する Spark jar、PySpark スクリプト、SparkSQL クエリなどの作業単位です。1つのジョブに複数のジョブ実行を設定できます。ジョブ実行の送信時には、次の情報を含めます。

- ジョブを実行する仮想クラスター。
- ジョブを識別するジョブ名。
- 実行ロール。これはジョブを実行するスコープ付き IAM ロールで、ジョブからアクセスできるリソースを指定できます。
- Amazon EMR リリースラベル。使用するオープンソースアプリケーションのバージョンを指定します。
- ジョブの送信時に使用するアーティファクト (spark-submit パラメータなど)。

デフォルトでは、ログは Spark 履歴サーバーにアップロードされ、AWS Management Consoleからアクセス可能です。イベントログ、実行ログ、メトリクスを、Amazon S3 と Amazon CloudWatch にプッシュすることもできます。

Amazon EMR コンテナ

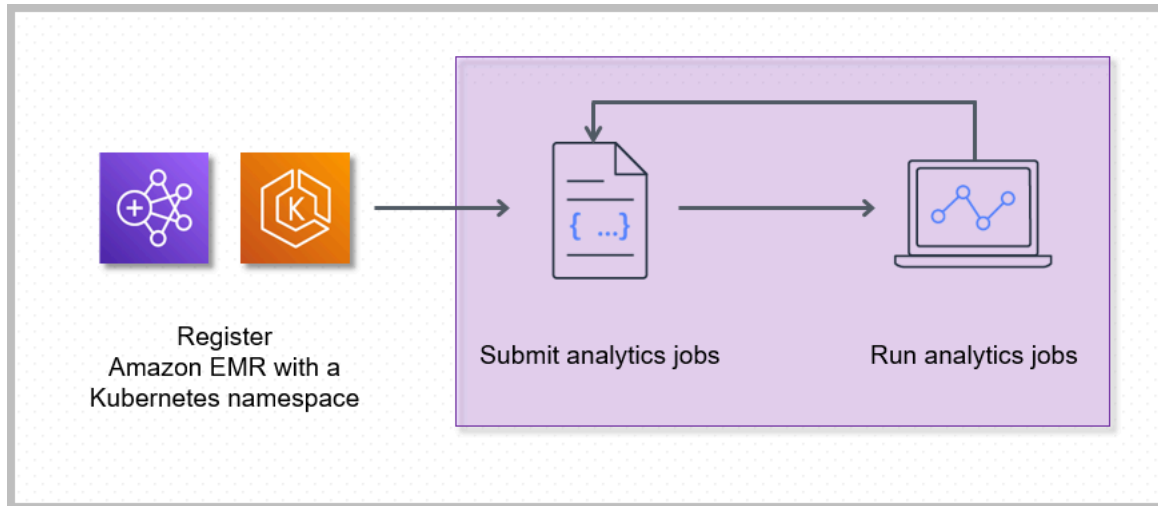
Amazon EMR コンテナとは、[Amazon EMR on EKS の API 名](#)です。次のシナリオで `emr-containers` プレフィックスを使用します。

- Amazon EMR on EKS の CLI コマンドのプレフィックスです。例えば、`aws emr-containers start-job-run` です。
- Amazon EMR on EKS の IAM ポリシーアクションの前に使用するプレフィックスです。例えば、`"Action": ["emr-containers:StartJobRun"]` です。詳細については、[Amazon EMR on EKS でのポリシーアクション](#)を参照してください。
- Amazon EMR on EKS サービスエンドポイントで使用するプレフィックスです。例えば、`emr-containers.us-east-1.amazonaws.com` です。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンポーネント間の連携の仕組み

次の手順と図は、Amazon EMR on EKS のワークフローを示しています。

- 既存の Amazon EKS クラスターを使用するか、[eksctl](#) コマンドラインユーティリティまたは Amazon EKS コンソールを使用してクラスターを作成します。
- Amazon EMR を EKS クラスター上の名前空間に登録して、仮想クラスターを作成します。
- AWS CLI または SDK を使用してジョブを仮想クラスターに送信します。



Amazon EMR を Amazon EKS 上の Kubernetes 名前空間に登録すると、仮想クラスターが作成されます。これで、Amazon EMR はその名前空間で分析ワークロードを実行できるようになります。ユーザーが Amazon EMR on EKS を使って Spark ジョブを仮想クラスターに送信すると、Amazon EMR on EKS は Amazon EKS 上の Kubernetes スケジューラにポッドのスケジュールをリクエストします。

Amazon EMR on EKS は、ユーザーが実行するジョブごとに、Amazon Linux 2 ベースイメージ、Apache Spark、および関連する依存関係を持つコンテナを作成します。各ジョブはポッドで実行され、コンテナがダウンロードされて実行が開始されます。ポッドはジョブの終了後に終了します。コンテナのイメージが既にノードにデプロイされている場合は、キャッシュされたイメージが使用されてダウンロードがバイパスされます。ログフォワーダーやメトリクスフォワーダーなどのサイドカーコンテナをポッドにデプロイできます。ジョブが終了した後でも、Amazon EMR コンソールの Spark アプリケーション UI を使用してジョブをデバッグできます。

はじめに

このトピックを参照し、仮想クラスターに Spark アプリケーションをデプロイすることで、EKS での Amazon EMR を使い始めるのに役立ちます。開始する前に、「[Amazon EMR on EKS のセットアップ](#)」の手順を完了しておくようにしてください。開始時に役立つ他のテンプレートについては、GitHub の「[EMR Containers Best Practices Guide](#)」を参照してください。

セットアップ手順の次の情報が必要になります。

- Amazon EMR に登録された Amazon EKS クラスターおよび Kubernetes 名前空間の仮想クラスター ID

⚠ Important

EKS クラスターを作成する際は、m5.xlarge をインスタンスタイプとして使用するか、CPU とメモリがそれよりも高いその他のインスタンスタイプを使用してください。CPU またはメモリが m5.xlarge よりも低いインスタンスタイプを使用すると、クラスターで使用可能なリソースが不足することによるジョブの失敗につながる可能性があります。

- ジョブの実行に使用する IAM ロールの名前
- Amazon EMR リリースのリリースラベル (たとえば、emr-6.4.0-latest など)
- ログイングおよびモニタリングの送信先ターゲット:
 - Amazon CloudWatch ロググループ名とログストリームのプレフィックス
 - イベントログとコンテナログを保存する Amazon S3 の場所

⚠ Important

Amazon EMR on EKS ジョブでは、モニタリングとログの送信先ターゲットとして Amazon CloudWatch と Amazon S3 を使用します。これらの送信先に送信されるジョブログを表示することで、ジョブの進行状況をモニタリングし、エラーのトラブルシューティングを行うことができます。ログを有効にするには、ジョブの実行の IAM ロールに関連付けられた IAM ポリシーに、ターゲットリソースへのアクセスに必要なアクセス許可が必要です。必要なアクセス許可が IAM ポリシーにない場合は、このサンプルジョブを実行する前に、[ジョブ実](#)

[行ロールの信頼ポリシーを更新する](#)、[Configure a job run to use Amazon S3 logs](#)、および [Configure a job run to use CloudWatch Logs](#) のステップに従う必要があります。

Spark アプリケーションの実行

次のステップに従って、EKS での Amazon EMR でシンプルな Spark アプリケーションを実行します。Spark Python アプリケーションのアプリケーション entryPoint ファイルは、`s3://REGION.elasticmapreduce/emr-containers/samples/wordcount/scripts/wordcount.py` にあります。`REGION` は、`us-east-1` など、Amazon EMR on EKS 仮想クラスターが存在するリージョンです。

1. 次のポリシーステートメントで示すように、必要なアクセス許可があるジョブ実行ロールの IAM ポリシーを更新します。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Sid": "ReadFromLoggingAndInputScriptBuckets",
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "s3:GetObject",
        "s3:ListBucket"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:s3::*:elasticmapreduce",
        "arn:aws:s3::*:elasticmapreduce/*",
        "arn:aws:s3::*:DOC-EXAMPLE-BUCKET-OUTPUT",
        "arn:aws:s3::*:DOC-EXAMPLE-BUCKET-OUTPUT/*",
        "arn:aws:s3::*:DOC-EXAMPLE-BUCKET-LOGGING",
        "arn:aws:s3::*:DOC-EXAMPLE-BUCKET-LOGGING/*"
      ]
    },
    {
      "Sid": "WriteToLoggingAndOutputDataBuckets",
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "s3:PutObject",
        "s3:DeleteObject"
      ],
    }
  ]
}
```

```
    "Resource": [
      "arn:aws:s3:::DOC-EXAMPLE-BUCKET-OUTPUT/*",
      "arn:aws:s3:::DOC-EXAMPLE-BUCKET-LOGGING/*"
    ],
  },
  {
    "Sid": "DescribeAndCreateCloudwatchLogStream",
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "logs:CreateLogStream",
      "logs:DescribeLogGroups",
      "logs:DescribeLogStreams"
    ],
    "Resource": [
      "arn:aws:logs:*:*:*"
    ]
  },
  {
    "Sid": "WriteToCloudwatchLogs",
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "logs:PutLogEvents"
    ],
    "Resource": [
      "arn:aws:logs:*:*:log-group:my_log_group_name:log-
stream:my_log_stream_prefix/*"
    ]
  }
]
```

- このポリシーの最初のステートメントである `ReadFromLoggingAndInputScriptBuckets` は、`ListBucket` および `GetObject` に次の Amazon S3 バケットへのアクセスを許可します。
 - *REGION*.elasticmapreduce - アプリケーション `entryPoint` ファイルが配置されているバケット。
 - *DOC-EXAMPLE-BUCKET-OUTPUT* - 出力データ用に定義するバケット。
 - *DOC-EXAMPLE-BUCKET-LOGGING* - ログデータ用に定義するバケット。

- このポリシーの 2 番目のステートメントである WriteToLoggingAndOutputDataBuckets は、出力バケットとログバケットにそれぞれデータを書き込むアクセス許可をジョブに付与します。
 - 3 番目のステートメントである DescribeAndCreateCloudwatchLogStream は、Amazon CloudWatch Logs を記述して作成するアクセス許可をジョブに付与します。
 - 4 番目のステートメントである WriteToCloudwatchLogs は、*my_log_stream_prefix* という名前のログストリームの下にある *my_log_group_name* という名前の Amazon CloudWatch ロググループにログを書き込むためのアクセス許可を付与します。
2. Spark Python アプリケーションを実行するには、次のコマンドを使用します。置き換え可能なすべての#####値を適切な値に置き換えます。*REGION* は、*us-east-1* など、Amazon EMR on EKS 仮想クラスターが存在するリージョンです。

```
aws emr-containers start-job-run \  
--virtual-cluster-id cluster_id \  
--name sample-job-name \  
--execution-role-arn execution-role-arn \  
--release-label emr-6.4.0-latest \  
--job-driver '{  
  "sparkSubmitJobDriver": {  
    "entryPoint": "s3://REGION.elasticmapreduce/emr-containers/samples/wordcount/  
scripts/wordcount.py",  
    "entryPointArguments": ["s3://DOC-EXAMPLE-BUCKET-OUTPUT/wordcount_output"],  
    "sparkSubmitParameters": "--conf spark.executor.instances=2 --  
conf spark.executor.memory=2G --conf spark.executor.cores=2 --conf  
spark.driver.cores=1"  
  }  
}' \  
--configuration-overrides '{  
  "monitoringConfiguration": {  
    "cloudWatchMonitoringConfiguration": {  
      "logGroupName": "my_log_group_name",  
      "logStreamNamePrefix": "my_log_stream_prefix"  
    },  
    "s3MonitoringConfiguration": {  
      "logUri": "s3://DOC-EXAMPLE-BUCKET-LOGGING"  
    }  
  }  
}'
```

このジョブからの出力データは、`s3://DOC-EXAMPLE-BUCKET-OUTPUT/wordcount_output` で使用できます。

ジョブ実行に指定されたパラメータを使用して、JSON ファイルを作成することもできます。次に、JSON ファイルへのパスを指定して `start-job-run` コマンドを実行します。詳細については、[StartJobRun でジョブ実行を送信する](#) を参照してください。ジョブ実行パラメータの設定について詳しくは、[ジョブ実行を構成するためのオプション](#) を参照してください。

3. Spark SQL アプリケーションを実行するには、次のコマンドを使用します。すべての#####
###値を適切な値に置き換えます。`REGION` は、`us-east-1` など、Amazon EMR on EKS 仮想クラスターが存在するリージョンです。

```
aws emr-containers start-job-run \  
--virtual-cluster-id cluster_id \  
--name sample-job-name \  
--execution-role-arn execution-role-arn \  
--release-label emr-6.7.0-latest \  
--job-driver '{  
  "sparkSqlJobDriver": {  
    "entryPoint": "s3://query-file.sql",  
    "sparkSqlParameters": "--conf spark.executor.instances=2 --  
conf spark.executor.memory=2G --conf spark.executor.cores=2 --conf  
spark.driver.cores=1"  
  }  
}' \  
--configuration-overrides '{  
  "monitoringConfiguration": {  
    "cloudWatchMonitoringConfiguration": {  
      "logGroupName": "my_log_group_name",  
      "logStreamNamePrefix": "my_log_stream_prefix"  
    },  
    "s3MonitoringConfiguration": {  
      "logUri": "s3://DOC-EXAMPLE-BUCKET-LOGGING"  
    }  
  }  
}'
```

SQL クエリファイルの例を以下に示します。テーブルのデータが保存される S3 などの外部ファイルストアが必要です。

```
CREATE DATABASE demo;
```

```
CREATE EXTERNAL TABLE IF NOT EXISTS demo.amazonreview( marketplace string,
customer_id string, review_id string, product_id string, product_parent string,
product_title string, star_rating integer, helpful_votes integer, total_votes
integer, vine string, verified_purchase string, review_headline string,
review_body string, review_date date, year integer) STORED AS PARQUET LOCATION
's3://URI to parquet files';
SELECT count(*) FROM demo.amazonreview;
SELECT count(*) FROM demo.amazonreview WHERE star_rating = 3;
```

このジョブの出力は、設定されている monitoringConfiguration に応じて S3 または CloudWatch のドライバーの stdout ログに表示されます。

- ジョブ実行に指定されたパラメータを使用して、JSON ファイルを作成することもできます。次に、JSON ファイルへのパスを指定して start-job-run コマンドを実行します。詳細については、「Submit a job run」を参照してください。ジョブ実行パラメータの設定について詳しくは、「Options for configuring a job run」を参照してください。

ジョブの進行状況をモニタリングしたり、失敗をデバッグしたりするには、Amazon S3、CloudWatch Logs、またはその両方にアップロードされたログを検査します。Amazon S3 のログパスについては、[Configure a job run to use S3 logs](#) を参照してください。CloudWatch Logs については、[Configure a job run to use CloudWatch Logs](#) を参照してください。CloudWatch Logs でログを表示するには、以下の手順に従います。

- CloudWatch コンソール (<https://console.aws.amazon.com/cloudwatch/>) を開きます。
- ナビゲーションペインで [ログ] を選択します。次に、[ロググループ] を選択します。
- Amazon EMR on EKS のロググループを選択したら、アップロードされたログイベントを表示します。



⚠ Important

ジョブには [デフォルトで再試行ポリシーが設定](#)されています。構成を変更または無効にする方法については、「[Using job retry policies](#)」を参照してください。

GitHub の EKS での Amazon EMR ベストプラクティスガイドへのリンク

「[Amazon EMR on EKS Best Practices Guide](#)」は、オープンソースコミュニティとのコラボレーションにより作成されました。これにより、さまざまなユースケースについて迅速に作業を進め、推奨事項を提示できます。これらのセクションについては、「[Amazon EMR on EKS best practices guide](#)」を使用することをお勧めします。各セクションのリンクを選択して GitHub サイトに移動します。

セキュリティ

Note

EKS での Amazon EMR のセキュリティの詳細については、「[Amazon EMR on EKS でのセキュリティのベストプラクティス](#)」を参照してください。

[暗号化のベストプラクティス](#): 保管中のデータおよび転送中のデータに暗号化を使用する方法。

[ネットワークセキュリティの管理](#)では、Amazon RDS や Amazon Redshift のように AWS のサービスにホストされているデータソースに接続する際の EKS での Amazon EMR のポッドのセキュリティグループを設定する方法について説明します。

[AWS Secrets Manager を使用してシークレットを保存します](#)。

Pyspark ジョブ送信

[Pyspark ジョブ送信](#): zip、egg、wheel、pex などのパッケージ形式を使用して、pySpark アプリケーションのさまざまなタイプのパッケージを指定します。

ストレージ

[EBS ボリュームの使用](#): EBS ボリュームを必要とするジョブに静的プロビジョニングと動的プロビジョニングを使用する方法。

[Amazon FSx for Lustre ボリュームの使用](#): Amazon FSx for Luster ボリュームを必要とするジョブに静的プロビジョニングと動的プロビジョニングを使用する方法。

[インスタンスストアボリュームの使用](#): ジョブ処理にインスタンスストアボリュームを使用する方法。

メタストア統合

[Hive メタストアの使用](#): Hive メタストアを使用するさまざまな方法を提供します。

[AWS Glue の使用](#): AWS Glue カタログを構成するさまざまな方法を提供します。

Debugging

[Spark デバッグの使用](#): ログレベルの変更の方法。

[ドライバーポッドの Spark UI への接続](#)。

[EKS での Amazon EMR でセルフホスト型の Spark 履歴サーバーを使用する方法](#)。

EKS での Amazon EMR に関する問題のトラブルシューティング

[トラブルシューティング](#)。

ノードの配置

single-az およびその他のユースケースでの [Kubernetes ノードセクターの使用](#)。

[Fargate ノード配置の使用](#)。

パフォーマンス

[動的リソース割り当て \(DRA\) の使用](#)。

Amazon VPC コンテナネットワークインターフェイスプラグイン (CNI)、Cluster Autoscaler、コア DNS の [EKS ベストプラクティス](#)。

コスト最適化

[スポットインスタンスの使用](#): Amazon EC2 スポットインスタンスのベストプラクティスと Spark ノードの廃止機能の使用方法。

AWS Outposts を使用する

[AWS Outposts を使用した EKS での Amazon EMR の実行](#)

Amazon EMR on EKS の Docker イメージのカスタマイズ

カスタマイズした Docker イメージは、Amazon EMR on EKS で使用できます。Amazon EMR on EKS ランタイムイメージをカスタマイズすると、次の利点を得られます。

- アプリケーションの依存関係とランタイム環境を単一のイミュータブルコンテナにパッケージ化し、移植性を高め、各ワークロードの依存関係管理を効率化します。
- ワークロードに最適化されたパッケージをインストールして設定します。これらのパッケージは、Amazon EMR ランタイムのパブリックディストリビューションでは広く利用できない場合があります。
- Amazon EMR on EKS を、ローカルでの開発やテストなど、組織内で現在確立されているビルド、テスト、デプロイの各プロセスと統合します。
- 組織内のコンプライアンスおよびガバナンス要件を満たす、確立されたセキュリティプロセス (イメージスキャンなど) を適用します。

トピック

- [Docker イメージをカスタマイズする方法](#)
- [ベースイメージ URI を選択する方法](#)
- [考慮事項](#)

Docker イメージをカスタマイズする方法

Amazon EMR on EKS の Docker イメージをカスタマイズするには、次のステップに従います。

- [前提条件](#)
- [ステップ 1: Amazon Elastic Container Registry \(Amazon ECR\) からベースイメージを取得する](#)
- [ステップ 2: ベースイメージをカスタマイズする](#)
- [ステップ 3: \(オプション、ただし推奨\) カスタムイメージを検証する](#)
- [ステップ 4: カスタムイメージを公開する](#)
- [ステップ 5: カスタムイメージを使用して Amazon EMR で Spark ワークロードを送信する](#)

Docker イメージをカスタマイズする際に考慮すべきその他のオプションは、次のとおりです。

- [インタラクティブエンドポイントの Docker イメージをカスタマイズする](#)

- [マルチアーキテクチャイメージを使用する](#)

前提条件

- Amazon EMR on EKS で [Amazon EMR on EKS のセットアップ](#) ステップを実行します。
- ご自分の環境に Docker をインストールします。詳細については、[Get Docker](#) を参照してください。

ステップ 1: Amazon Elastic Container Registry (Amazon ECR) からベースイメージを取得する

ベースイメージには、Amazon EMR ランタイムと、他の AWS サービスへのアクセスに使用されるコネクタが含まれています。Amazon EMR 6.9.0 以降の場合は、Amazon ECR パブリックギャラリーからベースイメージを取得できます。ギャラリーを参照してイメージリンクを見つけ、そのイメージをローカルワークスペースに取り込みます。例えば、Amazon EMR 6.14.0 リリースの場合、次の `docker pull` コマンドは最新の標準ベースイメージを取得します。 `emr-6.14.0:latest` を `emr-6.14.0-spark-rapids:latest` に置き換えると、Nvidia RAPIDS アクセラレーターがあるイメージを取得できます。 `emr-6.14.0:latest` を `emr-6.14.0-java11:latest` に置き換えて Java 11 ランタイムでイメージを取得することもできます。

```
docker pull public.ecr.aws/emr-on-eks/spark/emr-6.14.0:latest
```

Amazon EMR 6.9.0 以前のリリースのベースイメージを取得したい場合、または各リージョンの Amazon ECR レジストリアカウントから取得したい場合は、次のステップを使用してください。

1. ベースイメージ URI を選択します。次の例で示されるように、イメージ URI は `ECR-registry-account.dkr.ecr.Region.amazonaws.com/spark/container-image-tag` の形式に従います。

```
895885662937.dkr.ecr.us-west-2.amazonaws.com/spark/emr-6.6.0:latest
```

ご利用のリージョンのベースイメージを選択するには、[ベースイメージ URI を選択する方法](#) を参照してください。

2. ベースイメージが保存されている Amazon ECR リポジトリにログインします。 `895885662937` と `us-west-2` を、Amazon ECR レジストリアカウントと選択した AWS リージョンに置き換えます。

```
aws ecr get-login-password --region us-west-2 | docker login --username AWS --password-stdin 895885662937.dkr.ecr.us-west-2.amazonaws.com
```

3. ベースイメージをローカルワークスペースにプルします。*emr-6.6.0:latest* を、選択したコンテナイメージタグに置き換えます。

```
docker pull 895885662937.dkr.ecr.us-west-2.amazonaws.com/spark/emr-6.6.0:latest
```

ステップ 2: ベースイメージをカスタマイズする

Amazon ECR からプルしたベースイメージをカスタマイズするには、次のステップに従います。

1. ローカルワークスペースで新しい Dockerfile を作成します。
2. 前の手順で作成した Dockerfile を編集し、以下のコンテンツを追加します。この Dockerfile は、*895885662937.dkr.ecr.us-west-2.amazonaws.com/spark/emr-6.6.0:latest* からプルしたコンテナイメージを使用します。

```
FROM 895885662937.dkr.ecr.us-west-2.amazonaws.com/spark/emr-6.6.0:latest
USER root
### Add customization commands here ###
USER hadoop:hadoop
```

3. Dockerfile にコマンドを追加して、ベースイメージをカスタマイズします。たとえば、次の Dockerfile で示すように、Python ライブラリをインストールするコマンドを追加します。

```
FROM 895885662937.dkr.ecr.us-west-2.amazonaws.com/spark/emr-6.6.0:latest
USER root
RUN pip3 install --upgrade boto3 pandas numpy // For python 3
USER hadoop:hadoop
```

4. Dockerfile が作成されたディレクトリと同じディレクトリから、次のコマンドを実行して Docker イメージを作成します。Docker イメージの名前を指定します (例えば、*emr6.6_custom* など)。

```
docker build -t emr6.6_custom .
```

ステップ 3: (オプション、ただし推奨) カスタムイメージを検証する

公開する前に、カスタムイメージの互換性をテストすることをお勧めします。[Amazon EMR on EKS カスタムイメージ CLI](#) を使用して、イメージに Amazon EMR on EKS で実行するために必要なファイル構造と正しい構成があるかどうかを確認できます。

Note

Amazon EMR on EKS カスタムイメージ CLI では、イメージにエラーがないことを確認できません。ベースイメージから依存関係を削除する際は、注意してください。

カスタムイメージを検証するには、次のステップに従います。

1. Amazon EMR on EKS カスタムイメージ CLI をダウンロードしてインストールします。詳細については、[Amazon EMR on EKS カスタムイメージ CLI インストールガイド](#) を参照してください。
2. 以下のコマンドを実行して、インストールをテストします。

```
emr-on-eks-custom-image --version
```

出力の例を以下に示します。

```
Amazon EMR on EKS Custom Image CLI  
Version: x.xx
```

3. 以下のコマンドを実行して、カスタムイメージを検証します。

```
emr-on-eks-custom-image validate-image -i image_name -r release_version [-t image_type]
```

- **-i** には、検証する必要があるローカルイメージ URI を指定します。これには、イメージ URI や、イメージについて定義した任意の名前またはタグを指定できます。
- **-r** には、ベースイメージの正確なリリースバージョンを指定します (たとえば、`emr-6.6.0-latest` など)。
- **-t** には、イメージタイプを指定します。これが Spark イメージの場合は、`spark` を入力します。デフォルト値は、「`spark`」です。現在の Amazon EMR on EKS カスタムイメージ CLI バージョンでは、Spark ランタイムイメージのみがサポートされています。

コマンドが正常に実行され、カスタムイメージが必須のすべての設定とファイル構造を満たしている場合、以下の例で示すように、返される出力にはすべてのテストの結果が表示されます。

```
Amazon EMR on EKS Custom Image Test
Version: x.xx
... Checking if docker cli is installed
... Checking Image Manifest
[INFO] Image ID: xxx
[INFO] Created On: 2021-05-17T20:50:07.986662904Z
[INFO] Default User Set to hadoop:hadoop : PASS
[INFO] Working Directory Set to /home/hadoop : PASS
[INFO] Entrypoint Set to /usr/bin/entrypoint.sh : PASS
[INFO] SPARK_HOME is set with value: /usr/lib/spark : PASS
[INFO] JAVA_HOME is set with value: /etc/alternatives/jre : PASS
[INFO] File Structure Test for spark-jars in /usr/lib/spark/jars: PASS
[INFO] File Structure Test for hadoop-files in /usr/lib/hadoop: PASS
[INFO] File Structure Test for hadoop-jars in /usr/lib/hadoop/lib: PASS
[INFO] File Structure Test for bin-files in /usr/bin: PASS
... Start Running Sample Spark Job
[INFO] Sample Spark Job Test with local:///usr/lib/spark/examples/jars/spark-
examples.jar : PASS
-----
Overall Custom Image Validation Succeeded.
-----
```

カスタムイメージが必須の設定またはファイル構造を満たしていない場合、エラーメッセージが表示されます。返される出力では、誤った設定またはファイル構造に関する情報が提供されません。

ステップ 4: カスタムイメージを公開する

新しい Docker イメージを Amazon ECR レジストリに公開します。

1. 次のコマンドを実行して、Docker イメージを保存するための Amazon ECR リポジトリを作成します。リポジトリの名前を入力します (例えば、*emr6.6_custom_repo* など)。*us-west-2* を、ご利用のリージョンに置き換えます。

```
aws ecr create-repository \  
  --repository-name emr6.6_custom_repo \  
  --region us-west-2
```



```
--image-scanning-configuration scanOnPush=true \  
--region us-west-2
```

詳細については、Amazon ECR ユーザーガイドの[リポジトリの作成](#)を参照してください。

2. 次のコマンドを実行して、デフォルトレジストリに対して認証します。

```
aws ecr get-login-password --region us-west-2 | docker login --username AWS --  
password-stdin aws_account_id.dkr.ecr.us-west-2.amazonaws.com
```

詳細については、Amazon ECR ユーザーガイドの[デフォルトレジストリに対して認証する](#)を参照してください。

3. イメージにタグを付けて、作成した Amazon ECR リポジトリに公開します。

イメージにタグを付けます。

```
docker tag emr6.6_custom aws_account_id.dkr.ecr.us-  
west-2.amazonaws.com/emr6.6_custom_repo
```

イメージをプッシュします。

```
docker push aws_account_id.dkr.ecr.us-west-2.amazonaws.com/emr6.6_custom_repo
```

詳細については、Amazon ECR ユーザーガイドの[イメージを Amazon ECR にプッシュする](#)を参照してください。

ステップ 5: カスタムイメージを使用して Amazon EMR で Spark ワークロードを送信する

カスタムイメージを作成して公開したら、カスタムイメージを使用して Amazon EMR on EKS ジョブを送信できます。

まず、次の JSON ファイルの例で示すように、start-job-run-request.json ファイルを作成して、spark.kubernetes.container.image パラメータを指定し、カスタムイメージを参照します。

Note

以下の JSON スニペットの `entryPoint` 引数で示すように、`local://` スキームを使用してカスタムイメージで利用可能なファイルを参照できます。`local://` スキームを使用して、アプリケーションの依存関係を参照することもできます。`local://` スキームを使用して参照されるすべてのファイルと依存関係は、カスタムイメージの指定されたパスにすでに存在している必要があります。

```
{
  "name": "spark-custom-image",
  "virtualClusterId": "virtual-cluster-id",
  "executionRoleArn": "execution-role-arn",
  "releaseLabel": "emr-6.6.0-latest",
  "jobDriver": {
    "sparkSubmitJobDriver": {
      "entryPoint": "local:///usr/lib/spark/examples/jars/spark-examples.jar",
      "entryPointArguments": [
        "10"
      ],
      "sparkSubmitParameters": "--class org.apache.spark.examples.SparkPi --conf spark.kubernetes.container.image=123456789012.dkr.ecr.us-west-2.amazonaws.com/emr6.6_custom_repo"
    }
  }
}
```

次の例で示すように、`applicationConfiguration` プロパティを使用してカスタムイメージを参照することもできます。

```
{
  "name": "spark-custom-image",
  "virtualClusterId": "virtual-cluster-id",
  "executionRoleArn": "execution-role-arn",
  "releaseLabel": "emr-6.6.0-latest",
  "jobDriver": {
    "sparkSubmitJobDriver": {
      "entryPoint": "local:///usr/lib/spark/examples/jars/spark-examples.jar",
```

```
    "entryPointArguments": [
      "10"
    ],
    "sparkSubmitParameters": "--class org.apache.spark.examples.SparkPi"
  }
},
"configurationOverrides": {
  "applicationConfiguration": [
    {
      "classification": "spark-defaults",
      "properties": {
        "spark.kubernetes.container.image": "123456789012.dkr.ecr.us-
west-2.amazonaws.com/emr6.6_custom_repo"
      }
    }
  ]
}
}
```

次に、`start-job-run` コマンドを実行してジョブを送信します。

```
aws emr-containers start-job-run --cli-input-json file:///./start-job-run-request.json
```

上記の JSON の例では、`emr-6.6.0-latest` を Amazon EMR リリースバージョンに置き換えます。`-latest` リリースバージョンを使用して、選択したバージョンに最新のセキュリティ更新プログラムが含まれていることを確認することを強くお勧めします。Amazon EMR リリースバージョンおよびそれらのイメージタグの詳細については、「[ベースイメージ URI を選択する方法](#)」を参照してください。

Note

`spark.kubernetes.driver.container.image` と `spark.kubernetes.executor.container.image` を使用して、ドライバーポッドとエグゼキューターポッドに別のイメージを指定できます。

インタラクティブエンドポイントの Docker イメージをカスタマイズする

カスタマイズされたベースカーネルイメージを実行できるように、インタラクティブエンドポイント用の Docker イメージをカスタマイズすることもできます。これは、EMR Studio からインタラクティブワークロードを実行するときに必要な依存関係を確実に確保するのに役立ちます。

1. 上記の[ステップ 1~4](#)に従って、Docker イメージをカスタマイズします。Amazon EMR 6.9.0 リリース以降では、Amazon ECR パブリックギャラリーからベースイメージ URI を取得できます。Amazon EMR 6.9.0 より前のリリースでは、それぞれの AWS リージョンの Amazon ECR レジストリアカウントでイメージを取得できますが、唯一の違いは Dockerfile 内のベースイメージ URI です。ベースイメージ URI は次の形式に従います。

```
ECR-registry-account.dkr.ecr.Region.amazonaws.com/notebook-spark/container-image-tag
```

spark の代わりに、ベースイメージ URI で notebook-spark を使用する必要があります。ベースイメージには、Spark ランタイムと、Spark ランタイムで実行されるノートブックのカーネルが含まれています。リージョンとコンテナイメージタグの選択については、[ベースイメージ URI を選択する方法](#) を参照してください。

Note

現在のところ、ベースイメージのオーバーライドのみがサポートされており、ベースイメージ AWS が提供するもの以外の種類のまったく新しいカーネルの導入はサポートされていません。

2. カスタムイメージで使用できるインタラクティブエンドポイントを作成します。

まず、以下の内容で custom-image-managed-endpoint.json という JSON ファイルを作成します。

```
{
  "name": "endpoint-name",
  "virtualClusterId": "virtual-cluster-id",
  "type": "JUPYTER_ENTERPRISE_GATEWAY",
  "releaseLabel": "emr-6.6.0-latest",
  "executionRoleArn": "execution-role-arn",
  "certificateArn": "certificate-arn",
  "configurationOverrides": {
```

```
"applicationConfiguration": [
  {
    "classification": "jupyter-kernel-overrides",
    "configurations": [
      {
        "classification": "python3",
        "properties": {
          "container-image": "123456789012.dkr.ecr.us-
west-2.amazonaws.com/custom-notebook-python:latest"
        }
      },
      {
        "classification": "spark-python-kubernetes",
        "properties": {
          "container-image": "123456789012.dkr.ecr.us-
west-2.amazonaws.com/custom-notebook-spark:latest"
        }
      }
    ]
  }
]
```

次に、次の例で示すように、JSON ファイルで指定された設定を使用してインタラクティブエンドポイントを作成します。

```
aws emr-containers create-managed-endpoint --cli-input-json custom-image-managed-
endpoint.json
```

詳細については、「[Create an interactive endpoint for your virtual cluster](#)」を参照してください。

3. EMR Studio 経由でインタラクティブエンドポイントに接続します。詳細については、[Connecting from Studio](#) を参照してください。

マルチアーキテクチャイメージを使用する

Amazon EMR on EKS は、Amazon Elastic Container Registry (Amazon ECR) のマルチアーキテクチャコンテナイメージをサポートしています。詳細については、[Amazon ECR のマルチアーキテクチャコンテナイメージの紹介](#)を参照してください。

EKS での Amazon EMR カスタムイメージは、AWS Graviton ベースの EC2 インスタンスと非 Graviton ベースの EC2 インスタンスの両方をサポートしています。Graviton ベースのイメージは、非 Graviton ベースのイメージと同じ Amazon ECR のイメージリポジトリに格納されています。

例えば、Docker マニフェストリストに 6.6.0 イメージがあるかどうかを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
docker manifest inspect 895885662937.dkr.ecr.us-west-2.amazonaws.com/spark/emr-6.6.0:latest
```

出力は次のとおりです。arm64 アーキテクチャは Graviton インスタンス用です。amd64 は非 Graviton インスタンス用です。

```
{
  "schemaVersion": 2,
  "mediaType": "application/vnd.docker.distribution.manifest.list.v2+json",
  "manifests": [
    {
      "mediaType": "application/vnd.docker.distribution.manifest.v2+json",
      "size": 1805,
      "digest":
"xxx123:6b971cb47d11011ab3d45fff925e9442914b4977ae0f9fbcdf5cfa99a7593f0",
      "platform": {
        "architecture": "arm64",
        "os": "linux"
      }
    },
    {
      "mediaType": "application/vnd.docker.distribution.manifest.v2+json",
      "size": 1805,
      "digest":
"xxx123:6f2375582c9c57fa9838c1d3a626f1b4fc281e287d2963a72dfe0bd81117e52f",
      "platform": {
        "architecture": "amd64",
        "os": "linux"
      }
    }
  ]
}
```

マルチアーキテクチャイメージを作成するには、次のステップに従います。

1. 次の内容で Dockerfile を作成して、arm64 イメージをプルできるようにします。

```
FROM --platform=arm64 895885662937.dkr.ecr.us-west-2.amazonaws.com/spark/emr-6.6.0:latest
USER root

RUN pip3 install boto3 // install customizations here
USER hadoop:hadoop
```

2. マルチアーキテクチャイメージを作成するには、[Amazon ECR のマルチアーキテクチャコンテナイメージの紹介](#)の手順に従います。

Note

arm64 イメージは arm64 インスタンス上に作成する必要があります。同様に、amd64 インスタンス上に amd64 イメージを作成する必要があります。

Docker buildx コマンドを使用すると、特定のインスタンスタイプごとに作成せずに、マルチアーキテクチャイメージを作成することもできます。詳細については、[Leverage multi-CPU architecture support](#) を参照してください。

3. マルチアーキテクチャイメージを作成した後、同じ `spark.kubernetes.container.image` パラメータを使用してイメージを参照することにより、ジョブを送信できます。AWS Graviton ベースと非 Graviton ベースの EC2 インスタンスの両方を含む異種クラスターでは、インスタンスはそのイメージをプルするインスタンスアーキテクチャに基づいて正しいアーキテクチャイメージを決定します。

ベースイメージ URI を選択する方法

Note

Amazon EMR 6.9.0 以降のリリースでは、Amazon ECR パブリックギャラリーからベースイメージを取得できるため、このページの指示に従ってベースイメージ URI を作成する必要はありません。ベースイメージのコンテナイメージタグを見つけるには、EKS での Amazon EMR の該当するリリースの[リリースノートページ](#)を参照してください。

選択できるベース Docker イメージは、Amazon Elastic Container Registry (Amazon ECR) に保存されます。次の例で示すように、イメージ URI は `ECR-registry-account.dkr.ecr.Region.amazonaws.com/spark/container-image-tag` 形式に従います。

```
895885662937.dkr.ecr.us-west-2.amazonaws.com/spark/emr-6.14.0:latest
```

次の例で示すように、インタラクティブエンドポイントのイメージ URI は `ECR-registry-account.dkr.ecr.Region.amazonaws.com/notebook-spark/container-image-tag` 形式に従います。spark の代わりに、ベースイメージ URI で notebook-spark を使用する必要があります。

```
895885662937.dkr.ecr.us-west-2.amazonaws.com/notebook-spark/emr-6.14.0:latest
```

同様に、インタラクティブエンドポイント用の Spark python3 イメージ以外の場合、イメージ URI は `ECR-registry-account.dkr.ecr.Region.amazonaws.com/notebook-python/container-image-tag` です。次の URI の例は、正しい形式です。

```
895885662937.dkr.ecr.us-west-2.amazonaws.com/notebook-python/emr-6.14.0:latest
```

ベースイメージのコンテナイメージタグを見つけるには、EKS での Amazon EMR の該当するリリースの [リリースノートページ](#) を参照してください。

リージョン別の Amazon ECR レジストリアカウント

ネットワークレイテンシーが高くなるのを防ぐには、最も近い AWS リージョンからベースイメージをプルします。次の表に基づいて、イメージのプル元のリージョンに対応する Amazon ECR レジストリアカウントを選択します。

リージョン	Amazon ECR レジストリアカウント
ap-northeast-1	059004520145
ap-northeast-2	996579266876
ap-south-1	235914868574
ap-southeast-1	671219180197

リージョン	Amazon ECR レジストリアカウント
ap-southeast-2	038297999601
ca-central-1	351826393999
eu-central-1	107292555468
eu-north-1	830386416364
eu-west-1	483788554619
eu-west-2	118780647275
eu-west-3	307523725174
sa-east-1	052806832358
us-east-1	755674844232
us-east-2	711395599931
us-west-1	608033475327
us-west-2	895885662937

考慮事項

Docker イメージをカスタマイズする場合、ジョブの正確なランタイムをきめ細かなレベルで選択できます。この機能を使用する場合、次のベストプラクティスに従います。

- セキュリティは、AWS と顧客の間の責任共有です。イメージに追加するバイナリのセキュリティパッチの適用は、お客様が行います。[Amazon EMR on EKS でのセキュリティのベストプラクティス](#) (特に[カスタムイメージの最新のセキュリティ更新プログラムを入手する](#) および [最小特権の原則を適用する](#)) に従います。
- ベースイメージをカスタマイズするときは、Docker ユーザーを `hadoop:hadoop` に変更して、ルートユーザーを使用してジョブが実行されないようにする必要があります。

- EKS での Amazon EMR は、実行時に、`spark-defaults.conf` などのイメージの設定の上にファイルをマウントします。これらの設定ファイルを上書きするには、カスタムイメージでファイルを直接変更するのではなく、ジョブの送信中に `applicationOverrides` パラメータを使用することをお勧めします。
- EKS での Amazon EMR は、実行時に特定のフォルダをマウントします。これらのフォルダに加えられた変更は、コンテナでは使用できません。カスタムイメージにアプリケーションまたはその依存関係を追加する場合は、次の事前定義パスの一部ではないディレクトリを選択することをお勧めします。
 - `/var/log/fluentd`
 - `/var/log/spark/user`
 - `/var/log/spark/apps`
 - `/mnt`
 - `/tmp`
 - `/home/hadoop`
- カスタマイズしたイメージは、Amazon ECR、Docker Hub、プライベートエンタープライズリポジトリなど、Docker と互換性があるリポジトリにアップロードできます。選択した Docker リポジトリを使用した Amazon EKS クラスター認証の設定については、「[Pull an Image from a Private Registry](#)」を参照してください。

EKS での Amazon EMR を使用した Flink ジョブの実行

Note

Apache Flink の機能は EKS での Amazon EMR のプレビュー版であり、変更される可能性があります。この機能は、[AWS サービス条件](#)で定義されているプレビューサービスとして提供されます。

Amazon EMR リリース 6.13.0 以降では、EKS での Amazon EMR のジョブ送信モデルとして、Apache Flink または Flink Kubernetes オペレータを使用する EKS での Amazon EMR をサポートしています。Apache Flink で EKS での Amazon EMR を使用すると、Amazon EMR リリースランタイムを使用して Flink アプリケーションを独自の Amazon EKS クラスターにデプロイおよび管理できます。Amazon EKS クラスターに Flink Kubernetes オペレーターをデプロイすると、そのオペレータを使用して Flink アプリケーションを直接送信できます。オペレータは Flink アプリケーションのライフサイクルを管理します。

トピック

- [Flink Kubernetes オペレータ](#)
- [Native Kubernetes](#)
- [Flink Kubernetes オペレータと Flink ジョブのモニタリング](#)
- [Flink 演算子と Flink アプリケーションでの高可用性 \(HA、High Availability\) の使用](#)
- [Flink アプリケーションでの Autoscaler の使用](#)
- [トラブルシューティング](#)
- [Apache Flink をサポートしている Amazon EMR on EKS のリリース](#)

Flink Kubernetes オペレータ

Note

Apache Flink の機能は EKS での Amazon EMR のプレビュー版であり、変更される可能性があります。この機能は、[AWS サービス条件](#)で定義されているプレビューサービスとして提供されます。

以下のページでは、Amazon EMR on EKS で Flink ジョブを実行できるよう、Flink Kubernetes オペレータをセットアップして使用方法について説明します。

トピック

- [Amazon EMR on EKS での Flink Kubernetes オペレータのセットアップ](#)
- [Amazon EMR on EKS で Flink Kubernetes オペレータを使ってみる](#)
- [Flink アプリケーションの実行](#)
- [セキュリティ](#)
- [Amazon EMR on EKS での Flink Kubernetes オペレータのアンインストール](#)

Amazon EMR on EKS での Flink Kubernetes オペレータのセットアップ

Flink Kubernetes オペレータを Amazon EKS にインストールする前に、以下のタスクを完了してセットアップを行います。Amazon Web Services (AWS) に既にサインアップしていて、Amazon EKS を既に使用している場合、Amazon EMR on EKS を使用する準備はほぼ整っています。Amazon EKS で Flink Kubernetes オペレータのセットアップを行うには、以下のタスクを完了します。前提条件のいずれかを既に完了している場合は、その前提条件をスキップして、次の前提条件に進むことができます。

- [AWS CLI をインストールする](#) — AWS CLI を既にインストールしている場合は、それが最新バージョンであることを確認します。
- [eksctl のインストール](#) — eksctl は、Amazon EKS との通信に使用するコマンドラインツールです。
- [Helm のインストール](#) – Kubernetes 用の Helm パッケージマネージャーを使用すると、Kubernetes クラスターにアプリケーションをインストールして管理できます。
- [Amazon EKS クラスターのセットアップ](#) – 新しい Kubernetes クラスターをノードと共に Amazon EKS に作成する手順に従います。
- [Amazon EMR リリースラベルの選択](#) (リリース 6.13.0 以降) – Flink Kubernetes オペレータは、Amazon EMR リリース 6.13.0 以降でサポートされています。
- [Amazon EKS クラスターでサービスアカウント \(IRSA\) の IAM ロールを有効にします。](#)
- [ジョブ実行ロールを作成します。](#)
- [ジョブ実行ロールの信頼ポリシーを更新する。](#)

- オペレータ実行ロールを作成します。この手順は省略可能です。Flink ジョブとオペレータに同じロールを使用できます。オペレータに異なる IAM ロールを使用する場合は、別のロールを作成できます。
- オペレータ実行ロールの信頼ポリシーを更新します。Amazon EMR Flink Kubernetes オペレータサービスアカウントにロールを使用する場合は、そのロールの信頼ポリシーエントリを 1 つ明示的に追加する必要があります。次の例に示した形式に従うことができます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "Federated": "arn:aws:iam::<AWS #####-id>:oidc-provider/
<OIDC_PROVIDER>"
      },
      "Action": "sts:AssumeRoleWithWebIdentity",
      "Condition": {
        "StringLike": {
          "<OIDC_PROVIDER>:sub": "system:serviceaccount:<NAMESPACE>:emr-
containers-sa-flink-operator"
        }
      }
    }
  ]
}
```

Amazon EMR on EKS で Flink Kubernetes オペレータを使ってみる

Note

Apache Flink の機能は EKS での Amazon EMR のプレビュー版であり、変更される可能性があります。この機能は、[AWS サービス条件](#)で定義されているプレビューサービスとして提供されます。

このトピックは、Flink をデプロイすることで、Amazon EKS で Flink Kubernetes オペレータを使ってみるときに参考になります。

オペレータのインストール

Apache Flink 用の Kubernetes オペレータをインストールするには、次の手順を実行します。

1. 「[the section called “セットアップ”](#)」のステップをまだ完了していない場合は完了します。
2. `cert-manager` を (Amazon EKS クラスターごとに 1 回) インストールして、ウェブフックコンポーネントを追加できるようにします。

```
kubectl apply -f https://github.com/cert-manager/cert-manager/releases/download/v1.12.0/cert-manager.yaml
```

3. Helm チャートをインストールします。

```
export VERSION=6.14.0 # The Amazon EMR release version
export NAMESPACE=The Kubernetes namespace to deploy the operator

helm install flink-kubernetes-operator-demo \
oci://public.ecr.aws/emr-on-eks/flink-kubernetes-operator \
--version $VERSION \
--namespace $NAMESPACE
```

出力例:

```
NAME: flink-kubernetes-operator-demo
LAST DEPLOYED: Tue May 31 17:38:56 2022
NAMESPACE: $NAMESPACE
STATUS: deployed
REVISION: 1
TEST SUITE: None
```

4. デプロイが完了するまで待ち、Helm チャートのインストールを検証します。

```
kubectl wait deployment flink-kubernetes-operator-demo --namespace $NAMESPACE --for
condition=Available=True --timeout=30s
```

5. デプロイが完了すると、次のメッセージが表示されます。

```
deployment.apps/flink-kubernetes-operator-demo condition met
```

6. 次のコマンドを使用して、デプロイしたオペレータを表示します。

```
helm list --namespace $NAMESPACE
```

次に、出力の例を示します。この例では、アプリのバージョン `x.y.z-amzn-n` が Amazon EMR on EKS リリースの Flink オペレータのバージョンと一致しています。詳細については、「[Apache Flink をサポートしている Amazon EMR on EKS のリリース](#)」を参照してください。

NAME	STATUS	CHART	NAMESPACE	REVISION	UPDATED	APP VERSION
flink-kubernetes-operator-demo	16:43:45.24148 -0500 EST	deployed	\$NAMESPACE	1	2023-02-22	flink-kubernetes-operator-emr-6.14.0 x.y.z-amzn-n

Flink アプリケーションの実行

Flink Kubernetes オペレータは、Amazon EMR 6.13.0 以降でサポートされています。Amazon EMR on EKS 6.13.0 以降で Flink Kubernetes オペレータを使用して Flink アプリケーションを実行するには、次の手順を実行します。

Note

パブリックプレビューでは、Amazon EMR on EKS Flink オペレータは Flink セッションジョブをサポートしていません。カスタムリソース定義 (CRD) `flinkdeployments.flink.apache.org` に定義されている Flink アプリケーションジョブのみを送信できます。

Note

Flink ジョブを送信する際に高可用性メタデータを保存するには、Amazon S3 バケットを作成する必要があります。この機能を使用しない場合には無効にできます。これは、デフォルトでは有効になっています。

1. Flink Kubernetes オペレータを使用して Flink アプリケーションを実行する前に、「[the section called “セットアップ”](#)」と「[the section called “オペレータのインストール”](#)」のステップを完了してください。
2. 次の例に示した内容で FlinkDeployment 定義ファイル `basic-example.yaml` を作成します。

```
apiVersion: flink.apache.org/v1beta1
kind: FlinkDeployment
metadata:
  name: basic-example
spec:
  flinkConfiguration:
    taskmanager.numberOfTaskSlots: "2"
    state.checkpoints.dir: CHECKPOINT S3 STORAGE PATH
    state.savepoints.dir: SAVEPOINT S3 STORAGE PATH
  flinkVersion: v1_17
  executionRoleArn: JOB EXECUTION IAM ROLE ARN
  emrReleaseLabel: "emr-6.13.0-flink-latest"
  jobManager:
    storageDir: HA S3 STORAGE PATH
    resource:
      memory: "2048m"
      cpu: 1
  taskManager:
    resource:
      memory: "2048m"
      cpu: 1
  job:
    # if you have your job jar in S3 bucket you can use that path as well
    jarURI: local:///opt/flink/examples/streaming/StateMachineExample.jar
    parallelism: 2
    upgradeMode: savepoint
    savepointTriggerNonce: 0
  monitoringConfiguration:
    cloudWatchMonitoringConfiguration:
      logGroupName: LOG GROUP NAME
```

3. 次のコマンドで Flink デプロイを送信します。これにより、`basic-example` という名前で FlinkDeployment オブジェクトも作成されます。


```
kubectl create -f example.yaml -n <NAMESPACE>
```

4. Flink UI にアクセスします。

```
kubectl port-forward deployments/basic-example 8081 -n <NAMESPACE>
```

5. localhost:8081 を開いて、Flink ジョブをローカルに表示します。
6. ジョブをクリーンアップします。チェックポイント、HA、セーブポイントメタデータ、CloudWatch ログなど、このジョブのために作成された S3 アーティファクトを忘れずにクリーンアップしてください。

Flink Kubernetes オペレータを利用して Flink にアプリケーションを送信する方法の詳細については、GitHub の `apache/flink-kubernetes-operator` フォルダにある「[Flink Kubernetes operator examples](#)」を参照してください。

セキュリティ

RBAC

オペレータをデプロイし、Flink ジョブを実行するには、オペレータロールとジョブロールという 2 つの Kubernetes ロールを作成する必要があります。Amazon EMR は、オペレータをインストールするときに、デフォルトでロールを 2 つ作成します。

オペレータロール

オペレータロールを使用すると、`flinkdeployments` を管理して Flink ジョブやその他のリソース (サービスなど) ごとに JobManager を作成および管理できます。

オペレータロールのデフォルト名は `emr-containers-sa-flink-operator` で、使用するには以下の権限が必要です。

```
rules:  
- apiGroups:  
  - ""  
  resources:  
  - pods  
  - services  
  - events  
  - configmaps  
  - secrets
```

```
- serviceaccounts
verbs:
- '*'
- apiGroups:
  - rbac.authorization.k8s.io
  resources:
  - roles
  - rolebindings
  verbs:
  - '*'
- apiGroups:
  - apps
  resources:
  - deployments
  - deployments/finalizers
  - replicasets
  verbs:
  - '*'
- apiGroups:
  - extensions
  resources:
  - deployments
  - ingresses
  verbs:
  - '*'
- apiGroups:
  - flink.apache.org
  resources:
  - flinkdeployments
  - flinkdeployments/status
  - flinksessionjobs
  - flinksessionjobs/status
  verbs:
  - '*'
- apiGroups:
  - networking.k8s.io
  resources:
  - ingresses
  verbs:
  - '*'
- apiGroups:
  - coordination.k8s.io
  resources:
  - leases
```

```
verbs:  
- '*'
```

ジョブロール

JobManager は、ジョブロールを使用して、ジョブごとに TaskManagers と ConfigMaps を作成および管理します。

```
rules:  
- apiGroups:  
  - ""  
  resources:  
  - pods  
  - configmaps  
  verbs:  
  - '*'  
- apiGroups:  
  - apps  
  resources:  
  - deployments  
  - deployments/finalizers  
  verbs:  
  - '*'
```

Amazon EMR on EKS での Flink Kubernetes オペレータのアンインストール

Note

Apache Flink の機能は EKS での Amazon EMR のプレビュー版であり、変更される可能性があります。この機能は、[AWS サービス条件](#)で定義されているプレビューサービスとして提供されます。

次の手順に従って、Flink Kubernetes オペレータをアンインストールします。

1. オペレータを削除します。

```
helm uninstall flink-kubernetes-operator-demo -n <NAMESPACE>
```

2. Helm がアンインストールしない Kubernetes リソースを削除します。

```
kubectl delete serviceaccounts, roles, rolebindings -l emr-  
containers.amazonaws.com/component=flink.operator --namespace <namespace>  
kubectl delete crd flinkdeployments.flink.apache.org  
flinksessionjobs.flink.apache.org
```

3. (オプション) cert-manager を削除します。

```
kubectl delete -f https://github.com/jetstack/cert-manager/releases/download/  
v1.12.0/cert-manager.yaml
```

Native Kubernetes

Note

Apache Flink の機能は EKS での Amazon EMR のプレビュー版であり、変更される可能性があります。この機能は、[AWS サービス条件](#)で定義されているプレビューサービスとして提供されます。

Amazon EMR リリース 6.13.0 以降では、Flink アプリケーションを Amazon EMR on EKS クラスターに送信して実行するために使用できるコマンドラインツールとして Flink Native Kubernetes がサポートされています。

トピック

- [Amazon EMR on EKS での Flink Native Kubernetes のセットアップ](#)
- [Amazon EMR on EKS の Flink Native Kubernetes を試してみる](#)
- [Native Kubernetes の Flink JobManager サービスアカウントセキュリティ要件](#)

Amazon EMR on EKS での Flink Native Kubernetes のセットアップ

Note

Apache Flink の機能は EKS での Amazon EMR のプレビュー版であり、変更される可能性があります。この機能は、[AWS サービス条件](#)で定義されているプレビューサービスとして提供されます。

Amazon EMR on EKS で Flink CLI を使用してアプリケーションを実行する前に、次のタスクを完了してセットアップを行います。Amazon Web Services (AWS) に既にサインアップしていて、Amazon EKS を既に使用している場合、Amazon EMR on EKS を使用する準備はほぼ整っています。前提条件のいずれかを既に完了している場合は、その前提条件をスキップして、次の前提条件に進むことができます。

- [AWS CLI をインストールする](#) — AWS CLI を既にインストールしている場合は、それが最新バージョンであることを確認します。
- [Amazon EKS クラスターのセットアップ](#) – 新しい Kubernetes クラスターをノードと共に Amazon EKS に作成する手順に従います。
- [Amazon EMR ベースイメージ URI](#) (リリース 6.13.0 以上) を選択する – Flink Kubernetes コマンドは、Amazon EMR リリース 6.13.0 以降でサポートされています。
- JobManager サービスアカウントに TaskManager ポッドを作成および監視するための適切な権限があることを確認します。詳細については、Native Kubernetes の Flink JobManager サービスアカウントセキュリティ要件を参照してください。
- ローカルの [AWS 認証情報プロファイル](#) をセットアップします。
- Flink アプリケーションの実行対象とする [Amazon EKS クラスターの kubeconfig ファイルを作成または更新します](#)。

Amazon EMR on EKS の Flink Native Kubernetes を使ってみる

Flink アプリケーションを実行する

Amazon EMR 6.13.0 以降では、Amazon EKS クラスターで Flink アプリケーションを実行できるよう、Flink Native Kubernetes をサポートしています。Flink アプリケーションを実行するには、次の手順に従います。

1. Flink Native Kubernetes コマンドを使用して Flink アプリケーションを実行する前に、「[the section called “セットアップ”](#)」のステップを完了してください。
2. 次の環境変数の値を設定します。

```
export FLINK_HOME=  
export NAMESPACE=flink  
export CLUSTER_ID=flink-application-cluster  
export IMAGE=<123456789012.dkr.ecr.sample-AWS #####-.amazonaws.com/flink/  
emr-6.13.0-flink:latest>  
export FLINK_SERVICE_ACCOUNT=emr-containers-sa-flink  
export FLINK_CLUSTER_ROLE_BINDING=emr-containers-crb-flink
```

3. Kubernetes リソースを管理するためのサービスアカウントを作成します。

```
kubectl create serviceaccount $FLINK_SERVICE_ACCOUNT -n $NAMESPACE  
kubectl create clusterrolebinding $FLINK_CLUSTER_ROLE_BINDING --clusterrole=edit --  
serviceaccount=$NAMESPACE:$FLINK_SERVICE_ACCOUNT
```

4. run-application CLI コマンドを実行します。

```
$FLINK_HOME/bin/flink run-application \  
  --target kubernetes-application \  
  -Dkubernetes.namespace=$NAMESPACE \  
  -Dkubernetes.cluster-id=$CLUSTER_ID \  
  -Dkubernetes.container.image.ref=$IMAGE \  
  -Dkubernetes.service-account=$FLINK_SERVICE_ACCOUNT \  
  local:///opt/flink/examples/streaming/Iteration.jar  
2022-12-29 21:13:06,947 INFO  org.apache.flink.kubernetes.utils.KubernetesUtils  
    [] - Kubernetes deployment requires a fixed port. Configuration  
blob.server.port will be set to 6124  
2022-12-29 21:13:06,948 INFO  org.apache.flink.kubernetes.utils.KubernetesUtils  
    [] - Kubernetes deployment requires a fixed port. Configuration  
taskmanager.rpc.port will be set to 6122  
2022-12-29 21:13:07,861 WARN  
org.apache.flink.kubernetes.KubernetesClusterDescriptor    [] - Please note that  
Flink client operations(e.g. cancel, list, stop, savepoint, etc.) won't work from  
outside the Kubernetes cluster since 'kubernetes.rest-service.exposed.type' has  
been set to ClusterIP.  
2022-12-29 21:13:07,868 INFO  
org.apache.flink.kubernetes.KubernetesClusterDescriptor    [] - Create flink  
application cluster flink-application-cluster successfully, JobManager Web  
Interface: http://flink-application-cluster-rest.flink:8081
```

5. 作成した Kubernetes リソースを確認します。

```
kubectl get all -n <namespace>
NAME READY STATUS RESTARTS AGE
pod/flink-application-cluster-546687cb47-w2p2z 1/1 Running 0 3m37s
pod/flink-application-cluster-taskmanager-1-1 1/1 Running 0 3m24s

NAME TYPE CLUSTER-IP EXTERNAL-IP PORT(S) AGE
service/flink-application-cluster ClusterIP None <none> 6123/TCP,6124/TCP 3m38s
service/flink-application-cluster-rest ClusterIP 10.100.132.158 <none> 8081/TCP
3m38s

NAME READY UP-TO-DATE AVAILABLE AGE
deployment.apps/flink-application-cluster 1/1 1 1 3m38s

NAME DESIRED CURRENT READY AGE
replicaset.apps/flink-application-cluster-546687cb47 1 1 1 3m38s
```

6. 8081 にポート転送します。

```
kubectl port-forward service/flink-application-cluster-rest 8081 -n <namespace>
Forwarding from 127.0.0.1:8081 -> 8081
```

7. Flink UI にローカルにアクセスします。

The screenshot shows the Apache Flink Dashboard interface. The left sidebar contains navigation options: Overview (selected), Jobs, Running Jobs, Completed Jobs, Task Managers, and Job Manager. The main content area displays the following information:

- Available Task Slots:** 0
- Running Jobs:** 1
- Total Task Slots:** 1 | **Task Managers:** 1
- Finished:** 0 | **Canceled:** 0 | **Failed:** 0
- Running Job List:**

Job Name	Start Time	Duration	End Time	Tasks	Status
State machine job	2022-12-29 21:14:39	5m 27s	-	2 / 2	RUNNING
- Completed Job List:** No Data

8. Flink アプリケーションを削除します。

```
kubectl delete deployment.apps/flink-application-cluster -n <namespace>
deployment.apps "flink-application-cluster" deleted
```

Flink にアプリケーションを送信する方法の詳細については、Apache Flink ドキュメントの「[Native Kubernetes](#)」を参照してください。

Native Kubernetes の Flink JobManager サービスアカウントセキュリティ要件

Note

Apache Flink の機能は EKS での Amazon EMR のプレビュー版であり、変更される可能性があります。この機能は、[AWS サービス条件](#)で定義されているプレビューサービスとして提供されます。

Flink JobManager ポッドは、Kubernetes サービスアカウントを使用して Kubernetes API サーバーにアクセスし、TaskManager ポッドを作成および監視します。JobManager サービスアカウントには、TaskManager ポッドを作成/削除するための適切な権限が必要です。また、TaskManager からリーダーの ConfigMaps を監視して、クラスター内の JobManager と ResourceManager のアドレスを取得できるようにする必要があります。

このサービスアカウントには、次のルールが適用されます。

```
rules:
- apiGroups:
  - ""
  resources:
  - pods
  verbs:
  - "*"
- apiGroups:
  - ""
  resources:
  - services
  verbs:
  - "*"

```



```
- apiGroups:
  - ""
  resources:
  - configmaps
  verbs:
  - "*"

```

Flink Kubernetes オペレータと Flink ジョブのモニタリング

Note

Apache Flink の機能は EKS での Amazon EMR のプレビュー版であり、変更される可能性があります。この機能は、[AWS サービス条件](#)で定義されているプレビューサービスとして提供されます。

このセクションでは、Amazon EMR on EKS で Flink ジョブをモニタリングする方法をいくつか紹介します。

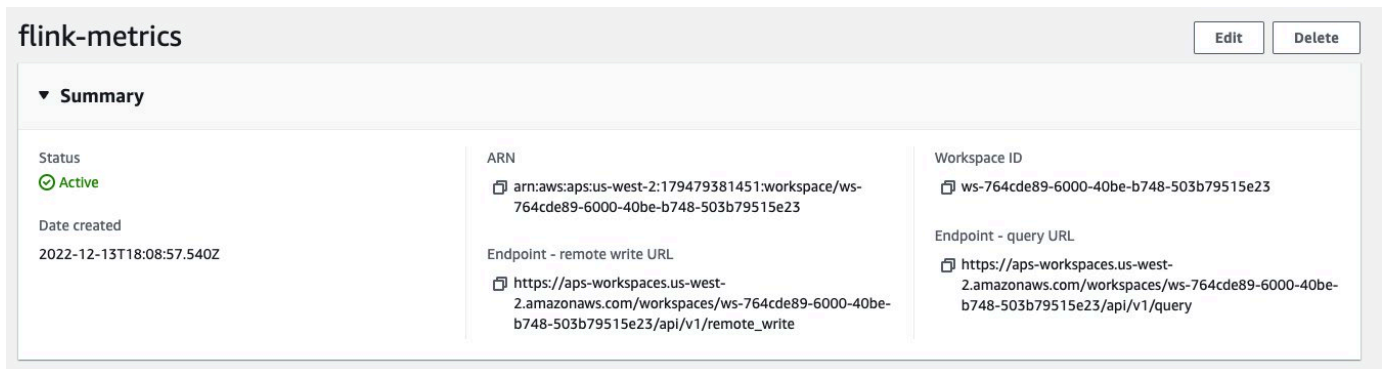
トピック

- [Amazon Managed Service for Prometheus を使用した Flink ジョブのモニタリング](#)
- [Flink UI を使用した Flink ジョブのモニタリング](#)
- [モニタリング設定を使用した、Flink Kubernetes オペレータと Flink ジョブのモニタリング](#)

Amazon Managed Service for Prometheus を使用した Flink ジョブのモニタリング

Apache Flink を Amazon Managed Service for Prometheus (管理ポータル) とインテグレーションできます。Amazon Managed Service for Prometheus では、Amazon Managed Service for Prometheus サーバーからメトリクスを Amazon EKS で実行されているクラスターに取り込むことができます。Amazon Managed Service for Prometheus は、Amazon EKS クラスターで既に実行されている Prometheus サーバーと連携して動作します。Amazon Managed Service for Prometheus と Amazon EMR Flink オペレータとのインテグレーションを実行すると、Prometheus サーバーが自動的にデプロイされ、Amazon Managed Service for Prometheus とインテグレーションするように設定されます。

1. [Amazon Managed Service for Prometheus ワークスペースを作成します](#)。このワークスペースは、取り込みエンドポイントとして機能します。後でそのリモート書き込み URL が必要になります。



The screenshot shows the configuration page for a workspace named 'flink-metrics'. It includes a 'Summary' section with the following details:

Property	Value
Status	Active
Date created	2022-12-13T18:08:57.540Z
ARN	arn:aws:aps:us-west-2:179479381451:workspace/ws-764cde89-6000-40be-b748-503b79515e23
Workspace ID	ws-764cde89-6000-40be-b748-503b79515e23
Endpoint - remote write URL	https://aps-workspaces.us-west-2.amazonaws.com/workspaces/ws-764cde89-6000-40be-b748-503b79515e23/api/v1/remote_write
Endpoint - query URL	https://aps-workspaces.us-west-2.amazonaws.com/workspaces/ws-764cde89-6000-40be-b748-503b79515e23/api/v1/query

2. サービスアカウントの IAM ロールをセットアップします。

このオンボーディング方法では、Prometheus サーバーが稼働している Amazon EKS クラスターのサービスアカウントの IAM ロールを使用します。こうしたロールは、サービスロールとも呼ばれます。

まだサービスロールがない場合は、[Amazon EKS クラスターからメトリクスを取り込めるようにサービスロールをセットアップします](#)。

続行する前に、IAM ロールを `amp-iamproxy-ingest-role` という名前で作成します。

3. Amazon EMR Flink オペレータを Amazon Managed Service for Prometheus と共にインストールします。

Amazon Managed Service for Prometheus ワークスペース、Amazon Managed Service for Prometheus 専用の IAM ロール、および必要な権限が用意できたので、Amazon EMR Flink オペレータをインストールできます。パラメータ `prometheus.install=true` を渡して、Amazon Managed Service for Prometheus インスタンスを指すようにアップグレードします。

この結果、オペレータ内の Prometheus レポーターがポート 9999 に自動的にインストールされます。また、以後 `FlinkDeployment` を指定すると、`metrics` ポートが 9249 に公開されます。

- Flink オペレータメトリクスは、Prometheus のラベル `flink_k8soperator_` の下に表示されます。
- Flink タスクマネージャーメトリクスは、Prometheus のラベル `flink_taskmanager_` の下に表示されます。

- Flink ジョブマネージャーメトリクスは、Prometheus のラベル `flink_jobmanager_` の下に表示されます。

[Helm Install --set](#) コマンドを使用して、`flink-kubernetes-operator` チャートにオーバーライドを渡します。

```
helm install flink-kubernetes-operator-demo -n namespace \  
~/workplace/helm/flink-kubernetes-operator \  
--set prometheus.install=true
```

Flink UI を使用した Flink ジョブのモニタリング

実行中の Flink アプリケーションの正常性とパフォーマンスをモニタリングするには、Flink Web Dashboard を使用します。ジョブのステータス、TaskManagers の数、ジョブのメトリクスとログといった情報を確認できます。また、Flink ジョブの設定を表示して変更できるほか、Flink クラスターとやり取りしてジョブの送信やキャンセルができます。

Kubernetes で実行中の Flink アプリケーションの Flink Web Dashboard にアクセスするには

1. `kubectl port-forward` コマンドを使用して、Flink アプリケーションの TaskManager ポッドで Flink Web Dashboard が実行されているポートにローカルポートを転送します。デフォルトでは、このポートは 8081 です。`deployment-name` を上記の Flink アプリケーションデプロイの名前に置き換えます。

```
kubectl get deployments -n namespace
```

出力例:

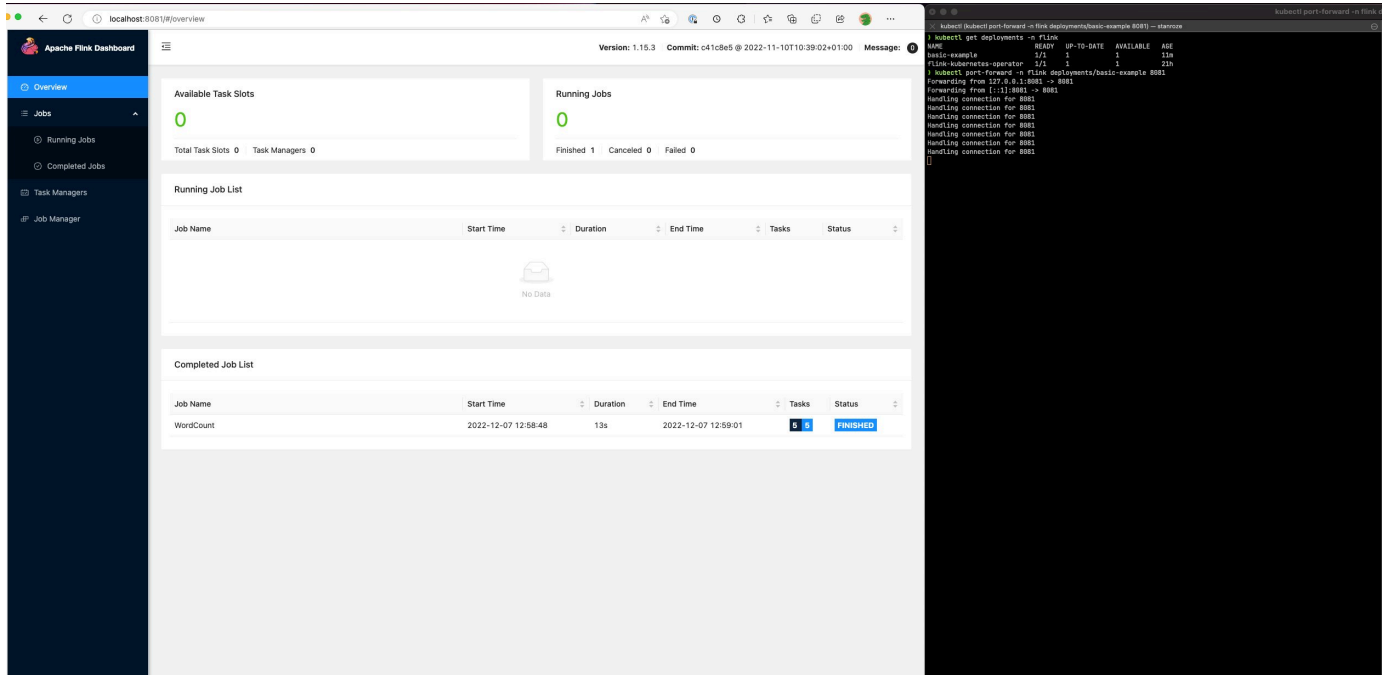
```
kubectl get deployments -n flink-namespace  
NAME                                READY    UP-TO-DATE    AVAILABLE    AGE  
basic-example                       1/1      1              1            11m  
flink-kubernetes-operator           1/1      1              1            21h
```

```
kubectl port-forward deployments/deployment-name 8081 -n namespace
```

2. 別のポートをローカルに使用する場合は、`local-port:8081` パラメータを使用します。

```
kubectl port-forward -n flink deployments/basic-example 8080:8081
```

- ウェブブラウザで、`http://localhost:8081` (カスタムローカルポートを使用した場合は `http://localhost:local-port`) に移動して、Flink Web Dashboard にアクセスします。ジョブのステータス、TaskManagers の数、ジョブのメトリクスとログといった実行中の Flink アプリケーションの情報を確認できます。



モニタリング設定を使用した、Flink Kubernetes オペレータと Flink ジョブのモニタリング

モニタリング設定を使用すると、Flink アプリケーションログとオペレータログを S3 や CloudWatch (どちらか一方または両方を選択可能) にアーカイブするように簡単にセットアップできます。このようにすると、FluentD サイドカーが JobManager ポッドと TaskManager ポッドに追加され、その後、設定しておいたシンクにこれらのコンポーネントのログが転送されます。

Note

この機能は他の AWS のサービスとやり取りする必要があるため、この機能を使用できるようにするには、Flink オペレータと Flink ジョブ (サービスアカウント) のサービスアカウントに IAM ロールをセットアップする必要があります。このセットアップを行うには、

「[Amazon EMR on EKS での Flink Kubernetes オペレータのセットアップ](#)」で IRSA を使用する必要があります。

Flink アプリケーションログ

この設定は、次の方法で定義できます。

```
apiVersion: flink.apache.org/v1beta1
kind: FlinkDeployment
metadata:
  name: basic-example
spec:
  image: FLINK IMAGE TAG
  imagePullPolicy: Always
  flinkVersion: v1_17
  flinkConfiguration:
    taskmanager.numberOfTaskSlots: "2"
  executionRoleArn: JOB EXECUTION ROLE
  jobManager:
    resource:
      memory: "2048m"
      cpu: 1
  taskManager:
    resource:
      memory: "2048m"
      cpu: 1
  job:
    jarURI: local:///opt/flink/examples/streaming/StateMachineExample.jar
  monitoringConfiguration:
    s3MonitoringConfiguration:
      logUri: S3 BUCKET
    cloudWatchMonitoringConfiguration:
      logGroupName: LOG GROUP NAME
      logStreamNamePrefix: LOG GROUP STREAM PREFIX
  sidecarResources:
    limits:
      cpuLimit: 500m
      memoryLimit: 250Mi
  containerLogRotationConfiguration:
    rotationSize: 2Gb
    maxFilesToKeep: 10
```

次に、設定オプションを示します。

- `s3MonitoringConfiguration` — S3 への転送をセットアップするための設定キー
 - `logUri` (必須) – ログの保存先への S3 バケットパス。
 - ログがアップロードされると、S3 上のパスは次のようになります。
 - ログローテーションは有効になっていません。

```
s3://${logUri}/${POD_NAME}/STDOUT or STDERR.gz
```

- ログローテーションは有効になっています。ローテーションするファイルと現在のファイル (日付スタンプがないファイル) の両方を使用できます。

```
s3://${logUri}/${POD_NAME}/STDOUT or STDERR.gz
```

次の形式にすると、数値が増分されます。

```
s3://${logUri}/${POD_NAME}/stdout_YYYYMMDD_index.gz
```

- このフォワーダーを使用するには、次の IAM 権限が必要です。

```
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "s3:PutObject"
  ],
  "Resource": [
    "${S3_BUCKET_URI}/*",
    "${S3_BUCKET_URI}"
  ]
}
```

- `cloudWatchMonitoringConfiguration` — CloudWatch への転送をセットアップするための設定キー。
 - `logGroupName` (必須) – ログの送信先となる CloudWatch ロググループの名前 (ロググループが存在しない場合は自動的に作成されます)。
 - `logStreamNamePrefix` (オプション) – ログの送信先となるログストリームの名前。デフォルト値は空の文字列です。形式は次のとおりです。

```

${logStreamNamePrefix}/${POD_NAME}/STDOUT or STDERR

```

- このフォワーダーを使用するには、次の IAM 権限が必要です。

```

{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "logs:CreateLogStream",
    "logs:CreateLogGroup",
    "logs:PutLogEvents"
  ],
  "Resource": [
    "arn:aws:logs:REGION:ACCOUNT-ID:log-group:{YOUR_LOG_GROUP_NAME}:*",
    "arn:aws:logs:REGION:ACCOUNT-ID:log-group:{YOUR_LOG_GROUP_NAME}"
  ]
}

```

- `sideCarResources` (オプション) – 起動した Fluentbit サイドカーコンテナにリソース制限を設定するための設定キー。
- `memoryLimit` (オプション) - デフォルト値は 512Mi です。必要に応じて調整してください。
- `cpuLimit` (オプション) — このオプションにはデフォルトはありません。必要に応じて調整してください。
- `containerLogRotationConfiguration` (オプション) – コンテナログローテーションの動作を制御します。このエージェントは、デフォルトでは有効になっています。
 - `rotationSize` (必須) - ログローテーションのファイルサイズを指定します。指定できる値の範囲は 2 KB ~ 2 GB です。rotationSize パラメータの数値単位部分は整数として渡されます。小数値はサポートされていないため、値 1500 MB などに 1.5 GB のローテーションサイズを指定できます。デフォルトは 2 GB です。
 - `maxFilesToKeep` (必須) — ローテーションが行われた後にコンテナに保持するファイルの最大数を指定します。最小値は 1 で、最大値は 50 です。デフォルトは 10 です。

Flink オペレーターログ

また、オペレーターのログアーカイブを有効にすることもできます。そのためには、Helm チャートのインストール先にある `values.yaml` ファイルで次のオプションを使用します。S3 と CloudWatch のいずれか、またはその両方を有効にできます。

```
monitoringConfiguration:
  s3MonitoringConfiguration:
    logUri: "S3-BUCKET"
    totalFileSize: "1G"
    uploadTimeout: "1m"
  cloudWatchMonitoringConfiguration:
    logGroupName: "flink-log-group"
    logStreamNamePrefix: "example-job-prefix-test-2"
  sidecarResources:
    limits:
      cpuLimit: 1
      memoryLimit: 800Mi
    memoryBufferLimit: 700M
```

次に、`monitoringConfiguration` で使用できる設定オプションを示します。

- `s3MonitoringConfiguration` — S3 にアーカイブするようにこのオプションを設定します。
- `logUri` (必須) – ログの保存先への S3 バケットパス。
- ログがアップロードされると、S3 バケットパスは次のような形式になります。
 - ログローテーションは有効になっていません。

```
s3://${logUri}/${POD_NAME}/OPERATOR or WEBHOOK/STDOUT or STDERR.gz
```

- ログローテーションは有効になっています。ローテーションするファイルと現在のファイル (日付スタンプがないファイル) の両方を使用できます。

```
s3://${logUri}/${POD_NAME}/OPERATOR or WEBHOOK/STDOUT or STDERR.gz
```

次の形式のインデックスにすると、数値が増分されます。

```
s3://${logUri}/${POD_NAME}/OPERATOR or WEBHOOK/stdout_YYYYMMDD_index.gz
```

- `cloudWatchMonitoringConfiguration` — CloudWatch への転送をセットアップするための設定キー。
 - `logGroupName` (必須) - ログの送信となる CloudWatch ロググループの名前。このグループが存在しない場合は自動的に作成されます。
 - `logStreamNamePrefix` (オプション) – ログの送信先となるログストリームの名前。デフォルト値は空の文字列です。CloudWatch の形式は次のとおりです。


```
${logStreamNamePrefix}/${POD_NAME}/STDOUT or STDERR
```

- `sideCarResources` (オプション) – 起動した Fluentbit サイドカーコンテナにリソース制限を設定するための設定キー。
- `memoryLimit` (オプション) — メモリの上限。必要に応じて調整してください。デフォルトは 512Mi です。
- `cpuLimit` — CPU の制限。必要に応じて調整してください。デフォルト値はありません。
- `containerLogRotationConfiguration` (オプション) – コンテナログローテーションの動作を制御します。このエージェントは、デフォルトでは有効になっています。
- `rotationSize` (必須) - ログローテーションのファイルサイズを指定します。指定できる値の範囲は 2 KB ~ 2 GB です。rotationSize パラメータの数値単位部分は整数として渡されます。小数値はサポートされていないため、値 1500 MB などに 1.5 GB のローテーションサイズを指定できません。デフォルトは 2 GB です。
- `maxFilesToKeep` (必須) — ローテーションが行われた後にコンテナに保持するファイルの最大数を指定します。最小値は 1 で、最大値は 50 です。デフォルトは 10 です。

Flink 演算子と Flink アプリケーションでの高可用性 (HA、High Availability) の使用

Note

Apache Flink の機能は EKS での Amazon EMR のプレビュー版であり、変更される可能性があります。この機能は、[AWS サービス条件](#)で定義されているプレビューサービスとして提供されます。

Flink ジョブマネージャー

Flink デプロイの高可用性 (HA、High Availability) により、一時的なエラーが発生して JobManager がクラッシュした場合でも、ジョブを継続して進行させることができます。ジョブは HA が有効になっている正常な最後のチェックポイントから再開されます。HA が有効になっていないと、Kubernetes は JobManager を再起動しますが、ジョブは新しいジョブとして開始され、進行状況は失われます。HA を設定したら、JobManager で一時的な障害が発生した場合に参照できるように HA メタデータを永続ストレージに保存し、正常な最後のチェックポイントからジョブを再開するように Kubernetes に指示できます。

Flink ジョブでは HA がデフォルトで有効になっています (レプリカ数は 2 に設定されているため、HA メタデータを保持するための S3 ストレージロケーションを指定する必要があります)。

HA 設定

```
apiVersion: flink.apache.org/v1beta1
kind: FlinkDeployment
metadata:
  name: basic-example
spec:
  flinkConfiguration:
    taskmanager.numberOfTaskSlots: "2"
    executionRoleArn: "<JOB EXECUTION ROLE ARN>"
    emrReleaseLabel: "emr-6.13.0-flink-latest"
  jobManager:
    resource:
      memory: "2048m"
      cpu: 1
    replicas: 2
    highAvailabilityEnabled: true
    storageDir: "s3://<S3 PERSISTENT STORAGE DIR>"
  taskManager:
    resource:
      memory: "2048m"
      cpu: 1
```

以下は、Job Manager (.spec.jobManager で定義されている) における上記の HA 設定の説明です。

- `highAvailabilityEnabled` (オプション、デフォルトは `true`): HA を有効にせず、提供されている HA 設定を使用しない場合は、これを `false` に設定してください。引き続き、「`replicas`」フィールドを操作して HA を手動で設定することはできます。
- `replicas` (オプション、デフォルトは 2): この数を 1 より大きく設定すると、他のスタンバイ JobManagers が作成され、ジョブのリカバリが速くなります。HA を無効にする場合は、レプリカ数を 1 に設定する必要があります。そうしないと、検証エラーが発生し続けます (HA が有効になっていない場合、サポートされるレプリカは 1 つのみです)。
- `storageDir` (必須): デフォルトではレプリカ数を 2 に設定しているため、永続的な `storageDir` を用意する必要があります。現在、このフィールドはストレージロケーションとして S3 パスのみを受け付けます。

ポッドのローカリティ

HA を有効にすると、同じ AZ 内のポッドのコロケーションも試みられるため、パフォーマンスが向上します (同じ AZ にポッドを配置することでネットワークレイテンシーが減少します)。これはベストエフォート型のプロセスです。つまり、ポッドの大部分がスケジュールされている AZ に十分なリソースがない場合でも、残りのポッドは引き続きスケジュールされますが、最終的にはこの AZ 外のノードに配置される可能性があります。

リーダーレプリカの決定

HA が有効になっている場合、レプリカはリースを使用してどの JM がリーダーかを判断し、このメタデータを保存するデータストアとして K8s Configmap を使用します。リーダーを特定したい場合は、Configmap の内容を見て、データの下にあるキー `org.apache.flink.k8s.leader.restserver` を見て、IP アドレスを持つ K8s ポッドを探してください。以下の `bash` コマンドを使用することもできます。

```
ip=$(kubectl get configmap -n <NAMESPACE> <JOB-NAME>-cluster-config-map -o json | jq -r ".data[\"org.apache.flink.k8s.leader.restserver\"]" | awk -F: '{print $2}' | awk -F '/' '{print $3}')
kubectl get pods -n <NAMESPACE> -o json | jq -r ".items[]" | select(.status.podIP == \"\${ip}\") | .metadata.name"
```

Flink 演算子の高可用性

Flink 演算子の高可用性を有効にすることで、障害発生時にスタンバイの Flink 演算子にフェイルオーバーして、演算子制御ループのダウンタイムを最小限に抑えることができます。高可用性はデフォルトで有効になっており、開始演算子レプリカ数のデフォルトは 2 です。values.yaml ファイルのレプリカフィールドは Helm チャート用に設定できます。

以下のフィールドがカスタマイズ可能です。

- `replicas` (オプション、デフォルトは 2): この数を 1 より大きく設定すると、他のスタンバイ演算子が作成され、ジョブの復旧が早くなります。
- `highAvailabilityEnabled` (オプション、デフォルトは true): HA を有効にするかどうかを制御します。このパラメータを true に指定すると、マルチ AZ 配置サポートが有効になり、正しい `flink-conf.yaml` パラメータが設定されます。

values.yaml ファイルに以下の設定を行うことで、演算子の HA を無効にできます。

```
...
imagePullSecrets: []
```

```
replicas: 1

# set this to false if you do not want HA
highAvailabilityEnabled: false
...
```

マルチ AZ 配置

複数のアベイラビリティゾーンに演算子ポッドを作成します。これはソフト制約であり、別の AZ に十分なリソースがない場合、演算子ポッドは同じ AZ にスケジュールされます。

リーダーレプリカの決定

HA が有効になっている場合、レプリカはリースを使用してどの JM がリーダーかを判断し、リーダーの選定には K8s リースを使用します。リースを記述し、.Spec.Holder Identity フィールドを確認することで、現在のリーダーを判断できます

```
kubectl describe lease <Helm Install Release Name>-<NAMESPACE>-lease -n <NAMESPACE> |
grep "Holder Identity"
```

Flink-S3 インタラクション

アクセス認証情報の設定

S3 バケットにアクセスするための適切な IAM 権限を IRSA に設定していることを確認してください。

S3 アプリケーションモードからジョブジャーを取得

Flink 演算子は S3 からのアプリケーションジャーの取得もサポートしています。FlinkDeployment 仕様で jarURI の S3 ロケーションを指定するだけです。

この機能は、PyFlink スクリプトのような他のアーティファクトのダウンロードにも使用できます。結果として生じる Python スクリプトはパス /opt/flink/usr/lib/ の下にドロップされます。

以下の例は、PyFlink ジョブにこの機能を使用する方法を示しています。jarURI フィールドと args フィールドに注意してください。

```
apiVersion: flink.apache.org/v1beta1
```

```
kind: FlinkDeployment
metadata:
  name: python-example
spec:
  image: <YOUR CUSTOM PYFLINK IMAGE>
  emrReleaseLabel: "emr-6.12.0-flink-latest"
  flinkVersion: v1_16
  flinkConfiguration:
    taskmanager.numberOfTaskSlots: "1"
  serviceAccount: flink
  jobManager:
    highAvailabilityEnabled: false
    replicas: 1
    resource:
      memory: "2048m"
      cpu: 1
  taskManager:
    resource:
      memory: "2048m"
      cpu: 1
  job:
    jarURI: "s3://<S3-BUCKET>/scripts/pyflink.py" # Note, this will trigger the
    artifact download process
    entryClass: "org.apache.flink.client.python.PythonDriver"
    args: ["-pyclientexec", "/usr/local/bin/python3", "-py", "/opt/flink/usrlib/
    pyflink.py"]
    parallelism: 1
    upgradeMode: stateless
```

Flink S3 コネクタ

Flink には 2 つの S3 コネクタ (下記参照) が同梱されています。以下のセクションでは、どのコネクタをどのような場合に使用するかについて説明します。

チェックポイント: Presto S3 コネクタ

- S3 スキームを `s3p://` に設定します。
- S3 へのチェックポイントに使用することをお勧めするコネクタ。

FlinkDeployment 仕様の例:

```
apiVersion: flink.apache.org/v1beta1
```

```
kind: FlinkDeployment
metadata:
  name: basic-example
spec:
  flinkConfiguration:
    taskmanager.numberOfTaskSlots: "2"
    state.checkpoints.dir: s3p://<UCKET-NAME>/flink-checkpoint/
```

- S3 スキームを `s3://` または `(s3a://)` に設定する
- S3 からのファイルの読み書きに推奨されるコネクタ ([Flinks Filesystem インターフェイス](#)を実装する S3 コネクタのみ)。
- デフォルトでは、`fs.s3a.aws.credentials.provider` が `flink-conf.yaml` ファイルに設定されます。このファイルは `com.amazonaws.auth.WebIdentityTokenCredentialsProvider` です。デフォルト `flink-conf` を完全にオーバーライドして S3 とやり取りする場合は、必ずこのプロバイダーを使用してください。

FlinkDeployment 仕様の例

```
apiVersion: flink.apache.org/v1beta1
kind: FlinkDeployment
metadata:
  name: basic-example
spec:
  job:
    jarURI: local:///opt/flink/examples/streaming/WordCount.jar
    args: [ "--input", "s3a://<INPUT BUCKET>/PATH", "--output", "s3a://<OUTPUT BUCKET>/PATH" ]
    parallelism: 2
    upgradeMode: stateless
```

Flink アプリケーションでの Autoscaler の使用

Note

Apache Flink の機能は EKS での Amazon EMR のプレビュー版であり、変更される可能性があります。この機能は、[AWS サービス条件](#)で定義されているプレビューサービスとして提供されます。

演算子 autoscaler を使用すると、Flink ジョブからメトリクスを収集してジョブの頂点レベルで並列処理を自動的に調整することで、バックプレッシャーを緩和できます。次に、設定がどのようなか、その一例を示します。

```
apiVersion: flink.apache.org/v1beta1
kind: FlinkDeployment
metadata:
  ...
spec:
  ...
  flinkVersion: v1_17
  flinkConfiguration:
    kubernetes.operator.job.autoscaler.enabled: "true"
    kubernetes.operator.job.autoscaler.stabilization.interval: 1m
    kubernetes.operator.job.autoscaler.metrics.window: 5m
    kubernetes.operator.job.autoscaler.target.utilization: "0.6"
    kubernetes.operator.job.autoscaler.target.utilization.boundary: "0.2"
    kubernetes.operator.job.autoscaler.restart.time: 2m
    kubernetes.operator.job.autoscaler.catch-up.duration: 5m
    pipeline.max-parallelism: "720"
  ...
```

次に、autoscaler の設定オプションを示します。

- `kubernetes.operator.job.autoscaler.scaling.enabled` — autoscaler のアクションを有効にするかどうかを指定します。デフォルトは `false` で、パッシブ/メトリクス専用モードをサポートします。このモードでは、autoscaler はスケーリング関連のパフォーマンスメトリクスを収集して評価しますが、ジョブのアップグレードはトリガーしません。このオプションを使用すると、実行中のアプリケーションにまったく影響を与えることなく、モジュールの信頼性を高めることができます。
- `kubernetes.operator.job.autoscaler.stabilization.interval` — 新しいスケーリングが実行されない安定化期間。デフォルトは 5 分です。
- `kubernetes.operator.job.autoscaler.metrics.window` — スケーリングメトリクスの集計期間ウィンドウサイズ。ウィンドウサイズが大きいほど、スムーズで安定性が増しますが、負荷の突然の変化に対して autoscaler の対応が遅くなる可能性があります。デフォルトは 10 分です。3~60 分の値を試してみることをお勧めします。
- `kubernetes.operator.job.autoscaler.target.utilization` — 頂点の目標使用率であり、ジョブのパフォーマンスを安定させ、負荷の変動をある程度和らげることができます。デフォルトは 0.7 で、ジョブ頂点の目標使用率/負荷は 70% です。

- `kubernetes.operator.job.autoscaler.target.utilization.boundary` — 頂点の目標使用率の境界であり、負荷が変動してもすぐにはスケールしないよう、バッファとしての役割を果たします。デフォルトは 0.4 です。つまり、目標使用率からの偏差を 40% まで許容します。この値を超えると、スケーリングアクションをトリガーします。
- `kubernetes.operator.job.autoscaler.restart.time` — アプリケーションを再起動するまでの想定時間。デフォルトは 3 分です。
- `kubernetes.operator.job.autoscaler.catch-up.duration` — キャッチアップするまでの想定時間。キャッチアップとは、スケーリング操作が完了した後でバックログを完全に処理することです。デフォルトは 5 分です。このキャッチアップ期間を短くすると、autoscaler がスケーリングアクションのために予約しなければならないキャパシティが増えます。
- `pipeline.max-parallelism` — autoscaler が使用できる最大並列処理。この値が Flink 設定が各オペレータに直接設定されている最大並列処理よりも高い場合、autoscaler はこの制限を無視します。デフォルトは 200 です。autoscaler は、最大並列処理数の除数として並列処理を計算することに注意してください。このため、Flink が提供するデフォルトを利用するのではなく、除数が多い最大並列処理設定を選択することをお勧めします。この設定には、120、180、240、360、720 といった 60 の倍数を使用することをお勧めします。

詳細な設定リファレンスページについては、「[Autoscaler configuration](#)」を参照してください。

トラブルシューティング

このセクションでは、Amazon EMR on EKS に関する問題をトラブルシューティングする方法について説明します。Amazon EMR に関する一般的な問題をトラブルシューティングする方法については、「Amazon EMR 管理ガイド」の「[Troubleshoot a cluster](#)」を参照してください。

- [PersistentVolumeClaims \(PVC\) を使用するジョブのトラブルシューティング](#)
- [Amazon EMR on EKS 垂直自動スケーリングのトラブルシューティング](#)
- [Amazon EMR on EKS Spark オペレータのトラブルシューティング](#)

Amazon EMR on EKS での Apache Flink のトラブルシューティング

Note

Apache Flink の機能は EKS での Amazon EMR のプレビュー版であり、変更される可能性があります。この機能は、[AWS サービス条件](#)で定義されているプレビューサービスとして提供されます。

Helm チャートのインストール時にリソースマッピングが見つからない

Helm チャートをインストールするときに、次のエラーメッセージが表示されることがあります。

```
Error: INSTALLATION FAILED: pulling from host 1234567890.dkr.ecr.us-west-2.amazonaws.com failed with status code [manifests 6.13.0]: 403 Forbidden Error: INSTALLATION FAILED: unable to build kubernetes objects from release manifest: [resource mapping not found for name: "flink-operator-serving-cert" namespace: "<the namespace to install your operator>" from "": no matches for kind "Certificate" in version "cert-manager.io/v1"
```

```
ensure CRDs are installed first, resource mapping not found for name: "flink-operator-selfsigned-issuer" namespace: "<the namespace to install your operator>" " from "": no matches for kind "Issuer" in version "cert-manager.io/v1"
```

```
ensure CRDs are installed first].
```

このエラーを解決するには、cert-manager をインストールして、ウェブフックコンポーネントを追加できるようにします。使用する Amazon EKS クラスターごとに cert-manager をインストールする必要があります。

```
kubectl apply -f https://github.com/cert-manager/cert-manager/releases/download/v1.12.0
```

AWS のサービスアクセス拒否エラー

access denied エラーが表示された場合は、Helm チャート values.yaml ファイル内の operatorExecutionRoleArn の IAM ロールに適切な権限が付与されていることを確認します。また、FlinkDeployment 仕様の executionRoleArn に記載されている IAM ロールに適切な権限が付与されていることを確認します。

FlinkDeployment がスタックしている

FlinkDeployment がずっと停止した状態になる場合は、次の手順を使用して、問題のデプロイを強制的に削除します。

1. デプロイ実行を編集します。

```
kubectl edit -n Flink Namespace flinkdeployments/App Name
```

2. このファイナライザーを削除します。

```
finalizers:  
- flinkdeployments.flink.apache.org/finalizer
```

3. デプロイを削除します。

```
kubectl delete -n Flink Namespace flinkdeployments/App Name
```

Apache Flink をサポートしている Amazon EMR on EKS のリリース

Apache Flink は、次の Amazon EMR on EKS リリースで使用できます。使用可能なすべてのリリースについては、「[Amazon EMR on EKS リリース](#)」を参照してください。

リリースラベル	Java	Flink	Flink オペレータ
emr-6.14.0-flink-latest	11	1.17.1	-
emr-6.14.0-flink-k8s-operator-latest	11	1.17.1	1.6.0
emr-6.13.0-flink-latest	11	1.17.0	-
emr-6.13.0-flink-k8s-operator-latest	11	1.17.0	1.5.0

Amazon EMR on EKS でのジョブの実行

ジョブ実行とは、Amazon EMR on EKS に送信する Spark jar、PySpark スクリプト、SparkSQL クエリなどの作業単位です。このトピックでは、AWS CLI を使用したジョブ実行の管理、Amazon EMR コンソールを使用したジョブ実行の表示、および一般的なジョブ実行エラーのトラブルシューティングの概要について説明します。

Note

Amazon EMR on EKS でのジョブ実行を送信する前に、「[Amazon EMR on EKS のセットアップ](#)」のステップを完了する必要があります。

トピック

- [StartJobRun で Spark ジョブを実行する](#)
- [Spark 演算子を使用して Spark ジョブを実行する](#)
- [spark-submit を使用して Spark ジョブを実行する](#)
- [Amazon EMR on EKS ジョブ実行の管理](#)
- [ジョブ送信者分類の使用](#)
- [ジョブテンプレートの使用](#)
- [ポッドテンプレートの使用](#)
- [ジョブ再試行ポリシーの使用](#)
- [Spark イベントログのローテーションを使用する](#)
- [Spark コンテナログのローテーションを使用する](#)
- [Amazon EMR Spark ジョブで垂直的自動スケーリングを使用する](#)

StartJobRun で Spark ジョブを実行する

トピック

- [Amazon EMR on EKS のセットアップ](#)
- [StartJobRun でジョブ実行を送信する](#)

Amazon EMR on EKS のセットアップ

Amazon EMR on EKS のセットアップを行うには、以下のタスクを完了します。Amazon Web Services (AWS) に既にサインアップしていて、Amazon EKS を既に使用している場合、Amazon EMR on EKS を使用する準備はほぼ整っています。既に完了しているタスクはスキップしてください。

Note

また、[Amazon EMR on EKS Workshop](#) に従って、Amazon EMR on EKS で Spark ジョブを実行するのに必要なすべてのリソースをセットアップすることもできます。このワークショップには、CloudFormation テンプレートを使用して、開始するのに必要なリソースを作成する自動化機能も用意されています。その他のテンプレートとベストプラクティスについては、GitHub の「[EMR Containers Best Practices Guide](#)」を参照してください。

1. [AWS CLI をインストールする](#)
2. [eksctl をインストールする](#)
3. [Amazon EKS クラスターを設定する](#)
4. [Amazon EMR on EKS のクラスターアクセスを有効にする](#)
5. [EKS クラスターでサービスアカウント \(IRSA\) の IAM ロールを有効にする](#)
6. [ジョブ実行ロールを作成する](#)
7. [ジョブ実行ロールの信頼ポリシーを更新する](#)
8. [Amazon EMR on EKS へのアクセス許可をユーザーに付与する](#)
9. [Amazon EKS クラスターをAmazon EMR に登録する](#)

AWS CLI をインストールする

macOS、Linux、または Windows 向けの最新バージョンの AWS CLI をインストールできます。

Important

Amazon EMR on EKS をセットアップするには、最新バージョンの AWS CLI をインストールしておく必要があります。

macOS 用の AWS CLI をインストールまたは更新するには

1. 現在 AWS CLI がインストールされている場合は、インストールされているバージョンを確認します。

```
aws --version
```

2. AWS CLI の以前のバージョンを使用している場合、次のコマンドを使用して、最新の AWS CLI バージョン 2 をインストールします。その他のインストールオプションや、現在インストールされているバージョン 2 をアップグレードするには、「[macOS での AWS CLI バージョン 2 のアップグレード](#)」を参照してください。

```
curl "https://awscli.amazonaws.com/AWSCLIV2.pkg" -o "AWSCLIV2.pkg"  
sudo installer -pkg AWSCLIV2.pkg -target /
```

AWS CLI バージョン 2 を使用できない場合は、次のコマンドを使用して、[AWS CLI バージョン 1](#) の最新バージョンがインストールされていることを確認します。

```
pip3 install awscli --upgrade --user
```

Linux 用の AWS CLI をインストールまたは更新するには

1. 現在 AWS CLI がインストールされている場合は、インストールされているバージョンを確認します。

```
aws --version
```

2. AWS CLI の以前のバージョンを使用している場合、次のコマンドを使用して、最新の AWS CLI バージョン 2 をインストールします。その他のインストールオプションや、現在インストールされているバージョン 2 をアップグレードするには、「[Linux での AWS CLI バージョン 2 のアップグレード](#)」を参照してください。

```
curl "https://awscli.amazonaws.com/awscli-exe-linux-x86_64.zip" -o "awscliv2.zip"  
unzip awscliv2.zip  
sudo ./aws/install
```

AWS CLI バージョン 2 を使用できない場合は、次のコマンドを使用して、[AWS CLI バージョン 1](#) の最新バージョンがインストールされていることを確認します。

```
pip3 install --upgrade --user awscli
```

Windows 用の AWS CLI をインストールまたは更新するには

1. 現在 AWS CLI がインストールされている場合は、インストールされているバージョンを確認します。

```
aws --version
```

2. AWS CLI の以前のバージョンを使用している場合、次のコマンドを使用して、最新の AWS CLI バージョン 2 をインストールします。その他のインストールオプションや、現在インストールされているバージョン 2 をアップグレードする方法については、「[Windows での AWS CLI バージョン 2 のアップグレード](#)」を参照してください。

1. Windows 用の AWS CLI MSI インストーラ (64 ビット) を <https://awscli.amazonaws.com/AWSCLIV2.msi> からダウンロードします。
2. ダウンロードした MSI インストーラを実行し、画面の指示に従います。デフォルトでは、AWS CLI は C:\Program Files\Amazon\AWSCLIV2 にインストールされます。

AWS CLI バージョン 2 を使用できない場合は、次のコマンドを使用して、[AWS CLI バージョン 1](#) の最新バージョンがインストールされていることを確認します。

```
pip3 install --user --upgrade awscli
```

AWS CLI 認証情報を設定する

eksctl と AWS CLI の両方には、使用している環境で AWS 認証情報が設定されている必要があります。一般的な使用の場合、aws configure コマンドが、AWS CLI をインストールして設定するための最も簡単な方法です。

```
$ aws configure
AWS Access Key ID [None]: <AKIAIOSFODNN7EXAMPLE>
AWS Secret Access Key [None]: <wJalrXUtnFEMI/K7MDENG/bPxrRfiCYEXAMPLEKEY>
Default region name [None]: <region-code>
Default output format [None]: <json>
```

このコマンドを入力すると、AWS CLI によって、アクセスキー、シークレットアクセスキー、AWS リージョン、出力形式の 4 つの情報の入力が必要になります。これらの情報は、default という名前のプロファイル (設定の集合) に保存されます。コマンドを実行する際には、別のプロファイルを指定しない限り、このプロファイルが使用されます。詳細については、「AWS Command Line Interface ユーザーガイド」の「[AWS CLI の設定](#)」を参照してください。

eksctl をインストールする

macOS、Linux、または Windows で、最新バージョンの eksctl コマンドラインユーティリティをインストールします。詳細については、<https://eksctl.io/> を参照してください。

Important

Amazon EMR on EKS をセットアップするには、eksctl 0.34.0 バージョン以降が必要です。ただし、最新の eksctl をダウンロードすることをお勧めします。Amazon EMR on EKS の一部の機能では後継バージョンが必要になるからです。詳細については、「[eksctl をインストールする](#)」を参照してください。

Homebrew を使用して macOS で eksctl をインストールまたはアップグレードするには

Amazon EKS と macOS の使用を開始する最も簡単な方法は、[eksctl を Homebrew でインストール](#) することです。eksctl Homebrew レシピでは、eksctl のほか、Amazon EKS に必要なその他の依存関係 (kubectl など) がインストールされます。さらにレシピでは、[aws-iam-authenticator](#) もインストールされます。これは、AWS CLI バージョン 1.16.156 以降がインストールされていない場合に必要です。

1. Mac OS で Homebrew をまだインストールしていない場合は、以下のコマンドでインストールします。

```
/bin/bash -c "$(curl -fsSL https://raw.githubusercontent.com/Homebrew/install/master/install.sh)"
```

2. Weaveworks Homebrew tap をインストールします。

```
brew tap weaveworks/tap
```

3. 1. eksctl をインストールまたはアップグレードします。
 - 以下のコマンドを使用して、eksctl をインストールします。

```
brew install weaveworks/tap/eksctl
```

- eksctl が既にインストールされている場合は、以下のコマンドでアップグレードします。

```
brew upgrade eksctl & brew link --overwrite eksctl
```

2. 以下のコマンドを使用して、インストールが成功したことをテストします。eksctl バージョン 0.34.0 以降が必要です。

```
eksctl version
```

eksctl を使用して Linux で curl をインストールまたはアップグレードするには

1. 以下のコマンドを使用して、eksctl の最新リリースをダウンロードして抽出します。

```
curl --silent --location "https://github.com/weaveworks/eksctl/releases/latest/download/eksctl_$(uname -s)_amd64.tar.gz" | tar xz -C /tmp
```

2. 抽出したバイナリを /usr/local/bin に移動します。

```
sudo mv /tmp/eksctl /usr/local/bin
```

3. 以下のコマンドを使用して、インストールが成功したことをテストします。eksctl バージョン 0.34.0 以降が必要です。

```
eksctl version
```

Chocolatey を使用して Windows で eksctl をインストールまたはアップグレードするには

1. Windows システムに Chocolatey がまだインストールされていない場合は、「[Chocolatey のインストール](#)」を参照してください。
2. をインストールまたはアップグレードします eksctl。
 - 次のコマンドでバイナリをインストールします。

```
chocolatey install -y eksctl
```


- すでにインストールされている場合は、以下のコマンドでアップグレードします。

```
chocolatey upgrade -y eksctl
```

3. 以下のコマンドを使用して、インストールが成功したことをテストします。eksctl バージョン 0.34.0 以降が必要です。

```
eksctl version
```

Amazon EKS クラスターを設定する

Amazon EKS は、独自の Kubernetes コントロールプレーンまたはノードをインストール、操作、維持することなく、AWS で Kubernetes を簡単に実行できるようにするマネージドサービスです。以下に概説されている手順に従って、Amazon EKS でノードを持つ新しい Kubernetes クラスターを作成します。

前提条件

Important

Amazon EKS クラスターを作成する場合は、Amazon EKS クラスターが想定どおりに動作してスケールするように、事前に「Amazon EKS ユーザーガイド」に記載されている [Amazon EKS VPC とサブネットの要件および考慮事項](#)を満たしてください。

このチュートリアルを開始する前に、Amazon EKS クラスターの作成と管理に必要な次のツールとリソースをインストールおよび設定しておく必要があります。

- AWS CLI の最新バージョン。
- kubectl バージョン 1.20 以降。
- eksctl の最新バージョン。

詳細については、「[AWS CLI をインストールする](#)」、「[Installing kubectl](#)」、および「[eksctl をインストールする](#)」を参照してください。

eksctl を使用して Amazon EKS クラスターを作成する

次の手順に従って、eksctl を使用して Amazon EKS クラスターを作成します。

⚠ Important

素早く開始できるように、デフォルト設定を使用して EKS クラスターとノードを作成できます。ただし、実稼働環境では、特定の要件を満たすようにクラスターとノードの設定をカスタマイズすることをお勧めします。すべての設定とオプションの一覧を表示するには、コマンド `eksctl create cluster -h` を実行します。詳細については、eksctl ドキュメントの「[Creating and Managing Clusters](#)」(クラスターの作成と管理) を参照してください。

1. Amazon EC2 キーペアを作成します。

既存のキーペアがない場合、次のコマンドを実行して、新しいキーペアを作成できます。us-west-2 は、クラスターを作成するリージョンに置き換えてください。

```
aws ec2 create-key-pair --region us-west-2 --key-name myKeyPair
```

返された出力は、ローカルコンピュータ上の任意のファイルに保存してください。詳細については、Linux インスタンス用の Amazon EC2 ユーザーガイド「[キーペアの作成またはインポート](#)」を参照してください。

ℹ Note

EKS クラスターを作成するために、キーペアは必要ありません。しかし、キーペアを指定することで、作成されたノードに SSH でアクセスできるようになります。キーペアは、ノードグループを作成するときのみ指定できます。

2. EKS クラスターを作成します。

次のコマンドを実行して、EKS クラスターとノードを作成します。*my-cluster* と *myKeyPair* は、独自のクラスター名とキーペア名に置き換えてください。*us-west-2* は、クラスターを作成するリージョンに置き換えてください。Amazon EKS でサポートされるリージョンについては、「[Amazon Elastic Kubernetes Service エンドポイントとクォータ](#)」を参照してください。

```
eksctl create cluster \
```

```
--name my-cluster \  
--region us-west-2 \  
--with-oidc \  
--ssh-access \  
--ssh-public-key myKeyPair \  
--instance-types=m5.xlarge \  
--managed
```

⚠ Important

EKS クラスターを作成する際は、m5.xlarge をインスタンスタイプとして使用するか、CPU とメモリがそれよりも高いその他のインスタンスタイプを使用してください。CPU またはメモリが m5.xlarge よりも低いインスタンスタイプを使用すると、クラスターで使用可能なリソースが不足することによるジョブの失敗につながる可能性があります。作成されたすべてのリソースを確認するには、[AWS Cloud Formation コンソール](#)で、eksctl-*my-cluster*-cluster という名前のスタックを表示します。

クラスターとノードの作成処理には数分かかります。クラスターとノードが作成されると、出力にいくつかの行が表示されます。次の例は、出力の最後の行を示しています。

```
...  
[#] EKS cluster "my-cluster" in "us-west-2" region is ready
```

eksctl により、~/ .kube で kubectl config ファイルが作成されるか、~/ .kube で既存の config ファイル内に新規クラスター設定が追加されました。

3. リソースを表示して検証します。

次のコマンドを実行して、クラスターノードを表示します。

```
kubectl get nodes -o wide
```

出力例を次に示します。

Amazon EC2 node output

NAME	INTERNAL-IP	EXTERNAL-IP	STATUS	ROLES	AGE	VERSION
			OS-IMAGE		KERNEL-VERSION	
	CONTAINER-RUNTIME					

```
ip-192-168-12-49.us-west-2.compute.internal    Ready    none    6m7s
v1.18.9-eks-d1db3c 192.168.12.49 52.35.116.65 Amazon Linux 2
4.14.209-160.335.amzn2.x86_64 docker://19.3.6
ip-192-168-72-129.us-west-2.compute.internal Ready    none    6m4s
v1.18.9-eks-d1db3c 192.168.72.129 44.242.140.21 Amazon Linux 2
4.14.209-160.335.amzn2.x86_64 docker://19.3.6
```

詳細については、「[ノードを表示する](#)」を参照してください。

次のコマンドを使用して、クラスターで実行されているワークロードを表示します。

```
kubectl get pods --all-namespaces -o wide
```

出力例を次に示します。

Amazon EC2 output

NAMESPACE	NAME	READY	STATUS	RESTARTS	AGE	IP
	NODE				NOMINATED	NODE
READINESS GATES						
kube-system	aws-node-6ctpm	1/1	Running	0	7m43s	
	192.168.72.129 ip-192-168-72-129.us-west-2.compute.internal				none	
	none					
kube-system	aws-node-cbntg	1/1	Running	0	7m46s	
	192.168.12.49 ip-192-168-12-49.us-west-2.compute.internal				none	
	none					
kube-system	coredns-559b5db75d-26t47	1/1	Running	0	14m	
	192.168.78.81 ip-192-168-72-129.us-west-2.compute.internal				none	
	none					
kube-system	coredns-559b5db75d-9rvnk	1/1	Running	0	14m	
	192.168.29.248 ip-192-168-12-49.us-west-2.compute.internal				none	
	none					
kube-system	kube-proxy-l8pbd	1/1	Running	0	7m46s	
	192.168.12.49 ip-192-168-12-49.us-west-2.compute.internal				none	
	none					
kube-system	kube-proxy-zh85h	1/1	Running	0	7m43s	
	192.168.72.129 ip-192-168-72-129.us-west-2.compute.internal				none	
	none					

ここに表示される内容の詳細については、「[ワークロードの表示](#)」を参照してください。

AWS Management Console と AWS CLI を使用して EKS クラスターを作成する

AWS Management Console と AWS CLI を使用して EKS クラスターを作成することもできます。
「[Amazon EKS の開始方法 – AWS Management Console と AWS CLI](#)」の手順に従います。この手順に従うことで、EKS クラスター用に各リソースがどのように作成され、リソース間でどのようなやり取りが行われるかを把握できます。

⚠ Important

EKS クラスターのノードを作成する際は、m5.xlarge をインスタンスタイプとして使用するが、CPU とメモリがそれよりも高いその他のインスタンスタイプを使用してください。

AWS Fargate を使用して EKS クラスターを作成する

AWS Fargate でポッドが実行されている EKS クラスターを作成することもできます。

1. Fargate でポッドが実行されている EKS クラスターを作成するには、「[Amazon EKS を使用した AWS Fargate の使用開始](#)」で概説されている手順に従います。

ℹ Note

Amazon EMR on EKS では、EKS クラスターでジョブを実行するために CoreDNS が必要です。Fargate でのみポッドを実行する場合は、「[Updating CoreDNS](#)」の手順に従う必要があります。

2. 次のコマンドを実行して、クラスターノードを表示します。

```
kubectl get nodes -o wide
```

Fargate の出力例を次に示します。

```
Fargate node output
```

NAME	STATUS	ROLES	AGE
VERSION	INTERNAL-IP	EXTERNAL-IP	OS-IMAGE
VERSION	CONTAINER-RUNTIME		KERNEL-
fargate-ip-192-168-141-147.us-west-2.compute.internal	Ready	none	
8m3s	v1.18.8-eks-7c9bda	192.168.141.147	none
			Amazon Linux 2
4.14.209-160.335.amzn2.x86_64	containerd://1.3.2		

```
fargate-ip-192-168-164-53.us-west-2.compute.internal    Ready    none
7m30s    v1.18.8-eks-7c9bda    192.168.164.53    none    Amazon Linux 2
4.14.209-160.335.amzn2.x86_64    containerd://1.3.2
```

詳細については、「[ノードを表示する](#)」を参照してください。

3. 次のコマンドを実行して、クラスターで実行されているワークロードを表示します。

```
kubectl get pods --all-namespaces -o wide
```

Fargate の出力例を次に示します。

Fargate output

NAMESPACE	NAME	READY	STATUS	RESTARTS	AGE	IP
	NODE					NOMINATED NODE
READINESS GATES						
kube-system	coredns-69dfb8f894-9z951	1/1	Running	0	18m	
	192.168.164.53		fargate-ip-192-168-164-53.us-west-2.compute.internal			none
	none					
kube-system	coredns-69dfb8f894-c8v66	1/1	Running	0	18m	
	192.168.141.147		fargate-ip-192-168-141-147.us-west-2.compute.internal			none
	none					

詳細については、「[ワークロードの表示](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS のクラスターアクセスを有効にする

Amazon EMR on EKS がクラスターで特定の名前空間にアクセスできるようにする必要があります。これを行うには、Kubernetes ロールを作成し、そのロールを Kubernetes ユーザーにバインドして、Kubernetes ユーザーをサービスにリンクされたロール

[AWSServiceRoleForAmazonEMRContainers](#) にマッピングします。これらのアクションは、IAM ID マッピングコマンドがサービス名として `emr-containers` と共に使用されると、`eksctl` で自動的に行われます。これらの操作は、次のコマンドを使用して簡単に実行できます。

```
eksctl create iamidentitymapping \
  --cluster my_eks_cluster \
  --namespace kubernetes_namespace \
  --service-name "emr-containers"
```

`my_eks_cluster` は使用する Amazon EKS クラスターの名前に置き換え、`kubernetes_namespace` は Amazon EMR ワークロードを実行するために作成された Kubernetes 名前空間に置き換えます。

⚠ Important

この機能を使用するには、前のステップ [eksctl をインストールする](#) を使用して最新の eksctl をダウンロードする必要があります。

Amazon EMR on EKS のクラスターアクセスを有効にするための手動ステップ

次の手動ステップを使用して、Amazon EMR on EKS のクラスターアクセスを有効にすることができます。

1. 特定の名称空間に Kubernetes ロールを作成する

Amazon EKS 1.22 - 1.27

Amazon EKS 1.22 ~ 1.27 で、次のコマンドを実行して特定の名称空間に Kubernetes ロールを作成します。このロールは、Amazon EMR on EKS に必要な RBAC アクセス許可を付与します。

```
namespace=my-namespace
cat - >>EOF | kubectl apply -f - >>namespace "${namespace}"
apiVersion: rbac.authorization.k8s.io/v1
kind: Role
metadata:
  name: emr-containers
  namespace: ${namespace}
rules:
  - apiGroups: [""]
    resources: ["namespaces"]
    verbs: ["get"]
  - apiGroups: [""]
    resources: ["serviceaccounts", "services", "configmaps", "events", "pods",
"pods/log"]
    verbs: ["get", "list", "watch", "describe", "create", "edit", "delete",
"deletcollection", "annotate", "patch", "label"]
  - apiGroups: [""]
    resources: ["secrets"]
    verbs: ["create", "patch", "delete", "watch"]
```

```

- apiGroups: ["apps"]
  resources: ["statefulsets", "deployments"]
  verbs: ["get", "list", "watch", "describe", "create", "edit", "delete",
"annotate", "patch", "label"]
- apiGroups: ["batch"]
  resources: ["jobs"]
  verbs: ["get", "list", "watch", "describe", "create", "edit", "delete",
"annotate", "patch", "label"]
- apiGroups: ["extensions", "networking.k8s.io"]
  resources: ["ingresses"]
  verbs: ["get", "list", "watch", "describe", "create", "edit", "delete",
"annotate", "patch", "label"]
- apiGroups: ["rbac.authorization.k8s.io"]
  resources: ["roles", "rolebindings"]
  verbs: ["get", "list", "watch", "describe", "create", "edit", "delete",
"deletecollection", "annotate", "patch", "label"]
- apiGroups: [""]
  resources: ["persistentvolumeclaims"]
  verbs: ["get", "list", "watch", "describe", "create", "edit", "delete",
"annotate", "patch", "label"]
EOF

```

Amazon EKS 1.21 and below

Amazon EKS 1.21 以前で、次のコマンドを実行して特定の名前空間に Kubernetes ロールを作成します。このロールは、Amazon EMR on EKS に必要な RBAC アクセス許可を付与します。

```

namespace=my-namespace
cat - >>EOF | kubectl apply -f - >>namespace "${namespace}"
apiVersion: rbac.authorization.k8s.io/v1
kind: Role
metadata:
  name: emr-containers
  namespace: ${namespace}
rules:
- apiGroups: [""]
  resources: ["namespaces"]
  verbs: ["get"]
- apiGroups: [""]
  resources: ["serviceaccounts", "services", "configmaps", "events", "pods",
"pods/log"]

```



```

  verbs: ["get", "list", "watch", "describe", "create", "edit", "delete",
"deletecollection", "annotate", "patch", "label"]
- apiGroups: [""]
  resources: ["secrets"]
  verbs: ["create", "patch", "delete", "watch"]
- apiGroups: ["apps"]
  resources: ["statefulsets", "deployments"]
  verbs: ["get", "list", "watch", "describe", "create", "edit", "delete",
"annotate", "patch", "label"]
- apiGroups: ["batch"]
  resources: ["jobs"]
  verbs: ["get", "list", "watch", "describe", "create", "edit", "delete",
"annotate", "patch", "label"]
- apiGroups: ["extensions"]
  resources: ["ingresses"]
  verbs: ["get", "list", "watch", "describe", "create", "edit", "delete",
"annotate", "patch", "label"]
- apiGroups: ["rbac.authorization.k8s.io"]
  resources: ["roles", "rolebindings"]
  verbs: ["get", "list", "watch", "describe", "create", "edit", "delete",
"deletecollection", "annotate", "patch", "label"]
- apiGroups: [""]
  resources: ["persistentvolumeclaims"]
  verbs: ["get", "list", "watch", "describe", "create", "edit", "delete",
"annotate", "patch", "label"]
EOF

```

2. 名前空間にスコープが設定された Kubernetes ロールバインディングを作成する

次のコマンドを実行して、特定の名前空間に Kubernetes ロールバインディングを作成します。このロールバインディングは、前のステップで作成したロールに定義されたアクセス許可を、`emr-containers` という名前のユーザーに付与します。このユーザーにより、[Amazon EMR on EKS のサービスにリンクされたロール](#)が特定されるため、Amazon EMR on EKS は作成したロールによって定義されているとおりにアクションを実行できます。

```

namespace=my-namespace

cat - <<EOF | kubectl apply -f - --namespace "${namespace}"
apiVersion: rbac.authorization.k8s.io/v1
kind: RoleBinding
metadata:
  name: emr-containers

```

```
namespace: ${namespace}
subjects:
- kind: User
  name: emr-containers
  apiGroup: rbac.authorization.k8s.io
roleRef:
  kind: Role
  name: emr-containers
  apiGroup: rbac.authorization.k8s.io
EOF
```

3. Kubernetes **aws-auth** 設定マップを更新する

次のいずれかのオプションを使用して、Amazon EMR on EKS のサービスにリンクされたロールを、前のステップで Kubernetes ロールにバインドされた `emr-containers` ユーザーにマップできます。

オプション 1: `eksctl` を使用する

次の `eksctl` コマンドを実行して、Amazon EMR on EKS のサービスにリンクされたロールを `emr-containers` ユーザーにマップします。

```
eksctl create iamidentitymapping \
  --cluster my-cluster-name \
  --arn "arn:aws:iam::my-account-id:role/AWSServiceRoleForAmazonEMRContainers" \
  --username emr-containers
```

オプション 2: `eksctl` を使用しない

1. 次のコマンドを実行して、テキストエディタで `aws-auth` 設定マップを開きます。

```
kubectl edit -n kube-system configmap/aws-auth
```

Note

Error from server (NotFound): configmaps "aws-auth" not found というエラーを受け取った場合、「Amazon EKS ユーザーガイド」の[ユーザーロールの追加](#)の手順を参照して、ストック ConfigMap を適用してください。

2. Amazon EMR on EKS のサービスにリンクされたロールの詳細を、data の下の ConfigMap の mapRoles セクションに追加します。ファイルに存在しない場合は、このセクションを追加します。データの下で更新された mapRoles セクションは、次の例のようになります。

```
apiVersion: v1
data:
  mapRoles: |
    - rolearn: arn:aws:iam::<your-account-id>:role/
      AWSServiceRoleForAmazonEMRContainers
      username: emr-containers
    - ... <other previously existing role entries, if there's any>.
```

3. ファイルを保存し、テキストエディタを終了します。

EKS クラスターでサービスアカウント (IRSA) の IAM ロールを有効にする

サービスアカウントの IAM ロール機能は、Amazon EKS バージョン 1.14 以降、および 2019 年 9 月 3 日以降にバージョン 1.13 に更新された EKS クラスターで利用できます。この機能を使用するために、既存の EKS クラスターをバージョン 1.14 以降に更新できます。詳細については、「[Amazon EKS クラスターの Kubernetes バージョンの更新](#)」を参照してください。

クラスターがサービスアカウントの IAM ロールをサポートしている場合、[OpenID Connect](#) 発行者 URL が関連付けられます。この URL は、Amazon EKS コンソールで表示するか、次の AWS CLI コマンドを使用して取得できます。

Important

このコマンドで適切な出力を得るには、AWS CLI の最新バージョンを使用する必要があります。

```
aws eks describe-cluster --name cluster_name --query "cluster.identity.oidc.issuer" --output text
```

予想される出力は次のようになります。

```
https://oidc.eks.<region-code>.amazonaws.com/id/EXAMPLED539D4633E53DE1B716D3041E
```

クラスターでサービスアカウントの IAM ロールを使用するには、[eksctl](#) または [AWS Management Console](#) のいずれかを使用して OIDC ID プロバイダーを作成する必要があります。

eksctl を使用してクラスターの IAM OIDC ID プロバイダーを作成するには

以下のコマンドを使用して、eksctl のバージョンを確認します。この手順では、eksctl をインストール済みで、お使いの eksctl のバージョンが 0.32.0 以上であることを前提としています。

```
eksctl version
```

eksctl のインストールまたはアップグレードの詳細については、「[eksctl のインストールまたはアップグレード](#)」を参照してください。

次のコマンドを使用して、クラスターの OIDC ID プロバイダーを作成します。*cluster_name* は、独自の値に置き換えてください。

```
eksctl utils associate-iam-oidc-provider --cluster cluster_name --approve
```

AWS Management Console を使用してクラスターの IAM OIDC プロバイダーを作成するには

クラスターの Amazon EKS コンソールの説明から OIDC 発行者 URL を取得するか、次の AWS CLI コマンドを使用します。

次のコマンドを使って、AWS CLI から OIDC 発行者 URL を取得します。

```
aws eks describe-cluster --name <cluster_name> --query "cluster.identity.oidc.issuer" --output text
```

次の手順に従って、Amazon EKS コンソールから OIDC 発行者 URL を取得します。

1. IAM コンソール (<https://console.aws.amazon.com/iam/>) を開きます。
2. ナビゲーションペインで、[ID プロバイダー] を選択し、[プロバイダーの作成] をクリックします。
 1. [プロバイダーのタイプ] で [Choose a provider type] を選択してから、[OpenID Connect] を選択します。
 2. Provider URL に、クラスターの OIDC 発行者 URL を貼り付けます。
 3. [対象者] に、「sts.amazonaws.com」と入力し、[次のステップ] を選択します。
3. プロバイダー情報が正しいことを確認し、[作成] を選択して ID プロバイダーを作成します。

ジョブ実行ロールを作成する

Amazon EMR on EKS でワークロードを実行するには、IAM ロールを作成する必要があります。このドキュメントでは、このロールをジョブ実行ロールと呼びます。IAM ロールの作成方法の詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ロールの作成](#)」を参照してください。

また、ジョブ実行ロールの権限を指定する IAM ポリシーを作成し、その IAM ポリシーをジョブ実行ロールにアタッチする必要があります。

ジョブ実行ロールの次のポリシーでは、リソースターゲット、Amazon S3、および CloudWatch へのアクセスが許可されます。これらのアクセス許可は、ジョブとアクセスログを監視するために必要です。AWS CLI を使用して同じプロセスを実行する場合は、Amazon EMR on EKS Workshop の「[Create IAM Role for job execution](#)」セクションのステップを使用してロールをセットアップすることもできます。

Note

アクセス権限は、ジョブ実行ロール内のすべての S3 オブジェクトに付与するのではなく、適切にスコープする必要があります。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "s3:PutObject",
        "s3:GetObject",
        "s3:ListBucket"
      ],
      "Resource": "arn:aws:s3:::example-bucket"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "logs:PutLogEvents",
        "logs:CreateLogStream",
        "logs:DescribeLogGroups",
        "logs:DescribeLogStreams"
      ],
    }
  ]
}
```

```
        "Resource": [
            "arn:aws:logs:*:*:*"
        ]
    }
]
}
```

詳細については、[ジョブ実行ロールの使用](#)、[S3ログ使用のためのジョブ実行の構成](#)、および [CloudWatchログ使用のためのジョブ実行の構成](#)) を参照してください。

ジョブ実行ロールの信頼ポリシーを更新する

サービスアカウントの IAM ロール (IRSA) を使用して Kubernetes 名前空間上でジョブを実行する場合、管理者はジョブ実行ロールと EMR マネージドサービスアカウントの ID との間に信頼関係を作成する必要があります。信頼関係は、ジョブ実行ロールの信頼ポリシーを更新することによって作成できます。EMR マネージドサービスアカウントは、ジョブの送信時に自動的に作成され、ジョブが送信される名前空間にスコープ設定されます。

信頼ポリシーを更新するには、次のコマンドを実行します。

```
aws emr-containers update-role-trust-policy \
  --cluster-name cluster \
  --namespace namespace \
  --role-name iam_role_name_for_job_execution
```

詳細については、「[Amazon EMR on EKS でのジョブ実行ロールの使用](#)」を参照してください。

Important

上記のコマンドを実行するオペレータには、`eks:DescribeCluster`、`iam:GetRole`、`iam:UpdateAssumeRolePolicy` のアクセス許可が必要です。

Amazon EMR on EKS へのアクセス許可をユーザーに付与する

Amazon EMR on EKS で実行するアクションについては、そのアクションに対応する IAM アクセス許可が必要です。Amazon EMR on EKS アクションを実行し、使用する IAM ユーザーまたはロールにポリシーをアタッチできる IAM ポリシーを作成する必要があります。

このトピックでは、新しいポリシーを作成し、ユーザーにアタッチする手順について説明します。Amazon EMR on EKS 環境を設定するために必要な基本的なアクセス許可についても説明します。ビジネスニーズに基づいて、可能な限り、特定のリソースに対するアクセス許可を絞り込むことをお勧めします。

新しい IAM ポリシーを作成して、IAM コンソールでユーザーにアタッチする

新規 IAM ポリシーを作成する

1. AWS Management Console にサインインして、IAM コンソール (<https://console.aws.amazon.com/iam/>) を開きます。
2. IAM コンソールの左側のナビゲーションペインで [ポリシー] を選択します。
3. [ポリシー] ページで、[ポリシーの作成] を選択します。
4. [Create Policy] (ポリシーの作成) ウィンドウで、[Edit JSON] (JSON の編集) タブに移動します。この手順の後、例に示されているように、1 つ以上の JSON ステートメントを含むポリシードキュメントを作成します。次に、[ポリシーの確認] を選択します。
5. [Review Policy] (ポリシーの確認) 画面で、[Policy Name] (ポリシー名) に AmazonEMR0nEKSPolicy (など) を入力します。任意で説明を入力し、[ポリシーの作成] を選択します。

ポリシーをユーザーまたはロールにアタッチする

1. AWS Management Console にサインインして、<https://console.aws.amazon.com/iam/> で IAM コンソールを開きます。
2. ナビゲーションペインで、[ポリシー] を選択します。
3. ポリシーのリストで、前のセクションで作成したポリシーの横にあるチェックボックスを選択します。[Filter (フィルター)] メニューと検索ボックスを使用して、ポリシーのリストをフィルタリングできます。
4. [Policy actions] を選択して、[Attach] を選択します。
5. ポリシーをアタッチするユーザーまたはロールを選択します。[Filter] メニューと検索ボックスを使用して、プリンシパルエンティティのリストをフィルタリングできます。ポリシーをアタッチするユーザーまたはロールを選択した後、[Attach policy] (ポリシーのアタッチ) を選択します。

仮想クラスターを管理するためのアクセス許可

AWS アカウントで仮想クラスターを管理するには、次のアクセス許可を含む IAM ポリシーを作成します。これらのアクセス許可により、AWS アカウントで仮想クラスターを作成、一覧表示、説明、および削除ができるようになります。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "iam:CreateServiceLinkedRole"
      ],
      "Resource": "*",
      "Condition": {
        "StringLike": {
          "iam:AWSServiceName": "emr-containers.amazonaws.com"
        }
      }
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "emr-containers:CreateVirtualCluster",
        "emr-containers:ListVirtualClusters",
        "emr-containers:DescribeVirtualCluster",
        "emr-containers>DeleteVirtualCluster"
      ],
      "Resource": "*"
    }
  ]
}
```

AWS アカウントから初めて CreateVirtualCluster オペレーションが呼び出されるときに、Amazon EMR on EKS のサービスにリンクされたロールを作成するための CreateServiceLinkedRole アクセス許可も必要になります。詳細については、「[Amazon EMR on EKS でのサービスにリンクされたロールの使用](#)」を参照してください。

ジョブを送信するためのアクセス許可

AWS アカウントで仮想クラスター上にジョブを送信するには、次のアクセス許可を含む IAM ポリシーを作成します。これらのアクセス許可により、アカウント内のすべての仮想クラスターに対して、ジョブ実行の開始、一覧表示、説明、およびキャンセルを行えるようになります。仮想クラスターを一覧表示または記述するアクセス許可を追加することを検討する必要があります。これにより、ジョブを送信する前に仮想クラスターの状態を確認できます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "emr-containers:StartJobRun",
        "emr-containers:ListJobRuns",
        "emr-containers:DescribeJobRun",
        "emr-containers:CancelJobRun"
      ],
      "Resource": "*"
    }
  ]
}
```

デバッグとモニタリングを行うためのアクセス許可

Amazon S3 および CloudWatch にプッシュされたログにアクセスしたり、Amazon EMR コンソールでアプリケーションイベントログを表示したりするには、以下のアクセス許可を持つ IAM ポリシーを作成します。ビジネスニーズに基づいて、可能な限り、特定のリソースに対するアクセス許可を絞り込むことをお勧めします。

Important

Amazon S3 バケットを作成していない場合は、s3:CreateBucket アクセス許可をポリシーステートメントに追加する必要があります。ロググループを作成していない場合は、logs:CreateLogGroup をポリシーステートメントに追加する必要があります。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
```

```
"Statement": [
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "emr-containers:DescribeJobRun",
      "elasticmapreduce:CreatePersistentAppUI",
      "elasticmapreduce:DescribePersistentAppUI",
      "elasticmapreduce:GetPersistentAppUIPresignedURL"
    ],
    "Resource": "*"
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "s3:GetObject",
      "s3:ListBucket"
    ],
    "Resource": "*"
  },
  {
    "Effect": "Allow",
    "Action": [
      "logs:Get*",
      "logs:DescribeLogGroups",
      "logs:DescribeLogStreams"
    ],
    "Resource": "*"
  }
]
```

Amazon S3 および CloudWatch にログをプッシュするようにジョブ実行を設定する方法の詳細については、[S3ログ使用のための実行の構成](#)) および [CloudWatchログ使用のためのジョブ実行の構成](#)) を参照してください。

Amazon EKS クラスターをAmazon EMR に登録する

ワークロードを実行するように Amazon EMR on EKS をセットアップするために必要な最後の手順は、クラスターの登録です。

次のコマンドを使用して、前の手順で設定した Amazon EKS クラスターと名前空間の名前を指定して仮想クラスターを作成します。

Note

各仮想クラスターには、EKS クラスター全体で一意的な名前を付ける必要があります。同じ名前の仮想クラスターが 2 つあると、デプロイプロセスは失敗します。これは、その 2 つの仮想クラスターがそれぞれ異なる EKS クラスターに属している場合でも同じです。

```
aws emr-containers create-virtual-cluster \  
--name virtual_cluster_name \  
--container-provider '{  
  "id": "cluster_name",  
  "type": "EKS",  
  "info": {  
    "eksInfo": {  
      "namespace": "namespace_name"  
    }  
  }  
'
```

または、仮想クラスターに必要なパラメータを含む JSON ファイルを作成し、JSON ファイルへのパスを指定して `create-virtual-cluster` コマンドを実行することもできます。詳細については、「[仮想クラスターの管理](#)」を参照してください。

Note

仮想クラスターが正常に作成されたことを確認するには、`list-virtual-clusters` オペレーションを使用するか、Amazon EMR コンソールで Virtual Clusters ページに移動して、仮想クラスターのステータスを確認します。

StartJobRun でジョブ実行を送信する

指定したパラメータを持つ JSON ファイルを使用してジョブ実行を送信するには

1. `start-job-run-request.json` ファイルを作成し、次の JSON ファイルの例に示すように、ジョブ実行に必要なパラメータを指定します。これらのパラメータの詳細については、[ジョブ実行を構成するためのオプション](#) を参照してください。

```
{
```

```
"name": "myjob",
"virtualClusterId": "123456",
"executionRoleArn": "iam_role_name_for_job_execution",
"releaseLabel": "emr-6.2.0-latest",
"jobDriver": {
  "sparkSubmitJobDriver": {
    "entryPoint": "entryPoint_location",
    "entryPointArguments": ["argument1", "argument2", ...],
    "sparkSubmitParameters": "--class <main_class> --conf
spark.executor.instances=2 --conf spark.executor.memory=2G --conf
spark.executor.cores=2 --conf spark.driver.cores=1"
  }
},
"configurationOverrides": {
  "applicationConfiguration": [
    {
      "classification": "spark-defaults",
      "properties": {
        "spark.driver.memory": "2G"
      }
    }
  ],
  "monitoringConfiguration": {
    "persistentAppUI": "ENABLED",
    "cloudWatchMonitoringConfiguration": {
      "logGroupName": "my_log_group",
      "logStreamNamePrefix": "log_stream_prefix"
    },
    "s3MonitoringConfiguration": {
      "logUri": "s3://my_s3_log_location"
    }
  }
}
}
```

- ローカルに保存されている `start-job-run-request.json` ファイルへのパスを指定して、`start-job-run` コマンドを使用します。

```
aws emr-containers start-job-run \
--cli-input-json file:///./start-job-run-request.json
```

start-job-run コマンドを使用してジョブ実行を開始するには

1. 次の例に示すように、StartJobRun コマンドで指定したすべてのパラメータを指定します。

```
aws emr-containers start-job-run \  
--virtual-cluster-id 123456 \  
--name myjob \  
--execution-role-arn execution-role-arn \  
--release-label emr-6.2.0-latest \  
--job-driver '{"sparkSubmitJobDriver": {"entryPoint": "entryPoint_location",  
"entryPointArguments": ["argument1", "argument2", ...], "sparkSubmitParameters":  
"--class <main_class> --conf spark.executor.instances=2 --conf  
spark.executor.memory=2G --conf spark.executor.cores=2 --conf  
spark.driver.cores=1"}}' \  
--configuration-overrides '{"applicationConfiguration": [{"classification":  
"spark-defaults", "properties": {"spark.driver.memory": "2G"}},  
"monitoringConfiguration": {"cloudWatchMonitoringConfiguration":  
{"logGroupName": "log_group_name", "logStreamNamePrefix": "log_stream_prefix"},  
"persistentAppUI": "ENABLED", "s3MonitoringConfiguration": {"logUri":  
"s3://my_s3_log_location" } } }'
```

2. Spark SQL の場合、以下の例に示すように、StartJobRun コマンドで指定したすべてのパラメータを指定します。

```
aws emr-containers start-job-run \  
--virtual-cluster-id 123456 \  
--name myjob \  
--execution-role-arn execution-role-arn \  
--release-label emr-6.7.0-latest \  
--job-driver '{"sparkSqlJobDriver": {"entryPoint": "entryPoint_location",  
"sparkSqlParameters": "--conf spark.executor.instances=2 --conf  
spark.executor.memory=2G --conf spark.executor.cores=2 --conf  
spark.driver.cores=1"}}' \  
--configuration-overrides '{"applicationConfiguration": [{"classification":  
"spark-defaults", "properties": {"spark.driver.memory": "2G"}},  
"monitoringConfiguration": {"cloudWatchMonitoringConfiguration":  
{"logGroupName": "log_group_name", "logStreamNamePrefix": "log_stream_prefix"},  
"persistentAppUI": "ENABLED", "s3MonitoringConfiguration": {"logUri":  
"s3://my_s3_log_location" } } }'
```

Spark 演算子を使用して Spark ジョブを実行する

Amazon EMR リリース 6.10.0 以降では、Amazon EMR on EKS のジョブ送信モデルとして、Apache Spark の Kubernetes 演算子、または Spark 演算子がサポートされています。Spark 演算子を使用すると、Amazon EMR リリースランタイムを使用して Spark アプリケーションを独自の Amazon EKS クラスターにデプロイおよび管理できます。Amazon EKS クラスターに Spark 演算子をデプロイすると、その演算子を使用して Spark アプリケーションを直接送信できます。演算子は Spark アプリケーションのライフサイクルを管理します。

Note

Amazon EMR は、Amazon EMR アプリケーションイメージをダウンロードし始めてから Amazon EKS ポッドが終了するまでに演算子ポッドから使用する vCPU とメモリリソースに基づいて Amazon EKS の料金を計算し、最も近い秒数に切り上げられます。

トピック

- [Amazon EMR on EKS での Spark 演算子のセットアップ](#)
- [Amazon EMR on EKS で Spark 演算子の使用を開始する](#)
- [Amazon EMR on EKS の Spark 演算子で垂直的自動スケーリングを使用する](#)
- [Amazon EMR on EKS での Spark 演算子のアンインストール](#)
- [Amazon EMR on EKS でのセキュリティと Spark 演算子](#)

Amazon EMR on EKS での Spark 演算子のセットアップ

Spark 演算子を Amazon EKS にインストールする前に、以下のタスクを完了してセットアップを行います。Amazon Web Services (AWS) に既にサインアップしていて、Amazon EKS を既に使用している場合、Amazon EMR on EKS を使用する準備はほぼ整っています。Amazon EKS で Spark 演算子のセットアップを行うには、以下のタスクを完了します。前提条件のいずれかを既に完了している場合は、その前提条件をスキップして、次の前提条件に進むことができます。

- [AWS CLI をインストールする](#) — AWS CLI を既にインストールしている場合は、それが最新バージョンであることを確認します。
- [eksctl のインストール](#) — eksctl は、Amazon EKS との通信に使用するコマンドラインツールです。

- [Helm のインストール](#) – Kubernetes 用の Helm パッケージマネージャーを使用すると、Kubernetes クラスターにアプリケーションをインストールして管理できます。
- [Amazon EKS クラスターのセットアップ](#) – 新しい Kubernetes クラスターをノードと共に Amazon EKS に作成する手順に従います。
- [Amazon EMR ベースイメージ URI を選択する](#) (リリース 6.10.0 以降) – Spark 演算子は Amazon EMR リリース 6.10.0 以降でサポートされています。

Amazon EMR on EKS で Spark 演算子の使用を開始する

このトピックは、Spark アプリケーションとスケジューラ Spark アプリケーションをデプロイして、Amazon EKS で Spark 演算子の使用を開始するのに役立ちます。

Spark 演算子をインストールする

Apache Spark 用の Kubernetes 演算子をインストールするには、以下のステップを実行します。

1. 「[Amazon EMR on EKS での Spark 演算子のセットアップ](#)」のステップをまだ完了していない場合は完了します。
2. Amazon ECR レジストリに対し、Helm クライアントを認証します。以下のコマンドで、*region-id* 値を任意の AWS リージョンに置き換え、[リージョン別の Amazon ECR レジストリアカウント](#) ページに表示されているリージョンに対応する *ECR-registry-account* 値を置き換えます。

```
aws ecr get-login-password \  
--region region-id | helm registry login \  
--username AWS \  
--password-stdin ECR-registry-account.dkr.ecr.region-id.amazonaws.com
```

3. 以下のコマンドで Spark 演算子をインストールします。

Helm チャート `--version` パラメータには、`emr-` プレフィックスと日付サフィックスを削除した Amazon EMR リリースラベルを使用してください。例えば、`emr-6.12.0-java17-latest` リリースでは、`6.12.0-java17` を指定します。以下のコマンドの例では `emr-6.14.0-latest` リリースを使用しているため、Helm チャート `--version` 用に `6.14.0` を指定しています。

```
helm install spark-operator-demo \  
oci://895885662937.dkr.ecr.region-id.amazonaws.com/spark-operator \  

```

```
--set emrContainers.awsRegion=region-id \  
--version 6.14.0 \  
--namespace spark-operator \  
--create-namespace
```

デフォルトでは、このコマンドは Spark 演算子のサービスアカウント `emr-containers-sa-spark-operator` を作成します。別のサービスアカウントを使用するには、引数 `serviceAccounts.sparkoperator.name` を指定します。例:

```
--set serviceAccounts.sparkoperator.name my-service-account-for-spark-operator
```

[Spark 演算子で垂直的自動スケーリングを使用する](#)場合は、インストールコマンドに以下の行を追加して、演算子にウェブフックを許可します。

```
--set webhook.enable=true
```

4. `helm list` コマンドで Helm チャートをインストールしたことを確認します。

```
helm list --namespace spark-operator -o yaml
```

`helm list` コマンドは、新しくデプロイした Helm チャートのリリース情報を返します。

```
app_version: v1beta2-1.3.8-3.1.1  
chart: spark-operator-6.14.0  
name: spark-operator-demo  
namespace: spark-operator  
revision: "1"  
status: deployed  
updated: 2023-03-14 18:20:02.721638196 +0000 UTC
```

5. 必要な追加オプションを指定してインストールを完了します。詳しくは、GitHub の「[spark-on-k8s-operator](#)」ドキュメントを参照してください。

Spark アプリケーションの実行

Spark 演算子は Amazon EMR 6.10.0 以降でサポートされています。Spark 演算子をインストールすると、Spark アプリケーションを実行するサービスアカウント `emr-containers-sa-spark` がデフォルトで作成されます。Amazon EMR on EKS 6.10.0 以降で Spark 演算子を使用して Spark アプリケーションを実行するには、以下のステップを実行します。

1. Spark 演算子を使用して Spark アプリケーションを実行する前に、[Amazon EMR on EKS での Spark 演算子のセットアップ](#) および [Spark 演算子をインストールする](#) のステップを完了してください。
2. 以下の例の内容で SparkApplication 定義ファイル spark-pi.yaml を作成します。

```
apiVersion: "sparkoperator.k8s.io/v1beta2"
kind: SparkApplication
metadata:
  name: spark-pi
  namespace: spark-operator
spec:
  type: Scala
  mode: cluster
  image: "895885662937.dkr.ecr.us-west-2.amazonaws.com/spark/emr-6.10.0:latest"
  imagePullPolicy: Always
  mainClass: org.apache.spark.examples.SparkPi
  mainApplicationFile: "local:///usr/lib/spark/examples/jars/spark-examples.jar"
  sparkVersion: "3.3.1"
  restartPolicy:
    type: Never
  volumes:
    - name: "test-volume"
      hostPath:
        path: "/tmp"
        type: Directory
  driver:
    cores: 1
    coreLimit: "1200m"
    memory: "512m"
    labels:
      version: 3.3.1
    serviceAccount: emr-containers-sa-spark
    volumeMounts:
      - name: "test-volume"
        mountPath: "/tmp"
  executor:
    cores: 1
    instances: 1
    memory: "512m"
    labels:
      version: 3.3.1
    volumeMounts:
      - name: "test-volume"
```

```
mountPath: "/tmp"
```

- 次に、以下のコマンドを使用して、Spark アプリケーションを送信します。これにより、spark-pi という名前の SparkApplication オブジェクトも作成されます。

```
kubectl apply -f spark-pi.yaml
```

- 次のコマンドで SparkApplication オブジェクトのイベントがないか確認します。

```
kubectl describe sparkapplication spark-pi --namespace spark-operator
```

Spark 演算子を使用して Spark にアプリケーションを送信する方法の詳細については、GitHub の spark-on-k8s-operator ドキュメントの「[Using a SparkApplication](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS の Spark 演算子で垂直的自動スケーリングを使用する

Amazon EMR on EKS の垂直的自動スケーリングは、リソース管理を簡素化します。Amazon EMR Spark アプリケーションに提供するワークロードのニーズに合わせて、メモリと CPU リソースを自動的に調整します。詳細については、「[Amazon EMR Spark ジョブで垂直的自動スケーリングを使用する](#)」を参照してください。

このセクションでは、垂直的自動スケーリングを使用するように Spark 演算子を設定する方法について説明します。

前提条件

続行する前に、以下の設定を完了していることを確認してください。

- [Amazon EMR on EKS での Spark 演算子のセットアップ](#) のステップを完了します。
- 「[Spark 演算子をインストールする](#)」の各ステップを実行します。ステップ 3 では、インストールコマンドに以下の行を追加して、演算子にウェブフックを許可します。

```
--set webhook.enable=true
```

Spark 演算子で垂直的自動スケーリングを使用してジョブを実行する

Spark 演算子を使用して Spark アプリケーションを実行する前に、「[前提条件](#)」のステップを完了する必要があります。

Spark 演算子で垂直的自動スケーリングを使用するには、アプリケーションに追加する必要がある設定がいくつかあります。このリストの下に例があります。

ドライバー設定

ドライバー設定に以下の注釈を追加します。

```
emr-containers.amazonaws.com/dynamic.sizing.signature: "YOUR_JOB_SIGNATURE"
```

アプリケーション設定に以下のラベルを追加します。

```
emr-containers.amazonaws.com/dynamic.sizing: "true"
```

エグゼキューター設定

例えば、エグゼキューター設定に以下のラベルを追加します。

```
emr-containers.amazonaws.com/dynamic.sizing.signature: "YOUR_JOB_SIGNATURE"
```

エグゼキューター設定に以下の環境変数を定義します。

```
- name: DYNAMIC_SIZING_ENABLED
  value: "true" # true, not set otherwise
- name: OVERHEAD_FACTOR
  value: "0.1" # value of spark.kubernetes.memoryOverheadFactor
                # or spark.driver.memoryOverheadFactor, not set otherwise
- name: PYSPARK_MEM
  value: "0.1" # value of spark.executor.pyspark.memory, not set otherwise
- name: EXEC_POD_CPU_REQUEST
  valueFrom:
    resourceFieldRef:
      containerName: spark-kubernetes-executor
      resource: requests.cpu
      divisor: 1
- name: EXEC_POD_CPU_LIMIT
  valueFrom:
```

```

    resourceFieldRef:
      containerName: spark-kubernetes-executor
      resource: limits.cpu
      divisor: 1
- name: EXEC_POD_MEM_REQUEST
  valueFrom:
    resourceFieldRef:
      containerName: spark-kubernetes-executor
      resource: requests.memory
      divisor: 1
- name: EXEC_POD_MEM_LIMIT
  valueFrom:
    resourceFieldRef:
      containerName: spark-kubernetes-executor
      resource: limits.memory
      divisor: 1

```

以下の例で、垂直的自動スケーリングを使用するために必要な設定を含む SparkApplication 定義ファイル `spark-pi.yaml` を示します。

```

apiVersion: "sparkoperator.k8s.io/v1beta2"
kind: SparkApplication
metadata:
  name: spark-pi
  namespace: spark-operator
spec:
  type: Scala
  mode: cluster
  image: "895885662937.dkr.ecr.us-west-2.amazonaws.com/spark/emr-6.10.0:latest"
  imagePullPolicy: Always
  mainClass: org.apache.spark.examples.SparkPi
  mainApplicationFile: "local:///usr/lib/spark/examples/jars/spark-examples.jar"
  arguments:
    - "10000"
  sparkVersion: "3.3.1"
  sparkConf:
    spark.kubernetes.executor.deleteOnTermination: "true"
  restartPolicy:
    type: Never
  volumes:
    - name: "test-volume"
      hostPath:

```

```
    path: "/tmp"
    type: Directory
driver:
  cores: 1
  coreLimit: "1200m"
  memory: "512m"
  annotations:
    emr-containers.amazonaws.com/dynamic.sizing.signature: "my-signature"
  labels:
    emr-containers.amazonaws.com/dynamic.sizing: "true"
    version: 3.3.1
  serviceAccount: emr-containers-sa-spark
  volumeMounts:
    - name: "test-volume"
      mountPath: "/tmp"
executor:
  cores: 1
  instances: 1
  memory: "512m"
  labels:
    emr-containers.amazonaws.com/dynamic.sizing.signature: "my-signature"
    version: 3.3.1
  volumeMounts:
    - name: "test-volume"
      mountPath: "/tmp"
env:
  - name: "DYNAMIC_SIZING_ENABLED"
    value: "true" # true, not set otherwise
  - name: "EXEC_POD_CPU_REQUEST"
    valueFrom:
      resourceFieldRef:
        containerName: "spark-kubernetes-executor"
        resource: "requests.cpu"
        divisor: "1"
  - name: "EXEC_POD_CPU_LIMIT"
    valueFrom:
      resourceFieldRef:
        containerName: "spark-kubernetes-executor"
        resource: "limits.cpu"
        divisor: "1"
  - name: "EXEC_POD_MEM_REQUEST"
    valueFrom:
      resourceFieldRef:
        containerName: "spark-kubernetes-executor"
```

```

    resource: "requests.memory"
    divisor: "1"
  - name: "EXEC_POD_MEM_LIMIT"
    valueFrom:
      resourceFieldRef:
        containerName: "spark-kubernetes-executor"
        resource: "limits.memory"
        divisor: "1"

```

次に、以下のコマンドを使用して、Spark アプリケーションを送信します。これにより、spark-pi という名前の SparkApplication オブジェクトも作成されます。

```
kubectl apply -f spark-pi.yaml
```

Spark 演算子を使用して Spark にアプリケーションを送信する方法の詳細については、GitHub の spark-on-k8s-operator ドキュメントの「[Using a SparkApplication](#)」を参照してください。

垂直的自動スケーリング機能の検証

垂直的自動スケーリングが送信されたジョブで正しく機能することを確認するには、kubectl を使用して verticalpodautoscaler カスタムリソースを取得し、スケーリングの推奨事項を確認してください。

```
kubectl get verticalpodautoscalers --all-namespaces \
-l=emr-containers.amazonaws.com/dynamic.sizing.signature=my-signature
```

このクエリの出力は以下のようになります。

NAMESPACE	NAME	MODE
CPU MEM	PROVIDED AGE	
spark-operator	ds-p73j6mkosvc4xeb3gr7x4xol2bfcw5evqimzqojrlysvj3giozuq-vpa	Off
580026651	True 15m	

出力が類似していない場合やエラーコードが含まれている場合は、「[Amazon EMR on EKS 垂直自動スケーリングのトラブルシューティング](#)」を参照して、問題の解決に役立つ手順をご覧ください。

Amazon EMR on EKS での Spark 演算子のアンインストール

Spark 演算子をアンインストールするには、以下の手順を実行します。

1. 正しい名前空間を使用して Spark 演算子を削除します。この例の場合、名前空間は spark-operator-demo になります。

```
helm uninstall spark-operator-demo -n spark-operator
```

2. Spark 演算子サービスアカウントを削除します。

```
kubectl delete sa emr-containers-sa-spark-operator -n spark-operator
```

3. Spark 演算子 CustomResourceDefinitions (CRD) を削除します。

```
kubectl delete crd sparkapplications.sparkoperator.k8s.io  
kubectl delete crd scheduledsparkapplications.sparkoperator.k8s.io
```

Amazon EMR on EKS でのセキュリティと Spark 演算子

トピック

- [ロールベースアクセスコントロール \(RBAC、role-based access control\) を使用したクラスターのアクセス許可の設定](#)
- [サービスアカウント用 IAM ロール \(IRSA、IAM roles for service accounts\) でクラスターアクセス権限を設定する](#)

ロールベースアクセスコントロール (RBAC、role-based access control) を使用したクラスターのアクセス許可の設定

Spark 演算子をデプロイするために、Amazon EMR on EKS は Spark 演算子と Spark アプリケーション用に 2 つのロールとサービスアカウントを作成します。

トピック

- [演算子サービスアカウントとロール](#)
- [Spark サービスのアカウントとロール](#)

演算子サービスアカウントとロール

Amazon EMR on EKS は、Spark ジョブやサービスなどの他のリソース用の SparkApplications を管理するための演算子サービスアカウントとロールを作成します。

このサービスアカウントのデフォルト名は `emr-containers-sa-spark-operator` です。

このサービスロールには、以下の規則が適用されます。

```
rules:
- apiGroups:
  - ""
  resources:
  - pods
  verbs:
  - "*"
- apiGroups:
  - ""
  resources:
  - services
  - configmaps
  - secrets
  verbs:
  - create
  - get
  - delete
  - update
- apiGroups:
  - extensions
  - networking.k8s.io
  resources:
  - ingresses
  verbs:
  - create
  - get
  - delete
- apiGroups:
  - ""
  resources:
  - nodes
  verbs:
  - get
- apiGroups:
  - ""
  resources:
  - events
  verbs:
  - create
  - update
```



```
- patch
- apiGroups:
  - ""
  resources:
  - resourcequotas
  verbs:
  - get
  - list
  - watch
- apiGroups:
  - apiextensions.k8s.io
  resources:
  - customresourcedefinitions
  verbs:
  - create
  - get
  - update
  - delete
- apiGroups:
  - admissionregistration.k8s.io
  resources:
  - mutatingwebhookconfigurations
  - validatingwebhookconfigurations
  verbs:
  - create
  - get
  - update
  - delete
- apiGroups:
  - sparkoperator.k8s.io
  resources:
  - sparkapplications
  - sparkapplications/status
  - scheduledsparkapplications
  - scheduledsparkapplications/status
  verbs:
  - "*"
  {{- if .Values.batchScheduler.enable }}
  # required for the `volcano` batch scheduler
- apiGroups:
  - scheduling.incubator.k8s.io
  - scheduling.sigs.dev
  - scheduling.volcano.sh
  resources:
```

```
- podgroups
verbs:
- "*"
{{- end }}
{{ if .Values.webhook.enable }}
- apiGroups:
- batch
resources:
- jobs
verbs:
- delete
{{- end }}
```

Spark サービスのアカウントとロール

Spark ドライバーポッドには、ポッドと同じ名前空間にある Kubernetes サービスアカウントが必要です。このサービスアカウントには、エグゼキューターポッドの作成、取得、一覧表示、パッチ適用、削除を行う権限と、ドライバー用の Kubernetes ヘッドレスサービスを作成する権限が必要です。ポッドの名前空間のデフォルトサービスアカウントに必要な権限がない限り、ドライバーは失敗し、サービスアカウントなしで終了します。

このサービスアカウントのデフォルト名は `emr-containers-sa-spark` です。

このサービスロールには、以下の規則が適用されます。

```
rules:
- apiGroups:
- ""
resources:
- pods
verbs:
- "*"
- apiGroups:
- ""
resources:
- services
verbs:
- "*"
- apiGroups:
- ""
resources:
- configmaps
verbs:
```

```
- "*"
- apiGroups:
  - ""
  resources:
  - persistentvolumeclaims
  verbs:
  - "*"

```

サービスアカウント用 IAM ロール (IRSA、IAM roles for service accounts) でクラスターアクセス権限を設定する

このセクションでは、AWS Identity and Access Management ロールを引き受けるように Kubernetes サービスアカウントを設定する方法を例を示して説明します。これにより、サービスアカウントを使用するポッドが、ロールにアクセス権限がある任意の AWS サービスにアクセスできるようになります。

以下の例では、Spark アプリケーションを実行して Amazon S3 内のファイルの単語をカウントします。これを行うには、サービスアカウント用 IAM ロール (IRSA、IAM roles for service accounts) を設定して、Kubernetes サービスアカウントを認証および承認します。

Note

この例では、Spark 演算子と Spark アプリケーションを送信する名前空間に「spark-operator」名前空間を使用しています。

前提条件

このページの例を試す前に、以下の前提条件を完了します。

- [Spark 演算子のセットアップを行う。](#)
- [Spark 演算子をインストールする。](#)
- [Amazon S3 バケットを作成する。](#)
- お気に入りの詩を poem.txt という名前のテキストファイルに保存し、このファイルを S3 バケットにアップロードします。このページで作成した Spark アプリケーションは、テキストファイルの内容を読み取ります。S3 にファイルをアップロードする際の詳細については、「Amazon Simple Storage Service ユーザーガイド」の「[バケットにオブジェクトをアップロードする](#)」を参照してください。

IAM ロールを引き受けるように Kubernetes サービスアカウントを設定する

以下の手順に従って、Kubernetes サービスアカウントを設定し、AWS サービスにアクセスするためにポッドが使用できる IAM ロール (同サービスにアクセス権限を持つ) を引き受けるようにします。

1. [前提条件](#) を完了したら、AWS Command Line Interface を使用して、Amazon S3 にアップロードしたファイルへの読み取り専用アクセスを許可する `example-policy.json` ファイルを作成します。

```
cat >example-policy.json <<EOF
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "s3:GetObject",
        "s3:ListBucket"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:s3:::my-pod-bucket",
        "arn:aws:s3:::my-pod-bucket/*"
      ]
    }
  ]
}
EOF
```

2. 続いて、IAM ポリシー `example-policy` を作成します。

```
aws iam create-policy --policy-name example-policy --policy-document file://
example-policy.json
```

3. 次に、IAM ロール `example-role` を作成し、それを Spark ドライバーの Kubernetes サービスアカウントに関連付けます。

```
eksctl create iamserviceaccount --name driver-account-sa --namespace spark-operator
\
--cluster my-cluster --role-name "example-role" \
--attach-policy-arn arn:aws:iam::111122223333:policy/example-policy --approve
```

4. Spark ドライバサービスアカウントに必要なクラスターロールバインディングを含む yml ファイルを作成します。

```
cat >spark-rbac.yml <<EOF
apiVersion: v1
kind: ServiceAccount
metadata:
  name: driver-account-sa
---
apiVersion: rbac.authorization.k8s.io/v1
kind: ClusterRoleBinding
metadata:
  name: spark-role
roleRef:
  apiGroup: rbac.authorization.k8s.io
  kind: ClusterRole
  name: edit
subjects:
- kind: ServiceAccount
  name: driver-account-sa
  namespace: spark-operator
EOF
```

5. クラスターロールバインディング設定を適用します。

```
kubectl apply -f spark-rbac.yml
```

kubectl コマンドを実行すると、アカウントが正常に作成されたことを確認できます。

```
serviceaccount/driver-account-sa created
clusterrolebinding.rbac.authorization.k8s.io/spark-role configured
```

Spark 演算子からアプリケーションを実行する

[Kubernetes サービスアカウントを設定する](#)と、[前提条件](#)の一部としてアップロードしたテキストファイル内の単語数をカウントする Spark アプリケーションを実行できます。

1. ワードカウントアプリケーションの SparkApplication 定義を含む新しいファイル word-count.yml を作成します。

```
cat >word-count.yml <<EOF
```

```
apiVersion: "sparkoperator.k8s.io/v1beta2"
kind: SparkApplication
metadata:
  name: word-count
  namespace: spark-operator
spec:
  type: Java
  mode: cluster
  image: "895885662937.dkr.ecr.us-west-2.amazonaws.com/spark/emr-6.10.0:latest"
  imagePullPolicy: Always
  mainClass: org.apache.spark.examples.JavaWordCount
  mainApplicationFile: local:///usr/lib/spark/examples/jars/spark-examples.jar
  arguments:
    - s3://my-pod-bucket/poem.txt
  hadoopConf:
    # EMRFS filesystem
    fs.s3.customAWSCredentialsProvider:
com.amazonaws.auth.WebIdentityTokenCredentialsProvider
    fs.s3.impl: com.amazon.ws.emr.hadoop.fs.EmrFileSystem
    fs.AbstractFileSystem.s3.impl: org.apache.hadoop.fs.s3.EMRFSDelegate
    fs.s3.buffer.dir: /mnt/s3
    fs.s3.getObject.initialSocketTimeoutMilliseconds: "2000"

mapreduce.fileoutputcommitter.algorithm.version.emr_internal_use_only.EmrFileSystem:
"2"
  mapreduce.fileoutputcommitter.cleanup-
failures.ignored.emr_internal_use_only.EmrFileSystem: "true"
  sparkConf:
    # Required for EMR Runtime
    spark.driver.extraClassPath: /usr/lib/hadoop-lzo/lib/*:/usr/lib/hadoop/
hadoop-aws.jar:/usr/share/aws/aws-java-sdk/*:/usr/share/aws/emr/emrfs/conf:/usr/
share/aws/emr/emrfs/lib/*:/usr/share/aws/emr/emrfs/auxlib/*:/usr/share/aws/emr/
security/conf:/usr/share/aws/emr/security/lib/*:/usr/share/aws/hmclient/lib/aws-
glue-datacatalog-spark-client.jar:/usr/share/java/Hive-JSON-Serde/hive-openx-
serde.jar:/usr/share/aws/sagemaker-spark-sdk/lib/sagemaker-spark-sdk.jar:/home/
hadoop/extrajars/*
    spark.driver.extraLibraryPath: /usr/lib/hadoop/lib/native:/usr/lib/hadoop-lzo/
lib/native:/docker/usr/lib/hadoop/lib/native:/docker/usr/lib/hadoop-lzo/lib/native
    spark.executor.extraClassPath: /usr/lib/hadoop-lzo/lib/*:/usr/lib/hadoop/
hadoop-aws.jar:/usr/share/aws/aws-java-sdk/*:/usr/share/aws/emr/emrfs/conf:/usr/
share/aws/emr/emrfs/lib/*:/usr/share/aws/emr/emrfs/auxlib/*:/usr/share/aws/emr/
security/conf:/usr/share/aws/emr/security/lib/*:/usr/share/aws/hmclient/lib/aws-
glue-datacatalog-spark-client.jar:/usr/share/java/Hive-JSON-Serde/hive-openx-
```

```

serde.jar:/usr/share/aws/sagemaker-spark-sdk/lib/sagemaker-spark-sdk.jar:/home/
hadoop/extrajars/*
  spark.executor.extraLibraryPath: /usr/lib/hadoop/lib/native:/usr/lib/hadoop-
lzo/lib/native:/docker/usr/lib/hadoop/lib/native:/docker/usr/lib/hadoop-lzo/lib/
native
  sparkVersion: "3.3.1"
  restartPolicy:
    type: Never
  driver:
    cores: 1
    coreLimit: "1200m"
    memory: "512m"
    labels:
      version: 3.3.1
    serviceAccount: my-spark-driver-sa
  executor:
    cores: 1
    instances: 1
    memory: "512m"
    labels:
      version: 3.3.1
EOF

```

2. Spark アプリケーションを送信します。

```
kubectl apply -f word-count.yaml
```

kubectl コマンドは、word-count という SparkApplication オブジェクトが正常に作成されたことを示す確認を返します。

```
sparkapplication.sparkoperator.k8s.io/word-count configured
```

3. SparkApplication オブジェクトのイベントを確認するには、以下のコマンドを実行します。

```
kubectl describe sparkapplication word-count -n spark-operator
```

kubectl コマンドは、SparkApplication の説明とイベントを返します。

```

Events:
  Type          Reason          Age          From
  Message

```

```

-----
Normal   SparkApplicationSpecUpdateProcessed  3m2s (x2 over 17h)   spark-
operator Successfully processed spec update for SparkApplication word-count
Warning  SparkApplicationPendingRerun         3m2s (x2 over 17h)   spark-
operator SparkApplication word-count is pending rerun
Normal   SparkApplicationSubmitted             2m58s (x2 over 17h)   spark-
operator SparkApplication word-count was submitted successfully
Normal   SparkDriverRunning                   2m56s (x2 over 17h)   spark-
operator Driver word-count-driver is running
Normal   SparkExecutorPending                 2m50s                 spark-
operator Executor [javawordcount-fdd1698807392c66-exec-1] is pending
Normal   SparkExecutorRunning                 2m48s                 spark-
operator Executor [javawordcount-fdd1698807392c66-exec-1] is running
Normal   SparkDriverCompleted                 2m31s (x2 over 17h)   spark-
operator Driver word-count-driver completed
Normal   SparkApplicationCompleted            2m31s (x2 over 17h)   spark-
operator SparkApplication word-count completed
Normal   SparkExecutorCompleted               2m31s (x2 over 2m31s) spark-
operator Executor [javawordcount-fdd1698807392c66-exec-1] completed

```

アプリケーションが S3 ファイル内の単語数をカウントするようになりました。単語数を確認するには、ドライバーのログファイルを参照してください。

```
kubectl logs pod/word-count-driver -n spark-operator
```

kubectl コマンドは、ワードカウントアプリケーションの結果を含むログファイルの内容を返しません。

```
INFO DAGScheduler: Job 0 finished: collect at JavaWordCount.java:53, took 5.146519 s
Software: 1
```

Spark 演算子を使用して Spark にアプリケーションを送信する方法の詳細については、GitHub の Apache Spark 用 Kubernetes 演算子 (spark-on-k8s-operator) ドキュメントの「[Using a SparkApplication](#)」を参照してください。

spark-submit を使用して Spark ジョブを実行する

Amazon EMR リリース 6.10.0 以降では、Spark アプリケーションを Amazon EMR on EKS クラスターに送信して実行するために使用できるコマンドラインツールとして spark-submit がサポートされています。

Note

Amazon EMR は、Amazon EMR アプリケーションイメージをダウンロードし始めてから Amazon EKS ポッドが終了するまでに演算子ポッドから使用する vCPU とメモリリソースに基づいて Amazon EKS の料金を計算し、最も近い秒数に切り上げられます。

トピック

- [Amazon EMR on EKS での spark-submit のセットアップ](#)
- [Amazon EMR on EKS で spark-submit の使用を開始する](#)
- [spark-submit の Spark ドライバサービスアカウントセキュリティ要件](#)

Amazon EMR on EKS での spark-submit のセットアップ

Amazon EMR on EKS で spark-submit を使用してアプリケーションを実行する前に、以下のタスクを完了してセットアップを行います。Amazon Web Services (AWS) に既にサインアップしていて、Amazon EKS を既に使用している場合、Amazon EMR on EKS を使用する準備はほぼ整っています。前提条件のいずれかを既に完了している場合は、その前提条件をスキップして、次の前提条件に進むことができます。

- [AWS CLI をインストールする](#) — AWS CLI を既にインストールしている場合は、それが最新バージョンであることを確認します。
- [eksctl のインストール](#) — eksctl は、Amazon EKS との通信に使用するコマンドラインツールです。
- [Amazon EKS クラスターのセットアップ](#) — 新しい Kubernetes クラスターをノードと共に Amazon EKS に作成する手順に従います。
- [Amazon EMR ベースイメージ URI \(リリース 6.10.0 以上\) を選択する](#) — spark-submit コマンドは Amazon EMR リリース 6.10.0 以降でサポートされています。

- ドライバーサービスアカウントにエグゼキューターポッドを作成および監視するための適切な権限があることを確認します。詳細については、「[spark-submit の Spark ドライバーサービスアカウントセキュリティ要件](#)」を参照してください。
- ローカルの [AWS 認証情報プロファイル](#) をセットアップします。
- [Amazon EKS クラスターエンドポイント](#) を取得します。

Amazon EMR on EKS で spark-submit の使用を開始する

Spark アプリケーションの実行

Amazon EMR 6.10.0 以降では、Amazon EKS クラスターで Spark アプリケーションを実行するための spark-submit がサポートされています。Spark アプリケーションを実行するには、以下の手順に従います。

1. spark-submit コマンドで Spark アプリケーションを実行する前に、「[Amazon EMR on EKS での spark-submit のセットアップ](#)」のステップを完了してください。
2. 次の環境変数の値を設定します。

```
export SPARK_HOME=spark-home
export MASTER_URL=k8s://Amazon EKS-cluster-endpoint
```

3. 次に、以下のコマンドを使用して、Spark アプリケーションを送信します。

```
$SPARK_HOME/bin/spark-submit \  
  --class org.apache.spark.examples.SparkPi \  
  --master $MASTER_URL \  
  --conf spark.kubernetes.container.image=895885662937.dkr.ecr.us-  
west-2.amazonaws.com/spark/emr-6.10.0:latest \  
  --conf spark.kubernetes.authenticate.driver.serviceAccountName=spark \  
  --deploy-mode cluster \  
  --conf spark.kubernetes.namespace=spark-operator \  
  local:///usr/lib/spark/examples/jars/spark-examples.jar 20
```

Spark へのアプリケーションの送信の詳細については、Apache Spark ドキュメントの「[Submitting applications](#)」を参照してください。

⚠ Important

spark-submit は送信メカニズムとしてクラスターモードのみをサポートします。

spark-submit の Spark ドライバーサービスアカウントセキュリティ要件

Spark ドライバーポッドは Kubernetes サービスアカウントを使用して Kubernetes API サーバーにアクセスし、エグゼキューターポッドを作成および監視します。ドライバーサービスアカウントには、クラスター内のポッドの一覧表示、作成、編集、パッチ適用、削除を行うために適切な権限が必要です。以下のコマンドを実行して、リソースを一覧表示できることを確認できます。

```
kubectl auth can-i list/create/edit/delete/patch pods
```

このサービスロールには、以下の規則が適用されます。

```
rules:
- apiGroups:
  - ""
  resources:
  - pods
  verbs:
  - "*"
- apiGroups:
  - ""
  resources:
  - services
  verbs:
  - "*"
- apiGroups:
  - ""
  resources:
  - configmaps
  verbs:
  - "*"
- apiGroups:
  - ""
  resources:
  - persistentvolumeclaims
  verbs:
  - "*"

```

Amazon EMR on EKS ジョブ実行の管理

以下のセクションでは、Amazon EMR on EKS ジョブ実行を管理するのに役立つトピックについて説明します。

トピック

- [AWS CLI を使用してジョブ実行を管理する](#)
- [StartJobRun API による Spark SQL スクリプトの実行](#)
- [ジョブ実行状態](#)
- [Amazon EMR コンソールでジョブを表示する](#)
- [ジョブ実行時の一般的なエラー](#)

AWS CLI を使用してジョブ実行を管理する

このページでは、AWS Command Line Interface (AWS CLI) を使用してジョブ実行を管理する方法について説明します。

ジョブ実行を構成するためのオプション

以下のオプションを使用して、ジョブ実行パラメータを設定します。

- `--execution-role-arn`: ジョブの実行に使用する IAM ロールを指定する必要があります。詳細については、「[Amazon EMR on EKS でのジョブ実行ロールの使用](#)」を参照してください。
- `--release-label`: Amazon EMR バージョン 5.32.0 および 6.2.0 以降を使用して Amazon EMR on EKS をデプロイできます。Amazon EMR on EKS は、以前の Amazon EMR リリースバージョンではサポートされていません。詳細については、「[Amazon EMR on EKS リリース](#)」を参照してください。
- `--job-driver`: Job ドライバーは、メインジョブに入力を提供するために使用されます。これは、実行するジョブタイプの値の 1 つだけを渡すことができるユニオンタイプフィールドです。サポートされるジョブタイプには次のものが含まれます。
 - Spark 送信ジョブ - Spark 送信を通じてコマンドを実行するために使用されます。このジョブタイプを使用して、Scala、PySpark、SparkR、SparkSQL およびその他のサポートされているジョブを Spark 送信を通じて実行できます。このジョブタイプには以下のパラメータがあります。
 - エントリーポイント - これは、実行するメイン jar/py ファイルへの HCFS (Hadoop 互換ファイルシステム) 参照です。

- `EntryPointArguments` - これはメイン jar/pyファイルに渡す引数の配列です。これらのパラメータの読み取りは、エントリーポイントコードを使用して処理する必要があります。配列の各引数は、カンマで区切る必要があります。`EntryPointArguments` には、`()`、`{}`、`[]` などの角括弧や丸括弧を含めることはできません。
- `SparkSubmitParameters` - これらは、ジョブに送信する追加の Spark パラメータです。このパラメータを使用して、ドライバーメモリや `--conf` や `--class` などのエグゼキューターの数など、デフォルトの Spark プロパティを上書きします。詳細については、[spark-submit を使用したアプリケーションの起動](#)を参照してください。
- Spark SQL ジョブ - Spark SQL を使用して SQL クエリファイルを実行するために使用されます。このジョブタイプを使用して SparkSQL ジョブを実行できます。このジョブタイプには以下のパラメータがあります。
- エントリーポイント - これは、実行する SQL クエリファイルへの HDFS (Hadoop 互換ファイルシステム) 参照です。

Spark SQL ジョブに使用できるその他の Spark パラメータのリストについては、「[StartJobRun API による Spark SQL スクリプトの実行](#)」を参照してください。

- `--configuration-overrides`: 設定オブジェクトを提供することで、アプリケーションのデフォルト設定を上書きできます。短縮構文を使用して、設定を指定したり、JSON ファイルの設定オブジェクトを参照したりできます。設定オブジェクトは、分類、プロパティ、オプションの入れ子になっている設定で構成されます。プロパティは、そのファイル内で上書きする設定で構成されます。単一の JSON オブジェクトで、複数のアプリケーションに複数の分類を指定できます。Amazon EMR リリースバージョンによって使用可能な設定分類は異なります。Amazon EMR の各リリースバージョンで使用可能な設定分類の一覧については、[Amazon EMR on EKS リリース](#)を参照してください。

アプリケーションの上書きと Spark 送信パラメータで同じ設定を渡すと、Spark 送信パラメータが優先されます。完全な設定優先順位リストは、優先順位の最も高いものから最も低いものの順に表示されます。

- `SparkSession` 作成時に提供される構成。
- `--conf` を使用して `sparkSubmitParameters` の一部として提供される構成。
- アプリケーションの上書きの一部として提供される設定。
- リリース用に Amazon EMR によって選択された最適化された設定。
- アプリケーションのデフォルトのオープンソース構成。

Amazon CloudWatch または Amazon S3 を使用してジョブの実行をモニタリングするには、CloudWatch の設定の詳細を指定する必要があります。詳細については、[Amazon S3 ログを使用するようにジョブ実行を設定する](#) および [Amazon CloudWatch Logs を使用するようにジョブ実行を設定する](#) を参照してください。S3 バケットまたは CloudWatch Logs グループが存在しない場合、Amazon EMR はバケットにログをアップロードする前にそれを作成します。

- Kubernetes 設定オプションのその他のリストについては、[Kubernetes の Spark プロパティ](#) を参照してください。

以下の Spark 設定はサポートされていません。

- `spark.kubernetes.authenticate.driver.serviceAccountName`
- `spark.kubernetes.authenticate.executor.serviceAccountName`
- `spark.kubernetes.namespace`
- `spark.kubernetes.driver.pod.name`
- `spark.kubernetes.container.image.pullPolicy`
- `spark.kubernetes.container.image`

Note

カスタマイズされた Docker イメージに `spark.kubernetes.container.image` を使用できます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS の Docker イメージのカスタマイズ](#)」を参照してください。

Amazon S3 ログを使用するようにジョブ実行を設定する

ジョブの進行状況をモニタリングし、障害のトラブルシューティングをできるようにするには、Amazon S3、Amazon CloudWatch Logs、またはその両方にログ情報を送信するようにジョブを設定する必要があります。このトピックは、Amazon EMR on EKS で起動したジョブで Amazon S3 へのアプリケーションログの発行を開始するのに役立ちます。

S3 ログ IAM ポリシー

ジョブが Amazon S3 にログデータを送信できるようにするには、ジョブ実行ロールのアクセス許可ポリシーに次のアクセス許可を含める必要があります。**`DOC-EXAMPLE-BUCKET-LOGGING`** をログ記録バケットの名前に置き換えます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "s3:PutObject",
        "s3:GetObject",
        "s3:ListBucket"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:s3:::DOC-EXAMPLE-BUCKET-LOGGING",
        "arn:aws:s3:::DOC-EXAMPLE-BUCKET-LOGGING/*",
      ]
    }
  ]
}
```

Note

Amazon EMR on EKS は、Amazon S3 バケットを作成することもできます。Amazon S3 バケットが利用できない場合は、IAM ポリシーに “s3:CreateBucket” アクセス許可を含めてください。

Amazon S3 にログを送信するための適切なアクセス許可を実行ロールに付与した後、「[AWS CLI を使用してジョブ実行を管理する](#)」に示すように、start-job-run リクエストの monitoringConfiguration セクションで s3MonitoringConfiguration が渡されると、ログデータは次の Amazon S3 の場所に送信されます。

- コントローラーログ - */logUri/virtual-cluster-id/jobs/job-id/containers/pod-name/(stderr.gz/stdout.gz)*
- ドライバーログ - */logUri/virtual-cluster-id/jobs/job-id/containers/spark-application-id/spark-job-id-driver/(stderr.gz/stdout.gz)*
- エグゼキュターログ - */logUri/virtual-cluster-id/jobs/job-id/containers/spark-application-id/executor-pod-name/(stderr.gz/stdout.gz)*

Amazon CloudWatch Logs を使用するようにジョブ実行を設定する

ジョブの進行状況をモニタリングし、障害のトラブルシューティングを行うには、Amazon S3、Amazon CloudWatch Logs、またはその両方にログ情報を送信するようにジョブを設定する必要があります。このトピックは、Amazon EMR on EKS で起動されたジョブでの CloudWatch Logs の使用開始に役立ちます。CloudWatch Logs については、Amazon CloudWatch ユーザーガイドの[ログファイルのモニタリング](#)を参照してください。

CloudWatch Logs IAM ポリシー

ジョブが CloudWatch Logs にログデータを送信するには、ジョブ実行ロールのアクセス許可ポリシーに次のアクセス許可を含める必要があります。*my_log_group_name* と *my_log_stream_prefix* を、それぞれ CloudWatch Logs グループとログストリームの名前に置き換えます。実行ロール ARN に適切なアクセス許可がある限り、Amazon EMR on EKS は、ロググループとログストリームが存在しない場合に作成します。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "logs:CreateLogStream",
        "logs:DescribeLogGroups",
        "logs:DescribeLogStreams"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:logs:*:*:*"
      ]
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "logs:PutLogEvents"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:logs:*:*:log-group:my_log_group_name:log-stream:my_log_stream_prefix/*"
      ]
    }
  ]
}
```


Note

Amazon EMR on EKS はログストリームを作成することもできます。ログストリームが存在しない場合は、IAM ポリシーに "logs:CreateLogGroup" アクセス許可を含める必要があります。

実行ロールに適切なアクセス許可を付与した後、「[AWS CLI を使用してジョブ実行を管理する](#)」に示すように、start-job-run リクエストの monitoringConfiguration セクションで cloudWatchMonitoringConfiguration が渡されると、アプリケーションはそのログデータを CloudWatch Logs に送信します。

StartJobRun API で、*log_group_name* は CloudWatch のロググループ名であり、*log_stream_prefix* は CloudWatch のログストリーム名のプレフィックスです。これらのログは AWS Management Console で表示および検索できます。

- コントローラーログ - *logGroup/logStreamPrefix/virtual-cluster-id/jobs/job-id/containers/pod-name/(stderr/stdout)*
- ドライバーログ - *logGroup/logStreamPrefix/virtual-cluster-id/jobs/job-id/containers/spark-application-id/spark-job-id-driver/(stderr/stdout)*
- エグゼキュターログ - *logGroup/logStreamPrefix/virtual-cluster-id/jobs/job-id/containers/spark-application-id/executor-pod-name/(stderr/stdout)*

ジョブの実行のリスト

次の例に示すように、list-job-run を実行してジョブ実行の状態を表示できます。

```
aws emr-containers list-job-runs --virtual-cluster-id <cluster-id>
```

ジョブ実行の説明

次の例に示すように、describe-job-run を実行すると、ジョブの状態、状態の詳細、ジョブ名など、ジョブの詳細を取得できます。

```
aws emr-containers describe-job-run --virtual-cluster-id cluster-id --id job-run-id
```

ジョブ実行をキャンセルする

次の例に示すように、cancel-job-run を実行して実行中のジョブをキャンセルできます。

```
aws emr-containers cancel-job-run --virtual-cluster-id cluster-id --id job-run-id
```

StartJobRun API による Spark SQL スクリプトの実行

Amazon EMR on EKS リリース 6.7.0 以降には Spark SQL ジョブドライバーが含まれているため、StartJobRun API を使用して Spark SQL スクリプトを実行できます。SQL エントリーポイントファイルを提供することで、既存の Spark SQL スクリプトを変更することなく、StartJobRun API を使用して Amazon EMR on EKS で Spark SQL クエリを直接実行できます。以下の表は、StartJobRun API を使用して Spark SQL ジョブでサポートされている Spark パラメータの一覧です。

Spark SQL ジョブに送信するパラメータは、以下の Spark パラメータから選択できます。これらのパラメータを使用して、Spark プロパティのデフォルトを上書きします。

オプション	説明
--name NAME	Application Name(アプリケーション名)
--jars JARS	ドライバーと実行クラスパスに含める jar のカンマ区切りリスト。
--packages	ドライバーとエグゼキュータークラスパスに含める jar の Maven 座標のカンマ区切りリスト。
--exclude-packages	--packages で提供される依存関係を解決する際に除外して、依存関係の競合を回避する groupId:artifactId のカンマ区切りリスト。
--repositories	--packages で与えられた Maven 座標を検索するための追加のリモトリポジトリのカンマ区切りリスト。
--files FILES	各エグゼキューターの作業ディレクトリに配置されるファイルのカンマ区切りリスト。

オプション	説明
<code>--conf PROP=VALUE</code>	Spark 設定プロパティ。
<code>--properties-file FILE</code>	追加プロパティを読み込むファイルへのパス。
<code>--driver-memory MEM</code>	ドライバー用メモリ。デフォルト 1024 MB。
<code>--driver-java-options</code>	ドライバーに渡す追加の Java オプション。
<code>--driver-library-path</code>	ドライバーに渡す追加のライブラリパスエントリ。
<code>--driver-class-path</code>	ドライバーに渡す追加のクラスパスエントリ。
<code>--executor-memory MEM</code>	エグゼキューターあたりのメモリ。デフォルト 1GB。
<code>--driver-cores NUM</code>	ドライバーが使用するコアの数。
<code>--total-executor-cores NUM</code>	すべてのエグゼキューターの合計コア。
<code>--executor-cores NUM</code>	各エグゼキューターが使用するコアの数。
<code>--num-executors NUM</code>	起動するエグゼキューターの数。
<code>-hivevar <key=value></code>	Hive コマンドに適用する変数置換。例: <code>-hivevar A=B</code>
<code>-hiveconf <property=value></code>	指定したプロパティに使用する値。

Spark SQL ジョブの場合、`start-job-run-request.json` ファイルを作成し、以下の例に示すように、ジョブ実行に必要なパラメータを指定します。

```
{
  "name": "myjob",
  "virtualClusterId": "123456",
  "executionRoleArn": "iam_role_name_for_job_execution",
  "releaseLabel": "emr-6.7.0-latest",
  "jobDriver": {
    "sparkSqlJobDriver": {
```

```
    "entryPoint": "entryPoint_location",
    "sparkSqlParameters": "--conf spark.executor.instances=2 --conf
spark.executor.memory=2G --conf spark.executor.cores=2 --conf spark.driver.cores=1"
  }
},
"configurationOverrides": {
  "applicationConfiguration": [
    {
      "classification": "spark-defaults",
      "properties": {
        "spark.driver.memory": "2G"
      }
    }
  ],
  "monitoringConfiguration": {
    "persistentAppUI": "ENABLED",
    "cloudWatchMonitoringConfiguration": {
      "logGroupName": "my_log_group",
      "logStreamNamePrefix": "log_stream_prefix"
    },
    "s3MonitoringConfiguration": {
      "logUri": "s3://my_s3_log_location"
    }
  }
}
}
```

ジョブ実行状態

Amazon EMR on EKS ジョブキューにジョブ実行を送信すると、ジョブ実行は PENDING 状態になります。その後、以下の状態を経由して完了 (コード 0 で終了) または失敗 (0 以外のコードで終了) します。

ジョブ実行の各状態は以下のとおりです。

- PENDING - ジョブ実行が Amazon EMR on EKS に送信されたときの初期のジョブの状態。ジョブは仮想クラスターへの送信を待機しており、Amazon EMR on EKS はこのジョブの送信を行っています。
- SUBMITTED - 仮想クラスターに正常に送信されたジョブ実行。その後、クラスタースケジューラは、クラスターでこのジョブを実行しようとします。

- **RUNNING** - 仮想クラスターで実行されているジョブ実行。Spark アプリケーションでは、これは Spark ドライバプロセスが `running` 状態にあることを意味します。
- **FAILED** - 仮想クラスターへの送信に失敗したジョブ実行、または正常に完了しなかったジョブ実行。StateDetails と FailureReason を参照して、このジョブの失敗に関する追加情報を調べてください。
- **COMPLETED** - 正常に完了したジョブ実行。
- **CANCEL_PENDING** - ジョブ実行のキャンセルがリクエストされました。Amazon EMR on EKS は、仮想クラスター上のジョブをキャンセルしようとしています。
- **CANCELLED** - 正常にキャンセルされたジョブ実行。

Amazon EMR コンソールでジョブを表示する

Amazon EMR コンソールでジョブを表示するには、以下のステップを実行します。

1. Amazon EMR コンソールの左側にあるメニューの Amazon EMR on EKS で、[仮想クラスター] を選択します。
2. 仮想クラスターのリストから、ジョブを表示する仮想クラスターを選択します。
3. [Job runs] (ジョブ実行) テーブルで、[View logs] (ログを表示する) を選択して、ジョブ実行の詳細を表示します。

Note

ワンクリックエクスペリエンスのサポートは、デフォルトで有効になっています。ジョブの送信中に `monitoringConfiguration` の `persistentAppUI` を `DISABLED` に設定すると、これを無効にできます。詳細については、「[永続アプリケーションユーザーインターフェイスの表示](#)」を参照してください。

ジョブ実行時の一般的なエラー

StartJobRun API を実行すると、次のエラーが発生することがあります。

エラーメッセージ	エラー状態	推奨される次のステップ
エラー: 引数 --## は必須です	必須のパラメータが欠落しています。	欠落している引数を API リクエストに追加します。
[StartJobRun オペレーションの呼び出し時にエラー (AccessDeniedException) が発生しました: ユーザー ARN は emr-containers:StartJobRun の実行を承認されていません]	実行ロールが欠落しています。	Amazon EMR on EKS でのジョブ実行ロールの使用 を参照してください。
[StartJobRun オペレーションの呼び出し時にエラー (AccessDeniedException) が発生しました: ユーザー ARN は emr-containers:StartJobRun の実行を承認されていません]	呼び出し元に、条件キーを介した実行ロール [有効/無効な形式] に対するアクセス許可がありません。	「 Amazon EMR on EKS でのジョブ実行ロールの使用 」を参照してください。
[StartJobRun オペレーションの呼び出し時にエラー (AccessDeniedException) が発生しました: ユーザー ARN は emr-containers:StartJobRun の実行を承認されていません]	ジョブの送信者と実行ロールの ARN が、異なるアカウントのものです。	ジョブの送信者と実行ロールの ARN が同じ AWS アカウントのものであることを確認します。
1 検証エラーが検出されました: 「executionRoleArn」の値###が ARN 正規表現パターンを満たすことができませんでした: ^arn:(aws[a-zA-Z0-9-]*):iam::(\d{12})?:(role(\u002F) (\u002F[\u0021-\u007F]+\u002F))[\w+=,.\@-]+)	呼び出し元は、条件キーを介して実行ロールのアクセス許可を持っていますが、ロールは ARN 形式の制約を満たしていません。	ARN 形式に従って実行ロールを指定します。「 Amazon EMR on EKS でのジョブ実行ロールの使用 」を参照してください。

エラーメッセージ	エラー状態	推奨される次のステップ
<p>StartJobRun オペレーションを呼び出すときにエラー (ResourceNotFoundException) が発生しました: 仮想クラスター##### ID は存在しません。</p> <p>StartJobRun オペレーションを呼び出すときにエラー (ValidationException) が発生しました: 仮想クラスター状態<code>state</code> はリソース JobRun の作成には有効ではありません。</p>	<p>仮想クラスター ID が見つかりません。</p> <p>仮想クラスターはジョブを実行する準備ができていません。</p>	<p>Amazon EMR on EKS に登録された仮想クラスター ID を指定します。</p> <p>「仮想クラスターの状態」を参照してください。</p>
<p>StartJobRun オペレーションを呼び出すときにエラー (ResourceNotFoundException) が発生しました: リリース <code>RELEASE</code> は存在しません。</p>	<p>ジョブの送信で指定されたリリースが正しくありません。</p>	<p>「Amazon EMR on EKS リリース」を参照してください。</p>

エラーメッセージ	エラー状態	推奨される次のステップ
<p>[StartJobRun オペレーションの呼び出し時にエラー (AccessDeniedException) が発生しました: ユーザー <i>ARN</i> はリソースに対する <code>emr-containers:StartJobRun</code> の実行を承認されていません: <i>ARN</i> (明示的な拒否を使用)]</p> <p>[StartJobRun オペレーションの呼び出し時にエラー (AccessDeniedException) が発生しました: ユーザー <i>ARN</i> にはリソースに対して <code>emr-containers:StartJobRun</code> を実行する権限がありません: <i>ARN</i>]</p>	<p>ユーザーに StartJobRun を呼び出す権限がありません。</p>	<p>「Amazon EMR on EKS でのジョブ実行ロールの使用」を参照してください。</p>
<p>StartJobRun オペレーションの呼び出し時にエラー (ValidationException) が発生しました: <code>configurationOverrides.monitoringConfiguration.s3MonitoringConfiguration.logUri</code> が制約を満たすことができませんでした: %s</p>	<p>S3 パス URI 構文が無効です。</p>	<p>LogURI は <code>s3://...</code> の形式でなければなりません</p>

ジョブの実行前に DescribeJobRun API を実行すると、次のエラーが発生する場合があります。

エラーメッセージ	エラー状態	推奨される次のステップ
<p>stateDetails: JobRun の送信に失敗しました。</p> <p>分類 <i>classification</i> はサポート対象外です。</p>	<p>StartJobRun のパラメータは無効です。</p>	<p>「Amazon EMR on EKS リリース」を参照してください。</p>

エラーメッセージ	エラー状態	推奨される次のステップ
<p>failureReason: VALIDATION_ERROR</p> <p>状態: FAILED。</p>		
<p>stateDetails: クラスター EKS ##### ID は存在しません。</p> <p>failureReason: CLUSTER_UNAVAILABLE</p> <p>状態: FAILED</p>	EKS クラスターは使用できません。	EKS クラスターが存在し、適切なアクセス許可を持っているかどうかを確認します。詳細については、「 Amazon EMR on EKS のセットアップ 」を参照してください。
<p>stateDetails: クラスター EKS ##### ID に十分なアクセス許可がありません。</p> <p>failureReason: CLUSTER_UNAVAILABLE</p> <p>状態: FAILED</p>	Amazon EMR に、EKS クラスターにアクセスする権限がありません。	登録された名前空間で、アクセス許可が Amazon EMR に設定されていることを確認します。詳細については、「 Amazon EMR on EKS のセットアップ 」を参照してください。
<p>stateDetails: クラスター EKS ##### ID には現在到達できません。</p> <p>failureReason: CLUSTER_UNAVAILABLE</p> <p>状態: FAILED</p>	EKS クラスターに到達できません。	EKS クラスターが存在し、適切なアクセス許可を持っているかどうかを確認します。詳細については、「 Amazon EMR on EKS のセットアップ 」を参照してください。
<p>stateDetails: 内部エラーのため、JobRun の送信に失敗しました。</p> <p>failureReason: INTERNAL_ERROR</p> <p>状態: FAILED</p>	EKS クラスターで内部エラーが発生しました。	該当なし

エラーメッセージ	エラー状態	推奨される次のステップ
<p>stateDetails: クラスター EKS ##### ID に十分なリソースがありません。</p> <p>failureReason: USER_ERROR</p> <p>状態: FAILED</p>	EKS クラスターでジョブを実行するためのリソースが不足しています。	EKS ノードグループに容量を追加するか、EKS Autoscalerを設定します。詳細については、 Cluster Autoscaler を参照してください。

ジョブの実行後に DescribeJobRun API を実行すると、次のエラーが発生する場合があります。

エラーメッセージ	エラー状態	推奨される次のステップ
<p>stateDetails: JobRun のモニタリング中に問題が発生しました。</p> <p>クラスター EKS ##### ID は存在しません。</p> <p>failureReason: CLUSTER_UNAVAILABLE</p> <p>状態: FAILED</p>	EKS クラスターは存在しません。	EKS クラスターが存在し、適切なアクセス許可を持っているかどうかを確認します。詳細については、「 Amazon EMR on EKS のセットアップ 」を参照してください。
<p>stateDetails: JobRun のモニタリング中に問題が発生しました。</p> <p>クラスター EKS ##### ID に十分なアクセス許可がありません。</p> <p>failureReason: CLUSTER_UNAVAILABLE</p> <p>状態: FAILED</p>	Amazon EMR に、EKS クラスターにアクセスする権限がありません。	登録された名前空間で、アクセス許可が Amazon EMR に設定されていることを確認します。詳細については、「 Amazon EMR on EKS のセットアップ 」を参照してください。

エラーメッセージ	エラー状態	推奨される次のステップ
<p>stateDetails: JobRun のモニタリング中に問題が発生しました。</p> <p>クラスター EKS ##### ID には現在到達できません。</p> <p>failureReason: CLUSTER_UNAVAILABLE</p> <p>状態: FAILED</p>	<p>EKS クラスターに到達できません。</p>	<p>EKS クラスターが存在し、適切なアクセス許可を持っているかどうかを確認します。詳細については、「Amazon EMR on EKS のセットアップ」を参照してください。</p>
<p>stateDetails: 内部エラーのため、JobRun のモニタリング中に問題が発生しました</p> <p>failureReason: INTERNAL_ERROR</p> <p>状態: FAILED</p>	<p>内部エラーが発生し、JobRun のモニタリングを妨げています。</p>	<p>該当なし</p>

ジョブを開始できず、ジョブが SUBMITTED 状態で 15 分間待機すると、以下のエラーが発生することがあります。クラスターリソースの不足が原因である可能性があります。

エラーメッセージ	エラー状態	推奨される次のステップ
<p>クラスタータイムアウト</p>	<p>ジョブが 15 分以上 SUBMITTED 状態になっている。</p>	<p>このパラメータのデフォルト設定である 15 分は、以下に示す設定オーバーライドでオーバーライドできます。</p>

以下の設定を使用して、クラスタータイムアウト設定を 30 分に変更します。新しい job-start-timeout 値を秒単位で指定していることに注意してください。

```
{
  "configurationOverrides": {
```

```
"applicationConfiguration": [{
  "classification": "emr-containers-defaults",
  "properties": {
    "job-start-timeout": "1800"
  }
}]
}
```

ジョブ送信者分類の使用

概要

Amazon EMR on EKS StartJobRun リクエストは、Spark ドライバーを生成するジョブ送信者ポッド (job-runner ポッドとも呼ばれます) を作成します。emr-job-submitter 分類を使用してジョブ送信者ポッドのノードセクターを設定できます。

emr-job-submitter 分類では以下の設定が可能です。

`jobsubmitter.node.selector.[labelKey]`

キー *labelKey* と値を設定の設定値として、ジョブ送信者ポッドのノードセクターに追加します。例えば、`jobsubmitter.node.selector.identifier` を `myIdentifier` に設定すると、ジョブ送信者ポッドにはキー識別子の値が `myIdentifier` のノードセクターが追加されます。複数のノードセクターキーを追加するには、このプレフィックスを使用して複数の設定を設定します。

ベストプラクティスとして、ジョブ送信者ポッドはスポットインスタンスではなく [オンデマンドインスタンスにノードを配置する](#) ことをお勧めします。これは、ジョブ送信者ポッドがスポットインスタンスの中断を受けるとジョブが失敗するためです。 [ジョブ送信者ポッドを1つのアベイラビリティゾーンに配置することも](#)、 [ノードに適用されている任意の Kubernetes ラベルを使用することも](#) できます。

ジョブ送信者の分類例

このセクションの内容

- [ジョブ送信者ポッドのオンデマンドノード配置を含む StartJobRun リクエスト](#)
- [ジョブ送信者ポッドのシングル AZ ノード配置を含む StartJobRun リクエスト](#)

- [ジョブ送信者ポッドのシングル AZ および Amazon EC2 インスタンスタイプ配置を含む StartJobRun リクエスト](#)

ジョブ送信者ポッドのオンデマンドノード配置を含む StartJobRun リクエスト

```
cat >spark-python-in-s3-nodeselector-job-submitter.json << EOF
{
  "name": "spark-python-in-s3-nodeselector",
  "virtualClusterId": "virtual-cluster-id",
  "executionRoleArn": "execution-role-arn",
  "releaseLabel": "emr-6.11.0-latest",
  "jobDriver": {
    "sparkSubmitJobDriver": {
      "entryPoint": "s3://S3-prefix/trip-count.py",
      "sparkSubmitParameters": "--conf spark.driver.cores=5 --conf
spark.executor.memory=20G --conf spark.driver.memory=15G --conf
spark.executor.cores=6"
    }
  },
  "configurationOverrides": {
    "applicationConfiguration": [
      {
        "classification": "spark-defaults",
        "properties": {
          "spark.dynamicAllocation.enabled": "false"
        }
      },
      {
        "classification": "emr-job-submitter",
        "properties": {
          "jobsubmitter.node.selector.eks.amazonaws.com/capacityType": "ON_DEMAND"
        }
      }
    ]
  },
  "monitoringConfiguration": {
    "cloudWatchMonitoringConfiguration": {
      "logGroupName": "/emr-containers/jobs",
      "logStreamNamePrefix": "demo"
    },
    "s3MonitoringConfiguration": {
      "logUri": "s3://joblogs"
    }
  }
}
```

```

    }
  }
}
EOF
aws emr-containers start-job-run --cli-input-json file:///spark-python-in-s3-
nodeselector-job-submitter.json

```

ジョブ送信者ポッドのシングル AZ ノード配置を含む **StartJobRun** リクエスト

```

cat >spark-python-in-s3-nodeselector-job-submitter-az.json << EOF
{
  "name": "spark-python-in-s3-nodeselector",
  "virtualClusterId": "virtual-cluster-id",
  "executionRoleArn": "execution-role-arn",
  "releaseLabel": "emr-6.11.0-latest",
  "jobDriver": {
    "sparkSubmitJobDriver": {
      "entryPoint": "s3://S3-prefix/trip-count.py",
      "sparkSubmitParameters": "--conf spark.driver.cores=5 --conf
spark.executor.memory=20G --conf spark.driver.memory=15G --conf
spark.executor.cores=6"
    }
  },
  "configurationOverrides": {
    "applicationConfiguration": [
      {
        "classification": "spark-defaults",
        "properties": {
          "spark.dynamicAllocation.enabled": "false"
        }
      },
      {
        "classification": "emr-job-submitter",
        "properties": {
          "jobsubmitter.node.selector.topology.kubernetes.io/zone": "Availability
Zone"
        }
      }
    ],
    "monitoringConfiguration": {
      "cloudWatchMonitoringConfiguration": {
        "logGroupName": "/emr-containers/jobs",
        "logStreamNamePrefix": "demo"
      }
    }
  }
}

```

```

    },
    "s3MonitoringConfiguration": {
      "logUri": "s3://joblogs"
    }
  }
}
EOF
aws emr-containers start-job-run --cli-input-json file:///spark-python-in-s3-
nodeselector-job-submitter-az.json

```

ジョブ送信者ポッドのシングル AZ および Amazon EC2 インスタンスタイプ配置を含む **StartJobRun** リクエスト

```

{
  "name": "spark-python-in-s3-nodeselector",
  "virtualClusterId": "virtual-cluster-id",
  "executionRoleArn": "execution-role-arn",
  "releaseLabel": "emr-6.11.0-latest",
  "jobDriver": {
    "sparkSubmitJobDriver": {
      "entryPoint": "s3://S3-prefix/trip-count.py",
      "sparkSubmitParameters": "--conf spark.driver.cores=5 --conf
spark.kubernetes.pyspark.pythonVersion=3 --conf spark.executor.memory=20G
--conf spark.driver.memory=15G --conf spark.executor.cores=6 --conf
spark.sql.shuffle.partitions=1000"
    }
  },
  "configurationOverrides": {
    "applicationConfiguration": [
      {
        "classification": "spark-defaults",
        "properties": {
          "spark.dynamicAllocation.enabled": "false",
        }
      },
      {
        "classification": "emr-job-submitter",
        "properties": {
          "jobsubmitter.node.selector.topology.kubernetes.io/zone": "Availability
Zone",
          "jobsubmitter.node.selector.node.kubernetes.io/instance-type": "m5.4xlarge"
        }
      }
    ]
  }
}

```

```
    }
  ],
  "monitoringConfiguration": {
    "cloudWatchMonitoringConfiguration": {
      "logGroupName": "/emr-containers/jobs",
      "logStreamNamePrefix": "demo"
    },
    "s3MonitoringConfiguration": {
      "logUri": "s3://joblogs"
    }
  }
}
```

ジョブテンプレートの使用

ジョブテンプレートには、ジョブ実行の開始時に StartJobRun API 呼び出し間で共有できる値が格納されます。以下の 2 つのユースケースをサポートしています。

- StartJobRun API リクエスト値が繰り返し発生するのを防ぐため。
- StartJobRun API リクエストを通じて特定の値を指定する必要があるというルールを適用するため。

ジョブテンプレートを使用すると、ジョブ実行用の再利用可能なテンプレートを定義して、以下のような追加のカスタマイズを適用できます。

- エグゼキューターとドライバーのコンピューティング性能の設定
- IAM ロールなどのセキュリティとガバナンスのプロパティの設定
- 複数のアプリケーションやデータパイプラインで使用するための Docker イメージのカスタマイズ

ジョブ実行を開始するためのジョブテンプレートの作成と使用

このセクションでは、ジョブテンプレートの作成と、そのテンプレートを使用して AWS Command Line Interface (AWS CLI) でジョブ実行を開始する方法について説明します。

ジョブテンプレートを作成するには

1. `create-job-template-request.json` ファイルを作成し、以下の JSON ファイルの例に示すように、ジョブテンプレートに必要なパラメータを指定します。使用可能なすべてのパラメータの詳細については、「[CreateJobTemplate API](#)」を参照してください。

StartJobRun API に必要なほとんどの値は `jobTemplateData` にも必要です。パラメータにブレースホルダーを使用し、ジョブテンプレートを使用して StartJobRun を呼び出すときに値を指定する場合は、ジョブテンプレートのパラメータに関する次のセクションを参照してください。

```
{
  "name": "mytemplate",
  "jobTemplateData": {
    "executionRoleArn": "iam_role_arn_for_job_execution",
    "releaseLabel": "emr-6.7.0-latest",
    "jobDriver": {
      "sparkSubmitJobDriver": {
        "entryPoint": "entryPoint_location",
        "entryPointArguments": [ "argument1", "argument2", ... ],
        "sparkSubmitParameters": "--class <main_class> --conf
spark.executor.instances=2 --conf spark.executor.memory=2G --conf
spark.executor.cores=2 --conf spark.driver.cores=1"
      }
    },
    "configurationOverrides": {
      "applicationConfiguration": [
        {
          "classification": "spark-defaults",
          "properties": {
            "spark.driver.memory": "2G"
          }
        }
      ],
      "monitoringConfiguration": {
        "persistentAppUI": "ENABLED",
        "cloudWatchMonitoringConfiguration": {
          "logGroupName": "my_log_group",
          "logStreamNamePrefix": "log_stream_prefix"
        },
        "s3MonitoringConfiguration": {
          "logUri": "s3://my_s3_log_location/"
        }
      }
    }
  }
}
```

```
}
```

- ローカルに保存されている `create-job-template-request.json` ファイルへのパスを指定して、`create-job-template` コマンドを使用します。

```
aws emr-containers create-job-template \  
--cli-input-json file://./create-job-template-request.json
```

ジョブテンプレートを使用してジョブ実行を開始するには

以下の例に示すように、`StartJobRun` コマンドで、仮想クラスター ID、ジョブテンプレート ID、ジョブ名を指定します。

```
aws emr-containers start-job-run \  
--virtual-cluster-id 123456 \  
--name myjob \  
--job-template-id 1234abcd
```

ジョブテンプレートパラメータの定義

ジョブテンプレートパラメータを使用すると、ジョブテンプレート内の変数を指定できます。これらのパラメータ変数の値は、そのジョブテンプレートを使用してジョブ実行を開始するときに指定する必要があります。ジョブテンプレートパラメータは `${parameterName}` フォーマットで指定されます。 `jobTemplateData` フィールド内の任意の値をジョブテンプレートパラメータとして指定できます。ジョブテンプレートパラメータ変数ごとに、データタイプ (STRING または NUMBER) を指定し、オプションでデフォルト値を指定します。以下の例は、エン트리ポイントロケーション、メインクラス、S3 ログロケーション値のジョブテンプレートパラメータを指定する方法を示しています。

エン트리ポイントの場所、メインクラス、Amazon S3 ログの場所をジョブテンプレートパラメータとして指定するには

- `create-job-template-request.json` ファイルを作成し、以下の JSON ファイルの例に示すように、ジョブテンプレートに必要なパラメータを指定します。パラメータの詳細については、「[CreateJobTemplate API](#)」を参照してください。

```
{  
  "name": "mytemplate",  
  "jobTemplateData": {  
    "executionRoleArn": "iam_role_arn_for_job_execution",
```

```
"releaseLabel": "emr-6.7.0-latest",
"jobDriver": {
  "sparkSubmitJobDriver": {
    "entryPoint": "${EntryPointLocation}",
    "entryPointArguments": [ "argument1", "argument2", ... ],
    "sparkSubmitParameters": "--class ${MainClass} --conf
spark.executor.instances=2 --conf spark.executor.memory=2G --conf
spark.executor.cores=2 --conf spark.driver.cores=1"
  }
},
"configurationOverrides": {
  "applicationConfiguration": [
    {
      "classification": "spark-defaults",
      "properties": {
        "spark.driver.memory": "2G"
      }
    }
  ],
  "monitoringConfiguration": {
    "persistentAppUI": "ENABLED",
    "cloudWatchMonitoringConfiguration": {
      "logGroupName": "my_log_group",
      "logStreamNamePrefix": "log_stream_prefix"
    },
    "s3MonitoringConfiguration": {
      "logUri": "${LogS3BucketUri}"
    }
  }
},
"parameterConfiguration": {
  "EntryPointLocation": {
    "type": "STRING"
  },
  "MainClass": {
    "type": "STRING",
    "defaultValue": "Main"
  },
  "LogS3BucketUri": {
    "type": "STRING",
    "defaultValue": "s3://my_s3_log_location/"
  }
}
}
```

```
}
```

- ローカルまたは Amazon S3 に保存されている `create-job-template-request.json` ファイルへのパスを指定して、`create-job-template` コマンドを使用します。

```
aws emr-containers create-job-template \  
--cli-input-json file://./create-job-template-request.json
```

ジョブテンプレートパラメータを指定したジョブテンプレートを使用してジョブ実行を開始するには、ジョブテンプレートパラメータを含むジョブテンプレートを使用してジョブ実行を開始するには、以下に示すように `StartJobRun` API リクエストでジョブテンプレート ID とジョブテンプレートパラメータの値を指定します。

```
aws emr-containers start-job-run \  
--virtual-cluster-id 123456 \  
--name myjob \  
--job-template-id 1234abcd \  
--job-template-parameters '{"EntryPointLocation": "entry_point_location", "MainClass":  
"ExampleMainClass", "LogS3BucketUri": "s3://example_s3_bucket/"}'
```

ジョブテンプレートへのアクセスの制御

`StartJobRun` ポリシーにより、ユーザーまたはロールは、指定したジョブテンプレートを使用してジョブのみを実行でき、指定されたジョブテンプレートを使用しないと `StartJobRun` 操作を実行できないように強制できます。そのためには、まず、以下に示すように、指定したジョブテンプレートに対する読み取り権限をユーザーまたはロールに付与してください。

```
{  
  "Version": "2012-10-17",  
  "Statement": [  
    {  
      "Effect": "Allow",  
      "Action": "emr-containers:DescribeJobTemplate",  
      "Resource": [  
        "job_template_1_arn",  
        "job_template_2_arn",  
        ...  
      ]  
    }  
  ]  
}
```

```
]
}
```

指定したジョブテンプレートを使用する場合にのみユーザーまたはロールが StartJobRun 操作を呼び出せるようにするには、特定のユーザーまたはロールに以下の StartJobRun ポリシー権限を割り当てます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "emr-containers:StartJobRun",
      "Resource": [
        "virtual_cluster_arn",
      ],
      "Condition": [
        "StringEquals": {
          "emr-containers:JobTemplateArn": [
            "job_template_1_arn",
            "job_template_2_arn",
            ...
          ]
        }
      ]
    }
  ]
}
```

ジョブテンプレートが実行ロール ARN フィールド内にジョブテンプレートパラメータを指定している場合、ユーザーはこのパラメータに値を指定できるため、任意の実行ロールを使用して StartJobRun を呼び出すことができます。ユーザーが指定できる実行ロールを制限するには、[「Amazon EMR on EKS でのジョブ実行ロールの使用」](#)の「実行ロールへのアクセスの制御」を参照してください。

特定のユーザーまたはロールに対して上記の StartJobRun アクションポリシーで条件が指定されていない場合、ユーザーまたはロールは、読み取りアクセス権のある任意のジョブテンプレートを使用するか、任意の実行ロールを使用して、指定された仮想クラスター上で StartJobRun アクションを呼び出すことができます。

ポッドテンプレートの使用

Amazon EMR バージョン 5.33.0 または 6.3.0 以降、Amazon EMR on EKS では Spark のポッドテンプレート機能がサポートされます。ポッドは、共有ストレージとネットワークリソース、およびコンテナの実行方法についての仕様を持つ 1 つ以上のコンテナのグループです。ポッドテンプレートは、各ポッドの実行方法を決定する仕様です。ポッドテンプレートファイルを使用して、Spark 構成でサポートされていないドライバーまたはエグゼキューターポッドの設定を定義できます。Spark のポッドテンプレート機能の詳細については、[ポッドテンプレート](#)を参照してください。

Note

ポッドテンプレート機能は、ドライバーポッドとエグゼキューターポッドでのみ機能します。ポッドテンプレートを使用してジョブコントローラーポッドを設定することはできません。

一般的なシナリオ

Amazon EMR on EKS でポッドテンプレートを使用して、共有 EKS クラスター上で Spark ジョブを実行する方法を定義し、コストを削減し、リソース使用率とパフォーマンスを向上させることができます。

- コストを削減するために、Spark エグゼキュータータスクを Amazon EC2 スポットインスタンスで実行するようにスケジューリングすると同時に、Spark ドライバータスクを Amazon EC2 オンデマンドインスタンスで実行するようにスケジュールできます。
- リソースの使用率を高めるために、複数のチームが同じ EKS クラスターでワークロードを実行するのをサポートできます。各チームは、ワークロードを実行するために指定された Amazon EC2 ノードグループを取得します。ポッドテンプレートを使用して、対応する許容値をワークロードに適用できます。
- モニタリングを改善するために、別のログ記録コンテナを実行して、既存のモニタリングアプリケーションにログを転送できます。

例えば、次のポッドテンプレートファイルは、一般的な使用シナリオを示しています。

```
apiVersion: v1
kind: Pod
spec:
```

```
volumes:
  - name: source-data-volume
    emptyDir: {}
  - name: metrics-files-volume
    emptyDir: {}
nodeSelector:
  eks.amazonaws.com/nodegroup: emr-containers-nodegroup
containers:
  - name: spark-kubernetes-driver # This will be interpreted as driver Spark main
    container
    env:
      - name: RANDOM
        value: "random"
    volumeMounts:
      - name: shared-volume
        mountPath: /var/data
      - name: metrics-files-volume
        mountPath: /var/metrics/data
  - name: custom-side-car-container # Sidecar container
    image: <side_car_container_image>
    env:
      - name: RANDOM_SIDE CAR
        value: random
    volumeMounts:
      - name: metrics-files-volume
        mountPath: /var/metrics/data
    command:
      - /bin/sh
      - '-c'
      - <command-to-upload-metrics-files>
initContainers:
  - name: spark-init-container-driver # Init container
    image: <spark-pre-step-image>
    volumeMounts:
      - name: source-data-volume # Use EMR predefined volumes
        mountPath: /var/data
    command:
      - /bin/sh
      - '-c'
      - <command-to-download-dependency-jars>
```

ポッドテンプレートは以下のタスクを実行します。

- 新しい [init コンテナ](#) を追加します。これは Spark メインコンテナが起動する前に実行されます。init コンテナは、source-data-volume という [EmptyDir ボリューム](#) を Spark メインコンテナと共有します。init コンテナで、依存関係のダウンロードや入力データの生成などの初期化ステップを実行できます。次に、Spark メインコンテナがデータを消費します。
- Spark メインコンテナとともに実行される別の [サイドカーコンテナ](#) を追加します。2 つのコンテナは metrics-files-volume という別の EmptyDir ボリュームを共有しています。Spark ジョブは Prometheus メトリクスなどのメトリクスを生成できます。その後、Spark ジョブはメトリクスをファイルに入れ、サイドカーコンテナで自分の BI システムにファイルをアップロードして将来の分析を行うことができます。
- Spark メインコンテナに新しい環境変数を追加します。ジョブに環境変数を使用させることができます。
- ポッドが emr-containers-nodegroup ノードグループでのみスケジューラされるように、[ノードセレクト](#) を定義します。これは、ジョブとチーム間でコンピューティングリソースを分離するのに役立ちます。

Amazon EMR on EKS でポッドテンプレートを有効にする

Amazon EMR on EKS でポッドテンプレート機能を有効にするには、Amazon S3 のポッドテンプレートファイルを指すように Spark プロパティ `spark.kubernetes.driver.podTemplateFile` および `spark.kubernetes.executor.podTemplateFile` を設定します。その後、Spark は、ポッドテンプレートファイルをダウンロードし、それを使用してドライバーポッドとエグゼキューターポッドを作成します。

Note

Spark はジョブ実行ロールを使用してポッドテンプレートをロードするため、ジョブ実行ロールには Amazon S3 にアクセスしてポッドテンプレートをロードするためのアクセス許可が必要です。詳細については、「[ジョブ実行ロールを作成する](#)」を参照してください。

次のジョブ実行 JSON ファイルが示すように、`SparkSubmitParameters` を使用して、ポッドテンプレートへの Amazon S3 パスを指定できます。

```
{
  "name": "myjob",
  "virtualClusterId": "123456",
  "executionRoleArn": "iam_role_name_for_job_execution",
```



```

"releaseLabel": "release_label",
"jobDriver": {
  "sparkSubmitJobDriver": {
    "entryPoint": "entryPoint_location",
    "entryPointArguments": ["argument1", "argument2", ...],
    "sparkSubmitParameters": "--class <main_class> \
      --conf
spark.kubernetes.driver.podTemplateFile=s3://path_to_driver_pod_template \
      --conf
spark.kubernetes.executor.podTemplateFile=s3://path_to_executor_pod_template \
      --conf spark.executor.instances=2 \
      --conf spark.executor.memory=2G \
      --conf spark.executor.cores=2 \
      --conf spark.driver.cores=1"
  }
}
}

```

別の方法として、次のジョブ実行 JSON ファイルが示すように、`configurationOverrides` を使用して、ポッドテンプレートへの Amazon S3 パスを指定できます。

```

{
  "name": "myjob",
  "virtualClusterId": "123456",
  "executionRoleArn": "iam_role_name_for_job_execution",
  "releaseLabel": "release_label",
  "jobDriver": {
    "sparkSubmitJobDriver": {
      "entryPoint": "entryPoint_location",
      "entryPointArguments": ["argument1", "argument2", ...],
      "sparkSubmitParameters": "--class <main_class> \
        --conf spark.executor.instances=2 \
        --conf spark.executor.memory=2G \
        --conf spark.executor.cores=2 \
        --conf spark.driver.cores=1"
    }
  },
  "configurationOverrides": {
    "applicationConfiguration": [
      {
        "classification": "spark-defaults",
        "properties": {
          "spark.driver.memory": "2G",

```

```
"spark.kubernetes.driver.podTemplateFile": "s3://path_to_driver_pod_template",  
  
"spark.kubernetes.executor.podTemplateFile": "s3://path_to_executor_pod_template"  
    }  
  }  
]  
}  
}
```

Note

1. 信頼できないアプリケーションコードの分離など、Amazon EMR on EKS でポッドテンプレート機能を使用する場合は、セキュリティガイドラインに従う必要があります。詳細については、「[Amazon EMR on EKS でのセキュリティのベストプラクティス](#)」を参照してください。
2. Spark メインコンテナ名は `spark-kubernetes-driver` および `spark-kubernetes-executors` としてハードコードされているため、`spark.kubernetes.driver.podTemplateContainerName` および `spark.kubernetes.executor.podTemplateContainerName` を使用して変更することはできません。Spark メインコンテナをカスタマイズする場合は、これらのハードコードされた名前を使用してポッドテンプレートでコンテナを指定する必要があります。

ポッドテンプレートフィールド

Amazon EMR on EKS でポッドテンプレートを設定する場合は、次のフィールド制限を考慮してください。

- Amazon EMR on EKS では、ポッドテンプレート内の以下のフィールドのみで適切なジョブスケジューリングの有効化が許可されます。

許可されるポッドレベルのフィールドは次のとおりです。

- `apiVersion`
- `kind`
- `metadata`
- `spec.activeDeadlineSeconds`
- `spec.affinity`

- `spec.containers`
- `spec.enableServiceLinks`
- `spec.ephemeralContainers`
- `spec.hostAliases`
- `spec.hostname`
- `spec.imagePullSecrets`
- `spec.initContainers`
- `spec.nodeName`
- `spec.nodeSelector`
- `spec.overhead`
- `spec.preemptionPolicy`
- `spec.priority`
- `spec.priorityClassName`
- `spec.readinessGates`
- `spec.runtimeClassName`
- `spec.schedulerName`
- `spec.subdomain`
- `spec.terminationGracePeriodSeconds`
- `spec.tolerations`
- `spec.topologySpreadConstraints`
- `spec.volumes`

許可されている Spark メインコンテナレベルのフィールドは次のとおりです。

- `env`
- `envFrom`
- `name`
- `lifecycle`
- `livenessProbe`
- `readinessProbe`

- `resources`
- `startupProbe`

- stdin
- stdinOnce
- terminationMessagePath
- terminationMessagePolicy
- tty
- volumeDevices
- volumeMounts
- workingDir

ポッドテンプレートで許可されていないフィールドを使用すると、Spark は例外をスローし、ジョブは失敗します。次の例では、許可されていないフィールドが原因で Spark コントローラーログにエラーメッセージが表示されています。

```
Executor pod template validation failed.  
Field container.command in Spark main container not allowed but specified.
```

- Amazon EMR on EKS は、ポッドテンプレートで次のパラメータを事前定義しています。ポッドテンプレートで指定するフィールドは、これらのフィールドと重複してはいけません。

事前定義済みのボリューム名は次のとおりです。

- emr-container-communicate
- config-volume
- emr-container-application-log-dir
- emr-container-event-log-dir
- temp-data-dir
- mnt-dir
- home-dir
- emr-container-s3

Spark メインコンテナにのみ適用される事前定義済みのボリュームマウントを次に示します。

- 名前: emr-container-communicate; MountPath: /var/log/fluentd
- 名前: emr-container-application-log-dir; MountPath: /var/log/spark/user
- 名前: emr-container-event-log-dir; MountPath: /var/log/spark/apps

- 名前: mnt-dir; MountPath: /mnt

- 名前: temp-data-dir; MountPath: /tmp
- 名前: home-dir; MountPath: /home/hadoop

Spark メインコンテナにのみ適用される事前定義済みの環境変数を次に示します。

- SPARK_CONTAINER_ID
- K8S_SPARK_LOG_URL_STDERR
- K8S_SPARK_LOG_URL_STDOUT
- SIDECAR_SIGNAL_FILE

Note

これらの事前定義済みボリュームを使用し、そのボリュームを追加のサイドカーコンテナにマウントすることもできます。例えば、emr-container-application-log-dir を使用してポッドテンプレートで定義されている独自のサイドカーコンテナにマウントできます。

指定したフィールドがポッドテンプレートの事前定義済みフィールドのいずれかと競合する場合、Spark は例外をスローし、ジョブは失敗します。次の例では、事前定義済みのフィールドとの競合が原因で Spark アプリケーションログにエラーメッセージが表示されています。

```
Defined volume mount path on main container must not overlap with reserved mount paths: [<reserved-paths>]
```

サイドカーコンテナの考慮事項

Amazon EMR は、Amazon EMR on EKS によってプロビジョニングされるポッドのライフサイクルを制御します。サイドカーコンテナは Spark メインコンテナと同じライフサイクルに従う必要があります。追加のサイドカーコンテナをポッドに挿入する場合は、Spark メインコンテナが終了したときにサイドカーコンテナが自動的に停止できるように、Amazon EMR が定義するポッドライフサイクル管理と統合することをお勧めします。

コストを削減するため、サイドカーコンテナを備えたドライバーポッドがジョブの完了後に実行し続けられないようにするプロセスを実装することをお勧めします。Spark ドライバーは、エグゼキューターの完了時にエグゼキューターポッドを削除します。ただし、ドライバープログラムが完了すると、追加のサイドカーコンテナは引き続き実行されます。ポッドは、Amazon EMR on EKS がドライバー

ポッドをクリーンアップするまで課金されます。通常は、ドライバー Spark メインコンテナが完了してから 1 分未満です。コストを削減するために、次のセクションで説明するように、追加のサイドカーコンテナをライフサイクル管理メカニズムと統合できます。このメカニズムは Amazon EMR on EKS がドライバーポッドとエグゼキューターポッドの両方に対して定義するものです。

ドライバーポッドとエグゼキューターポッドの Spark メインコンテナは、2 秒ごとに heartbeat をファイル `/var/log/fluentd/main-container-terminated` に送信します。Amazon EMR の事前定義済み `emr-container-communicate` ポリリュームマウントをサイドカーコンテナに追加すると、サイドカーコンテナのサブプロセスを定義して、このファイルの最終更新時刻を定期的に追跡できます。その後、サブプロセスにより Spark メインコンテナがより長い期間 heartbeat を停止していることが検出されると、サブプロセス自体が停止します。

次の例は、ハートビートファイルを追跡し、それ自体を停止するサブプロセスを示しています。 `your_volume_mount` を、事前定義されたボリュームをマウントするパスに置き換えます。スクリプトは、サイドカーコンテナで使用されるイメージ内にバンドルされています。ポッドテンプレートファイルでは、次のコマンドを使用してサイドカーコンテナを指定できます。 `sub_process_script.sh` および `main_command`。

```
MOUNT_PATH="your_volume_mount"
FILE_TO_WATCH="$MOUNT_PATH/main-container-terminated"
INITIAL_HEARTBEAT_TIMEOUT_THRESHOLD=60
HEARTBEAT_TIMEOUT_THRESHOLD=15
SLEEP_DURATION=10

function terminate_main_process() {
    # Stop main process
}

# Waiting for the first heartbeat sent by Spark main container
echo "Waiting for file $FILE_TO_WATCH to appear..."
start_wait=$(date +%s)
while ! [[ -f "$FILE_TO_WATCH" ]]; do
    elapsed_wait=$(expr $(date +%s) - $start_wait)
    if [ "$elapsed_wait" -gt "$INITIAL_HEARTBEAT_TIMEOUT_THRESHOLD" ]; then
        echo "File $FILE_TO_WATCH not found after $INITIAL_HEARTBEAT_TIMEOUT_THRESHOLD
seconds; aborting"
        terminate_main_process
        exit 1
    fi
    sleep $SLEEP_DURATION;
done;
```

```
echo "Found file $FILE_TO_WATCH; watching for heartbeats..."

while [[ -f "$FILE_TO_WATCH" ]]; do
    LAST_HEARTBEAT=$(stat -c %Y $FILE_TO_WATCH)
    ELAPSED_TIME_SINCE_AFTER_HEARTBEAT=$(expr $(date +%s) - $LAST_HEARTBEAT)
    if [ "$ELAPSED_TIME_SINCE_AFTER_HEARTBEAT" -gt "$HEARTBEAT_TIMEOUT_THRESHOLD" ];
then
    echo "Last heartbeat to file $FILE_TO_WATCH was more than
$HEARTBEAT_TIMEOUT_THRESHOLD seconds ago at $LAST_HEARTBEAT; terminating"
    terminate_main_process
    exit 0
    fi
    sleep $SLEEP_DURATION;
done;
echo "Outside of loop, main-container-terminated file no longer exists"

# The file will be deleted once the fluentd container is terminated

echo "The file $FILE_TO_WATCH doesn't exist any more;"
terminate_main_process
exit 0
```

ジョブ再試行ポリシーの使用

Amazon EMR on EKS バージョン 6.9.0 以降では、ジョブ実行の再試行ポリシーを設定できます。再試行ポリシーにより、ジョブドライバーポッドが失敗したり削除されたりすると、自動的に再起動されます。これにより、長時間実行されている Spark ストリーミングジョブの障害に対する耐性が高まります。

ジョブの再試行ポリシーの設定

再試行ポリシーを設定するには、[StartJobRun](#) API を使用して `RetryPolicyConfiguration` フィールドを指定します。例 `retryPolicyConfiguration` を以下に示します。

```
aws emr-containers start-job-run \
--virtual-cluster-id cluster_id \
--name sample-job-name \
--execution-role-arn execution-role-arn \
--release-label emr-6.9.0-latest \
--job-driver '{
  "sparkSubmitJobDriver": {
```

```
"entryPoint": "local:///usr/lib/spark/examples/src/main/python/pi.py",
"entryPointArguments": [ "2" ],
"sparkSubmitParameters": "--conf spark.executor.instances=2 --conf
spark.executor.memory=2G --conf spark.executor.cores=2 --conf spark.driver.cores=1"
}
}' \
--retry-policy-configuration '{
  "maxAttempts": 5
}' \
--configuration-overrides '{
  "monitoringConfiguration": {
    "cloudWatchMonitoringConfiguration": {
      "logGroupName": "my_log_group_name",
      "logStreamNamePrefix": "my_log_stream_prefix"
    },
    "s3MonitoringConfiguration": {
      "logUri": "s3://DOC-EXAMPLE-BUCKET-LOGGING"
    }
  }
}'
```

Note

retryPolicyConfiguration は AWS CLI 1.27.68 バージョン以降でのみ利用可能です。AWS CLI を最新バージョンに更新するには、「[AWS CLI の最新バージョンを使用してインストールまたは更新を行う](#)」を参照してください

maxAttempts フィールドには、ジョブドライバーポッドが失敗したり削除されたりした場合に再起動する最大回数を設定します。ジョブドライバーが 2 回再試行する間の実行間隔は、[Kubernetes ドキュメント](#)で説明されているように、指数関数的な再試行間隔 (10 秒、20 秒、40 秒...) で、上限は 6 分です。

Note

ジョブドライバーを追加実行するたびに、別のジョブ実行として請求され、[Amazon EMR on EKS 料金](#)が適用されます。

再試行ポリシー設定値

- ジョブのデフォルト再試行ポリシー: StartJobRun には、デフォルトで最大試行回数 1 回に設定された再試行ポリシーが含まれます。再試行ポリシーは、必要に応じて設定できます。

Note

retryPolicyConfiguration の maxAttempts が 1 に設定されている場合、失敗時にドライバーポッドを起動するための再試行は行われません。

- ジョブの再試行ポリシーを無効にする: 再試行ポリシーを無効にするには、retryPolicyConfiguration の最大試行値を 1 に設定します。

```
"retryPolicyConfiguration": {  
  "maxAttempts": 1  
}
```

- 有効範囲内のジョブに maxAttempts を設定する: maxAttempts 値が有効範囲外の場合、StartJobRun 呼び出しは失敗します。有効な maxAttempts 範囲は 1 から 2,147,483,647 (32 ビット整数) で、これは Kubernetes の backOffLimit 構成設定でサポートされている範囲です。詳細については、Kubernetes ドキュメントの「[Pod 失敗のバックオフポリシー](#)」を参照してください。maxAttempts 値が無効な場合、以下のエラーメッセージが返されます。

```
{  
  "message": "Retry policy configuration's parameter value of maxAttempts is invalid"  
}
```

ジョブの再試行ポリシーステータスの取得

[ListJobRuns](#) および [DescribeJobRun](#) API を使用して、ジョブの再試行のステータスを表示できます。再試行ポリシー設定が有効になっているジョブをリクエストすると、ListJobRun および DescribeJobRun レスポンスには、RetryPolicyExecution フィールドの再試行ポリシーのステータスが含まれます。さらに、DescribeJobRun レスポンスにはジョブの StartJobRun リクエストに入力された RetryPolicyConfiguration が含まれます。

レスポンス例

ListJobRuns response

```
{
  "jobRuns": [
    ...
    ...
    "retryPolicyExecution" : {
      "currentAttemptCount": 2
    }
    ...
    ...
  ]
}
```

DescribeJobRun response

```
{
  ...
  ...
  "retryPolicyConfiguration": {
    "maxAttempts": 5
  },
  "retryPolicyExecution" : {
    "currentAttemptCount": 2
  },
  ...
  ...
}
```

これらのフィールドは、以下の「[再試行ポリシー設定値](#)」で説明するように、ジョブで再試行ポリシーが無効になっている場合は表示されません。

再試行ポリシーを使用してジョブをモニタリングする

再試行ポリシーを有効にすると、作成されたジョブドライバーごとに CloudWatch イベントが生成されます。これらのイベントをサブスクライブするには、以下のコマンドを使用して CloudWatch イベントルールを設定します。

```
aws events put-rule \
--name cwe-test \
--event-pattern '{"detail-type": ["EMR Job Run New Driver Attempt"]}'
```

このイベントはジョブドライバーの `newDriverPodName`、`newDriverCreatedAt` タイムスタンプ、`previousDriverFailureMessage`、および `currentAttemptCount` に関する情報を返します。再試行ポリシーが無効になっている場合、これらのイベントは作成されません。

CloudWatch イベントを使用してジョブをモニタリングする方法の詳細については、「[Amazon CloudWatch Events でジョブをモニタリングする](#)」を参照してください。

ドライバーとエグゼキューター用のログを検索する

ドライバーポッド名は形式 `spark-<job id>-driver-<random-suffix>` に従います。ドライバーが生成するエグゼキューターポッド名にも同じ `random-suffix` が追加されます。この `random-suffix` を使用すると、ドライバーとそれに関連するエグゼキューターのログを検索できます。`random-suffix` は、そのジョブの[再試行ポリシーが有効になっている](#)場合にのみ存在します。それ以外の場合は、`random-suffix` は存在しません。

ログ記録用のモニタリング設定を使用してジョブを設定する方法の詳細については、「[Spark アプリケーションの実行](#)」を参照してください。

Spark イベントログのローテーションを使用する

Amazon EMR 6.3.0 以降では、Amazon EMR on EKS の Spark イベントログローテーション機能をオンにすることができます。この機能は、単一のイベントログファイルを生成する代わりに、設定された時間間隔に基づいてファイルをローテーションし、最も古いイベントログファイルを削除します。

Spark イベントログをローテーションすると、長時間実行されるジョブやストリーミングジョブ用に生成された大きな Spark イベントログファイルに関する潜在的な問題を回避できます。例えば、`persistentAppUI` パラメータでイベントログを有効にして、長時間実行される Spark ジョブを開始します。Spark ドライバーは、イベントログファイルを生成します。ジョブが数時間または数日間実行され、Kubernetes ノードのディスク容量が制限されている場合、イベントログファイルは使用可能なすべてのディスク領域を消費する可能性があります。Spark イベントログのローテーション機能をオンにすると、ログファイルを複数のファイルに分割し、最も古いファイルを削除することで問題が解決されます。

Note

この機能は、Amazon EMR on EKS でのみ使用できます。Amazon EC2 上で実行する Amazon EMR は Spark イベントログのローテーションをサポートしていません。

Spark イベントログのローテーション機能をオンにするには、次の Spark パラメータを設定します。

- `spark.eventLog.rotation.enabled` - ログローテーションをオンにします。Spark 設定ファイルではデフォルトで無効となっています。この機能をオンにするには、`true` に設定します。
- `spark.eventLog.rotation.interval` - ログローテーションの時間間隔を指定します。最小値は 60 秒です。デフォルト値は 300 秒です。
- `spark.eventLog.rotation.minFileSize` - ログファイルをローテーションするための最小ファイルサイズを指定します。最小値およびデフォルト値は 1 MB です。
- `spark.eventLog.rotation.maxFilesToRetain` - クリーンアップ中に保持するローテーションログファイルの数を指定します。有効な範囲は 1~10 です。デフォルト値は 2 です。

これらのパラメータは、次の例に示すように、[StartJobRun](#) API の `sparkSubmitParameters` セクションで指定できます。

```
"sparkSubmitParameters": "--class org.apache.spark.examples.SparkPi --conf  
spark.eventLog.rotation.enabled=true --conf spark.eventLog.rotation.interval=300 --  
conf spark.eventLog.rotation.minFileSize=1m --conf  
spark.eventLog.rotation.maxFilesToRetain=2"
```

Spark コンテナログのローテーションを使用する

Amazon EMR 6.11.0 以降では、Amazon EMR on EKS の Spark コンテナログローテーション機能をオンにすることができます。この機能は、単一の `stdout` または `stderr` ログファイルを生成する代わりに、設定されたローテーションサイズに基づいてファイルをローテーションし、コンテナから最も古いログファイルを削除します。

Spark コンテナログをローテーションすると、長時間実行されるジョブやストリーミングジョブ用に生成された大きな Spark ログファイルに関する潜在的な問題を回避できます。例えば、長時間実行される Spark ジョブを開始し、Spark ドライバーがコンテナログファイルを生成するとします。ジョブが数時間または数日間実行され、Kubernetes ノードのディスク容量が制限されている場合、コンテナログファイルは使用可能なすべてのディスク容量を消費する可能性があります。Spark コンテナログローテーションを有効にすると、ログファイルを複数のファイルに分割し、最も古いファイルを削除します。

Spark コンテナログのローテーション機能をオンにするには、以下の Spark パラメータを設定します。

containerLogRotationConfiguration

このパラメータを `monitoringConfiguration` に組み込むと、ログローテーションが有効になります。デフォルトでは無効となっています。 `s3MonitoringConfiguration` に加えて `containerLogRotationConfiguration` を使用する必要があります。

rotationSize

`rotationSize` パラメータはログローテーションのファイルサイズを指定します。指定できる値の範囲は 2KB ~ 2GB です。 `rotationSize` パラメータの数値単位部分は整数として渡されます。小数値はサポートされていないため、値 1500MB などに 1.5 GB のローテーションサイズを指定できます。

maxFilesToKeep

`maxFilesToKeep` パラメータは、ローテーションが行われた後にコンテナに保持するファイルの最大数を指定します。最小値は 1 で、最大値は 50 です。

これらのパラメータは、次の例に示すように、 `StartJobRun` API の `monitoringConfiguration` セクションで指定できます。この例では、 `rotationSize = "10 MB"` と `maxFilesToKeep = 3` を使用すると、Amazon EMR on EKS はログを 10 MB でローテーションし、新しいログファイルを生成し、ログファイルの数が 3 に達すると最も古いログファイルを削除します。

```
{
  "name": "my-long-running-job",
  "virtualClusterId": "123456",
  "executionRoleArn": "iam_role_name_for_job_execution",
  "releaseLabel": "emr-6.11.0-latest",
  "jobDriver": {
    "sparkSubmitJobDriver": {
      "entryPoint": "entryPoint_location",
      "entryPointArguments": ["argument1", "argument2", ...],
      "sparkSubmitParameters": "--class main_class --conf spark.executor.instances=2
--conf spark.executor.memory=2G --conf spark.executor.cores=2 --conf
spark.driver.cores=1"
    }
  },
  "configurationOverrides": {
    "applicationConfiguration": [
      {
        "classification": "spark-defaults",
        "properties": {
```

```
        "spark.driver.memory": "2G"
      }
    },
  ],
  "monitoringConfiguration": {
    "persistentAppUI": "ENABLED",
    "cloudWatchMonitoringConfiguration": {
      "logGroupName": "my_log_group",
      "logStreamNamePrefix": "log_stream_prefix"
    },
    "s3MonitoringConfiguration": {
      "logUri": "s3://my_s3_log_location"
    },
    "containerLogRotationConfiguration": {
      "rotationSize": "10MB",
      "maxFilesToKeep": "3"
    }
  }
}
```

Spark コンテナログローテーションを使用してジョブ実行を開始するには、これらのパラメータで設定した JSON ファイルへのパスを [StartJobRun](#) コマンドに含めます。

```
aws emr-containers start-job-run \  
--cli-input-json file://path-to-json-request-file
```

Amazon EMR Spark ジョブで垂直的自動スケーリングを使用する

Amazon EMR on EKS の垂直的自動スケーリングは、Amazon EMR Spark アプリケーションに提供するワークロードのニーズに合わせてメモリと CPU リソースを自動的に調整します。これにより、リソース管理が簡単になります。

Amazon EMR Spark アプリケーションのリアルタイムおよび過去のリソース使用率を追跡するために、垂直的自動スケーリングは Kubernetes [Vertical Pod Autoscaler \(VPA\)](#) を活用します。垂直的自動スケーリング機能では、VPA が収集したデータを使用して、Spark アプリケーションに割り当てられるメモリと CPU リソースを自動的に調整します。このシンプルなプロセスにより、信頼性が向上し、コストが最適化されます。

トピック

- [Amazon EMR on EKS の垂直的自動スケーリングのセットアップ](#)
- [Amazon EMR on EKS の垂直的自動スケーリングを開始する](#)
- [Amazon EMR on EKS の垂直的自動スケーリングを設定する](#)
- [Amazon EMR on EKS の垂直的自動スケーリングをモニタリングする](#)
- [Amazon EMR on EKS の垂直的自動スケーリング演算子をアンインストールする](#)

Amazon EMR on EKS の垂直的自動スケーリングのセットアップ

このトピックは、Amazon EKS クラスターが垂直的自動スケーリングを使用して Amazon EMR Spark ジョブを送信できるように準備するのに役立ちます。セットアッププロセスでは、以下のセクションのタスクを確認または完了する必要があります。

トピック

- [前提条件](#)
- [Amazon EKS クラスターに Operator Lifecycle Manager \(OLM\) をインストールする](#)
- [Amazon EMR on EKS の垂直的自動スケーリング演算子をインストールする](#)

前提条件

クラスターに垂直的自動スケーリング Kubernetes 演算子をインストールする前に、以下のタスクを完了します。前提条件のいずれかを既に完了している場合は、その前提条件をスキップして、次の前提条件に進むことができます。

- [AWS CLI をインストールする](#) — AWS CLI を既にインストールしている場合は、それが最新バージョンであることを確認します。
- [kubectI をインストールする](#) – kubectI は Kubernetes API サーバーと通信するために使用するコマンドラインツールです。Amazon EKS クラスターに垂直的自動スケーリング関連のアーティファクトをインストールしてモニタリングするには kubectI が必要です。
- [Operator SDK をインストールする](#) — Amazon EMR on EKS は、クラスターにインストールする垂直的自動スケーリング演算子の存続期間中、Operator SDK をパッケージマネージャーとして使用します。
- [Docker をインストールする](#) — Amazon EKS クラスターにインストールする垂直的自動スケーリング関連の Docker イメージを認証して取得するには、Docker CLI にアクセスする必要があります。

- [Amazon EKS クラスターを設定する \(バージョン 1.24 以降\)](#) — 垂直的自動スケーリングは Amazon EKS バージョン 1.24 以降でサポートされています。クラスターを作成したら、[Amazon EMR で使用できるように登録します](#)。
- [Amazon EMR ベースイメージ URI \(リリース 6.10.0 以上\) を選択する](#) — 垂直的自動スケーリングは Amazon EMR リリース 6.10.0 以降でサポートされています。

Amazon EKS クラスターに Operator Lifecycle Manager (OLM) をインストールする

Operator SDK CLI を使用して、以下の例に示すように、垂直的自動スケーリングを設定する Amazon EMR on EKS クラスターに Operator Lifecycle Manager (OLM) をインストールします。セットアップが完了すると、OLM を使用して [Amazon EMR 垂直的自動スケーリング演算子のライフサイクル](#)をインストールして管理できます。

```
operator-sdk olm install
```

インストールを検証するには、以下の `olm status` コマンドを実行します。

```
operator-sdk olm status
```

コマンドが以下の出力例のような成功した結果を返すことを確認します。

```
INFO[0007] Successfully got OLM status for version X.XX
```

インストールが成功しなかった場合は、「[Amazon EMR on EKS 垂直自動スケーリングのトラブルシューティング](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS の垂直的自動スケーリング演算子をインストールする

以下の手順を使用して Amazon EKS クラスターに垂直的自動スケーリング演算子をインストールします。

1. インストールを完了するために使用する以下の環境変数を設定します。
 - **\$REGION** はクラスターの AWS リージョンを指します。例えば、`us-west-2` です。
 - **\$ACCOUNT_ID** はリージョンの Amazon ECR アカウント ID を指します。詳細については、「[リージョン別の Amazon ECR レジストリアカウント](#)」を参照してください。
 - **\$RELEASE** はクラスターに使用したい Amazon EMR リリースを指します。垂直的自動スケーリングでは、Amazon EMR リリース 6.10.0 以降を使用する必要があります。

- 次に、演算子の [Amazon ECR レジストリ](#) への認証トークンを取得します。

```
aws ecr get-login-password \  
  --region region-id | docker login \  
  --username AWS \  
  --password-stdin $ACCOUNT_ID.dkr.ecr.region-id.amazonaws.com
```

- Amazon EMR on EKS 垂直的自動スケーリング演算子を以下のコマンドでインストールします。

```
ECR_URL=$ACCOUNT_ID.dkr.ecr.$REGION.amazonaws.com && \  
REPO_DEST=dynamic-sizing-k8s-operator-olm-bundle && \  
BUNDLE_IMG=emr-$RELEASE-dynamic-sizing-k8s-operator && \  
operator-sdk run bundle \  
$ECR_URL/$REPO_DEST/$BUNDLE_IMG\:latest
```

これにより、Amazon EKS クラスターのデフォルト名前空間に垂直的自動スケーリング演算子のリリースが作成されます。このコマンドを使用して別の名前空間にインストールします。

```
operator-sdk run bundle \  
$ACCOUNT_ID.dkr.ecr.$REGION.amazonaws.com/dynamic-sizing-k8s-operator-olm-bundle/  
emr-$RELEASE-dynamic-sizing-k8s-operator:latest \  
-n operator-namespace
```

Note

指定した名前空間が存在しない場合、OLM は演算子をインストールしません。詳細については、「[Kubernetes 名前空間が見つからない](#)」を参照してください。

- kubectl Kubernetes コマンドラインツールを使用して、演算子が正常にインストールされたことを確認します。

```
kubectl get csv -n operator-namespace
```

kubectl コマンドは、新しくデプロイされた垂直的自動スケーラー演算子を [フェーズ] ステータスが [成功] で返します。インストールやセットアップに問題がある場合は、「[Amazon EMR on EKS 垂直自動スケーリングのトラブルシューティング](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS の垂直的自動スケーリングを開始する

垂直的自動スケーリングを使用して Spark ジョブを送信する

[StartJobRun](#) API を使用してジョブを送信する場合、Spark ジョブのドライバーに以下の 2 つの設定を追加して、垂直的自動スケーリングを有効にします。

```
"spark.kubernetes.driver.label.emr-containers.amazonaws.com/dynamic.sizing": "true",  
"spark.kubernetes.driver.annotation.emr-containers.amazonaws.com/  
dynamic.sizing.signature": "YOUR_JOB_SIGNATURE"
```

上のコードでは、最初の行で垂直的自動スケーリング機能が有効になっています。次の行は、ジョブの署名を選択するために必須の署名設定です。

これらの設定と許容されるパラメータ値の詳細については、「[Amazon EMR on EKS の垂直的自動スケーリングを設定する](#)」を参照してください。デフォルトでは、ジョブは垂直的自動スケーリングのモニタリング専用 [オフ] モードで送信されます。このモニタリング状態では、自動スケーリングを実行しなくてもリソースレコメンデーションを計算して表示できます。詳細については、「[垂直的自動スケーリングモード](#)」を参照してください。

以下の例では、垂直的自動スケーリングを使用してサンプル start-job-run コマンドを完了する方法を示しています。

```
aws emr-containers start-job-run \  
--virtual-cluster-id $VIRTUAL_CLUSTER_ID \  
--name $JOB_NAME \  
--execution-role-arn $EMR_ROLE_ARN \  
--release-label emr-6.10.0-latest \  
--job-driver '{  
  "sparkSubmitJobDriver": {  
    "entryPoint": "local:///usr/lib/spark/examples/src/main/python/pi.py"  
  }  
' \  
--configuration-overrides '{  
  "applicationConfiguration": [{  
    "classification": "spark-defaults",  
    "properties": {  
      "spark.kubernetes.driver.label.emr-containers.amazonaws.com/dynamic.sizing":  
"true",  
      "spark.kubernetes.driver.annotation.emr-containers.amazonaws.com/  
dynamic.sizing.signature": "test-signature"
```

```
    }  
  }]  
}'
```

垂直的自動スケーリング機能の検証

垂直的自動スケーリングが送信されたジョブで正しく機能することを確認するには、`kubectl` を使用して `verticalpodautoscaler` カスタムリソースを取得し、スケーリングの推奨事項を確認してください。例えば、以下のコマンドは、[垂直的自動スケーリングを使用して Spark ジョブを送信する](#) セクションのサンプルジョブに関するレコメンデーションを問い合わせます。

```
kubectl get verticalpodautoscalers --all-namespaces \  
-l=emr-containers.amazonaws.com/dynamic.sizing.signature=test-signature
```

このクエリの出力は以下のようになります。

NAME	MODE	CPU	MEM
PROVIDED AGE			
ds-jceyefkxnhrvdzw6djum3naf2abm6o63a6dvjkkedqtkhlrf25eq-vpa 87m	Off	3304504865	True

出力が類似していない場合やエラーコードが含まれている場合は、「[Amazon EMR on EKS 垂直自動スケーリングのトラブルシューティング](#)」を参照して、問題の解決に役立つ手順をご覧ください。

Amazon EMR on EKS の垂直的自動スケーリングを設定する

[StartJobRun API](#) を使用して Amazon EMR Spark ジョブを送信するときに、垂直的自動スケーリングを設定できます。「[垂直的自動スケーリングを使用して Spark ジョブを送信する](#)」の例に示すように、Spark ドライバーポッドに自動スケーリング関連の設定パラメータを設定します。

Amazon EMR on EKS 垂直的自動スケーリング演算子は、自動スケーリング機能を備えたドライバーポッドをリッスンし、ドライバーポッドの設定を使用して Kubernetes Vertical Pod Autoscaler (VPA) との統合を設定します。これにより、Spark エグゼキューターポッドのリソーストラッキングと自動スケーリングが容易になります。

以下のセクションでは、Amazon EKS クラスターの垂直的自動スケーリングを設定するときに使用できるパラメータについて説明します。

Note

機能切り替えパラメータをラベルとして設定し、残りのパラメータを Spark ドライバーポッドのアノテーションとして設定します。自動スケーリングパラメータは `emr-containers.amazonaws.com/` ドメインに属し、`dynamic.sizing` プレフィックスが付いています。

必須パラメータ

ジョブを送信する際には、Spark ジョブドライバーに以下の 2 つのパラメータを含める必要があります。

キー	説明	使用できる値	デフォルト値	タイプ	Spark パラメータ ¹
<code>dynamic.sizing</code>	機能の切り替え	<code>true, false</code>	未設定	ラベル	<code>spark.kubernetes.driver.label.emr-containers.amazonaws.com/dynamic.sizing</code>
<code>dynamic.sizing.signature</code>	ジョブの署名	文字列	未設定	注釈	<code>spark.kubernetes.driver.annotation.emr-containers.amazonaws.com/dynamic.sizing.signature</code>

¹ このパラメータを StartJobRun API で SparkSubmitParameter または ConfigurationOverride として使用します。

- **dynamic.sizing** — dynamic.sizing ラベルを使用して垂直的自動スケーリングのオンとオフを切り替えることができます。垂直的自動スケーリングをオンにするには、Spark ドライバーポッドの dynamic.sizing を true に設定します。このラベルを省略したり、true 以外の値に設定したりすると、垂直的自動スケーリングはオフになります。
- **dynamic.sizing.signature** — dynamic.sizing.signature ドライバーポッドのアノテーションを使用してジョブの署名を設定します。垂直的自動スケーリングは、Amazon EMR Spark ジョブのさまざまな実行にわたるリソース使用状況データを集約して、リソースのレコメンデーションを導き出します。ジョブを結び付けるための一意の識別子を指定します。

Note

ジョブが毎日あるいは毎週などの一定の間隔で繰り返される場合、ジョブの新しいインスタンスごとにジョブの署名を同じままにしておく必要があります。これにより、垂直的自動スケーリングでは、ジョブのさまざまな実行にわたるレコメンデーションを計算して集計できます。

¹ このパラメータを StartJobRun API で SparkSubmitParameter または ConfigurationOverride として使用します。

任意指定のパラメータ

垂直的自動スケーリングは、以下のオプションパラメータもサポートしています。これらをドライバーポッドのアノテーションとして設定します。

キー	説明	使用できる値	デフォルト値	タイプ	Spark パラメータ ¹
dynamic.sizing.mode	垂直的自動スケーリングモード	Off, Initial, Auto	Off	注釈	spark.kubernetes.driver.label.emr-containers.amazonaws

キー	説明	使用できる値	デフォルト値	タイプ	Spark パラメータ ¹
					.com/dynamic.sizing.mode
dynamic.sizing.scale.memory	メモリスケーリングを有効にする	<i>true, false</i>	true	注釈	spark.kubernetes.driver.label.emr-containers.amazonaws.com/dynamic.sizing.scale.memory
dynamic.sizing.scale.cpu	CPU スケーリングをオンまたはオフにする	<i>true, false</i>	false	注釈	spark.kubernetes.driver.label.emr-containers.amazonaws.com/dynamic.sizing.scale.cpu

キー	説明	使用できる値	デフォルト値	タイプ	Spark パラメータ ¹
dynamic.sizing.scale.memory.min	メモリスケーリングの最小制限	文字列、 K8sリソース量 例: 1G	未設定	注釈	spark.kubernetes.driver.label.emr-containers.amazonaws.com/dynamic.sizing.scale.memory.min
dynamic.sizing.scale.memory.max	メモリスケーリングの最大制限	文字列、 K8sリソース量 例: 4G	未設定	注釈	spark.kubernetes.driver.label.emr-containers.amazonaws.com/dynamic.sizing.scale.memory.max

キー	説明	使用できる値	デフォルト値	タイプ	Spark パラメータ ¹
dynamic.sizing.scale.cpu.min	CPU スケーリングの最小制限	文字列、 K8s リソース量 例: 1	未設定	注釈	spark.kubernetes.driver.label.emr-containers.amazonaws.com/dynamic.sizing.scale.cpu.min
dynamic.sizing.scale.cpu.max	CPU スケーリングの最大制限	文字列、 K8s リソース量 例: 2	未設定	注釈	spark.kubernetes.driver.label.emr-containers.amazonaws.com/dynamic.sizing.scale.cpu.max

垂直的自動スケーリングモード

mode パラメータは VPA がサポートするさまざまな自動スケーリングモードにマッピングされます。ドライバーポッドの `dynamic.sizing.mode` アノテーションを使用してモードを設定します。このパラメータでは以下の値がサポートされています。

- オフ — レコメンデーションをモニタリングできる dry-run モードですが、自動スケーリングは実行されません。これが垂直的自動スケーリングのデフォルトモードです。このモードでは、関連する Vertical Pod Autoscaler リソースがレコメンデーションを計算し、kubect、Prometheus、Grafana などのツールを使用してレコメンデーションをモニタリングできます。

- 初期 — このモードでは、ジョブが繰り返し実行される場合など、ジョブの実行履歴に基づいてレコメンデーションがある場合、VPA はジョブの開始時にリソースを自動スケーリングします。
- 自動 — このモードでは、VPA は Spark エグゼキューターポッドを削除し、Spark ドライバーポッドがエグゼキューターポッドを再起動したときに推奨リソース設定でそれらを自動スケーリングします。VPA は実行中の Spark エグゼキューターポッドを削除することがあるため、中断されたエグゼキューターを再試行すると、さらにレイテンシーが発生する可能性があります。

リソースのスケーリング

垂直的自動スケーリングを設定する場合は、CPU およびメモリリソースをスケーリングするかどうかを選択することができます。dynamic.sizing.scale.cpu および dynamic.sizing.scale.memory アノテーションを true または false に設定します。デフォルトでは、CPU スケーリングは false に設定され、メモリスケーリングは true に設定されます。

リソースの最小値と最大値 (境界)

必要に応じて、CPU およびメモリリソースに境界を設定することもできます。自動スケーリングを有効にするときに、dynamic.sizing.[memory/cpu].[min/max] アノテーション付きのこれらのリソースの最小値と最大値を選択します。デフォルトでは、リソースに制限はありません。アノテーションは Kubernetes リソース量を表す文字列値として設定します。例えば、4 GB を表すようにするには、dynamic.sizing.memory.max を 4G に設定します。

Amazon EMR on EKS の垂直的自動スケーリングをモニタリングする

kubectl Kubernetes コマンドラインツールを使用して、クラスター上のアクティブな垂直的自動スケーリング関連のレコメンデーションを一覧表示できます。また、追跡したジョブの署名を表示したり、その署名に関連する不要なリソースを削除したりすることもできます。

クラスターの垂直的自動スケーリングのレコメンデーションを一覧表示する

kubectl を使用して verticalpodautoscaler リソースを取得し、現在のステータスとレコメンデーションを表示します。以下のクエリ例は、Amazon EKS クラスターのすべてのアクティブなリソースを返します。

```
kubectl get verticalpodautoscalers \
-o custom-columns="NAME:.metadata.name, \"\
\"SIGNATURE:.metadata.labels.emr-containers\.amazonaws\.com/dynamic\.sizing
\.signature, \"\
\"MODE:.spec.updatePolicy.updateMode, \"\
```

```
"MEM:.status.recommendation.containerRecommendations[0].target.memory" \
--all-namespaces
```

このクエリの出力は以下のようになります。

NAME	SIGNATURE	MODE	MEM
ds- <i>example-id-1</i> -vpa	<i>job-signature-1</i>	Off	<i>none</i>
ds- <i>example-id-2</i> -vpa	<i>job-signature-2</i>	Initial	12936384283

クラスターの垂直的自動スケーリングのレコメンデーションをクエリして削除します。

Amazon EMR 垂直的自動スケーリングジョブ実行リソースを削除すると、レコメンデーションを追跡して保存する関連付けられた VPA オブジェクトが自動的に削除されます。

以下の例では、`kubectl` を使用して、署名で識別されるジョブのレコメンデーションを削除します。

```
kubectl delete jobrun -n emr -l=emr-containers\.amazonaws\.com/dynamic\.sizing
\.signature=integ-test
jobrun.dynamicsizing.emr.services.k8s.aws "ds-job-signature" deleted
```

特定のジョブの署名がわからない場合や、クラスター上のリソースをすべて削除したい場合は、以下の例のように、一意のジョブ ID の代わりに `--all` または `--all-namespaces` をコマンドで使用できます。

```
kubectl delete jobruns --all --all-namespaces
jobrun.dynamicsizing.emr.services.k8s.aws "ds-example-id" deleted
```

Amazon EMR on EKS の垂直的自動スケーリング演算子をアンインストールする

Amazon EKS クラスターから垂直的自動スケーリング演算子を削除する場合は、以下の例に示すように Operator SDK CLI で `cleanup` コマンドを使用します。これにより、Vertical Pod Autoscaler など、演算子と共にインストールされたアップストリームの依存関係も削除されます。

```
operator-sdk cleanup emr-dynamic-sizing
```

演算子を削除したときにクラスター上に実行中のジョブがある場合、それらのジョブは垂直的自動スケーリングなしで実行され続けます。演算子を削除した後にクラスターでジョブを送信する

と、Amazon EMR on EKS は、[設定](#)時に定義した垂直的自動スケーリング関連のパラメータをすべて無視します。

EKS での Amazon EMR 上のインタラクティブワークロードの実行

インタラクティブエンドポイントは、Amazon EMR Studio を EKS での Amazon EMR に接続するゲートウェイです。これにより、インタラクティブワークロードを実行できます。EMR Studio でインタラクティブエンドポイントを使用すると、[Amazon S3](#) や [Amazon DynamoDB](#) などのデータストアにあるデータセットを使用してインタラクティブな分析を実行できます。

ユースケース

- EMR スタジオ IDE エクスペリエンスを使用して ETL スクリプトを作成します。IDE はオンプレミスデータを取り込み、変換後に Amazon S3 に保存し、後で分析できるようにします。
- ノートブックを使用してデータセットを調べ、データセットの異常を検出するように機械学習モデルをトレーニングします。
- ビジネスダッシュボードなどの分析アプリケーションの日次レポートを生成するスクリプトを作成します。

トピック

- [インタラクティブエンドポイントの概要](#)
- [EKS での Amazon EMR でインタラクティブエンドポイントを作成するための前提条件](#)
- [仮想クラスターのインタラクティブエンドポイントを作成する](#)
- [インタラクティブエンドポイントの設定](#)
- [インタラクティブエンドポイントのモニタリング](#)
- [セルフホスト型 Jupyter Notebook を使用する](#)
- [インタラクティブエンドポイントでのその他のオペレーション](#)

インタラクティブエンドポイントの概要

インタラクティブエンドポイントは、Amazon EMR Studio などのインタラクティブクライアントが EKS クラスター上の Amazon EMR に接続してインタラクティブワークロードを実行できるようにします。インタラクティブエンドポイントは、インタラクティブクライアントが必要とするリモートカーネルライフサイクル管理機能を提供する Jupyter Enterprise Gateway によって支えられてい

まず、カーネルは、Jupyter ベースの Amazon EMR Studio クライアントと相互作用してインタラクティブワークロードを実行する言語固有のプロセスです。

インタラクティブエンドポイントは、次のカーネルをサポートします。

- Python 3
- Kubernetes での PySpark
- Scala を使用した Apache Spark

Note

EKS での Amazon EMR の料金は、インタラクティブエンドポイントとカーネルに適用されます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS pricing](#)」のページを参照してください。

EMR Studio を EKS での Amazon EMR に接続するには、以下のエンティティが必要です。

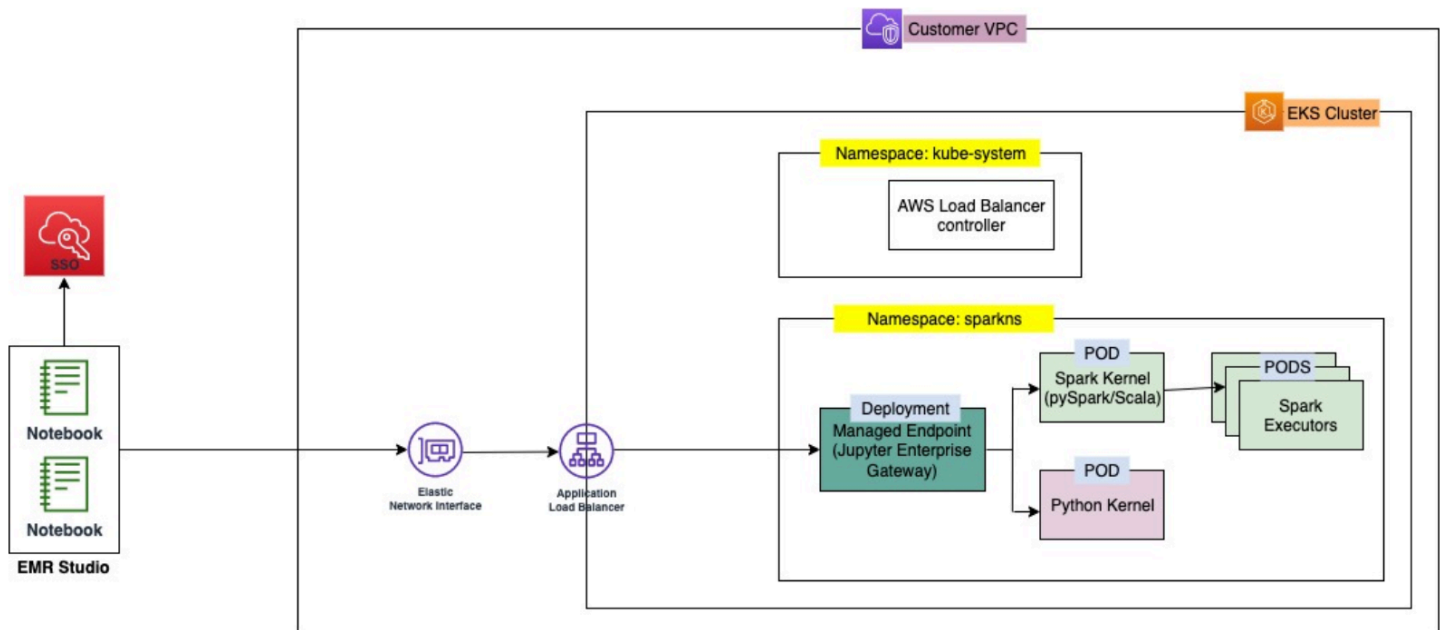
- EKS での Amazon EMR 仮想クラスター — 仮想クラスターは、Amazon EMR を登録する際に使用する Kubernetes 名前空間です。Amazon EMR では、仮想クラスターを使用してジョブを実行し、エンドポイントをホストします。複数の仮想クラスターを同じ物理クラスターでバックアップできます。ただし、各仮想クラスターは Amazon EKS クラスター上の 1 つの名前空間にマッピングされます。仮想クラスターでは、請求に適用されるアクティブなリソースや、サービスの外部でライフサイクル管理を必要とするアクティブなリソースは作成されません。
- EKS での Amazon EMR のインタラクティブエンドポイント — インタラクティブエンドポイントは、EMR Studio ユーザーがワークスペースに接続できる HTTPS エンドポイントです。HTTPS エンドポイントには EMR Studio からのみアクセスでき、Amazon EKS クラスターの Amazon Virtual Private Cloud (Amazon VPC) のプライベートサブネットにこれを作成します。

Python、PySpark、および Spark Scala カーネルは、EKS での Amazon EMR ジョブ実行ロールで定義されたアクセス許可を使用して、他の AWS のサービス呼び出します。インタラクティブエンドポイントに接続するすべてのカーネルとユーザーは、エンドポイントの作成時に指定したロールを使用します。ユーザーごとに別々のエンドポイントを作成し、ユーザーごとに異なる AWS Identity and Access Management (IAM) ロールを割り当てることをお勧めします。

- AWS Application Load Balancer コントローラー — AWS Application Load Balancer コントローラーは、Amazon EKS Kubernetes クラスターの Elastic Load Balancing を管理します。コントローラーは、Kubernetes Ingress リソースを作成するときに、Application Load Balancer (ALB) をプロビジョニングします。ALB は、インタラクティブエンドポイントなどの Kubernetes サービ

スを Amazon EKS クラスターの外部に公開しますが、同じ Amazon VPC 内に公開します。インタラクティブエンドポイントを作成すると、インタラクティブクライアントが接続できるように ALB を使用してインタラクティブエンドポイントを公開する Ingress リソースもデプロイされます。Amazon EKS クラスターごとに 1 つの AWS Application Load Balancer コントローラーをインストールするだけで済みます。

次の図に、EKS での Amazon EMR のインタラクティブエンドポイントのアーキテクチャを示します。Amazon EKS クラスターは、分析ワークロードを実行するコンピューティングとインタラクティブエンドポイントで構成されます。Application Load Balancer コントローラーは kube-system 名前空間で実行されます。ワークロードとインタラクティブエンドポイントは、仮想クラスターの作成時に指定した名前空間で実行されます。インタラクティブエンドポイントを作成すると、EKS での Amazon EMR コントロールプレーンは Amazon EKS クラスターにインタラクティブエンドポイントデプロイを作成します。さらに、Application Load Balancer イングレスのインスタンスが AWS ロードバランサーコントローラーによって作成されます。Application Load Balancer は、EMR Studio などのクライアントが Amazon EMR クラスターに接続し、インタラクティブワークロードを実行するための外部インターフェイスを提供します。



EKS での Amazon EMR でインタラクティブエンドポイントを作成するための前提条件

このセクションでは、EMR Studio が EKS での Amazon EMR クラスターに接続してインタラクティブワークロードを実行するために使用できるインタラクティブエンドポイントを設定するための前提条件について説明します。

AWS CLI

AWS Command Line Interface (AWS CLI) の最新バージョンをインストールするには、「[AWS CLI をインストールする](#)」の手順に従ってください。

eksctl のインストール

eksctl の最新バージョンをインストールするには、「[eksctl をインストールする](#)」の手順に従ってください。Amazon EKS クラスターに Kubernetes バージョン 1.22 以降を使用している場合は、0.117.0 より大きいバージョンの eksctl を使用してください。

Amazon EKS クラスター

Amazon EKS クラスターを作成します。クラスターを EKS での Amazon EMR に仮想クラスターとして登録します。このクラスターの要件と考慮事項は次のとおりです。

- クラスターは EMR Studio と同じ Amazon Virtual Private Cloud (VPC) 内にある必要があります。
- クラスターには、インタラクティブエンドポイントの有効化、Git ベースのリポジトリのリンク、および Application Load Balancer のプライベートモードでの起動のために、少なくとも 1 つのプライベートサブネットが必要です。
- EMR Studio と、仮想クラスターの登録に使用する Amazon EKS クラスターの間には少なくとも 1 つの共通のプライベートサブネットが必要です。これにより、インタラクティブエンドポイントが Studio ワークスペースにオプションとして表示され、Studio から Application Load Balancer への接続が有効になります。

Studio と Amazon EKS クラスターを接続するには、2 つの方法から選択できます。

- Amazon EKS クラスターを作成し、EMR Studio に属するサブネットに関連付けます。
- または、EMR Studio を作成し、Amazon EKS クラスターのプライベートサブネットを指定します。

- Amazon EKS 最適化 ARM Amazon Linux AMI は、EKS での Amazon EMR インタラクティブエンドポイントではサポートされていません。
- AWS Fargate (Fargate) 専用 EKS クラスターを使用する場合は、すべての Fargate ノードからノードテイント `eks.amazonaws.com/compute-type=fargate:NoSchedule` を削除します。
- インタラクティブエンドポイントは、バージョン 1.27 までの Kubernetes を使用する Amazon EKS クラスターで動作します。
- [Amazon EKS マネージドノードグループ](#)のみがサポートされます。

EKS での Amazon EMR のクラスターアクセスを許可する

「[EKS での Amazon EMR のクラスターアクセスを許可する](#)」のステップを使用して、EKS での Amazon EMR にクラスター内の特定の名前空間へのアクセスを許可します。

Amazon EKS クラスターでの IRSA の有効化

Amazon EKS クラスターでサービスアカウント (IRSA) の IAM ロールを有効化するには、「[Enable IAM Roles for Service Accounts \(IRSA\)](#)」の手順に従ってください。

IAM ジョブ実行ロールを作成する

EKS での Amazon EMR インタラクティブエンドポイントでワークロードを実行するには、IAM ロールを作成する必要があります。このドキュメントでは、この IAM ロールをジョブ実行ロールと呼びます。この IAM ロールは、インタラクティブエンドポイントコンテナと、EMR Studio でジョブを送信したときに作成される実際の実行コンテナの両方に割り当てられます。EKS での Amazon EMR のジョブ実行ロールの Amazon リソースネーム (ARN) が必要になります。これには次の 2 つのステップが必要です。

- [ジョブ実行の IAM ロールを作成する。](#)
- [ジョブ実行ロールの信頼ポリシーを更新する。](#)

Amazon EMR on EKS へのアクセス許可をユーザーに付与する

インタラクティブエンドポイントの作成のリクエストを行う IAM エンティティ (ユーザーまたはロール) には、次の Amazon EC2 および `emr-containers` アクセス権限も必要です。「[Amazon EMR on EKS へのアクセス許可をユーザーに付与する](#)」で説明した手順に従って、EKS での Amazon EMR が、インタラクティブエンドポイントのロードバランサーへのインバウンドトラフィックを制

限するセキュリティグループを作成、管理、および削除できるようにするアクセス権限を付与します。

以下の `emr-containers` アクセス権限により、ユーザーは基本的なインタラクティブエンドポイントオペレーションを実行できます。

```
"ec2:CreateSecurityGroup",
"ec2:DeleteSecurityGroup",
"ec2:AuthorizeSecurityGroupEgress",
"ec2:AuthorizeSecurityGroupIngress",
"ec2:RevokeSecurityGroupEgress",
"ec2:RevokeSecurityGroupIngress"

"emr-containers:CreateManagedEndpoint",
"emr-containers:ListManagedEndpoints",
"emr-containers:DescribeManagedEndpoint",
"emr-containers>DeleteManagedEndpoint"
```

Amazon EKS クラスターをAmazon EMR に登録する

仮想クラスターを設定し、ジョブを実行する Amazon EKS クラスター内の名前空間にマッピングします。AWS Fargate 専用クラスターの場合は、EKS での Amazon EMR 仮想クラスターと Fargate プロファイルの両方に同じ名前空間を使用します。

EKS での Amazon EMR 仮想クラスターの設定の詳細については、「[Amazon EKS クラスターを Amazon EMR に登録する](#)」を参照してください。

AWS Load Balancer Controller を Amazon EKS クラスターにデプロイする

Amazon EKS クラスターには AWS Application Load Balancer が必要です。Amazon EKS クラスターごとに 1 つの Application Load Balancer コントローラーを設定する必要があります。AWS Application Load Balancer コントローラーのセットアップについては、「Amazon EKS ユーザーガイド」の「[Installing the AWS Load Balancer Controller add-on](#)」を参照してください。

仮想クラスターのインタラクティブエンドポイントを作成する

このページでは、AWS コマンドラインインターフェイス (AWS CLI) を使用してインタラクティブエンドポイントを作成する方法について説明します。

create-managed-endpoint コマンドでインタラクティブエンドポイントを作成する

次のように create-managed-endpoint コマンドでパラメータを指定します。EKS での Amazon EMR は、Amazon EMR リリース 6.7.0 以降でのインタラクティブエンドポイントの作成をサポートしています。

```
aws emr-containers create-managed-endpoint \  
--type JUPYTER_ENTERPRISE_GATEWAY \  
--virtual-cluster-id 1234567890abcdef0xxxxxxx \  
--name example-endpoint-name \  
--execution-role-arn arn:aws:iam::444455556666:role/JobExecutionRole \  
--release-label emr-6.9.0-latest \  
--configuration-overrides '{  
  "applicationConfiguration": [{  
    "classification": "spark-defaults",  
    "properties": {  
      "spark.driver.memory": "2G"  
    }  
  }],  
  "monitoringConfiguration": {  
    "cloudWatchMonitoringConfiguration": {  
      "logGroupName": "log_group_name",  
      "logStreamNamePrefix": "log_stream_prefix"  
    },  
    "persistentAppUI": "ENABLED",  
    "s3MonitoringConfiguration": {  
      "logUri": "s3://my_s3_log_location"  
    }  
  }  
}'
```

詳細については、「[インタラクティブエンドポイントを作成するためのパラメータ](#)」を参照してください。

JSON ファイルで指定されたパラメータを使用してインタラクティブエンドポイントを作成する

1. create-managed-endpoint-request.json ファイルを作成し、次の JSON ファイルに示すように、エンドポイントに必要なパラメータを指定します。

```
{
  "name": "MY_TEST_ENDPOINT",
  "virtualClusterId": "MY_CLUSTER_ID",
  "type": "JUPYTER_ENTERPRISE_GATEWAY",
  "releaseLabel": "emr-6.9.0-latest",
  "executionRoleArn": "arn:aws:iam::444455556666:role/JobExecutionRole",
  "configurationOverrides":
  {
    "applicationConfiguration":
    [
      {
        "classification": "spark-defaults",
        "properties":
        {
          "spark.driver.memory": "8G"
        }
      }
    ],
    "monitoringConfiguration":
    {
      "persistentAppUI": "ENABLED",
      "cloudWatchMonitoringConfiguration":
      {
        "logGroupName": "my_log_group",
        "logStreamNamePrefix": "log_stream_prefix"
      },
      "s3MonitoringConfiguration":
      {
        "logUri": "s3://my_s3_log_location"
      }
    }
  }
}
```

- ローカルまたは Amazon S3 に保存されている `create-managed-endpoint-request.json` ファイルへのパスを指定して、`create-managed-endpoint` コマンドを使用します。

```
aws emr-containers create-managed-endpoint \
--cli-input-json file:///./create-managed-endpoint-request.json --region AWS-Region
```

インタラクティブエンドポイントの作成の出力

ターミナルで、次の出力が表示されます。出力には、新しいインタラクティブエンドポイントの名前と ID が含まれます。

```
{
  "id": "1234567890abcdef0",
  "name": "example-endpoint-name",
  "arn": "arn:aws:emr-containers:us-west-2:111122223333:/
virtualclusters/444455556666/endpoints/444455556666",
  "virtualClusterId": "111122223333xxxxxxxx"
}
```

`aws emr-containers create-managed-endpoint` を実行すると、EMR Studio とインタラクティブエンドポイントサーバー間の HTTPS 通信を可能にする自己署名証明書が作成されます。

`create-managed-endpoint` を実行しても前提条件を満たしていない場合、Amazon EMR は続行するために必要なアクションを含むエラーメッセージを返します。

インタラクティブエンドポイントを作成するためのパラメータ

トピック

- [インタラクティブエンドポイントの必須パラメータ](#)
- [インタラクティブエンドポイントの任意指定のパラメータ](#)

インタラクティブエンドポイントの必須パラメータ

インタラクティブエンドポイントを作成するときに次のパラメータを指定する必要があります。

--type

JUPYTER_ENTERPRISE_GATEWAY を使用します。これはサポートされている唯一のタイプです。

--virtual-cluster-id

EKS での Amazon EMR に登録した仮想クラスターの ID。

--name

EMR Studio ユーザーがドロップダウンリストから選択しやすいようにする、インタラクティブエンドポイントのわかりやすい名前。

--execution-role-arn

前提条件の一部として作成された EKS での Amazon EMR の IAM ジョブ実行 IAM ロールの Amazon リソースネーム (ARN)。

--release-label

エンドポイントに使用する Amazon EMR リリースのリリースラベル。例えば、`emr-6.9.0-latest` です。EKS での Amazon EMR は、Amazon EMR リリース 6.7.0 以降でインタラクティブエンドポイントをサポートしています。

インタラクティブエンドポイントの任意指定のパラメータ

インタラクティブエンドポイントを作成するときに、オプションで以下を指定することもできます。

--configuration-overrides

アプリケーションのデフォルト設定を上書きするには、設定オブジェクトを指定します。短縮構文を使用して、設定を指定したり、JSON ファイルの設定オブジェクトを参照したりできます。

設定オブジェクトは、分類、プロパティ、オプションの入れ子になっている設定で構成されます。プロパティは、そのファイル内で上書きする設定で構成されます。単一の JSON オブジェクトで、複数のアプリケーションに複数の分類を指定できます。EKS での Amazon EMR リリースによって使用可能な設定分類は異なります。EKS での Amazon EMR の各リリースで使用可能な設定分類の一覧については、「[Amazon EMR on EKS リリース](#)」を参照してください。各リリースにリストされている設定分類に加えて、インタラクティブエンドポイントには追加の分類 `jeg-config` が組み込まれています。詳細については、「[Jupyter エンタープライズゲートウェイ \(JEG\) 設定オプション](#)」を参照してください。

インタラクティブエンドポイントの設定

モニタリング Spark ジョブ

障害のモニタリングとトラブルシューティングをできるようにするには、エンドポイントで起動したジョブで Amazon S3、Amazon CloudWatch Logs、またはその両方にログ情報を送信できるようにインタラクティブエンドポイントを設定します。以下のセクションでは、EKS での Amazon EMR インタラクティブエンドポイントで起動した Spark ジョブの Amazon S3 へ Spark アプリケーションログを送信する方法について説明します。

Amazon S3 ログ用の IAM ポリシーを設定する

カーネルが Amazon S3 にログデータを送信できるようにするには、ジョブ実行ロールのアクセス権限ポリシーに次のアクセス権限を含める必要があります。*DOC-EXAMPLE-BUCKET-LOGGING* をログ記録バケットの名前に置き換えます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "s3:PutObject",
        "s3:GetObject",
        "s3:ListBucket"
      ],
      "Resource": [
        "arn:aws:s3:::DOC-EXAMPLE-BUCKET-LOGGING",
        "arn:aws:s3:::DOC-EXAMPLE-BUCKET-LOGGING/*",
      ]
    }
  ]
}
```

Note

EKS での Amazon EMR は、S3 バケットを作成することもできます。S3 バケットが利用できない場合は、IAM ポリシーに `s3:CreateBucket` アクセス権限を含めてください。

S3 バケットにログを送信するために必要なアクセス権限を実行ロールに付与すると、ログデータは次の Amazon S3 ロケーションに送信されます。これは、`s3MonitoringConfiguration` が `create-managed-endpoint` リクエストの `monitoringConfiguration` セクションで渡されるときに起こります。

- ドライバーログ — `logUri/virtual-cluster-id/endpoints/endpoint-id/containers/spark-application-id/spark-application-id-driver/(stderr.gz/stdout.gz)`
- エグゼキューターログ — `logUri/virtual-cluster-id/endpoints/endpoint-id/containers/spark-application-id/executor-pod-name-exec-<Number>/(stderr.gz/stdout.gz)`

Note

EKS での Amazon EMR は、エンドポイントログを S3 バケットにアップロードしません。

インタラクティブエンドポイントでカスタムポッドテンプレートを指定する

ドライバーとエグゼキュター用のカスタムポッドテンプレートを指定するインタラクティブエンドポイントを作成できます。ポッドテンプレートは、各ポッドの実行方法を決定する仕様です。ポッドテンプレートファイルを使用して、Spark 構成でサポートされていないドライバーまたはエグゼキュターポッドの設定を定義できます。ポッドテンプレートは現在、Amazon EMR リリース 6.3.0 以降でサポートされています。

ポッドテンプレートの詳細については、「Amazon EMR on EKS Development Guide」の「[Using pod templates](#)」を参照してください。

次の例は、ポッドテンプレートを使用してインタラクティブエンドポイントを作成する方法を示しています。

```
aws emr-containers create-managed-endpoint \  
  --type JUPYTER_ENTERPRISE_GATEWAY \  
  --virtual-cluster-id virtual-cluster-id \  
  --name example-endpoint-name \  
  --execution-role-arn arn:aws:iam::aws-account-id:role/EKSClusterRole \  
  --release-label emr-6.9.0-latest \  
  --configuration-overrides '{  
    "applicationConfiguration": [  
      {  
        "classification": "spark-defaults",  
        "properties": {  
          "spark.kubernetes.driver.podTemplateFile": "path/to/driver/  
template.yaml",  
          "spark.kubernetes.executor.podTemplateFile": "path/to/executor/  
template.yaml"  
        }  
      }  
    ]  
  }'
```

JEG ポッドのノードグループへのデプロイ

JEG (Jupyter Enterprise Gateway) ポッド配置は、特定のノードグループにインタラクティブエンドポイントをデプロイできるようにする機能です。この機能により、インタラクティブエンドポイントの `instance type` などの設定を行うことができます。

マネージドノードグループに JEG ポッドを関連付ける

次の設定プロパティでは、JEG ポッドをデプロイする Amazon EKS クラスター上のマネージドノードグループの名前を指定できます。

```
//payload
--configuration-overrides '{
  "applicationConfiguration": [
    {
      "classification": "endpoint-configuration",
      "properties": {
        "managed-nodegroup-name": NodeGroupName
      }
    }
  ]
}'
```

ノードグループには、ノードグループに含まれるすべてのノードに Kubernetes ラベル `for-use-with-emr-containers-managed-endpoint-ng=NodeGroupName` がアタッチされている必要があります。このタグを持つノードグループのすべてのノードをリストするには、次のコマンドを使用します。

```
kubectl get nodes --show-labels | grep for-use-with-emr-containers-managed-endpoint-ng=NodeGroupName
```

上記のコマンドの出力でマネージドノードグループの一部であるノードが返されない場合は、`for-use-with-emr-containers-managed-endpoint-ng=NodeGroupName` Kubernetes ラベルがアタッチされたノードがノードグループにありません。この場合、以下の手順に従って、そのラベルをノードグループ内のノードにアタッチします。

1. 次のコマンドを使用して、マネージドノードグループ *NodeGroupName* のすべてのノードに `for-use-with-emr-containers-managed-endpoint-ng=NodeGroupName` Kubernetes ラベルを追加します。


```
kubectl label nodes --selector eks:nodegroup-name=NodeGroupName for-use-with-emr-containers-managed-endpoint-ng=NodeGroupName
```

2. 次のコマンドを使用して、ノードが正しくラベル付けされていることを確認します。

```
kubectl get nodes --show-labels | grep for-use-with-emr-containers-managed-endpoint-ng=NodeGroupName
```

マネージドノードグループは Amazon EKS クラスターのセキュリティグループに関連付ける必要があります。通常、eksctl を使用してクラスターとマネージドノードグループを作成した場合にこれが当てはまります。次の手順を使用して、AWS コンソールでこれを確認できます。

1. Amazon EKS コンソールでクラスターに移動します。
2. クラスターの [ネットワークング] タブに移動し、クラスターセキュリティグループを書き留めます。
3. クラスターの [コンピューティング] タブに移動し、マネージドノードグループ名をクリックします。
4. マネージドノードグループの [詳細] タブで、前にメモしたクラスターセキュリティグループが [セキュリティグループ] に表示されていることを確認します。

マネージドノードグループが Amazon EKS クラスターセキュリティグループにアタッチされていない場合は、for-use-with-emr-containers-managed-endpoint-sg=*ClusterName/NodeGroupName* タグをノードグループのセキュリティグループにアタッチする必要があります。このタグをアタッチするには、次の手順を使用します。

1. Amazon EC2 コンソールに移動し、左側のナビゲーションペインで [セキュリティグループ] をクリックします。
2. チェックボックスをクリックして、マネージドノードグループのセキュリティグループを選択します。
3. [タグ] タブの [タグの管理] ボタンを使用してタグ for-use-with-emr-containers-managed-endpoint-sg=*ClusterName/NodeGroupName* を追加します。

セルフマネージドノードグループに JEG ポッドを関連付ける

次の設定プロパティでは、JEG ポッドがデプロイされる Amazon EKS クラスター上のセルフマネージドノードグループまたはアンマネージドノードグループの名前を指定できます。

```
//payload
--configuration-overrides '{
  "applicationConfiguration": [
    {
      "classification": "endpoint-configuration",
      "properties": {
        "self-managed-nodegroup-name": NodeGroupName
      }
    }
  ]
}'
```

ノードグループには、ノードグループに含まれるすべてのノードに `for-use-with-emr-containers-managed-endpoint-ng=NodeGroupName` Kubernetes ラベルがアタッチされている必要があります。このタグを持つノードグループのすべてのノードをリストするには、次のコマンドを使用します。

```
kubectl get nodes --show-labels | grep for-use-with-emr-containers-managed-endpoint-ng=NodeGroupName
```

上記のコマンドの出力でセルフマネージドノードグループの一部であるノードが返されない場合は、`for-use-with-emr-containers-managed-endpoint-ng=NodeGroupName` Kubernetes ラベルがアタッチされたノードがノードグループにありません。この場合、以下の手順に従って、そのラベルをノードグループ内のノードにアタッチします。

1. `eksctl` を使用してセルフマネージドノードグループを作成した場合は、以下のコマンドを使用して、セルフマネージドノードグループ *NodeGroupName* のすべてのノードに `for-use-with-emr-containers-managed-endpoint-ng=NodeGroupName` Kubernetes ラベルを一度に追加します。

```
kubectl label nodes --selector alpha.eksctl.io/nodegroup-name=NodeGroupName for-use-with-emr-containers-managed-endpoint-ng=NodeGroupName
```

セルフマネージドノードグループの作成に `eksctl` を使用しなかった場合は、上記のコマンドのセレクターを、ノードグループのすべてのノードにアタッチされている別の Kubernetes ラベルに置き換える必要があります。

2. 次のコマンドを使用して、ノードが正しくラベル付けされていることを確認します。

```
kubectl get nodes --show-labels | grep for-use-with-emr-containers-managed-endpoint-  
ng=NodeGroupName
```

セルフマネージドノードグループのセキュリティグループには `for-use-with-emr-containers-managed-endpoint-sg=ClusterName/NodeGroupName` タグがアタッチされている必要があります。次の手順に従って、AWS Management Consoleからセキュリティグループにタグをアタッチします。

1. Amazon EC2 コンソールに移動します。左側のナビゲーションペインで [セキュリティグループ] を選択します。
2. セルフマネージドノードグループのセキュリティグループの横にあるチェックボックスをオンにします。
3. [タグ] タブの [タグの管理] ボタンを使用してタグ `for-use-with-emr-containers-managed-endpoint-sg=ClusterName/NodeGroupName` を追加します。 *ClusterName* と *NodeGroupName* を適切な値に置き換えます。

オンデマンドインスタンスがあるマネージドノードグループに JEG ポッドを関連付ける

Kubernetes ラベルセレクターと呼ばれる追加のラベルを定義して、特定のノードまたはノードグループでインタラクティブエンドポイントを実行するための追加の制約や制限を指定することもできます。次の例は、JEG ポッドにオンデマンド Amazon EC2 インスタンスを使用する方法を示しています。

```
--configuration-overrides '{  
  "applicationConfiguration": [  
    {  
      "classification": "endpoint-configuration",  
      "properties": {  
        "managed-nodegroup-name": NodeGroupName,  
        "node-labels": "eks.amazonaws.com/capacityType:ON_DEMAND"      }  
    }  
  ]  
}
```

```

    }
  }
]
}'

```

Note

node-labels プロパティは、managed-nodegroup-name または self-managed-nodegroup-name プロパティでのみ使用できます。

Jupyter エンタープライズゲートウェイ (JEG) 設定オプション

EKS での Amazon EMR は Jupyter エンタープライズゲートウェイ (JEG) を使用してインタラクティブエンドポイントを有効にします。エンドポイントを作成するときに、許可リストに登録されている JEG 設定に次の値を設定できます。

- **RemoteMappingKernelManager.cull_idle_timeout** — 秒単位 (整数) のタイムアウト。この時間が過ぎると、カーネルはアイドル状態になり、カリングできる状態になります。0 以下の値はカリングを無効にします。タイムアウトが短いと、ネットワーク接続が不十分なユーザーのカーネルがカリングされる可能性があります。
- **RemoteMappingKernelManager.cull_interval** — カリングタイムアウト値を超えるアイドル状態のカーネルをチェックする秒単位の間隔 (整数)。

PySpark セッションパラメータの変更

EKS での Amazon EMR リリース 6.9.0 以降、Amazon EMR Studio では EMR ノートブックセルで `%configure` マジックコマンドを実行することで、PySpark セッションに関連付けられた Spark 設定を調整できるようになりました。

次の例は、Spark ドライバーとエグゼキューターのメモリ、コア、その他のプロパティを変更するために使用できるサンプルペイロードを示しています。conf 設定では、[Apache Spark の設定ドキュメント](#)で説明されている任意の Spark 設定を構成できます。

```

%%configure -f
{
  "driverMemory": "16G",
  "driverCores" 4,

```

```
"executorMemory" : "32G"
"executorCores": 2,
"conf": {
  "spark.dynamicAllocation.maxExecutors" : 10,
  "spark.dynamicAllocation.minExecutors": 1
}
}
```

次の例は、ファイル、pyFiles、および jar 依存関係を Spark ランタイムに追加するために使用できるサンプルペイロードを示しています。

```
%%configure -f
{
  "files": "s3://test-bucket-emr-eks/sample_file.txt",
  "pyFiles": : "path-to-python-files",
  "jars" : "path-to-jars"
}
```

インタラクティブエンドポイントを含むカスタムカーネルイメージ

Amazon EMR Studio からインタラクティブワークロードを実行するときにはアプリケーションに適切な依存関係があることを確認するには、インタラクティブエンドポイントの Docker イメージをカスタマイズし、カスタマイズされたベースカーネルイメージを実行します。インタラクティブエンドポイントを作成してカスタム Docker イメージに接続するには、以下の手順を実行します。

Note

上書きできるのはベースイメージだけです。新しいカーネルイメージタイプを追加することはできません。

1. カスタマイズした Docker イメージを作成して公開します。ベースイメージには、Spark ランタイムと、Spark ランタイムで実行されるノートブックのカーネルが含まれています。イメージを作成するには、[Docker イメージをカスタマイズする方法](#) のステップ 1~4 に従います。ステップ 1 では、Docker ファイル内のベースイメージ URI で、notebook-spark を spark の代わりに使用する必要があります。

```
ECR-registry-account.dkr.ecr.Region.amazonaws.com/notebook-spark/container-image-tag
```

AWS リージョンとコンテナイメージタグの選択については、「[ベースイメージ URI を選択する方法](#)」を参照してください。

2. カスタムイメージで使用できるインタラクティブエンドポイントを作成します。
 - a. 次の内容を含む JSON ファイル `custom-image-managed-endpoint.json` を作成します。この例では、Amazon EMR リリース 6.9.0 を使用します。

Example

```
{
  "name": "endpoint-name",
  "virtualClusterId": "virtual-cluster-id",
  "type": "JUPYTER_ENTERPRISE_GATEWAY",
  "releaseLabel": "emr-6.9.0-latest",
  "executionRoleArn": "execution-role-arn",
  "configurationOverrides": {
    "applicationConfiguration": [
      {
        "classification": "jupyter-kernel-overrides",
        "configurations": [
          {
            "classification": "python3",
            "properties": {
              "container-image": "123456789012.dkr.ecr.us-west-2.amazonaws.com/custom-notebook-python:latest"
            }
          },
          {
            "classification": "spark-python-kubernetes",
            "properties": {
              "container-image": "123456789012.dkr.ecr.us-west-2.amazonaws.com/custom-notebook-spark:latest"
            }
          }
        ]
      }
    ]
  }
}
```

- b. 次の例で示すように、JSON ファイルで指定された設定を使用してインタラクティブエンドポイントを作成します。詳細については、「[create-managed-endpoint コマンドでインタラクティブエンドポイントを作成する](#)」を参照してください。

```
aws emr-containers create-managed-endpoint --cli-input-json custom-image-managed-endpoint.json
```

3. EMR Studio 経由でインタラクティブエンドポイントに接続します。詳細と手順については、AWS Workshop Studio ドキュメントの「EKS での Amazon EMR」セクションにある「[Connecting from Studio](#)」を参照してください。

インタラクティブエンドポイントのモニタリング

EKS での Amazon EMR 6.10 以降では、インタラクティブエンドポイントは、カーネルのライフサイクルオペレーションのモニタリングとトラブルシューティングのための Amazon CloudWatch メトリクスを生成します。メトリクスは、EMR Studio やセルフホストの Jupyter Notebook などのインタラクティブクライアントによってトリガーされます。インタラクティブエンドポイントがサポートする各操作には、メトリクスが関連付けられています。以下の表に示すように、操作は各メトリクスのディメンションとしてモデル化されます。インタラクティブエンドポイントによって生成されたメトリクスは、アカウントのカスタム名前空間 EMRContainers に表示されます。

メトリクス	説明	単位
RequestCount	インタラクティブエンドポイントによって処理されたオペレーションのリクエストの累積数。	Count (カウント)
RequestLatency	リクエストがインタラクティブエンドポイントに到着し、インタラクティブエンドポイントからレスポンスが送信されるまでの時間。	ミリ秒
4XXError	操作のリクエストが処理中に 4xx エラーになった場合に生成されます。	Count (カウント)

メトリクス	説明	単位
5XXError	操作のリクエストが 5Xxx サーバー側エラーになった場合に生成されます。	Count (カウント)
KernelLaunchSuccess	CreateKernel 操作にのみ適用されます。このリクエストを含む、このリクエストまでに成功したカーネル起動の累積数を示します。	Count (カウント)
KernelLaunchFailure	CreateKernel 操作にのみ適用されます。このリクエストを含む、このリクエストまでに失敗したカーネル起動の累積数を示します。	Count (カウント)

各インタラクティブエンドポイントメトリクスには、次のディメンションが関連付けられています。

- **ManagedEndpointId**— インタラクティブエンドポイントの識別子
- **OperationName**— インタラクティブクライアントによってトリガーされる操作

OperationName ディメンションに指定できる値を次の表に示します。

operationName	操作の説明
CreateKernel	インタラクティブエンドポイントにカーネルの起動をリクエストします。
ListKernels	インタラクティブエンドポイントに、同じセッショントークンを使用して以前に起動されたカーネルを一覧表示するようにリクエストします。

operationName	操作の説明
GetKernel	インタラクティブエンドポイントに、以前に起動された特定のカーネルの詳細を取得するようにリクエストします。
ConnectKernel	インタラクティブエンドポイントに、ノートブッククライアントとカーネル間の接続を確立するようにリクエストします。
ConfigureKernel	pyspark カーネルで <code>%%configure magic request</code> を公開します。
ListKernelSpecs	インタラクティブエンドポイントに、利用可能なカーネル仕様を一覧表示するようリクエストします。
GetKernelSpec	インタラクティブエンドポイントに、以前に起動したカーネルのカーネル仕様を取得するようリクエストします。
GetKernelSpecResource	インタラクティブエンドポイントに、以前に起動されたカーネル仕様に関連する特定のリソースを取得するようリクエストします。

例

特定の日にインタラクティブエンドポイントで起動されたカーネルの総数を確認するには

1. カスタム名前空間を選択します: `EMRContainers`
2. `ManagedEndpointId`、`OperationName - CreateKernel` を選択します。
3. 統計 SUM と期間 1 day を含む `RequestCount` メトリクスは、過去 24 時間以内に行われたすべてのカーネル起動リクエストを提供します。
4. 統計 SUM と期間 1 day を含む `KernelLaunchSuccess` メトリクスは、過去 24 時間以内に行われたすべての成功したカーネル起動リクエストを提供します。

特定の日にインタラクティブエンドポイントで発生したカーネル障害の数を確認するには

1. カスタム名前空間を選択します: EMRContainers
2. ManagedEndpointId、OperationName - CreateKernel を選択します。
3. 統計 SUM と期間 1 day を含む KernelLaunchFailure メトリクスは、過去 24 時間以内に行われたすべての失敗したカーネル起動リクエストを提供します。また、4XXError と 5XXError メトリクスを選択して、どのようなカーネル起動エラーが発生したかを確認することもできます。

セルフホスト型 Jupyter Notebook を使用する

Jupyter または JupyterLab Notebook は、Amazon EC2 インスタンスまたは独自の Amazon EKS クラスターでセルフホスト型 Jupyter Notebook としてホストおよび管理できます。その後、セルフホスト型 Jupyter Notebook でインタラクティブワークロードを実行できます。以下のセクションでは、セルフホスト型 Jupyter Notebook を Amazon EKS クラスターにセットアップしてデプロイするプロセスについて説明します。

EKS クラスターでのセルフホスト型 Jupyter Notebook の作成

- [セキュリティグループの作成](#)
- [EKS での Amazon EMR インタラクティブエンドポイントを作成する](#)
- [インタラクティブエンドポイントのゲートウェイサーバー URL を取得する](#)
- [認証トークンを取得してインタラクティブエンドポイントに接続します。](#)
- [例: JupyterLab ノートブックをデプロイする](#)
- [セルフホスト型 Jupyter Notebook を削除する](#)

セキュリティグループの作成

インタラクティブエンドポイントを作成し、セルフホスト型 Jupyter または JupyterLab ノートブックを実行する前に、ノートブックとインタラクティブエンドポイント間のトラフィックを制御するセキュリティグループを作成する必要があります。Amazon EC2 コンソールまたは Amazon EC2 SDK を使用してセキュリティグループを作成するには、「Amazon EC2 User Guide for Linux Instances」の「[Create a security group](#)」のステップを参照してください。ノートブックサーバーをデプロイする VPC にセキュリティグループを作成する必要があります。

このガイドの例に従うには、Amazon EKS クラスターと同じ VPC を使用してください。Amazon EKS クラスターの VPC とは異なる VPC でノートブックをホストする場合、これらの 2 つの VPC 間にピアリング接続を作成する必要がある場合があります。2 つの VPC 間にピアリング接続を作成する手順については、「Amazon VPC Getting Started Guide」の「[Create a VPC peering connection](#)」を参照してください。

次のステップで [EKS での Amazon EMR インタラクティブエンドポイントを作成する](#) には、セキュリティグループの ID が必要です。

EKS での Amazon EMR インタラクティブエンドポイントを作成する

ノートブックのセキュリティグループを作成したら、「[仮想クラスターのインタラクティブエンドポイントを作成する](#)」に記載されている手順に従ってインタラクティブエンドポイントを作成します。「[セキュリティグループの作成](#)」でノートブック用に作成したセキュリティグループ ID を指定する必要があります。

次の構成オーバーライド設定で、*your-notebook-security-group-id* の代わりにセキュリティ ID を挿入します。

```
--configuration-overrides '{
  "applicationConfiguration": [
    {
      "classification": "endpoint-configuration",
      "properties": {
        "notebook-security-group-id": "your-notebook-security-group-id"
      }
    }
  ],
  "monitoringConfiguration": {
    ...'
```

インタラクティブエンドポイントのゲートウェイサーバー URL を取得する

インタラクティブエンドポイントを作成したら、AWS CLI で `describe-managed-endpoint` コマンドを使用してゲートウェイサーバーの URL を取得します。この URL は、ノートブックをエンドポイントに接続するために必要です。ゲートウェイサーバー URL はプライベートエンドポイントです。

```
aws emr-containers describe-managed-endpoint \
--region region \
--virtual-cluster-id virtualClusterId \
```

```
--id endpointId
```

最初、エンドポイントの状態は CREATING です。数分後、ACTIVE 状態に遷移します。エンドポイントが ACTIVE となっていれば、使用準備が完了しています。

serverUrl コマンドがアクティブなエンドポイントから返す aws emr-containers describe-managed-endpoint 属性を書き留めておきます。[セルフホスト型 Jupyter または JupyterLab ノートブックをデプロイするとき](#)に、ノートブックをエンドポイントに接続するには、この URL が必要です。

認証トークンを取得してインタラクティブエンドポイントに接続します。

Jupyter または JupyterLab ノートブックからインタラクティブエンドポイントに接続するには、GetManagedEndpointSessionCredentials API を使用してセッショントークンを生成する必要があります。このトークンは、インタラクティブエンドポイントサーバーに接続するための認証証明として機能します。

次のコマンドについて、出力例を示してさらに詳しく説明します。

```
aws emr-containers get-managed-endpoint-session-credentials \  
--endpoint-identifier endpointArn \  
--virtual-cluster-identifier virtualClusterArn \  
--execution-role-arn executionRoleArn \  
--credential-type "TOKEN" \  
--duration-in-seconds durationInSeconds \  
--region region
```

endpointArn

エンドポイントの ARN。ARN は describe-managed-endpoint 呼び出しの結果で確認できます。

virtualClusterArn

仮想クラスターの ARN。

executionRoleArn

実行ロールの ARN。

durationInSeconds

トークンの有効期間 (秒単位)。デフォルトの有効期間は 15 分 (900) で、最長は 12 時間 (43200) です。

region

エンドポイントと同じリージョン。

出力は次の例のようになります。[セルフホスト型 Jupyter または JupyterLab ノートブックをデプロイする](#)ときに使用する `session-token` 値を書き留めておいてください。

```
{
  "id": "credentialsId",
  "credentials": {
    "token": "session-token"
  },
  "expiresAt": "2022-07-05T17:49:38Z"
}
```

例: JupyterLab ノートブックをデプロイする

上記のステップを完了したら、このサンプル手順を試して、インタラクティブエンドポイントを使用して JupyterLab ノートブックを Amazon EKS クラスターにデプロイできます。

1. ノートブックサーバーを実行する名前空間を作成します。
2. `notebook.yaml` というファイルを次の内容でローカルに作成します。ファイルの内容は次のとおりです。

```
apiVersion: v1
kind: Pod
metadata:
  name: jupyter-notebook
  namespace: namespace
spec:
  containers:
  - name: minimal-notebook
    image: jupyter/all-spark-notebook:lab-3.1.4 # open source image
    ports:
    - containerPort: 8888
    command: ["start-notebook.sh"]
    args: ["--LabApp.token='']"]
    env:
    - name: JUPYTER_ENABLE_LAB
      value: "yes"
    - name: KERNEL_LAUNCH_TIMEOUT
```

```
value: "400"  
- name: JUPYTER_GATEWAY_URL  
  value: "serverUrl"  
- name: JUPYTER_GATEWAY_VALIDATE_CERT  
  value: "false"  
- name: JUPYTER_GATEWAY_AUTH_TOKEN  
  value: "session-token"
```

Jupyter Notebook を Fargate 専用クラスターにデプロイする場合は、次の例のように Jupyter ポッドに `role` ラベルを付けます。

```
...  
metadata:  
  name: jupyter-notebook  
  namespace: default  
  labels:  
    role: example-role-name-label  
spec:  
  ...
```

namespace

ノートブックをデプロイする Kubernetes 名前空間。

serverUrl

[インタラクティブエンドポイントのゲートウェイサーバー URL を取得する](#) で `describe-managed-endpoint` コマンドが返した `serverUrl` 属性。

session-token

[認証トークンを取得してインタラクティブエンドポイントに接続します。](#) で `get-managed-endpoint-session-credentials` コマンドが返した `session-token` 属性。

KERNEL_LAUNCH_TIMEOUT

インタラクティブエンドポイントが、カーネルが `RUNNING` 状態になるのを待つ時間 (秒単位)。カーネル起動タイムアウトを適切な値 (最大 400 秒) に設定して、カーネルの起動が完了するまで十分な時間を確保します。

KERNEL_EXTRA_SPARK_OPTS

オプションで、Spark カーネルに追加の Spark 構成を渡すことができます。以下の例のように、この環境変数に Spark 設定プロパティとして値を設定します。

```
- name: KERNEL_EXTRA_SPARK_OPTS
  value: "--conf spark.driver.cores=2
        --conf spark.driver.memory=2G
        --conf spark.executor.instances=2
        --conf spark.executor.cores=2
        --conf spark.executor.memory=2G
        --conf spark.dynamicAllocation.enabled=true
        --conf spark.dynamicAllocation.shuffleTracking.enabled=true
        --conf spark.dynamicAllocation.minExecutors=1
        --conf spark.dynamicAllocation.maxExecutors=5
        --conf spark.dynamicAllocation.initialExecutors=1
        "
```

3. Amazon EKS クラスターにポッドの仕様をデプロイします。

```
kubectl apply -f notebook.yaml -n namespace
```

これにより、EKS での Amazon EMR インタラクティブエンドポイントに接続された最小限の JupyterLab ノートブックが起動します。ポッドが RUNNING になるまでお待ちください。次のコマンドを使用して、ポッドのステータスを確認します。

```
kubectl get pod jupyter-notebook -n namespace
```

ポッドの準備が整うと、get pod コマンドは次のような出力を返します。

NAME	READY	STATUS	RESTARTS	AGE
jupyter-notebook	1/1	Running	0	46s

4. ノートブックセキュリティグループを、ノートブックがスケジュールされているノードにアタッチします。
 - a. まず、jupyter-notebook ポッドがスケジュールされているノードを describe pod コマンドで特定します。

```
kubectl describe pod jupyter-notebook -n namespace
```

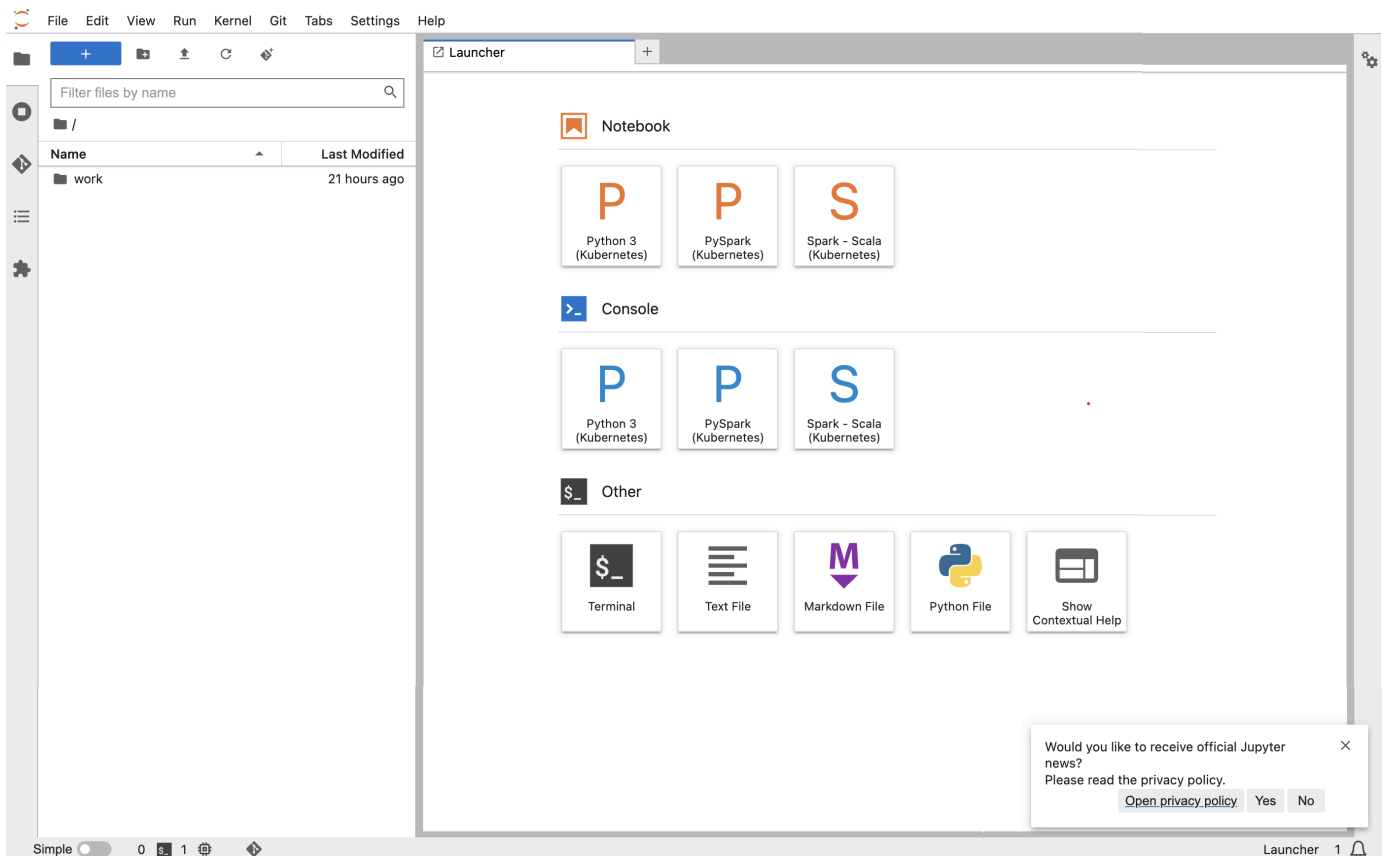
- b. <https://console.aws.amazon.com/eks/home#/clusters> で Amazon EKS コンソール を開きます。
- c. Amazon EKS クラスターの [コンピューティング] タブに移動し、describe pod コマンドで特定したノードを選択します。ノードのインスタンス ID を選択します。
- d. [アクション] メニューから [セキュリティ] > [セキュリティグループを変更] を選択し、[セキュリティグループの作成](#) で作成したセキュリティグループをアタッチします。
- e. AWS Fargate で Jupyter Notebook ポッドをデプロイする場合は、ロールラベルを付けた Jupyter Notebook ポッドに適用する [SecurityGroupPolicy](#) を作成します。

```
cat >my-security-group-policy.yaml <<EOF
apiVersion: vpcresources.k8s.aws/v1beta1
kind: SecurityGroupPolicy
metadata:
  name: example-security-group-policy-name
  namespace: default
spec:
  podSelector:
    matchLabels:
      role: example-role-name-label
  securityGroups:
    groupIds:
      - your-notebook-security-group-id
EOF
```

5. 次に、ポート転送して JupyterLab インターフェイスにローカルにアクセスできるようにします。

```
kubectl port-forward jupyter-notebook 8888:8888 -n namespace
```

それが実行したら、ローカルブラウザに移動し、localhost:8888 にアクセスして JupyterLab インターフェイスを確認してください。



6. JupyterLab から、新しい Scala ノートブックを作成します。Pi の値を概算するために実行できるサンプルコードスニペットを次に示します。

```
import scala.math.random
import org.apache.spark.sql.SparkSession

/** Computes an approximation to pi */
val session = SparkSession
  .builder
  .appName("Spark Pi")
  .getOrCreate()

val slices = 2
// avoid overflow
val n = math.min(100000L * slices, Int.MaxValue).toInt

val count = session.sparkContext
  .parallelize(1 until n, slices)
  .map { i =>
    val x = random * 2 - 1
    val y = random * 2 - 1
```

```

    if (x*x + y*y <= 1) 1 else 0
  }.reduce(_ + _)

println(s"Pi is roughly ${4.0 * count / (n - 1)}")
session.stop()

```

```

File Edit View Run Kernel Git Tabs Settings Help
+
Filter files by name
Name Last Modified
work 21 hours ago
Untitled.ipynb 4 minutes ago
Untitled.ipynb
[3]: import scala.math.random
import org.apache.spark.sql.SparkSession

/** Computes an approximation to pi */
val session = SparkSession
  .builder
  .appName("Spark Pi")
  .getOrCreate()

val slices = 2
// avoid overflow
val n = math.min(100000L * slices, Int.MaxValue).toInt

val count = session.sparkContext
  .parallelize(1 until n, slices)
  .map { i =>
    val x = random * 2 - 1
    val y = random * 2 - 1
    if (x*x + y*y <= 1) 1 else 0
  }.reduce(_ + _)

println(s"Pi is roughly ${4.0 * count / (n - 1)}")
session.stop()

Pi is roughly 3.140955704778524
session = org.apache.spark.sql.SparkSession@722cd3ee
slices = 2
n = 200000
count = 157047

[3]: 157047
[ ]:

```

セルフホスト型 Jupyter Notebook を削除する

セルフホスト型ノートブックを削除する準備ができたなら、インタラクティブエンドポイントとセキュリティグループも削除できます。次の順番でアクションを実行します。

1. 次のコマンドを使用して、jupyter-notebook ポッドを削除します。

```
kubectl delete pod jupyter-notebook -n namespace
```

2. 次に、delete-managed-endpoint コマンドを使用してインタラクティブエンドポイントを削除します。インタラクティブエンドポイントを削除する手順については、「[インタラクティブエンドポイントを削除する](#)」を参照してください。最初、エンドポイントは TERMINATING 状態になります。すべてのリソースがクリーンアップされると、TERMINATED 状態に移行します。

3. [セキュリティグループの作成](#) で作成したノートブックセキュリティグループを他の Jupyter Notebook デプロイに使用する予定がない場合は、削除できます。詳細については、「Amazon EC2 User Guide」の「[Delete a security group](#)」を参照してください。

インタラクティブエンドポイントでのその他のオペレーション

このトピックでは、[create-managed-endpoint](#) 以外のインタラクティブエンドポイントでサポートされるオペレーションについて説明します。

インタラクティブエンドポイントの詳細を取得する

インタラクティブエンドポイントを作成したら、`describe-managed-endpoint` AWS CLI コマンドを使用してその詳細を取得できます。*managed-endpoint-id*、*virtual-cluster-id*、および *region* に独自の値を挿入してください。

```
aws emr-containers describe-managed-endpoint --id managed-endpoint-id \
--virtual-cluster-id virtual-cluster-id --region region
```

出力は、ARN、ID、名前などの指定されたエンドポイントを含む次のようになります。

```
{
  "id": "as3ys2xxxxxxxx",
  "name": "endpoint-name",
  "arn": "arn:aws:emr-containers:us-east-1:1828xxxxxxxx:/virtualclusters/
lbhl6kwwyoxxxxxxxxxxxxxxxx/Endpoints/as3ysxxxxxxxx",
  "virtualClusterId": "lbhl6kwwyoxxxxxxxxxxxxxxxx",
  "type": "JUPYTER_ENTERPRISE_GATEWAY",
  "state": "ACTIVE",
  "releaseLabel": "emr-6.9.0-latest",
  "executionRoleArn": "arn:aws:iam::1828xxxxxxxx:role/RoleName",
  "certificateAuthority": {
    "certificateArn": "arn:aws:acm:us-east-1:1828xxxxxxxx:certificate/zzzzzzzz-
e59b-4ed0-aaaa-bbbbbbbbbbbb",
    "certificateData": "certificate-data"
  },
  "configurationOverrides": {
    "applicationConfiguration": [
      {
        "classification": "spark-defaults",
        "properties": {
          "spark.driver.memory": "8G"
        }
      }
    ]
  }
}
```

```
    }
  },
],
"monitoringConfiguration": {
  "persistentAppUI": "ENABLED",
  "cloudWatchMonitoringConfiguration": {
    "logGroupName": "log-group-name",
    "logStreamNamePrefix": "log-stream-name-prefix"
  },
  "s3MonitoringConfiguration": {
    "logUri": "s3-bucket-name"
  }
},
},
"serverUrl": "https://internal-k8s-namespace-ingressa-aaaaaaaaa-
zzzzzzzzzz.us-east-1.elb.amazonaws.com:18888 (https://internal-k8s-nspluto-
ingressa-51e860abbd-1620715833.us-east-1.elb.amazonaws.com:18888/)",
"createdAt": "2022-09-19T12:37:49+00:00",
"securityGroup": "sg-aaaaaaaaaaaaaa",
"subnetIds": [
  "subnet-111111111111",
  "subnet-222222222222",
  "subnet-333333333333"
],
"stateDetails": "Endpoint created successfully. It took 3 Minutes 15 Seconds",
"tags": {}
}
```

仮想クラスターに関連付けられたすべてのインタラクティブエンドポイントをリストする

`list-managed-endpoints` AWS CLI コマンドを使用して、指定した仮想クラスターに関連付けられているすべてのインタラクティブエンドポイントのリストを取得します。`virtual-cluster-id` は、仮想クラスターの ID に置き換えます。

```
aws emr-containers list-managed-endpoints --virtual-cluster-id virtual-cluster-id
```

次のような `list-managed-endpoint` コマンドの出力が表示されます。

```
{
  "endpoints": [{
    "id": "as3ys2xxxxxxx",
```

```
    "name": "endpoint-name",
    "arn": "arn:aws:emr-containers:us-east-1:1828xxxxxxx:/virtualclusters/
lbhl6kwwyoxxxxxxxxxxxxxxxxx/endpoints/as3ysxxxxxxxxx",
    "virtualClusterId": "lbhl6kwwyoxxxxxxxxxxxxxxxxx",
    "type": "JUPYTER_ENTERPRISE_GATEWAY",
    "state": "ACTIVE",
    "releaseLabel": "emr-6.9.0-latest",
    "executionRoleArn": "arn:aws:iam::1828xxxxxxx:role/RoleName",
    "certificateAuthority": {
      "certificateArn": "arn:aws:acm:us-east-1:1828xxxxxxx:certificate/zzzzzzzz-
e59b-4ed0-aaaa-bbbbbbbbbbbb",
      "certificateData": "certificate-data"
    },
    "configurationOverrides": {
      "applicationConfiguration": [{
        "classification": "spark-defaults",
        "properties": {
          "spark.driver.memory": "8G"
        }
      }],
      "monitoringConfiguration": {
        "persistentAppUI": "ENABLED",
        "cloudWatchMonitoringConfiguration": {
          "logGroupName": "log-group-name",
          "logStreamNamePrefix": "log-stream-name-prefix"
        },
        "s3MonitoringConfiguration": {
          "logUri": "s3-bucket-name"
        }
      }
    },
    "serverUrl": "https://internal-k8s-namespace-ingressa-aaaaaaaaaa-
zzzzzzzzzz.us-east-1.elb.amazonaws.com:18888 (https://internal-k8s-nspluto-
ingressa-51e860abbd-1620715833.us-east-1.elb.amazonaws.com:18888/)",
    "createdAt": "2022-09-19T12:37:49+00:00",
    "securityGroup": "sg-aaaaaaaaaaaaaa",
    "subnetIds": [
      "subnet-1111111111",
      "subnet-2222222222",
      "subnet-3333333333"
    ],
    "stateDetails": "Endpoint created successfully. It took 3 Minutes 15 Seconds",
    "tags": {}
  ]
}]
```

```
}
```

インタラクティブエンドポイントを削除する

EKS での Amazon EMR 仮想クラスターに関連付けられているインタラクティブエンドポイントを削除するには、`delete-managed-endpoint` AWS CLI コマンドを使用します。インタラクティブエンドポイントを削除すると、EKS での Amazon EMR はそのエンドポイント用に作成されたデフォルトのセキュリティグループを削除します。

コマンドに次のパラメータの値を指定します。

- `--id`: 削除するインタラクティブエンドポイントの識別子。
- `--virtual-cluster-id` - 削除するインタラクティブエンドポイントに関連付けられている仮想クラスターの識別子。これは、インタラクティブエンドポイントの作成時に指定された仮想クラスター ID と同じです。

```
aws emr-containers delete-managed-endpoint --id managed-endpoint-id --virtual-cluster-id virtual-cluster-id
```

このコマンドにより、インタラクティブエンドポイントが削除されたことを確認するために、次のような出力が返されます。

```
{
  "id": "8gai4l4exxxxx",
  "virtualClusterId": "0b0qvauoy3ch1nqodxxxxxxxx"
}
```

ジョブのモニタリング

トピック

- [Amazon CloudWatch Events でジョブをモニタリングする](#)
- [CloudWatch Events で Amazon EMR on EKS を自動化する](#)
- [例: Lambda を呼び出すルールを設定する](#)
- [Amazon CloudWatch Events を使用して再試行ポリシーでジョブのドライバーポッドを監視する](#)

Amazon CloudWatch Events でジョブをモニタリングする

Amazon EMR on EKS では、ジョブ実行の状態が変化したときにイベントが出力されます。各イベントが提供する情報には、そのイベントが発生した日時のほか、仮想クラスターの ID や影響を受けたジョブ実行の ID などの詳細が含まれています。

イベントを使用して、仮想クラスターで実行しているジョブのアクティビティと正常性を追跡できます。また、Amazon CloudWatch Events を使用すると、指定したパターンと一致するイベントがジョブ実行によって生成された場合に実行するアクションを定義できます。イベントは、ジョブ実行のライフサイクル中に特定の発生をモニタリングするのに便利です。例えば、ジョブ実行の状態が submitted から running に変化するタイミングをモニタリングできます。CloudWatch Events の詳細については、「[Amazon CloudWatch Events ユーザーガイド](#)」を参照してください。

次の表は、Amazon EMR on EKS のイベント、イベントが示す状態や状態の変化、イベントの重要度、イベントメッセージを示しています。各イベントは、イベントのストリームに自動的に送信される JSON オブジェクトとして表されます。JSON オブジェクトにはイベントの詳細が含まれます。JSON オブジェクトは、CloudWatch Events を使用してイベント処理のルールを設定する場合に特に重要です。ルールでは JSON オブジェクトでパターンのマッチングが行われるからです。詳細については、「[Amazon CloudWatch Events User Guide](#)」の「[Events and Event Patterns](#)」および「Amazon EMR on EKS Events」を参照してください。

ジョブ実行の状態変更イベント

状態	緊急度	Message
SUBMITTED	INFO	<i>Time</i> UTC に、ジョブ実行 <i>JobRunId</i> (<i>JobRunName</i>) が仮想クラスター

状態	緊急度	Message
		<i>VirtualClusterId</i> に正常に送信されました。
RUNNING	INFO	仮想クラスター <i>VirtualClusterId</i> 内のジョブ実行 <i>JobRunId (JobRunName)</i> が、 <i>Time</i> に実行を開始しました。
COMPLETED	INFO	仮想クラスター <i>VirtualClusterId</i> 内のジョブ実行 <i>jobRunId (JobRunName)</i> が <i>Time</i> に完了しました。ジョブ実行は <i>Time</i> に実行を開始し、完了するまでに <i>Num</i> 分かかりました。
CANCELLED	WARN	仮想クラスター <i>VirtualClusterId</i> 内のジョブ実行 <i>JobRunId (JobRunName)</i> のキャンセルリクエストが <i>Time</i> に成功し、ジョブ実行がキャンセルされました。
FAILED	ERROR	仮想クラスター <i>VirtualClusterId</i> 内のジョブ実行 <i>JobRunId (JobRunName)</i> が <i>Time</i> に失敗しました。

CloudWatch Events で Amazon EMR on EKS を自動化する

Amazon CloudWatch Events を使用して AWS サービスを自動化すると、アプリケーションの可用性の問題やリソースの変更などのシステムイベントに対応できます。AWS のサービスからのイベントは、ほぼリアルタイムに CloudWatch Events に送信されます。どのイベントに興味があるのか、イベントがルールに一致した場合にどのように自動的に実行するアクションをとるのか簡単なルールを指定して書き込みすることができます。自動的にトリガーできるオペレーションには、以下が含まれます。

- AWS Lambda 関数の呼び出し
- Amazon EC2 Run Command の呼び出し
- Amazon Kinesis Data Streams へのイベントの中継
- AWS Step Functions ステートマシンのアクティブ化

- Amazon Simple Notification Service (SNS) トピックまたは Amazon Simple Queue Service (SQS) キューの通知

Amazon EMR on EKS で CloudWatch Events を使用する例は次のとおりです。

- ジョブ実行が成功したときの Lambda 関数のアクティブ化
- ジョブ実行が失敗したときの Amazon SNS トピックの通知

"detail-type:" "EMR Job Run State Change" の CloudWatch Events は、SUBMITTED、RUNNING、CANCELLED、FAILED、COMPLETED の状態が変化したときに Amazon EMR on EKS によって生成されます。

例: Lambda を呼び出すルールを設定する

次の手順に従って、"EMR Job Run State Change" イベントの発生時に Lambda を呼び出す CloudWatch Events ルールを設定します。

```
aws events put-rule \  
--name cwe-test \  
--event-pattern '{"detail-type": ["EMR Job Run State Change"]}'
```

次のように、所有する Lambda 関数を新しいターゲットとして追加し、Lambda 関数を呼び出すためのアクセス許可を CloudWatch Events に付与します。**123456789012** は自分のアカウント ID に置き換えます。

```
aws events put-targets \  
--rule cwe-test \  
--targets Id=1,Arn=arn:aws:lambda:us-east-1:123456789012:function:MyFunction
```

```
aws lambda add-permission \  
--function-name MyFunction \  
--statement-id MyId \  
--action 'lambda:InvokeFunction' \  
--principal events.amazonaws.com
```

Note

通知イベントは順番が間違っていたり欠落していたりする可能性があるため、通知イベントの順序や有無に依存するプログラムは作成できません。イベントは、ベストエフォートベースで出力されます。

Amazon CloudWatch Events を使用して再試行ポリシーでジョブのドライバーポッドを監視する

CloudWatch イベントを使用すると、再試行ポリシーのあるジョブで作成されたドライバーポッドを監視できます。詳細については、このガイドの「[再試行ポリシーを使用してジョブをモニタリングする](#)」を参照してください。

仮想クラスターの管理

仮想クラスターとは、Amazon EMR が登録されている Kubernetes 名前空間です。仮想クラスターを作成、説明、一覧表示、および削除できます。システム内の追加のリソースは消費されません。1つの仮想クラスターは、1つの Kubernetes 名前空間にマップされます。この関係により、Kubernetes 名前空間をモデル化するのと同じ方法で仮想クラスターをモデル化して、要件を満たすことができます。[Kubernetes 概念概要](#) ドキュメントで、考えられるユースケースを参照してください。

Amazon EMR を Amazon EKS クラスターの Kubernetes 名前空間に登録するには、EKS クラスターの名前と、ワークロードを実行するためにセットアップされた名前空間が必要です。Amazon EMR に登録されたこれらのクラスターは、物理的なコンピューティングやストレージを管理するのではなく、ワークロードがスケジューリングされている Kubernetes 名前空間を指しているため、仮想クラスターと呼ばれます。

Note

仮想クラスターを作成する前に、まず「[Amazon EMR on EKS のセットアップ](#)」のステップ 1 ~ 8 を完了する必要があります。

トピック

- [仮想クラスターを作成する](#)
- [仮想クラスターを一覧表示する](#)
- [仮想クラスターを説明する](#)
- [仮想クラスターを削除する](#)
- [仮想クラスターの状態](#)

仮想クラスターを作成する

次のコマンドを実行して、Amazon EMR を EKS クラスター上の名前空間に登録し、仮想クラスターを作成します。*virtual_cluster_name* は、仮想クラスターに指定する名前に置き換えます。*eks_cluster_name* は、EKS クラスターの名前に置き換えます。*namespace_name* は、Amazon EMR を登録する名前空間に置き換えます。

```
aws emr-containers create-virtual-cluster \  
--name virtual_cluster_name \  
--container-provider '{  
  "id": "eks_cluster_name",  
  "type": "EKS",  
  "info": {  
    "eksInfo": {  
      "namespace": "namespace_name"  
    }  
  }  
'
```

または、次の例に示すように、仮想クラスターに必要なパラメータを含む JSON ファイルを作成することもできます。

```
{  
  "name": "virtual_cluster_name",  
  "containerProvider": {  
    "type": "EKS",  
    "id": "eks_cluster_name",  
    "info": {  
      "eksInfo": {  
        "namespace": "namespace_name"  
      }  
    }  
  }  
}
```

JSON ファイルへのパスを指定して、次の `create-virtual-cluster` コマンドを実行します。

```
aws emr-containers create-virtual-cluster \  
--cli-input-json file:///./create-virtual-cluster-request.json
```

Note

仮想クラスターが正常に作成されたことを確認するには、`list-virtual-clusters` コマンドを実行するか、Amazon EMR コンソールで [仮想クラスター] ページに移動して、仮想クラスターのステータスを確認します。

仮想クラスターを一覧表示する

次のコマンドを実行して、仮想クラスターのステータスを表示します。

```
aws emr-containers list-virtual-clusters
```

仮想クラスターを説明する

次のコマンドを実行して、名前空間、ステータス、登録日など、仮想クラスターの詳細を取得します。**123456** は、仮想クラスター ID に置き換えます。

```
aws emr-containers describe-virtual-cluster --id 123456
```

仮想クラスターを削除する

次のコマンドを実行して、仮想クラスターを削除します。**123456** は、仮想クラスター ID に置き換えます。

```
aws emr-containers delete-virtual-cluster --id 123456
```

仮想クラスターの状態

次の表には、仮想クラスターの 4 つの状態が示されています。

State	説明
RUNNING	仮想クラスターは RUNNING 状態です。
TERMINATING	仮想クラスターの要求された終了処理が進行中です。
TERMINATED	要求された終了処理が完了しています。
ARRESTED	要求された終了処理は、アクセス許可が不十分なため、失敗しました。

Amazon EMR on EKS のチュートリアル

このセクションでは、Amazon EMR on EKS アプリケーションで作業するときによく使用されるユースケースについて説明します。

トピック

- [Amazon EMR on EKS での Delta Lake の使用](#)
- [Amazon EMR on EKS での Apache Iceberg の使用](#)
- [Amazon EMR on EKS での RAPIDS Accelerator for Apache Spark の使用](#)
- [Amazon EMR on EKS での Amazon Redshift integration for Apache Spark の使用](#)
- [Amazon EMR on EKS で Apache Spark のカスタムスケジューラとして Volcano を使用する方法](#)
- [Amazon EMR on EKS で Apache Spark のカスタムスケジューラとして YuniKorn を使用する方法](#)

Amazon EMR on EKS での Delta Lake の使用

Amazon EMR on EKS アプリケーションで [Delta Lake](#) を使用するには

1. アプリケーション設定でジョブ実行を開始して Spark ジョブを送信するときに、Delta Lake JAR ファイルを含めます。

```
--job-driver '{"sparkSubmitJobDriver" : {  
  "sparkSubmitParameters" : "--jars local:///usr/share/aws/delta/lib/delta-  
core.jar,local:///usr/share/aws/delta/lib/delta-storage.jar,local:///usr/share/aws/  
delta/lib/delta-storage-s3-dynamodb.jar}}'
```

2. さらに別の Delta Lake 設定を含め、AWS Glue Data Catalog をメタストアとしてを使用します。

```
--configuration-overrides '{  
  "applicationConfiguration": [  
    {  
      "classification" : "spark-defaults",  
      "properties" : {  
        "spark.sql.extensions" : "io.delta.sql.DeltaSparkSessionExtension",  
  
        "spark.sql.catalog.spark_catalog":"org.apache.spark.sql.delta.catalog.DeltaCatalog",  
        "spark.hadoop.hive.metastore.client.factory.class":"com.amazonaws.glue.catalog.metastore.AW
```

```
    }  
  ]}]'
```

Amazon EMR on EKS での Apache Iceberg の使用

Amazon EMR on EKS アプリケーションで Apache Iceberg を使用するには

1. アプリケーション設定でジョブ実行を開始して Spark ジョブを送信するときに、Iceberg Spark ランタイム JAR ファイルを含めます。

```
--job-driver '{"sparkSubmitJobDriver" : {"sparkSubmitParameters" : "--jars  
local:///usr/share/aws/iceberg/lib/iceberg-spark3-runtime.jar"}]}'
```

2. さらに別の Iceberg 設定を含めます。

```
--configuration-overrides '{  
  "applicationConfiguration": [  
    "classification" : "spark-defaults",  
    "properties" : {  
      "spark.sql.catalog.dev.warehouse" : "s3://DOC-EXAMPLE-BUCKET/EXAMPLE-  
PREFIX/ ",  
      "spark.sql.extensions ":"  
org.apache.iceberg.spark.extensions.IcebergSparkSessionExtensions ",  
      "spark.sql.catalog.dev" : "org.apache.iceberg.spark.SparkCatalog",  
      "spark.sql.catalog.dev.catalog-impl" :  
"org.apache.iceberg.aws.glue.GlueCatalog",  
      "spark.sql.catalog.dev.io-impl": "org.apache.iceberg.aws.s3.S3FileIO"  
    }  
  ]  
}'
```

EMR の Apache Iceberg リリースバージョンの詳細については、「[Iceberg release history](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS での RAPIDS Accelerator for Apache Spark の使用

Amazon EMR on EKS では、Nvidia RAPIDS Accelerator for Apache Spark のジョブを実行できます。このチュートリアルでは、EC2 グラフィック処理ユニット (GPU) インスタンスタイプで RAPIDS を使用して Spark ジョブを実行する方法について説明します。このチュートリアルでは、次のバージョンを使用します。

- Amazon EMR on EKS リリースバージョン 6.9.0 以降
- Apache Spark 3.x

[Nvidia RAPIDS Accelerator for Apache Spark](#) プラグインを使用すると、Amazon EC2 GPU インスタンスタイプで Spark を高速化できます。これらのテクノロジーを併用すると、コードを変更しなくてもデータサイエンスパイプラインを高速化できます。これにより、データ処理とモデルトレーニングに必要な実行時間が短縮されます。短時間で多くのことができるようになるので、インフラストラクチャのコストを抑えることができます。

開始する前に、次のリソースが使用可能であることを確認してください。

- Amazon EMR on EKS 仮想クラスター
- GPU 対応のノードグループを備えた Amazon EKS クラスター

Amazon EKS 仮想クラスターは、Amazon EKS クラスター上の Kubernetes 名前空間への登録ハンドルであり、Amazon EMR on EKS によって管理されます。このハンドルにより、Amazon EMR は Kubernetes 名前空間をジョブの実行先として使用できます。仮想クラスターをセットアップする方法の詳細については、このガイドの「[Amazon EMR on EKS のセットアップ](#)」を参照してください。

ノードグループに GPU インスタンスを含めて、Amazon EKS 仮想クラスターを設定する必要があります。ノードには、Nvidia デバイスプラグインを設定する必要があります。詳細については、「[Managed node groups](#)」を参照してください。

GPU 対応のノードグループを追加するように Amazon EKS クラスターを設定するには、次の手順を実行します。

GPU 対応のノードグループを追加するには

1. 次の `create-nodegroup` コマンドで GPU 対応のノードグループを作成します。Amazon EKS クラスターに合わせて適切なパラメータに置き換えてください。インスタンスタイプは、P4、P3、G5、G4dn など Spark RAPIDS をサポートするものを使用します。

```
aws eks create-nodegroup \  
--cluster-name EKS_CLUSTER_NAME \  
--nodegroup-name NODEGROUP_NAME \  
--scaling-config minSize=0,maxSize=5,desiredSize=2 CHOOSE_APPROPRIATELY \  
--ami-type AL2_x86_64_GPU \  
--node-role NODE_ROLE \  
--subnets SUBNETS_SPACE_DELIMITED \  
--remote-access ec2SshKey= SSH_KEY \  
--instance-types GPU_INSTANCE_TYPE \  
--disk-size DISK_SIZE \  
--region AWS_REGION
```

2. クラスターに Nvidia デバイスプラグインをインストールすると、クラスターの各ノードに多数の GPU を出力し、クラスターで GPU 対応のコンテナを実行できます。次のコードを実行して、このプラグインをインストールします。

```
kubectl apply -f https://raw.githubusercontent.com/NVIDIA/k8s-device-plugin/v0.9.0/  
nvidia-device-plugin.yml
```

3. クラスターの各ノードで使用可能な GPU の数を確認するには、次のコマンドを実行します。

```
kubectl get nodes "-o=custom-  
columns=NAME:.metadata.name,GPU:.status.allocatable.nvidia\.com/gpu"
```

Spark RAPIDS ジョブを実行するには

1. Amazon EMR on EKS クラスターに Spark RAPIDS ジョブを送信します。ジョブを開始するには、次のコードに示したようなコマンドを使用します。ジョブを初めて実行する場合、イメージをダウンロードしてノードにキャッシュするまでに数分かかる場合があります。

```
aws emr-containers start-job-run \  
--virtual-cluster-id VIRTUAL_CLUSTER_ID \  
--execution-role-arn JOB_EXECUTION_ROLE \  
--release-label emr-6.9.0-spark-rapids-latest \  

```

```
--job-driver '{"sparkSubmitJobDriver": {"entryPoint": "local:///usr/lib/
spark/examples/jars/spark-examples.jar","entryPointArguments": ["10000"],
"sparkSubmitParameters":"--class org.apache.spark.examples.SparkPi "}}' \
---configuration-overrides '{"applicationConfiguration": [{"classification":
"spark-defaults","properties": {"spark.executor.instances":
"2","spark.executor.memory": "2G"}}], "monitoringConfiguration":
{"cloudWatchMonitoringConfiguration": {"logGroupName": "LOG_GROUP
_NAME"},"s3MonitoringConfiguration": {"logUri": "LOG_GROUP_STREAM"}}}'
```

2. Spark RAPIDS Accelerator が使用可能であることを確認するには、Spark ドライバーログをチェックします。このログは、CloudWatch が、または `start-job-run` コマンドを実行するときに指定した S3 の場所に保存されています。次の例は、一般的にログの各行がどのように表示されるかを示しています。

```
22/11/15 00:12:44 INFO RapidsPluginUtils: RAPIDS Accelerator build:
{version=22.08.0-amzn-0, user=release, url=, date=2022-11-03T03:32:45Z, revision=,
cudf_version=22.08.0, branch=}
22/11/15 00:12:44 INFO RapidsPluginUtils: RAPIDS Accelerator JNI build:
{version=22.08.0, user=, url=https://github.com/NVIDIA/spark-rapids-jni.git,
date=2022-08-18T04:14:34Z, revision=a1b23cd_sample, branch=HEAD}
22/11/15 00:12:44 INFO RapidsPluginUtils: cudf build: {version=22.08.0,
user=, url=https://github.com/rapidsai/cudf.git, date=2022-08-18T04:14:34Z,
revision=a1b23ce_sample, branch=HEAD}
22/11/15 00:12:44 WARN RapidsPluginUtils: RAPIDS Accelerator 22.08.0-amzn-0 using
cudf 22.08.0.
22/11/15 00:12:44 WARN RapidsPluginUtils:
spark.rapids.sql.multiThreadedRead.numThreads is set to 20.
22/11/15 00:12:44 WARN RapidsPluginUtils: RAPIDS Accelerator is enabled, to disable
GPU support set `spark.rapids.sql.enabled` to false.
22/11/15 00:12:44 WARN RapidsPluginUtils: spark.rapids.sql.explain is set to
`NOT_ON_GPU`. Set it to 'NONE' to suppress the diagnostics logging about the query
placement on the GPU.
```

3. GPU で実行される操作を確認するには、次の手順を実行して、他のログも記録されるようにします。「`spark.rapids.sql.explain : ALL`」の設定をメモしておきます。

```
aws emr-containers start-job-run \
--virtual-cluster-id VIRTUAL_CLUSTER_ID \
--execution-role-arn JOB_EXECUTION_ROLE \
--release-label emr-6.9.0-spark-rapids-latest \
--job-driver '{"sparkSubmitJobDriver": {"entryPoint": "local:///usr/lib/
spark/examples/jars/spark-examples.jar","entryPointArguments": ["10000"],
"sparkSubmitParameters":"--class org.apache.spark.examples.SparkPi "}}' \
```

```

---configuration-overrides '{"applicationConfiguration":
[{"classification": "spark-defaults","properties":
{"spark.rapids.sql.explain":"ALL","spark.executor.instances":
"2","spark.executor.memory": "2G"}]},{"monitoringConfiguration":
{"cloudWatchMonitoringConfiguration": {"logGroupName":
"LOG_GROUP_NAME"},"s3MonitoringConfiguration": {"logUri": "LOG_GROUP_STREAM"}}}'

```

前掲のコマンドは、GPU を使用するジョブの一例です。その出力は、次の例のようになります。以下を参考に出力内容を理解してください。

- * — GPU で動作する操作を示します。
- ! — GPU で実行できない操作を示します。
- @ — GPU で動作するものの、GPU で実行できないプラン内にあるため実行できない操作を示します。

```

22/11/15 01:22:58 INFO GpuOverrides: Plan conversion to the GPU took 118.64 ms
22/11/15 01:22:58 INFO GpuOverrides: Plan conversion to the GPU took 4.20 ms
22/11/15 01:22:58 INFO GpuOverrides: GPU plan transition optimization took 8.37 ms
22/11/15 01:22:59 WARN GpuOverrides:
  *Exec <ProjectExec> will run on GPU
    *Expression <Alias> substring(cast(date#149 as string), 0, 7) AS month#310
will run on GPU
    *Expression <Substring> substring(cast(date#149 as string), 0, 7) will run
on GPU
    *Expression <Cast> cast(date#149 as string) will run on GPU
  *Exec <SortExec> will run on GPU
    *Expression <SortOrder> date#149 ASC NULLS FIRST will run on GPU
  *Exec <ShuffleExchangeExec> will run on GPU
    *Partitioning <RangePartitioning> will run on GPU
    *Expression <SortOrder> date#149 ASC NULLS FIRST will run on GPU
  *Exec <UnionExec> will run on GPU
    !Exec <ProjectExec> cannot run on GPU because not all expressions can
be replaced
    @Expression <AttributeReference> customerID#0 could run on GPU
    @Expression <Alias> Charge AS kind#126 could run on GPU
      @Expression <Literal> Charge could run on GPU
    @Expression <AttributeReference> value#129 could run on GPU
    @Expression <Alias> add_months(2022-11-15, cast(-(cast(_we0#142 as
bigint) + last_month#128L) as int)) AS date#149 could run on GPU

```

```
! <AddMonths> add_months(2022-11-15, cast(-
(cast(_we0#142 as bigint) + last_month#128L) as int)) cannot run
on GPU because GPU does not currently support the operator class
org.apache.spark.sql.catalyst.expressions.AddMonths
  @Expression <Literal> 2022-11-15 could run on GPU
  @Expression <Cast> cast(-(cast(_we0#142 as bigint) +
last_month#128L) as int) could run on GPU
  @Expression <UnaryMinus> -(cast(_we0#142 as bigint) +
last_month#128L) could run on GPU
  @Expression <Add> (cast(_we0#142 as bigint) +
last_month#128L) could run on GPU
  @Expression <Cast> cast(_we0#142 as bigint) could run on
GPU
  @Expression <AttributeReference> _we0#142 could run on
GPU
  @Expression <AttributeReference> last_month#128L could run
on GPU
```

Amazon EMR on EKS での Amazon Redshift integration for Apache Spark の使用

Amazon EMR リリース 6.9.0 以降、リリースイメージには常に [Apache Spark](#) と Amazon Redshift をつなぐコネクタが含まれます。そのため、Amazon EMR on EKS で Spark を使用すると、Amazon Redshift に保存されているデータを処理できます。このインテグレーションは、[spark-redshift オープンソースコネクタ](#)をベースにしています。Amazon EMR on EKS では、[Amazon Redshift integration for Apache Spark](#) がネイティブインテグレーションとして含まれています。

トピック

- [Amazon Redshift integration for Apache Spark を使用した Spark アプリケーションの起動](#)
- [Amazon Redshift integration for Apache Spark による認証](#)
- [Amazon Redshift に対する読み書き](#)
- [Spark コネクタを使用する際の考慮事項と制限事項](#)

Amazon Redshift integration for Apache Spark を使用した Spark アプリケーションの起動

このインテグレーションを使用するには、Spark ジョブで必要な Spark Redshift の依存関係を渡す必要があります。--jars を使用して、Redshift コネクタ関連のライブラリを含める必要があります。ファイルの保存先として --jars オプションでサポートされている他の場所を確認するには、Apache Spark ドキュメントの「[Advanced Dependency Management](#)」セクションを参照してください。

- spark-redshift.jar
- spark-avro.jar
- RedshiftJDBC.jar
- minimal-json.jar

Amazon EMR on EKS リリース 6.9.0 以降で Amazon Redshift integration for Apache Spark を使用して Spark アプリケーションを起動するには、次のようなコマンドを使用します。なお、--conf spark.jars オプションに指定されているパスは JAR ファイルのデフォルトのパスであることに注意してください。

```
aws emr-containers start-job-run \  
  
--virtual-cluster-id cluster_id \  
--execution-role-arn arn \  
--release-label emr-6.9.0-latest \  
--job-driver '{  
  "sparkSubmitJobDriver": {  
    "entryPoint": "s3://script_path",  
    "sparkSubmitParameters":  
      "--conf spark.kubernetes.file.upload.path=s3://upload_path  
      --conf spark.jars=  
        /usr/share/aws/redshift/jdbc/RedshiftJDBC.jar,  
        /usr/share/aws/redshift/spark-redshift/lib/spark-redshift.jar,  
        /usr/share/aws/redshift/spark-redshift/lib/spark-avro.jar,  
        /usr/share/aws/redshift/spark-redshift/lib/minimal-json.jar"  
    }  
  }  
'
```

Amazon Redshift integration for Apache Spark による認証

AWS Secrets Manager を使用した認証情報の取得と Amazon Redshift への接続

Secrets Manager に認証情報を保存すると、Amazon Redshift に対して安全に認証できます。Spark ジョブを使用すると、GetSecretValue API を呼び出して認証情報を取得できます。

```
from pyspark.sql import SQLContextimport boto3

sc = # existing SparkContext
sql_context = SQLContext(sc)

secretsmanager_client = boto3.client('secretsmanager',
    region_name=os.getenv('AWS_REGION'))
secret_manager_response = secretsmanager_client.get_secret_value(
    SecretId='string',
    VersionId='string',
    VersionStage='string'
)
username = # get username from secret_manager_response
password = # get password from secret_manager_response
url = "jdbc:redshift://redshifthost:5439/database?user=" + username + "&password="
    + password

# Access to Redshift cluster using Spark
```

Amazon EMR on EKS ジョブ実行ロールでの IAM ベースの認証の使用

Amazon EMR on EKS リリース 6.9.0 以降、Amazon Redshift JDBC ドライバーバージョン 2.1 以降が環境にパッケージ化されます。JDBC ドライバー 2.1 以降では、JDBC URL を指定できます。未加工のユーザー名とパスワードを含めることはできません。代わりに、jdbc:redshift:iam:// スキームを指定できます。このコマンドは、Amazon EMR on EKS ジョブ実行ロールを使用して認証情報を自動的に取得するように JDBC ドライバーに指示しています。

詳細については、「Amazon Redshift 管理ガイド」の「[Configure a JDBC or ODBC connection to use IAM credentials](#)」を参照してください。

次の URL 例では、jdbc:redshift:iam:// スキームを使用しています。

```
jdbc:redshift:iam://examplecluster.abc123xyz789.us-west-2.redshift.amazonaws.com:5439/
dev
```

指定された条件をジョブ実行ロールが満たすためには、次の権限が必要です。

許可	ジョブ実行ロールで必要になる条件
redshift:GetClusterCredentials	JDBC ドライバーが Amazon Redshift から認証情報を取得するために必要
redshift:DescribeCluster	JDBC URL に Amazon Redshift クラスターのほか、エンドポイントではなく AWS リージョンを指定する場合に必要
redshift-serverless:GetCredentials	JDBC ドライバーが Amazon Redshift Serverless から認証情報を取得するために必要
redshift-serverless:GetWorkgroup	Amazon Redshift Serverless を使用していて、URL にワークグループ名とリージョンを含めて指定する場合に必要

ジョブ実行ロールポリシーには、次の権限が必要です。

```
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "redshift:GetClusterCredentials",
    "redshift:DescribeCluster",
    "redshift-serverless:GetCredentials",
    "redshift-serverless:GetWorkgroup"
  ],
  "Resource": [
    "arn:aws:redshift:AWS_REGION:ACCOUNT_ID:dbname:CLUSTER_NAME/DATABASE_NAME",
    "arn:aws:redshift:AWS_REGION:ACCOUNT_ID:dbuser:DATABASE_NAME/USER_NAME"
  ]
}
```

JDBC ドライバーによる Amazon Redshift の認証

JDBC URL 内にユーザー名とパスワードを設定する

Amazon Redshift クラスターに対して Spark ジョブを認証する場合は、JDBC URL に Amazon Redshift データベース名とパスワードを指定できます。

Note

URL にデータベース認証情報を渡すと、その URL にアクセスできるユーザーなら誰でもその認証情報にアクセスできます。この方法は、安全な方法ではないため、一般的にはお勧めしません。

ご使用のアプリケーションでセキュリティが問題にならない場合は、JDBC URL に次の形式を使用してユーザー名とパスワードを設定できます。

```
jdbc:redshift://redshifthost:5439/database?user=username&password=password
```

Amazon Redshift に対する読み書き

次のコード例では、PySpark でデータソース API と SparkSQL を使用して、Amazon Redshift データベースに対してサンプルデータを読み書きします。

Data source API

PySpark でデータソース API を使用して、Amazon Redshift データベースに対してサンプルデータを読み書きします。

```
import boto3
from pyspark.sql import SQLContext

sc = # existing SparkContext
sql_context = SQLContext(sc)

url = "jdbc:redshift:iam://redshifthost:5439/database"
aws_iam_role_arn = "arn:aws:iam::accountID:role/roleName"

df = sql_context.read \
    .format("io.github.spark_redshift_community.spark.redshift") \
    .option("url", url) \
    .option("dbtable", "tableName") \
    .option("tempdir", "s3://path/for/temp/data") \
    .option("aws_iam_role", "aws_iam_role_arn") \
    .load()
```



```
df.write \  
  .format("io.github.spark_redshift_community.spark.redshift") \  
  .option("url", url) \  
  .option("dbtable", "tableName_copy") \  
  .option("tempdir", "s3://path/for/temp/data") \  
  .option("aws_iam_role", "aws_iam_role_arn") \  
  .mode("error") \  
  .save()
```

SparkSQL

PySpark で SparkSQL を使用して、Amazon Redshift データベースに対してサンプルデータを読み書きします。

```
import boto3  
import json  
import sys  
import os  
from pyspark.sql import SparkSession  
  
spark = SparkSession \  
  .builder \  
  .enableHiveSupport() \  
  .getOrCreate()  
  
url = "jdbc:redshift:iam://redshifthost:5439/database"  
aws_iam_role_arn = "arn:aws:iam::accountID:role/roleName"  
  
bucket = "s3://path/for/temp/data"  
tableName = "tableName" # Redshift table name  
  
s = f"""CREATE TABLE IF NOT EXISTS {tableName} (country string, data string)  
  USING io.github.spark_redshift_community.spark.redshift  
  OPTIONS (dbtable '{tableName}', tempdir '{bucket}', url '{url}', aws_iam_role  
  '{aws_iam_role_arn}' ); """  
  
spark.sql(s)  
  
columns = ["country" ,"data"]  
data = [("test-country", "test-data")]  
df = spark.sparkContext.parallelize(data).toDF(columns)
```

```
# Insert data into table
df.write.insertInto(tableName, overwrite=False)
df = spark.sql(f"SELECT * FROM {tableName}")
df.show()
```

Spark コネクタを使用する際の考慮事項と制限事項

- Amazon EMR 上の Spark から Amazon Redshift への JDBC 接続に対して SSL をアクティブ化することをお勧めします。
- ベストプラクティスとして、AWS Secrets Manager で Amazon Redshift クラスターの認証情報を管理することをお勧めします。例については、「[Using AWS Secrets Manager to retrieve credentials for connecting to Amazon Redshift](#)」を参照してください。
- Amazon Redshift 認証パラメータのパラメータ `aws_iam_role` を使用して IAM ロールを渡すことをお勧めします。
- 現在、パラメータ `tempformat` は Parquet 形式をサポートしていません。
- `tempdir` URI は Amazon S3 の場所を指します。この一時ディレクトリは、自動的にクリーンアップされないため、追加コストが発生する可能性があります。
- Amazon Redshift については、次の推奨事項を検討してください。
 - Amazon Redshift クラスターにパブリックにアクセスできないようにすることをお勧めします。
 - [Amazon Redshift 監査ログ作成](#) を有効にすることをお勧めします。
 - [Amazon Redshift 保管時の暗号化](#) を有効にすることをお勧めします。
- Amazon S3 については、次の推奨事項を検討してください。
 - [Amazon S3 バケットへのパブリックアクセスをブロックする](#) ことをお勧めします。
 - [Amazon S3 サーバー側の暗号化](#) を使用して、使用する S3 バケットを暗号化することをお勧めします。
 - [Amazon S3 ライフサイクルポリシー](#) を使用して、S3 バケットの保持ルールを定義することをお勧めします。
 - Amazon EMR は、常にオープンソースからイメージにインポートされるコードを検証します。セキュリティ確保のため、Spark から Amazon S3 への認証方法として `tempdir` URI で AWS アクセスキーをエンコードする方法はサポートしていません。

コネクタとそのサポートされているパラメータの使用法の詳細については、次のリソースを参照してください。

- 「Amazon Redshift 管理ガイド」の「[Amazon Redshift integration for Apache Spark](#)」
- Github の [spark-redshift コミュニティリポジトリ](#)

Amazon EMR on EKS で Apache Spark のカスタムスケジューラとして Volcano を使用する方法

Amazon EMR on EKS では、Spark オペレータまたは spark-submit を使用して、Kubernetes カスタムスケジューラで Spark ジョブを実行できます。このチュートリアルでは、カスタムキューで Volcano スケジューラを使用して、Spark ジョブを実行する方法について説明します。

概要

[Volcano](#) では、キュースケジューリング、フェアシェアスケジューリング、リソース予約などの高度な機能を利用して、Spark スケジューリングを管理できます。Volcano の利点の詳細については、The Linux Foundation の CNCF ブログの「[Why Spark chooses Volcano as built-in batch scheduler on Kubernetes](#)」を参照してください。

Volcano のインストールとセットアップ

1. アーキテクチャのニーズに応じて、次のいずれかの kubectl コマンドを選択して、Volcano をインストールします。

```
# x86_64
kubectl apply -f https://raw.githubusercontent.com/volcano-sh/volcano/v1.5.1/
installer/volcano-development.yaml
# arm64:
kubectl apply -f https://raw.githubusercontent.com/volcano-sh/volcano/v1.5.1/
installer/volcano-development-arm64.yaml
```

2. サンプルの Volcano キューを用意します。キューは、[PodGroups](#) の集まりです。FIFO を採用しており、リソース配分の基礎となるものです。

```
cat << EOF > volcanoQ.yaml
apiVersion: scheduling.volcano.sh/v1beta1
kind: Queue
metadata:
  name: sparkqueue
spec:
  weight: 4
```

```
reclaimable: false
capability:
  cpu: 10
  memory: 20Gi
EOF

kubectl apply -f volcanoQ.yaml
```

3. サンプルの PodGroup マニフェストを Amazon S3 にアップロードします。PodGroup は、関連性の強いポッドをグループ化したものです。通常、バッチスケジューリングに PodGroup を使用します。前のステップで定義したキューに次のサンプルの PodGroup を送信します。

```
cat << EOF > podGroup.yaml
apiVersion: scheduling.volcano.sh/v1beta1
kind: PodGroup
spec:
  # Set minMember to 1 to make a driver pod
  minMember: 1
  # Specify minResources to support resource reservation.
  # Consider the driver pod resource and executors pod resource.
  # The available resources should meet the minimum requirements of the Spark job
  # to avoid a situation where drivers are scheduled, but they can't schedule
  # sufficient executors to progress.
  minResources:
    cpu: "1"
    memory: "1Gi"
  # Specify the queue. This defines the resource queue that the job should be
  # submitted to.
  queue: sparkqueue
EOF

aws s3 mv podGroup.yaml s3://bucket-name
```

Spark オペレータを指定して Volcano スケジューラで Spark アプリケーションを実行する

1. 次のセクションのステップをまだ完了していない場合は完了してセットアップします。
 - a. [Volcano のインストールとセットアップ](#)
 - b. [Amazon EMR on EKS での Spark 演算子のセットアップ](#)

c. [Spark 演算子をインストールする](#)

helm install spark-operator-demo コマンドを実行するときは、次の引数を含めます。

```
--set batchScheduler.enable=true  
--set webhook.enable=true
```

2. batchScheduler を設定して SparkApplication 定義ファイル spark-pi.yaml を作成します。

```
apiVersion: "sparkoperator.k8s.io/v1beta2"  
kind: SparkApplication  
metadata:  
  name: spark-pi  
  namespace: spark-operator  
spec:  
  type: Scala  
  mode: cluster  
  image: "895885662937.dkr.ecr.us-west-2.amazonaws.com/spark/emr-6.10.0:latest"  
  imagePullPolicy: Always  
  mainClass: org.apache.spark.examples.SparkPi  
  mainApplicationFile: "local:///usr/lib/spark/examples/jars/spark-examples.jar"  
  sparkVersion: "3.3.1"  
  batchScheduler: "volcano" #Note: You must specify the batch scheduler name as  
'volcano'  
  restartPolicy:  
    type: Never  
  volumes:  
    - name: "test-volume"  
      hostPath:  
        path: "/tmp"  
        type: Directory  
  driver:  
    cores: 1  
    coreLimit: "1200m"  
    memory: "512m"  
    labels:  
      version: 3.3.1  
    serviceAccount: emr-containers-sa-spark  
  volumeMounts:  
    - name: "test-volume"  
      mountPath: "/tmp"
```

```

executor:
  cores: 1
  instances: 1
  memory: "512m"
  labels:
    version: 3.3.1
  volumeMounts:
    - name: "test-volume"
      mountPath: "/tmp"

```

3. 次のコマンドで Spark アプリケーションを送信します。その結果、spark-pi という名前の SparkApplication オブジェクトも作成されます。

```
kubectl apply -f spark-pi.yaml
```

4. 次のコマンドで SparkApplication オブジェクトのイベントがないか確認します。

```
kubectl describe pods spark-pi-driver --namespace spark-operator
```

最初のポッドイベントは、Volcano がポッドをスケジュールしたことを示しています。

Type	Reason	Age	From	Message
----	-----	----	----	-----
Normal	Scheduled	23s	volcano	Successfully assigned default/spark-pi-driver to integration-worker2

spark-submit を指定して Volcano スケジューラで Spark アプリケーションを実行します。

1. まず、「[Amazon EMR on EKS での spark-submit のセットアップ](#)」セクションのステップを完了します。Volcano に対応した spark-submit ディストリビューションをビルドする必要があります。詳細については、Apache Spark ドキュメントの「[Using Volcano as Customized Scheduler for Spark on Kubernetes](#)」の「Build」セクションを参照してください。
2. 次の環境変数の値を設定します。

```

export SPARK_HOME=spark-home
export MASTER_URL=k8s://Amazon-EKS-cluster-endpoint

```

3. 次のコマンドで Spark アプリケーションを送信します。

```
$SPARK_HOME/bin/spark-submit \
  --class org.apache.spark.examples.SparkPi \
  --master $MASTER_URL \
  --conf spark.kubernetes.container.image=895885662937.dkr.ecr.us-
west-2.amazonaws.com/spark/emr-6.10.0:latest \
  --conf spark.kubernetes.authenticate.driver.serviceAccountName=spark \
  --deploy-mode cluster \
  --conf spark.kubernetes.namespace=spark-operator \
  --conf spark.kubernetes.scheduler.name=volcano \
  --conf spark.kubernetes.scheduler.volcano.podGroupTemplateFile=/path/to/podgroup-
template.yaml \
  --conf
spark.kubernetes.driver.pod.featureSteps=org.apache.spark.deploy.k8s.features.VolcanoFeatu
\
  --conf
spark.kubernetes.executor.pod.featureSteps=org.apache.spark.deploy.k8s.features.VolcanoFea
\
  local:///usr/lib/spark/examples/jars/spark-examples.jar 20
```

4. 次のコマンドで SparkApplication オブジェクトのイベントがないか確認します。

```
kubectl describe pod spark-pi --namespace spark-operator
```

最初のポッドイベントは、Volcano がポッドをスケジューリングしたことを示しています。

Type	Reason	Age	From	Message
----	-----	----	----	-----
Normal	Scheduled	23s	volcano	Successfully assigned default/spark-pi-driver to integration-worker2

Amazon EMR on EKS で Apache Spark のカスタムスケジューラとして YuniKorn を使用方法

Amazon EMR on EKS では、Spark オペレータまたは spark-submit を使用して、Kubernetes カスタムスケジューラで Spark ジョブを実行できます。このチュートリアルでは、カスタムキューとギャングスケジューリングで YuniKorn スケジューラを使用して、Spark ジョブを実行する方法について説明します。

概要

[Apache YuniKorn](#) では、アプリ対応のスケジューリングで Spark スケジューリングを管理して、リソースのクォータと優先順位をきめ細かく制御できます。ギャングスケジューリングを備えており、アプリに最小限必要なリソースリクエストを満たすことができるときにのみ、アプリをスケジュールします。詳細については、Apache YuniKorn ドキュメントサイトの「[What is gang scheduling](#)」を参照してください。

YuniKorn 用にクラスターを作成してセットアップする

次の手順を使用して、Amazon EKS クラスターをデプロイします。AWS リージョン (region) とアベイラビリティゾーン (availabilityZones) は変更してもかまいません。

1. Amazon EKS クラスターを定義します。

```
cat <<EOF >eks-cluster.yaml
---
apiVersion: eksctl.io/v1alpha5
kind: ClusterConfig

metadata:
  name: emr-eks-cluster
  region: eu-west-1

vpc:
  clusterEndpoints:
    publicAccess: true
    privateAccess: true

iam:
  withOIDC: true

nodeGroups:
- name: spark-jobs
  labels: { app: spark }
  instanceType: m5.xlarge
  desiredCapacity: 2
  minSize: 2
  maxSize: 3
  availabilityZones: ["eu-west-1a"]
EOF
```


2. クラスターを作成します。

```
eksctl create cluster -f eks-cluster.yaml
```

3. Spark ジョブの実行先となる名前空間 spark-job を作成します。

```
kubectl create namespace spark-job
```

4. 次に、Kubernetes ロールとロールバインディングを作成します。これは、Spark ジョブ実行が使用するサービスアカウントに必須の操作です。

a. Spark ジョブのサービスアカウント、ロール、ロールバインディングを定義します。

```
cat <<EOF >emr-job-execution-rbac.yaml
---
apiVersion: v1
kind: ServiceAccount
metadata:
  name: spark-sa
  namespace: spark-job
automountServiceAccountToken: false
---
apiVersion: rbac.authorization.k8s.io/v1
kind: Role
metadata:
  name: spark-role
  namespace: spark-job
rules:
  - apiGroups: ["", "batch","extensions"]
    resources: ["configmaps","serviceaccounts","events","pods","pods/
exec","pods/log","pods/
portforward","secrets","services","persistentvolumeclaims"]
    verbs: ["create","delete","get","list","patch","update","watch"]
---
apiVersion: rbac.authorization.k8s.io/v1
kind: RoleBinding
metadata:
  name: spark-sa-rb
  namespace: spark-job
roleRef:
  apiGroup: rbac.authorization.k8s.io
  kind: Role
  name: spark-role
```

```
subjects:
  - kind: ServiceAccount
    name: spark-sa
    namespace: spark-job
EOF
```

- b. 次のコマンドで Kubernetes ロールとロールバインディング定義を適用します。

```
kubectl apply -f emr-job-execution-rbac.yaml
```

YuniKorn をインストールしてセットアップする

1. 次の kubectl コマンドを使用して、Yunikorn スケジューラのデプロイ先となる名前空間 `yunikorn` を作成します。

```
kubectl create namespace yunikorn
```

2. このスケジューラをインストールするには、次の Helm コマンドを実行します。

```
helm repo add yunikorn https://apache.github.io/yunikorn-release
```

```
helm repo update
```

```
helm install yunikorn yunikorn/yunikorn --namespace yunikorn
```

Spark オペレータを指定して YuniKorn スケジューラで Spark アプリケーションを実行する

1. 次のセクションのステップをまだ完了していない場合は完了してセットアップします。
 - a. [YuniKorn 用にクラスターを作成してセットアップする](#)
 - b. [YuniKorn をインストールしてセットアップする](#)
 - c. [Amazon EMR on EKS での Spark 演算子のセットアップ](#)
 - d. [Spark 演算子をインストールする](#)

helm install spark-operator-demo コマンドを実行するときは、次の引数を含めません。

```
--set batchScheduler.enable=true
--set webhook.enable=true
```

2. SparkApplication ジョブ定義ファイル spark-pi.yaml を作成します。

YuniKorn をジョブのスケジューラとして使用するには、アプリケーション定義に特定の注釈とラベルを追加する必要があります。注釈とラベルでは、使用するジョブのキューとスケジューリング戦略を指定します。

次の例では、注釈 schedulingPolicyParameters はアプリケーションにギャングスケジューリングをセットアップします。次に、タスクグループ (タスクの「ギャング」) を作成して、ジョブ実行を開始するポッドをスケジュールする前に最小限使用できないキャパシティを指定します。最後に、「[YuniKorn 用にクラスターを作成してセットアップする](#)」セクションの定義に従って "app": "spark" ラベルを指定して、ノードグループを使用するようにタスクグループ定義を指定します。

```
apiVersion: "sparkoperator.k8s.io/v1beta2"
kind: SparkApplication
metadata:
  name: spark-pi
  namespace: spark-job
spec:
  type: Scala
  mode: cluster
  image: "895885662937.dkr.ecr.us-west-2.amazonaws.com/spark/emr-6.10.0:latest"
  imagePullPolicy: Always
  mainClass: org.apache.spark.examples.SparkPi
  mainApplicationFile: "local:///usr/lib/spark/examples/jars/spark-examples.jar"
  sparkVersion: "3.3.1"
  restartPolicy:
    type: Never
  volumes:
    - name: "test-volume"
      hostPath:
        path: "/tmp"
        type: Directory
  driver:
    cores: 1
```

```
coreLimit: "1200m"
memory: "512m"
labels:
  version: 3.3.1
annotations:
  yunikorn.apache.org/schedulingPolicyParameters: "placeholderTimeoutSeconds=30
gangSchedulingStyle=Hard"
  yunikorn.apache.org/task-group-name: "spark-driver"
  yunikorn.apache.org/task-groups: |-
    [{
      "name": "spark-driver",
      "minMember": 1,
      "minResource": {
        "cpu": "1200m",
        "memory": "1Gi"
      },
      "nodeSelector": {
        "app": "spark"
      }
    },
    {
      "name": "spark-executor",
      "minMember": 1,
      "minResource": {
        "cpu": "1200m",
        "memory": "1Gi"
      },
      "nodeSelector": {
        "app": "spark"
      }
    }
  ]
serviceAccount: spark-sa
volumeMounts:
  - name: "test-volume"
    mountPath: "/tmp"
executor:
  cores: 1
  instances: 1
  memory: "512m"
  labels:
    version: 3.3.1
  annotations:
    yunikorn.apache.org/task-group-name: "spark-executor"
  volumeMounts:
```

```
- name: "test-volume"
  mountPath: "/tmp"
```

3. 次のコマンドで Spark アプリケーションを送信します。その結果、spark-pi という名前の SparkApplication オブジェクトも作成されます。

```
kubectl apply -f spark-pi.yaml
```

4. 次のコマンドで SparkApplication オブジェクトのイベントがないか確認します。

```
kubectl describe sparkapplication spark-pi --namespace spark-job
```

最初のポッドイベントは、YuniKorn がポッドをスケジュールしたことを示しています。

Type	Reason	Age	From	Message
Normal	Scheduling	3m12s	yunikorn	spark-operator/org-apache-spark-examples-sparkpi-2a777a88b98b8a95-driver is queued and waiting for allocation
Normal	GangScheduling	3m12s	yunikorn	Pod belongs to the taskGroup spark-driver, it will be scheduled as a gang member
Normal	Scheduled	3m10s	yunikorn	Successfully assigned spark
Normal	PodBindSuccessful	3m10s	yunikorn	Pod spark-operator/
Normal	TaskCompleted	2m3s	yunikorn	Task spark-operator/
Normal	Pulling	3m10s	kubelet	Pulling

spark-submit を指定して YuniKorn スケジューラで Spark アプリケーションを実行します。

1. まず、「[Amazon EMR on EKS での spark-submit のセットアップ](#)」セクションのステップを完了します。
2. 次の環境変数の値を設定します。

```
export SPARK_HOME=spark-home
export MASTER_URL=k8s://Amazon-EKS-cluster-endpoint
```

3. 次のコマンドで Spark アプリケーションを送信します。

次の例では、注釈 schedulingPolicyParameters はアプリケーションにギャングスケジューリングをセットアップします。次に、タスクグループ (タスクの「ギャング」) を作成し


```
local:///usr/lib/spark/examples/jars/spark-examples.jar 20
```

4. 次のコマンドで SparkApplication オブジェクトのイベントがないか確認します。

```
kubectl describe pod spark-driver-pod --namespace spark-job
```

最初のポッドイベントは、YuniKorn がポッドをスケジュールしたことを示しています。

Type	Reason	Age	From	Message
Normal	Scheduling	3m12s	yunikorn	spark-operator/org-apache-spark-examples-sparkpi-2a777a88b98b8a95-driver is queued and waiting for allocation
Normal	GangScheduling	3m12s	yunikorn	Pod belongs to the taskGroup spark-driver, it will be scheduled as a gang member
Normal	Scheduled	3m10s	yunikorn	Successfully assigned spark
Normal	PodBindSuccessful	3m10s	yunikorn	Pod spark-operator/
Normal	TaskCompleted	2m3s	yunikorn	Task spark-operator/
Normal	Pulling	3m10s	kubelet	Pulling

Amazon EMR on EKS のセキュリティ

AWS では、クラウドセキュリティを最優先事項としています。AWS のユーザーは、セキュリティを最も重視する組織の要件を満たすように構築されたデータセンターとネットワークアーキテクチャを利用できます。

セキュリティは、AWS とユーザーの間の責任共有です。[責任共有モデル](#)では、これをクラウドのセキュリティおよびクラウド内のセキュリティと説明しています。

- クラウドのセキュリティ - AWS は、AWS クラウドで AWS のサービスを実行するインフラストラクチャを保護する責任を負います。また、AWS は、使用するサービスを安全に提供します。[AWS コンプライアンスプログラム](#)の一環として、サードパーティーの監査が定期的にセキュリティの有効性をテストおよび検証しています。Amazon EMR に適用するコンプライアンスプログラムについては、「[AWSコンプライアンスプログラムによる対象範囲サービス](#)」の「」を参照してください。
- クラウド内のセキュリティ - ユーザーの責任は、使用する AWS のサービスに応じて異なります。またお客様は、データの機密性、企業要件、適用法令と規制などのその他の要因に対しても責任を担います。

このドキュメントは、Amazon EMR on EKS を使用する際の責任共有モデルの適用について理解するのに役立ちます。以下のトピックで、セキュリティおよびコンプライアンスの目的を満たすように、Amazon EMR on EKS を設定する方法について説明します。Amazon EMR on EKS リソースのモニタリングやセキュリティ確保に役立つ他の AWS サービスの使用方法についても説明します。

トピック

- [Amazon EMR on EKS でのセキュリティのベストプラクティス](#)
- [データ保護](#)
- [Identity and Access Management](#)
- [ログ記録とモニタリング](#)
- [Amazon EMR on EKS のコンプライアンス検証](#)
- [Amazon EMR on EKS の耐障害性](#)
- [Amazon EMR on EKS でのインフラストラクチャセキュリティ](#)
- [構成と脆弱性の分析](#)
- [インターフェイス VPC エンドポイントを使用して Amazon EMR on EKS に接続する](#)

- [Amazon EMR on EKS のクロスアカウントアクセスを設定する](#)

Amazon EMR on EKS でのセキュリティのベストプラクティス

Amazon EMR on EKS には、独自のセキュリティポリシーを策定および実装する際に考慮すべき、さまざまなセキュリティ機能が用意されています。以下のベストプラクティスは一般的なガイドラインであり、完全なセキュリティソリューションに相当するものではありません。これらのベストプラクティスは顧客の環境に必ずしも適切または十分でない可能性があるため、処方箋ではなく、あくまで有用な検討事項とお考えください。

Note

その他のセキュリティのベストプラクティスについては、「[Amazon EMR on EKS でのセキュリティのベストプラクティス](#)」を参照してください。

最小特権の原則を適用する

Amazon EMR on EKS は、実行ロールなどの IAM ロールを使用して、アプリケーションに対してきめ細かいアクセスポリシーを提供します。これらの実行ロールは、IAM ロールの信頼ポリシーを使用して Kubernetes サービスアカウントにマッピングされます。Amazon EMR on EKS は、登録された Amazon EKS 名前空間内に、ユーザー提供のアプリケーションコードを実行するポッドを作成します。アプリケーションコードを実行するジョブポッドは、AWS の他のサービスへの接続時に実行ロールを引き受けます。実行ロールには、アプリケーションのカバーやログ送信先へのアクセスなど、ジョブに必要な最小限の特権セットのみを付与することをお勧めします。また、定期的に、およびアプリケーションコードに変更があったときに、ジョブの許可を監査することをお勧めします。

エンドポイントのアクセスコントロールリスト

マネージドエンドポイントは、VPC 内で少なくとも 1 つのプライベートサブネットを使用するように設定されている EKS クラスターに対してのみ作成できます。この設定では、VPC からのみアクセスできるように、マネージドエンドポイントによって作成されたロードバランサーへのアクセスが制限されます。セキュリティをさらに強化するには、これらのロードバランサーを使用してセキュリティグループを設定し、選択した一連の IP アドレスに受信トラフィックを制限できるようにすることをお勧めします。

カスタムイメージの最新のセキュリティ更新プログラムを入手する

Amazon EMR on EKS でカスタムイメージを使用するために、イメージに任意のバイナリとライブラリをインストールできます。イメージに追加するバイナリのセキュリティパッチの適用は、お客様が行います。Amazon EMR on EKS のイメージに、最新のセキュリティパッチを定期的に適用します。最新のイメージを取得するために、Amazon EMR リリースの新しいベースイメージバージョンが存在する場合は常に、カスタムイメージを再構築する必要があります。詳細については、[Amazon EMR on EKS リリース](#) および [ベースイメージ URI を選択する方法](#) を参照してください。

ポッドの認証情報アクセスを制限する

Kubernetes は、ポッドに認証情報を割り当てるための方法をいくつかサポートしています。複数の認証情報プロバイダーをプロビジョニングすると、セキュリティモデルの複雑さが増す可能性があります。Amazon EMR on EKS では、[サービスアカウントの IAM ロール \(IRSA\)](#) の使用を、登録された EKS 名前空間内の標準の認証情報プロバイダーとして採用しています。[kube2iam](#)、[kiam](#)、クラスターで実行されているインスタンスの EC2 インスタンスプロファイルの使用など、他の方法はサポートされていません。

信頼できないアプリケーションコードを分離する

Amazon EMR on EKS では、システムの利用者が送信したアプリケーションコードの整合性は検査されません。任意のコードを実行する信頼できないテナントがジョブの送信に使用できる、複数の実行ロールで設定されたマルチテナント仮想クラスターを実行している場合、悪意のあるアプリケーションがその特権をエスカレートするリスクがあります。このような状況では、同様の特権を持つ実行ロールを別の仮想クラスターに分離することを検討してください。

ロールベースのアクセスコントロール (RBAC) の許可

管理者は、Amazon EMR on EKS 管理の名前空間に対するロールベースのアクセスコントロール (RBAC) の許可を厳密に制御する必要があります。少なくとも、Amazon EMR on EKS 管理の名前空間でのジョブ送信者に、次の許可を付与しないでください。

- `configmap` を変更するための Kubernetes RBAC 許可 - Amazon EMR on EKS は、Kubernetes の `configmaps` を使用して、マネージドサービスアカウント名を持つマネージドポッドテンプレートを生成するためです。この属性は変更しないでください。
- Amazon EMR on EKS ポッドに対して実行するための Kubernetes RBAC 許可 - マネージド SA 名を持つマネージドポッドテンプレートへのアクセス権を付与しないようにします。この属性は変更しないでください。また、この許可により、ポッドにマウントされた JWT トークンへのアクセス権が付与され、これを使用して実行ロールの認証情報が取得される可能性があります。

- ポッドを作成するための Kubernetes RBAC 許可 - ユーザーよりも上位の AWS 特権を持っている IAM ロールにマップされる Kubernetes ServiceAccount を使用してユーザーがポッドを作成できないようにします。
- 変更ウェブフックをデプロイするための Kubernetes RBAC 許可 - ユーザーが変更ウェブフックを使用して、Amazon EMR on EKS によって作成されたポッドの Kubernetes ServiceAccount 名を変更できないようにします。
- Kubernetes シークレットを読み取るための Kubernetes RBAC 許可 - ユーザーがこれらのシークレットに保存されている機密データを読み取ることができないようにします。

ノードグループの IAM ロールまたはインスタンスプロファイルの認証情報へのアクセスを制限する

- ノードグループの IAM ロールに対して最小限の AWS 許可を割り当てることをお勧めします。これにより、EKS ワーカーノードのインスタンスプロファイル認証情報を使用して実行される可能性がある、コードによる特権エスカレーションを回避できます。
- Amazon EMR on EKS マネージドの名前空間で実行されるすべてのポッドに対するインスタンスプロファイル認証情報へのアクセスを完全にブロックするには、EKS ノードで iptables コマンドを実行することをお勧めします。詳細については、「[Amazon EC2 インスタンスプロファイルの認証情報に対するアクセスの制限](#)」を参照してください。ただし、ポッドが必要なすべての許可を持つように、サービスアカウントの IAM ロールを適切にスコープすることが重要です。例えば、ノードの IAM ロールには、Amazon ECR からコンテナイメージを取得するための許可が割り当てられます。ポッドにこれらの許可が割り当てられていない場合、ポッドは Amazon ECR からコンテナイメージを取得できません。VPC CNI プラグインも更新する必要があります。詳細については、「[演習: サービスアカウントの IAM ロールを使用するように VPC CNI プラグインを更新する](#)」を参照してください。

データ保護

AWS [責任共有モデル](#)は Amazon EMR on EKS のデータ保護に適用されます。このモデルで説明したように、AWS は、すべての AWS クラウドを実行するグローバルインフラストラクチャを保護する責任を負います。お客様は、このインフラストラクチャでホストされているコンテンツに対する管理を維持する責任があります。このコンテンツには、使用する AWS のサービスに対するセキュリティの設定と管理タスクが含まれます。データプライバシーの詳細については、「[データプライバシーのよくある質問](#)」を参照してください。欧州でのデータ保護の詳細については、AWS セキュリティブログに投稿された [AWS 責任共有モデルおよび GDPR](#) のブログを参照してください。

データ保護の目的で、AWS アカウントの認証情報を保護し、個々のアカウントを AWS Identity and Access Management (IAM) で設定することをお勧めします。この方法により、それぞれのジョブを遂行するために必要な許可のみを各ユーザーに付与できます。また、次の方法でデータを保護することをお勧めします。

- 各アカウントで多要素認証 (MFA) を使用します。
- SSL/TLS を使用して AWS リソースと通信します。TLS 1.2 以降が推奨されます。
- AWS CloudTrail で API とユーザーアクティビティログをセットアップします。
- AWS 暗号化ソリューションを AWS のサービス内のすべてのデフォルトのセキュリティ管理と一緒に使用します。
- Amazon Macie などのアドバンスドマネージドセキュリティサービスを使用します。これは、Amazon S3 に保存されている個人データの検出と保護を支援します。
- Amazon EMR on EKS の暗号化オプションを使用して保管中および転送中のデータを暗号化します。
- コマンドラインインターフェイスまたは API を使用して AWS にアクセスするときに FIPS 140-2 検証済みの暗号化モジュールが必要な場合は、FIPS エンドポイントを使用します。利用可能な FIPS エンドポイントの詳細については、[連邦情報処理規格 \(FIPS\) 140-2](#) を参照してください。

顧客のアカウント番号などの機密の識別情報は、[Name] (名前) フィールドなどの自由形式のフィールドに配置しないことを強くお勧めします。これは、Amazon EMR on EKS だけでなく、他の AWS のサービスでコンソール、API、AWS CLI、または AWS SDK を使用している場合も同様です。Amazon EMR on EKS や他のサービスに入力したすべてのデータは、診断ログに取り込まれる可能性があります。外部サーバーへの URL を指定するときは、そのサーバーへのリクエストを検証するための認証情報を URL に含めないでください。

保管中の暗号化

データの暗号化は、承認されていないユーザーがクラスターおよび関連するデータストレージシステムのデータを読み取れないようにするのに役立ちます。このデータには、保管中のデータと呼ばれる、永続的なメディアに保存されているデータや、転送中のデータと呼ばれる、ネットワークを介した転送の間に傍受される可能性のあるデータが含まれます。

データの暗号化には、キーと証明書が必要です。AWS Key Management Service で管理されるキー、Amazon S3で管理されるキー、指定するカスタムプロバイダーからのキーと証明書を含めて、複数のオプションから選択できます。AWS KMS をキープロバイダーとして使用する場合、料金

は暗号化キーの保存と使用に対して適用されます。詳細については、「[AWS KMS の料金](#)」を参照してください。

暗号化オプションを指定する前に、使用するキーと証明書の管理システムを決定します。次に、暗号化設定の一部として指定するカスタムプロバイダーのキーと証明書を作成します。

Amazon S3 内に保管中の EMRFS データの暗号化

Amazon S3 暗号化は、Amazon S3 への読み取りおよび書き込みが行われる EMR ファイルシステム (EMRFS) オブジェクトで使用できます。保管中のデータの暗号化を有効にする場合は、デフォルトの暗号化モードとして、Amazon S3 サーバー側での暗号化 (SSE) またはクライアント側での暗号化 (CSE) を指定します。オプションで、[Per bucket encryption overrides (バケットごとの暗号化オーバーライド)] を使用して、バケットごとに異なる暗号化方法を指定できます。Amazon S3 の暗号化が有効かどうかにかかわらず、Transport Layer Security (TLS) は、EMR クラスターノードと Amazon S3 の間で転送される EMRFS オブジェクトを暗号化します。Amazon S3 の暗号化の詳細については、「Amazon Simple Storage Service 開発者ガイド」の「[暗号化を使用したデータの保護](#)」を参照してください。

Note

AWS KMS を使用するときは、ストレージと暗号化キーの使用に対して料金が適用されます。詳細については、「[AWS KMS の料金](#)」を参照してください。

Amazon S3 のサーバー側の暗号化

Amazon S3 のサーバー側の暗号化をセットアップすると、Amazon S3 はデータをディスクに書き込むときにオブジェクトレベルで暗号化し、アクセスするときに復号します。SSE の詳細については、「Amazon Simple Storage Service 開発者ガイド」の「[サーバー側の暗号化を使用したデータの保護](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS で SSE を指定するときに、次の 2 つの異なるキー管理システムから選択できます。

- SSE-S3 — Amazon S3 がキーを管理します。
- SSE-KMS - AWS KMS key で Amazon EMR on EKS に適したポリシーを指定してセットアップします。

SSE とお客様が用意したキーとの組み合わせ (SSE-C) は、Amazon EMR on EKS では使用できません。

Amazon S3 クライアント側暗号化

Amazon S3 のクライアント側の暗号化を使用すると、Amazon S3 の暗号化と復号はクラスターの EMRFS クライアントで行われます。オブジェクトは Amazon S3 にアップロードされる前に暗号化され、ダウンロード後に復号化されます。指定するプロバイダーが、クライアントが使用する暗号化キーを提供します。クライアントは、AWS KMS によって提供されるキー (CSE-KMS) か、クライアント側のルートキーを提供するカスタム Java クラス (CSE-C) を使用できます。CSE-KMS と CSE-C では、指定するプロバイダーと、復号化または暗号化されるオブジェクトのメタデータに応じて、暗号化の仕様が少し異なります。これらの差異に関する詳細は、「Amazon Simple Storage Service 開発者ガイド」の「[クライアント側の暗号化を使用したデータの保護](#)」を参照してください。

Note

Amazon S3 CSE では、Amazon S3 と交換される EMRFS データのみが暗号化されます。クラスターインスタンスボリュームのすべてのデータが暗号化されるわけではありません。さらに、Hue は EMRFS を使用しないため、Hue S3 ファイルブラウザが Amazon S3 に書き込むオブジェクトは暗号化されません。

ローカルディスク暗号化

Apache Spark は、ローカルディスクに書き込まれた一時データの暗号化をサポートしています。これには、キャッシュ変数とブロードキャスト変数の両方について、ディスクに保存されているシャッフルファイル、シャッフルスピル、およびデータブロックが含まれます。saveAsHadoopFile や saveAsTable などの API を使用したアプリケーションによって生成された出力データの暗号化は対象外です。また、ユーザーが明示的に作成した一時ファイルは対象にならない場合があります。詳細については、Spark ドキュメントの「[Local Storage Encryption](#)」(ローカルストレージ暗号化)を参照してください。Spark は、データがメモリに収まらない場合、エグゼキュータプロセスによってローカルディスクに書き込まれる中間データなど、ローカルディスク上の暗号化されたデータをサポートしません。ディスクに保持されたデータは、ジョブランタイムにスコープ設定され、データの暗号化に使用されるキーは、ジョブ実行ごとに Spark によって動的に生成されます。Spark ジョブが終了すると、他のプロセスはデータを復号できません。

ドライバーとエグゼキューターポッドの場合、マウントされたボリュームに保持される保管中のデータを暗号化します。3 つの異なる AWS ネイティブストレージオプション [EBS](#)、[EFS](#)、[FSx for Lustre](#) を Kubernetes で使用できます。3 つのオプションはすべて、サービスマネージドキーまたは

AWS KMS keyを使用して保管時の暗号化を行います。詳細については、「[EKS ベストプラクティスガイド](#)」を参照してください。この方法では、マウントされたボリュームに保持されるすべてのデータが暗号化されます。

キーの管理

KMS キーを自動的にローテーションするように KMS を設定できます。これにより、古いキーを無期限に保存しながら、年に一度、キーをローテーションして、データを復号することができます。詳細については、「[Rotating AWS KMS keys](#)」を参照してください。

転送中の暗号化

転送時の暗号化では、複数の暗号化メカニズムが有効になります。これらはオープンソース機能であり、アプリケーション固有のもので、Amazon EMR on EKS リリースによって異なる可能性があります。次のアプリケーション固有の暗号化機能を Amazon EMR on EKS で有効にできます。

- Spark
 - Spark コンポーネント間 (ブロック転送サービスと外部シャッフルサービスなど) での内部 RPC 通信は、Amazon EMR のバージョン 5.9.0 以降では AES-256 暗号を使用して暗号化されます。以前のリリースでは、内部 RPC 通信は SASL と、暗号として DIGEST-MD5 を使用して暗号化されます。
 - Spark 履歴サーバーや HTTPS 対応ファイルサーバーなどのユーザーインターフェイスを使用した HTTP プロトコル通信は、Spark の SSL 設定を使用して暗号化されます。詳細については、Spark ドキュメントの「[SSL Configuration](#)」を参照してください。

詳細については、「[Spark のセキュリティ設定](#)」を参照してください。

- Amazon S3 バケット IAM ポリシーで [aws:SecureTransport 条件](#) を使用して、HTTPS (TLS) を介した暗号化接続のみを許可してください。
- JDBC または ODBC クライアントにストリーミングされるクエリ結果は、TLS を使用して暗号化されます。

Identity and Access Management

AWS Identity and Access Management (IAM) は、管理者が AWS リソースへのアクセスを安全に制御するために役立つ AWS のサービスです。IAM 管理者は、誰を認証 (サインイン) し、誰に Amazon EMR on EKS リソースの使用を承認する (アクセス許可を付与する) かを制御します。IAM は、追加費用なしで使用できる AWS のサービスです。

トピック

- [対象者](#)
- [アイデンティティを使用した認証](#)
- [ポリシーを使用したアクセスの管理](#)
- [Amazon EMR on EKS で IAM を使用する方法](#)
- [Amazon EMR on EKS でのサービスにリンクされたロールの使用](#)
- [Amazon EMR on EKS の管理ポリシー](#)
- [Amazon EMR on EKS でのジョブ実行ロールの使用](#)
- [Amazon EMR on EKS のアイデンティティベースのポリシーの例](#)
- [タグベースのアクセスコントロールのポリシー](#)
- [Amazon EMR on EKS の ID とアクセスのトラブルシューティング](#)

対象者

AWS Identity and Access Management (IAM) の使用方法は、Amazon EMR on EKS で行う作業によって異なります。

サービスユーザー – ジョブを実行するために Amazon EMR on EKS サービスを使用する場合は、管理者から必要なアクセス許可と認証情報が与えられます。さらに多くの Amazon EMR on EKS 機能を使用して作業を行う場合は、追加のアクセス許可が必要になることがあります。アクセスの管理方法を理解しておく、管理者に適切な許可をリクエストするうえで役立ちます。Amazon EMR on EKS の機能にアクセスできない場合は、「[Amazon EMR on EKS の ID とアクセスのトラブルシューティング](#)」を参照してください。

サービス管理者 – 社内の Amazon EMR on EKS リソースを管理しているユーザーには、通常、Amazon EMR on EKS への完全なアクセス権限があります。サービスのユーザーがどの Amazon EMR on EKS 機能やリソースにアクセスするかを決めるのは管理者の仕事です。その後、IAM 管理者にリクエストを送信して、サービスユーザーの許可を変更する必要があります。このページの情報を確認して、IAM の基本概念を理解してください。企業が Amazon EMR on EKS で IAM を利用する方法については、「[Amazon EMR on EKS で IAM を使用する方法](#)」を参照してください。

IAM 管理者 – IAM 管理者には、Amazon EMR on EKS へのアクセスを管理するポリシーの作成方法を、詳細に把握する必要が生じる場合があります。IAM で使用可能な、Amazon EMR on EKS アイ

デンティティベースのポリシーの例を確認するには、「[Amazon EMR on EKS のアイデンティティベースのポリシーの例](#)」を参照してください。

アイデンティティを使用した認証

認証とは、アイデンティティ認証情報を使用して AWS にサインインする方法です。ユーザーは、AWS アカウントのルートユーザーとして、または IAM ロールを引き受けることによって、認証済み (AWS にサインイン済み) である必要があります。

ID ソースから提供された認証情報を使用して、フェデレーテッドアイデンティティとして AWS にサインインできます。AWS IAM Identity Center フェデレーテッドアイデンティティの例としては、(IAM Identity Center) ユーザー、会社のシングルサインオン認証、Google または Facebook の認証情報などがあります。フェデレーテッドアイデンティティとしてサインインする場合、IAM ロールを使用して、前もって管理者により ID フェデレーションが設定されています。フェデレーションを使用して AWS にアクセスする場合、間接的にロールを引き受けることになります。

ユーザーのタイプに応じて、AWS Management Console または AWS アクセスポータルにサインインできます。AWS へのサインインの詳細については、AWS サインイン ユーザーガイドの「[AWS アカウントにサインインする方法](#)」を参照してください。

プログラムを使用して AWS にアクセスする場合、AWS は Software Development Kit (SDK) とコマンドラインインターフェイス (CLI) を提供し、認証情報を使用してリクエストに暗号で署名します。AWS ツールを使用しない場合は、リクエストに自分で署名する必要があります。リクエストに署名する推奨方法の使用については、「IAM ユーザーガイド」の「[AWS API リクエストの署名](#)」を参照してください。

使用する認証方法を問わず、セキュリティ情報の提供を追加でリクエストされる場合もあります。例えば、AWS は、アカウントのセキュリティを強化するために多要素認証 (MFA) を使用することをお勧めします。詳細については、「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の「[Multi-factor authentication](#)」(多要素認証) および「IAM ユーザーガイド」の「[AWS での多要素認証 \(MFA\) の使用](#)」を参照してください。

AWS アカウント ルートユーザー

AWS アカウントを作成する場合は、このアカウントのすべての AWS のサービスとリソースに対して完全なアクセス権を持つ 1 つのサインインアイデンティティから始めます。この ID は AWS アカウント ルートユーザーと呼ばれ、アカウントの作成に使用した E メールアドレスとパスワードでサインインすることによってアクセスできます。日常的なタスクには、ルートユーザーを使用しないことを強くお勧めします。ルートユーザーの認証情報を保護し、それらを使用してルートユーザーのみが実行できるタスクを実行します。ルートユーザーとしてサインインする必要があるタスクの完全な

リストについては、「IAM ユーザーガイド」の「[ルートユーザー認証情報が必要なタスク](#)」を参照してください。

フェデレーテッド ID

ベストプラクティスとして、管理者アクセスを必要とするユーザーを含む人間のユーザーに対し、ID プロバイダーとのフェデレーションを使用して、一時的な認証情報の使用により、AWS のサービスにアクセスすることを要求します。

フェデレーテッド ID は、エンタープライズユーザーディレクトリ、ウェブ ID プロバイダー、AWS Directory Service、Identity Center ディレクトリのユーザーか、または ID ソースから提供された認証情報を使用して AWS のサービスにアクセスするユーザーです。フェデレーテッド ID が AWS アカウントにアクセスすると、ロールが継承され、ロールは一時的な認証情報を提供します。

アクセスを一元管理する場合は、AWS IAM Identity Center を使用することをお勧めします。IAM Identity Center でユーザーとグループを作成するか、すべての AWS アカウントとアプリケーションで使用するために、独自の ID ソースで一連のユーザーとグループに接続して同期することもできます。IAM Identity Center の詳細については、「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の「[What is IAM Identity Center?](#)」(IAM Identity Center とは)を参照してください。

IAM ユーザーとグループ

[IAM ユーザー](#)は、1 人のユーザーまたは 1 つのアプリケーションに対して特定の許可を持つ AWS アカウント内のアイデンティティです。可能であれば、パスワードやアクセスキーなどの長期的な認証情報を保有する IAM ユーザーを作成する代わりに、一時的な認証情報を使用することをお勧めします。ただし、IAM ユーザーとの長期的な認証情報が必要な特定のユースケースがある場合は、アクセスキーをローテーションすることをお勧めします。詳細については、IAM ユーザーガイドの「[長期的な認証情報を必要とするユースケースのためにアクセスキーを定期的にローテーションする](#)」を参照してください。

[IAM グループ](#)は、IAM ユーザーの集団を指定するアイデンティティです。グループとしてサインインすることはできません。グループを使用して、複数のユーザーに対して一度に許可を指定できます。多数のユーザーグループがある場合、グループを使用することで許可の管理が容易になります。例えば、IAMAdmins という名前のグループを設定して、そのグループに IAM リソースを管理する許可を与えることができます。

ユーザーは、ロールとは異なります。ユーザーは 1 人の人または 1 つのアプリケーションに一意に関連付けられますが、ロールはそれを必要とする任意の人が引き受けるようになっています。ユーザーには永続的な長期の認証情報がありますが、ロールでは一時的な認証情報が提供されます。詳

細については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ユーザー \(ロールではなく\) の作成が適している場合](#)」を参照してください。

IAM ロール

[IAM ロール](#)は、特定の許可を持つ、AWS アカウント 内のアイデンティティです。これは IAM ユーザーに似ていますが、特定のユーザーには関連付けられていません。[ロールを切り替える](#)ことによって、AWS Management Console で IAM ロールを一時的に引き受けることができます。ロールを引き受けるには、AWS CLI または AWS API オペレーションを呼び出すか、カスタム URL を使用します。ロールを使用する方法の詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ロールの使用](#)」を参照してください。

IAM ロールと一時的な認証情報は、次の状況で役立ちます。

- フェデレーティッドユーザーアクセス - フェデレーティッドアイデンティティに許可を割り当てるには、ロールを作成してそのロールの許可を定義します。フェデレーティッドアイデンティティが認証されると、そのアイデンティティはロールに関連付けられ、ロールで定義されている許可が付与されます。フェデレーションの詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[Creating a role for a third-party Identity Provider](#)」(サードパーティーアイデンティティプロバイダー向けロールの作成)を参照してください。IAM アイデンティティセンターを使用する場合、許可セットを設定します。アイデンティティが認証後にアクセスできるものを制御するため、IAM Identity Center は、アクセス許可セットを IAM のロールに関連付けます。アクセス許可セットの詳細については、「AWS IAM Identity Center ユーザーガイド」の「[アクセス許可セット](#)」を参照してください。
- 一時的な IAM ユーザー許可 - IAM ユーザーまたはロールは、特定のタスクに対して複数の異なる許可を一時的に IAM ロールで引き受けることができます。
- クロスアカウントアクセス - IAM ロールを使用して、自分のアカウントのリソースにアクセスすることを、別のアカウントの人物(信頼済みプリンシパル)に許可できます。クロスアカウントアクセスを許可する主な方法は、ロールを使用することです。ただし、一部の AWS のサービスでは、(ロールをプロキシとして使用する代わりに) リソースにポリシーを直接アタッチできます。クロスアカウントアクセスにおけるロールとリソースベースのポリシーの違いについては、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ロールとリソースベースのポリシーとの相違点](#)」を参照してください。
- クロスサービスアクセス - 一部の AWS のサービスでは、他の AWS のサービスの機能を使用します。例えば、サービスで呼び出しを行うと、通常そのサービスによって Amazon EC2 でアプリケーションが実行されたり、Amazon S3 にオブジェクトが保存されたりします。サービスでは、呼び出し元プリンシパルの許可、サービスロール、またはサービスにリンクされたロールを使用してこれを行う場合があります。

- プリンシパル許可 - IAM ユーザーまたはロールを使用して AWS でアクションを実行する場合、そのユーザーはプリンシパルと見なされます。ポリシーによって、プリンシパルに許可が付与されます。一部のサービスを使用する際に、アクションを実行することで、別のサービスの別のアクションがトリガーされることがあります。この場合、両方のアクションを実行するための許可が必要です。ポリシー内で、アクションに追加の依存アクションが必要かどうかを確認するには、「サービス認証リファレンス」の「[Amazon EMR on EKS のアクション、リソース、および条件キー](#)」を参照してください。
- サービスロール - サービスがユーザーに代わってアクションを実行するために引き受ける [IAM ロール](#)です。IAM 管理者は、IAM 内からサービスロールを作成、変更、削除できます。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[AWS のサービスにアクセス許可を委任するロールの作成](#)」を参照してください。
- サービスにリンクされたロール - サービスにリンクされたロールは、AWS のサービスにリンクされたサービスロールの一種です。サービスは、ユーザーに代わってアクションを実行するロールを引き受けることができます。サービスにリンクされたロールは、AWS アカウントに表示され、サービスによって所有されます。IAM 管理者は、サービスにリンクされたロールの許可を表示できますが、編集することはできません。
- Amazon EC2 で実行されているアプリケーション - EC2 インスタンスで実行され、AWS CLI または AWS API 要求を行っているアプリケーションの一時的な認証情報を管理するには、IAM ロールを使用できます。これは、EC2 インスタンス内でのアクセスキーの保存に推奨されます。AWS ロールを EC2 インスタンスに割り当て、そのすべてのアプリケーションで使用できるようにするには、インスタンスにアタッチされたインスタンスプロファイルを作成します。インスタンスプロファイルにはロールが含まれ、EC2 インスタンスで実行されるプログラムは一時的な認証情報を取得することができます。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[Amazon EC2 インスタンスで実行されるアプリケーションに IAM ロールを使用して許可を付与する](#)」を参照してください。

IAM ロールと IAM ユーザーのどちらを使用するかについては、「IAM ユーザーガイド」の「[\(IAM ユーザーではなく\) IAM ロールをいつ作成したら良いのか?](#)」を参照してください。

ポリシーを使用したアクセスの管理

AWS でアクセスをコントロールするには、ポリシーを作成して AWS アイデンティティまたはリソースにアタッチします。ポリシーは AWS のオブジェクトであり、アイデンティティやリソースに関連付けて、これらのアクセス許可を定義します。AWS は、プリンシパル (ユーザー、ルートユーザー、またはロールセッション) がリクエストを行うと、これらのポリシーを評価します。ポリシーでの許可により、リクエストが許可されるか拒否されるかが決まります。大半のポリシーは JSON

ドキュメントとして AWS に保存されます。JSON ポリシードキュメントの構造と内容の詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[JSON ポリシー概要](#)」を参照してください。

管理者は AWS JSON ポリシーを使用して、誰が何にアクセスできるかを指定できます。つまり、どのプリンシパルがどのリソースに対してどのような条件下でアクションを実行できるかということです。

デフォルトでは、ユーザーやロールにアクセス許可はありません。IAM 管理者は、リソースに必要なアクションを実行するためのアクセス許可をユーザーに付与する IAM ポリシーを作成できます。その後、管理者はロールに IAM ポリシーを追加し、ユーザーはロールを引き受けることができます。

IAM ポリシーは、オペレーションの実行方法を問わず、アクションの許可を定義します。例えば、iam:GetRole アクションを許可するポリシーがあるとします。このポリシーがあるユーザーは、AWS Management Console、AWS CLI、または AWS API からロールの情報を取得できます。

アイデンティティベースのポリシー

アイデンティティベースポリシーは、IAM ユーザー、ユーザーのグループ、ロールなど、アイデンティティにアタッチできる JSON 許可ポリシードキュメントです。これらのポリシーは、ユーザーとロールが実行できるアクション、リソース、および条件を制御します。アイデンティティベースのポリシーを作成する方法については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ポリシーの作成](#)」を参照してください。

アイデンティティベースのポリシーは、さらにインラインポリシーまたはマネージドポリシーに分類できます。インラインポリシーは、単一のユーザー、グループ、またはロールに直接埋め込まれます。マネージドポリシーは、AWS アカウント内の複数のユーザー、グループ、およびロールにアタッチできるスタンドアロンポリシーです。マネージドポリシーには、AWS マネージドポリシーとカスタマーマネージドポリシーがあります。マネージドポリシーまたはインラインポリシーのいずれかを選択する方法については、「IAM ユーザーガイド」の「[マネージドポリシーとインラインポリシーの比較](#)」を参照してください。

リソースベースのポリシー

リソースベースのポリシーは、リソースにアタッチする JSON ポリシードキュメントです。リソースベースのポリシーには例として、IAM ロールの信頼ポリシーや Amazon S3 バケットポリシーがあげられます。リソースベースのポリシーをサポートするサービスでは、サービス管理者はポリシーを使用して特定のリソースへのアクセスを制御できます。ポリシーが添付されているリソースの場合、指定されたプリンシパルがそのリソースに対して実行できるアクションと条件は、ポリシーによっ

で定義されます。リソースベースのポリシーで、[プリンシパルを指定する](#)必要があります。プリンシパルには、アカウント、ユーザー、ロール、フェデレーテッドユーザー、または AWS のサービスを含めることができます。

リソースベースのポリシーは、そのサービス内にあるインラインポリシーです。リソースベースのポリシーでは IAM の AWS マネージドポリシーは使用できません。

アクセスコントロールリスト (ACL)

アクセスコントロールリスト (ACL) は、どのプリンシパル (アカウントメンバー、ユーザー、またはロール) がリソースにアクセスするための許可を持つかをコントロールします。ACL はリソースベースのポリシーに似ていますが、JSON ポリシードキュメント形式は使用しません。

Simple Storage Service (Amazon S3)、AWS WAF、および Amazon VPC は、ACL をサポートするサービスの例です。ACL の詳細については、「Amazon Simple Storage Service デベロッパガイド」の「[アクセスコントロールリスト \(ACL\) の概要](#)」を参照してください。

その他のポリシータイプ

AWS では、その他の一般的ではないポリシータイプもサポートしています。これらのポリシータイプでは、より一般的なポリシータイプで付与された最大の許可を設定できます。

- **アクセス許可の境界** - アクセス許可の境界は、アイデンティティベースのポリシーによって IAM エンティティ (IAM ユーザーまたはロール) に付与できる許可の上限を設定する高度な機能です。エンティティにアクセス許可の境界を設定できます。結果として得られるアクセス許可は、エンティティのアイデンティティベースポリシーとそのアクセス許可の境界の共通部分になります。Principal フィールドでユーザーまたはロールを指定するリソースベースのポリシーでは、アクセス許可の境界は制限されません。これらのポリシーのいずれかを明示的に拒否した場合、許可は無効になります。アクセス許可の境界の詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM エンティティのアクセス許可の境界](#)」を参照してください。
- **サービスコントロールポリシー (SCP)** - SCP は、AWS Organizations で組織や組織単位 (OU) の最大許可を指定する JSON ポリシーです。AWS Organizations は、顧客のビジネスが所有する複数の AWS アカウントをグループ化し、一元的に管理するサービスです。組織内のすべての機能を有効にすると、サービスコントロールポリシー (SCP) を一部またはすべてのアカウントに適用できます。SCP はメンバーアカウントのエンティティに対するアクセス許可を制限します (各 AWS アカウントのルートユーザーなど)。Organizations と SCP の詳細については、AWS Organizations ユーザーガイドの「[SCP の仕組み](#)」を参照してください。
- **セッションポリシー** - セッションポリシーは、ロールまたはフェデレーテッドユーザーの一時的なセッションをプログラムで作成する際にパラメータとして渡す高度なポリシーです。結果として

セッションの許可される範囲は、ユーザーまたはロールのアイデンティティベースポリシーとセッションポリシーの共通部分になります。また、リソースベースのポリシーから許可が派生する場合があります。これらのポリシーのいずれかを明示的に拒否した場合、許可は無効になります。詳細については、IAM ユーザーガイドの「[セッションポリシー](#)」を参照してください。

複数のポリシータイプ

1つのリクエストに複数のタイプのポリシーが適用されると、結果として作成される許可を理解するのがさらに難しくなります。複数のポリシータイプが関連するとき、リクエストを許可するかどうかをAWSが決定する方法の詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[ポリシーの評価ロジック](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS で IAM を使用する方法

IAM を使用して Amazon EMR on EKS へのアクセスを管理する前に、Amazon EMR on EKS で使用できる IAM 機能について理解しておく必要があります。

Amazon EMR on EKS で使用できる IAM の機能

IAM 機能	Amazon EMR on EKS のサポート
アイデンティティベースのポリシー	はい
リソースベースのポリシー	いいえ
ポリシーアクション	はい
ポリシーリソース	はい
ポリシー条件キー	はい
ACL	いいえ
ABAC (ポリシー内のタグ)	Yes
一時的な認証情報	はい
プリンシパル許可	はい
サービスロール	No

IAM 機能	Amazon EMR on EKS のサポート
サービスにリンクされたロール	Yes

大部分の IAM 機能が Amazon EMR on EKS および AWS のその他のサービスでどのように機能するかに関するおおまかな説明については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM と連携する AWS のサービス](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS のアイデンティティベースの ポリシー

アイデンティティベースのポリシーのサポート はい

アイデンティティベースポリシーは、IAM ユーザー、ユーザーグループ、ロールなど、アイデンティティにアタッチできる JSON アクセス許可ポリシードキュメントです。これらのポリシーは、ユーザーとロールが実行できるアクション、リソース、および条件を制御します。アイデンティティベースのポリシーを作成する方法については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ポリシーの作成](#)」を参照してください。

IAM アイデンティティベースのポリシーでは、許可または拒否するアクションとリソース、アクションを許可または拒否する条件を指定できます。プリンシパルは、それが添付されているユーザーまたはロールに適用されるため、アイデンティティベースのポリシーでは指定できません。JSON ポリシーで使用できるすべての要素について学ぶには、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM JSON ポリシーの要素のリファレンス](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS のアイデンティティベースのポリシーの例

Amazon EMR on EKS のアイデンティティベースのポリシーの例は、「[Amazon EMR on EKS のアイデンティティベースのポリシーの例](#)」でご確認ください。

Amazon EMR on EKS 内のリソースベースのポリシー

リソースベースのポリシーのサポート いいえ

リソースベースのポリシーは、リソースにアタッチする JSON ポリシードキュメントです。リソースベースのポリシーには例として、IAM ロールの信頼ポリシーや Amazon S3 バケットポリシーがあ

げられます。リソースベースのポリシーをサポートするサービスでは、サービス管理者はポリシーを使用して特定のリソースへのアクセスを制御できます。ポリシーが添付されているリソースの場合、指定されたプリンシパルがそのリソースに対して実行できるアクションと条件は、ポリシーによって定義されます。リソースベースのポリシーで、[プリンシパルを指定する](#)必要があります。プリンシパルには、アカウント、ユーザー、ロール、フェデレーテッドユーザー、または AWS のサービスを含めることができます。

クロスアカウントアクセスを有効にするには、全体のアカウント、または別のアカウントの IAM エンティティを、リソースベースのポリシーのプリンシパルとして指定します。リソースベースのポリシーにクロスアカウントのプリンシパルを追加しても、信頼関係は半分しか確立されない点に注意してください。プリンシパルとリソースが異なる AWS アカウントにある場合、信頼できるアカウントの IAM 管理者は、リソースにアクセスするための許可をプリンシパルエンティティ (ユーザーまたはロール) に付与する必要もあります。IAM 管理者は、アイデンティティベースのポリシーをエンティティにアタッチすることで許可を付与します。ただし、リソースベースのポリシーで、同じアカウントのプリンシパルへのアクセス権が付与されている場合は、ID ベースのポリシーをさらに付与する必要はありません。詳細については、IAM ユーザーガイドの「[IAM ロールとリソースベースのポリシーとの相違点](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS のポリシーアクション

ポリシーアクションに対するサポート	はい
-------------------	----

管理者は AWS JSON ポリシーを使用して、だれが何にアクセスできるかを指定できます。つまり、どのプリンシパルがどのリソースに対してどのような条件下でアクションを実行できるかということです。

JSON ポリシーの Action 要素には、ポリシー内のアクセスを許可または拒否するために使用できるアクションが記述されます。ポリシーアクションの名前は通常、関連する AWS API オペレーションと同じです。一致する API オペレーションのない許可のみのアクションなど、いくつかの例外があります。また、ポリシーに複数のアクションが必要なオペレーションもあります。これらの追加アクションは、依存アクションと呼ばれます。

このアクションは、関連付けられたオペレーションを実行するための許可を付与するポリシーで使用されます。

Amazon EMR on EKS のアクションのリストについては、「サービス認証リファレンス」の「[Amazon EMR on EKS のアクション、リソース、および条件キー](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS のポリシーアクションは、アクションの前に次のプレフィックスを使用します。

```
emr-containers
```

単一のステートメントで複数のアクションを指定するには、アクションをカンマで区切ります。

```
"Action": [  
  "emr-containers:action1",  
  "emr-containers:action2"  
]
```

Amazon EMR on EKS のアイデンティティベースのポリシーの例は、「[Amazon EMR on EKS のアイデンティティベースのポリシーの例](#)」でご確認ください。

Amazon EMR on EKS のポリシーリソース

ポリシーリソースに対するサポート	はい
------------------	----

管理者は AWS JSON ポリシーを使用して、だれが何にアクセスできるかを指定できます。つまり、どのプリンシパルがどのリソースに対してどのような条件下でアクションを実行できるかということです。

Resource JSON ポリシー要素は、オブジェクトあるいはアクションが適用されるオブジェクトを指定します。ステートメントには、Resource または NotResource 要素を含める必要があります。ベストプラクティスとして、[Amazon リソースネーム \(ARN\)](#) を使用してリソースを指定します。これは、リソースレベルの許可と呼ばれる特定のリソースタイプをサポートするアクションに対して実行できます。

オペレーションのリスト化など、リソースレベルの許可をサポートしないアクションの場合は、ステートメントがすべてのリソースに適用されることを示すために、ワイルドカード (*) を使用します。

```
"Resource": "*" 
```

Amazon EMR on EKS リソースのタイプとその ARN のリストを確認するには、「サービス認証リファレンス」の「[Amazon EMR on EKS で定義されるリソース](#)」を参照してください。各リソース

の ARN を指定できるアクションについては、「[Amazon EMR on EKS のアクション、リソース、および条件キー](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS のアイデンティティベースのポリシーの例は、「[Amazon EMR on EKS のアイデンティティベースのポリシーの例](#)」でご確認ください。

Amazon EMR on EKS のポリシー条件キー

サービス固有のポリシー条件キーのサポート	Yes
----------------------	-----

管理者は AWS JSON ポリシーを使用して、だれが何にアクセスできるかを指定できます。つまり、どのプリンシパルがどのリソースに対してどのような条件下でアクションを実行できるかということです。

Condition 要素 (または Condition ブロック) を使用すると、ステートメントが有効な条件を指定できます。Condition 要素はオプションです。イコールや未満などの[条件演算子](#)を使用して条件式を作成することで、ポリシーの条件とリクエスト内の値を一致させることができます。

1 つのステートメントに複数の Condition 要素を指定する場合、または 1 つの Condition 要素に複数のキーを指定する場合、AWS では AND 論理演算子を使用してそれら进行评估します。単一の条件キーに複数の値を指定する場合、AWS では OR 論理演算子を使用して条件进行评估します。ステートメントの許可が付与される前にすべての条件が満たされる必要があります。

条件を指定する際にプレースホルダー変数も使用できます。例えば IAM ユーザーに、IAM ユーザー名がタグ付けされている場合のみリソースにアクセスできる許可を付与することができます。詳細については、IAM ユーザーガイドの「[IAM ポリシーの要素: 変数およびタグ](#)」を参照してください。

AWS はグローバル条件キーとサービス固有の条件キーをサポートしています。すべての AWS グローバル条件キーを確認するには、IAM ユーザーガイドの「[AWS グローバル条件コンテキストキー](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS の条件キーのリスト、および条件キーを使用できるアクションとリソースについては、「サービス認証リファレンス」の「[Amazon EMR on EKS のアクション、リソース、および条件キー](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS のアイデンティティベースのポリシーの例は、「[Amazon EMR on EKS のアイデンティティベースのポリシーの例](#)」でご確認ください。

Amazon EMR on EKS アクセスコントロールリスト (ACL)

ACL のサポート	いいえ
-----------	-----

アクセスコントロールリスト (ACL) は、どのプリンシパル (アカウントメンバー、ユーザー、またはロール) がリソースにアクセスするための許可を持つかを制御します。ACL はリソースベースのポリシーに似ていますが、JSON ポリシードキュメント形式は使用しません。

Amazon EMR on EKS での属性ベースのアクセスコントロール (ABAC)

ABAC (ポリシー内のタグ) のサポート	Yes
-----------------------	-----

属性ベースのアクセス制御 (ABAC) は、属性に基づいて許可を定義する認可戦略です。AWS では、属性はタグと呼ばれます。タグは、IAM エンティティ (ユーザーまたはロール)、および多数の AWS リソースにアタッチできます。エンティティとリソースのタグ付けは、ABAC の最初のステップです。その後、プリンシパルのタグがアクセスしようとしているリソースのタグと一致した場合に操作を許可するように ABAC ポリシーをします。

ABAC は、急速に成長している環境でポリシー管理が面倒な状況に役立ちます。

タグに基づいてアクセスを管理するには、`aws:ResourceTag/key-name`、`aws:RequestTag/key-name`、または `aws:TagKeys` の条件キーを使用して、ポリシーの [条件要素](#) でタグ情報を提供します。

サービスがすべてのリソースタイプに対して 3 つの条件キーすべてをサポートする場合、そのサービスの値ははいです。サービスが一部のリソースタイプに対してのみ 3 つの条件キーすべてをサポートする場合、値は部分的です。

ABAC の詳細については、IAM ユーザーガイドの「[ABAC とは?](#)」を参照してください。ABAC を設定する手順を示したチュートリアルを表示するには、IAM ユーザーガイドの「[属性ベースのアクセスコントロール \(ABAC\) を使用する](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS での一時認証情報の使用

一時認証情報のサポート	はい
-------------	----

AWS のサービスには、一時認証情報を使用してサインインしても機能しないものがあります。一時的な認証情報を利用できる AWS のサービスを含めた詳細情報については、IAM ユーザーガイドの「[IAM と連携する AWS のサービス](#)」を参照してください。

ユーザー名とパスワード以外の方法で AWS Management Console にサインインする場合は、一時認証情報を使用していることとなります。例えば、会社の Single Sign-On (SSO) リンクを使用して AWS にアクセスすると、そのプロセスは自動的に一時認証情報を作成します。また、ユーザーとしてコンソールにサインインしてからロールを切り替える場合も、一時認証情報が自動的に作成されます。ロールの切り替えに関する詳細については、IAM ユーザーガイドの「[ロールへの切り替え \(コンソール\)](#)」を参照してください。

一時認証情報は、AWS CLI または AWS API を使用して手動で作成できます。作成後、一時認証情報を使用して AWS にアクセスできるようになります。AWS は、長期的なアクセスキーを使用する代わりに、一時認証情報を動的に生成することをお勧めします。詳細については、「[IAM の一時的セキュリティ認証情報](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS のクロスサービスプリンシパル許可

プリンシパル許可のサポート	はい
---------------	----

IAM ユーザーまたはロールを使用して AWS でアクションを実行するユーザーは、プリンシパルと見なされます。ポリシーは、プリンシパルにアクセス許可を付与します。一部のサービスを使用する際に、アクションを実行することで、別のサービスの別のアクションがトリガーされることがあります。この場合、両方のアクションを実行するための許可が必要です。ポリシー内で、アクションに追加の依存アクションが必要かどうかを確認するには、「サービス認証リファレンス」の「[Amazon EMR on EKS のアクション、リソース、および条件キー](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS のサービスロール

サービスロールに対するサポート	No
-----------------	----

Amazon EMR on EKS のサービスにリンクされたロール

サービスにリンクされたロールのサポート	Yes
---------------------	-----

サービスにリンクされたロールの作成または管理の詳細については、[IAM と提携する AWS のサービス](#)」を参照してください。表の中から、[Service-linked role] (サービスにリンクされたロール) 列に Yes と記載されたサービスを見つけます。サービスにリンクされたロールに関するドキュメントをサービスで表示するには、[Yes] (はい) リンクを選択します。

Amazon EMR on EKS でのサービスにリンクされたロールの使用

Amazon EMR on EKS は、AWS Identity and Access Management (IAM) の[サービスにリンクされたロール](#)を使用しています。サービスにリンクされたロールは、Amazon EMR on EKS に直接リンクされた一意のタイプの IAM ロールです。サービスにリンクされたロールは、Amazon EMR on EKS で事前定義されています。このロールには、サービスがユーザーに代わって他の AWS のサービスを呼び出すために必要な、すべてのアクセス許可が付与されています。

サービスにリンクされたロールを使用すると、必要なアクセス許可を手動で追加する必要がなくなるため、Amazon EMR on EKS の設定が簡単になります。サービスにリンクされたロールのアクセス許可は、Amazon EMR on EKS により定義されます。特に指定されている場合を除き、Amazon EMR on EKS のみはそのロールを引き受けることができます。定義される許可には、信頼ポリシーと許可ポリシーが含まれており、その許可ポリシーを他の IAM エンティティにアタッチすることはできません。

サービスにリンクされたロールは、まずその関連リソースを削除しなければ削除できません。これにより、リソースへのアクセス許可を誤って削除することが防止され、Amazon EMR on EKS リソースが保護されます。

サービスにリンクされたロールをサポートする他のサービスについては、「[IAM と連携する AWS のサービス](#)」を参照して、サービスにリンクされたロール列がはいになっているサービスを確認してください。サービスにリンクされたロールに関するドキュメントをサービスで表示するには、[Yes] (はい) リンクを選択します。


Amazon EMR on EKS でのサービスにリンクされたロールのアクセス許可

Amazon EMR on EKS では、サービスにリンクされたロール `AWSServiceRoleForAmazonEMRContainers` を使用します。

`AWSServiceRoleForAmazonEMRContainers` サービスにリンクされたロールは、ロールの引き受けについて以下のサービスを信頼します。

- `emr-containers.amazonaws.com`

ロールのアクセス許可ポリシー AmazonEMRContainersServiceRolePolicy は、以下のポリシーステートメントで示すように、指定したリソースに対して一連のアクションを実行することを Amazon EMR on EKS に許可します。

 Note

マネージドポリシーの内容は変わるため、ここに示すポリシーは古くなっている可能性があります。AWS Management Console で、最新のポリシー [AmazonEMRContainersServiceRolePolicy](#) を確認してください。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "eks:DescribeCluster",
        "eks:ListNodeGroups",
        "eks:DescribeNodeGroup",
        "ec2:DescribeRouteTables",
        "ec2:DescribeSubnets",
        "ec2:DescribeSecurityGroups",
        "elasticloadbalancing:DescribeInstanceHealth",
        "elasticloadbalancing:DescribeLoadBalancers",
        "elasticloadbalancing:DescribeTargetGroups",
        "elasticloadbalancing:DescribeTargetHealth"
      ],
      "Resource": "*"
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "acm:ImportCertificate",
        "acm:AddTagsToCertificate"
      ],
      "Resource": "*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "aws:RequestTag/emr-container:endpoint:managed-certificate": "true"
        }
      }
    }
  ]
}
```

```
    },
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "acm:DeleteCertificate"
      ],
      "Resource": "*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "aws:ResourceTag/emr-container:endpoint:managed-certificate":
"true"
        }
      }
    }
  ]
}
```

サービスにリンクされたロールの作成、編集、削除をIAM エンティティ (ユーザー、グループ、ロールなど) に許可するには、許可を設定する必要があります。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[サービスにリンクされたロールの許可](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS でのサービスにリンクされたロールの作成

サービスにリンクされたロールを手動で作成する必要はありません。サービスにリンクされたロールは、仮想クラスターの作成時に Amazon EMR on EKS によって自動的に作成されます。

このサービスにリンクされたロールを削除した後で再度作成する必要がある場合は、同じ方法でアカウントにロールを再作成できます。サービスにリンクされたロールは、仮想クラスターの作成時に Amazon EMR on EKS によって再度作成されます。

IAM コンソールを使用して、Amazon EMR on EKS ユースケースでサービスにリンクされたロールを作成することもできます。AWS CLI または AWS API で、`emr-containers.amazonaws.com` サービス名を使用してサービスリンクロールを作成します。詳細については、IAM ユーザーガイドの「[サービスリンクロールの作成](#)」を参照してください。このサービスリンクロールを削除する場合、この同じプロセスを使用して、もう一度ロールを作成できます。

Amazon EMR on EKS でのサービスにリンクされたロールの編集

Amazon EMR on EKS では、`AWSServiceRoleForAmazonEMRContainers` のサービスにリンクされたロールを編集することはできません。サービスにリンクされたロールを作成すると、多くのエンティティによってロールが参照される可能性があるため、ロール名を変更することはできません。た

だし、IAM を使用したロールの説明の編集はできません。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[サービスにリンクされたロールの編集](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS でのサービスにリンクされたロールの削除

サービスにリンクされたロールが必要な機能またはサービスが不要になった場合には、そのロールを削除することをお勧めします。そうすることで、積極的にモニタリングまたは保守されていない未使用のエンティティを排除できます。ただし、手動で削除する前に、サービスにリンクされたロールのリソースをクリーンアップする必要があります。

Note

リソースの削除を試みた際に、対応するロールが Amazon EMR on EKS サービスで使用されている場合、削除が失敗することがあります。失敗した場合は、数分待ってから操作を再試行してください。

AWSServiceRoleForAmazonEMRContainers で使用されている Amazon EMR on EKS リソースを削除するには

1. Amazon EMR コンソールを開きます。
2. 仮想クラスターを選択します。
3. Virtual Cluster ページで、[削除] を選択します。
4. この手順をアカウント内の他のすべての仮想クラスターに対して繰り返します。

IAM を使用してサービスリンクロールを手動で削除するには

IAM コンソール、AWS CLI、または AWS API を使用して、AWSServiceRoleForAmazonEMRContainers サービスリンクロールを削除します。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[サービスにリンクされたロールの削除](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS のサービスにリンクされたロールがサポートされるリージョン

Amazon EMR on EKS では、このサービスを利用できるすべてのリージョンで、サービスにリンクされたロールの使用がサポートされます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイントとサービスクォータ](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS の管理ポリシー

2021 年 3 月 1 日以降に行われた、Amazon EMR on EKS の AWS 管理ポリシーへの更新についての詳細を表示します。

変更	説明	日付
AmazonEMRContainerServiceRolePolicy - Amazon EKS ノードグループの説明と一覧表示、ロードバランサーのターゲットグループの説明、ロードバランサーのターゲットヘルスの説明を行う権限を追加しました。	以下の権限がポリシーに追加されます: eks:ListNodeGroups、eks:DescribeNodeGroup、elasticloadbalancing:DescribeTargetGroups、elasticloadbalancing:DescribeTargetHealth。	2023 年 3 月 13 日
AmazonEMRContainerServiceRolePolicy - AWS Certificate Manager に証明書をインポートおよび削除する権限を追加しました。	以下の権限がポリシーに追加されます: acm:ImportCertificate、acm:AddTagsToCertificate、acm>DeleteCertificate。	2021 年 12 月 3 日
Amazon EMR on EKS が変更の追跡を開始しました	Amazon EMR on EKS が AWS 管理ポリシーの変更の追跡を開始しました。	2021 年 3 月 1 日

Amazon EMR on EKS でのジョブ実行ロールの使用

StartJobRun コマンドを使用して EKS クラスターでのジョブ実行を送信するには、まず、仮想クラスターで使用するジョブ実行ロールをオンボーディングする必要があります。詳細については、「」の [ジョブ実行ロールを作成する](#) を参照してください。また、Amazon EMR on EKS Workshop の「[Create IAM Role for job execution](#)」セクションの指示に従うこともできます。

ジョブ実行ロールの信頼ポリシーに、次のアクセス許可を含める必要があります。

```
{
```

```

"Version": "2012-10-17",
"Statement": [
  {
    "Effect": "Allow",
    "Principal": {
      "Federated": "arn:aws:iam::AWS_ACCOUNT_ID:oidc-provider/OIDC_PROVIDER"
    },
    "Action": "sts:AssumeRoleWithWebIdentity",
    "Condition": {
      "StringLike": {
        "OIDC_PROVIDER:sub": "system:serviceaccount:NAMESPACE:emr-containers-sa-*-*AWS_ACCOUNT_ID-BASE36_ENCODED_ROLE_NAME"
      }
    }
  }
]
}

```

前述の例の信頼ポリシーでは、名前が `emr-containers-sa-*-`

`*-AWS_ACCOUNT_ID-BASE36_ENCODED_ROLE_NAME` パターンに一致する Amazon EMR 管理の Kubernetes サービスアカウントにのみ権限が付与されます。このパターンのサービスアカウントは、ジョブの送信時に自動的に作成され、ジョブが送信される名前空間にスコープされます。この信頼ポリシーにより、これらのサービスアカウントは実行ロールを引き受けて、実行ロールの一時認証情報を取得できます。別の Amazon EKS クラスターのサービスアカウントや、同じ EKS クラスター内の別の名前空間のサービスアカウントは、実行ロールを引き受けることができません。

次のコマンドを実行すると、上記の形式で信頼ポリシーを自動的に更新できます。

```

aws emr-containers update-role-trust-policy \
  --cluster-name cluster \
  --namespace namespace \
  --role-name iam_role_name_for_job_execution

```

実行ロールへのアクセスの制御

Amazon EKS クラスターの管理者は、IAM 管理者が複数の実行ロールを追加できるマルチテナントの Amazon EMR on EKS 仮想クラスターを作成できます。信頼できないテナントであっても、こうした実行ロールを使用して、任意のコードを実行するジョブを送信できます。そのため、信頼できないテナントではこうした実行ロールの 1 つ以上に割り当てられた権限を取得するコードを実行できないように制限することをお勧めします。IAM ID にアタッチされている IAM ポリ

シーを制限する場合、IAM 管理者はオプションの Amazon リソースネーム (ARN) 条件キー `emr-containers:ExecutionRoleArn` を使用できます。この条件は、次の権限ポリシーで示すように、仮想クラスターに対する権限を持つ実行ロール ARN のリストを受け入れます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "emr-containers:StartJobRun",
      "Resource": "arn:aws:emr-containers:REGION:AWS_ACCOUNT_ID:/
virtualclusters/VIRTUAL_CLUSTER_ID",
      "Condition": {
        "ArnEquals": {
          "emr-containers:ExecutionRoleArn": [
            "execution_role_arn_1",
            "execution_role_arn_2",
            ...
          ]
        }
      }
    }
  ]
}
```

MyRole など特定のプレフィックスで始まるすべての実行ロールを許可する場合は、条件演算子 `ArnEquals` を演算子 `ArnLike` に置き換えることができるほか、条件内の `execution_role_arn` 値をワイルドカード文字 `*` に置き換えることができます。例えば、`arn:aws:iam::AWS_ACCOUNT_ID:role/MyRole*` です。[その他の ARN 条件キー](#) もすべてサポートされています。

Note

Amazon EMR on EKS では、タグや属性に基づいて実行ロールに権限を付与することはできません。Amazon EMR on EKS は、実行ロールに対してタグベースのアクセスコントロール (TBAC) や属性ベースのアクセスコントロール (ABAC) をサポートしていません。

Amazon EMR on EKS のアイデンティティベースのポリシーの例

デフォルトでは、ユーザーおよびロールには Amazon EMR on EKS リソースを作成または変更するアクセス権はありません。また、AWS Management Console、AWS Command Line Interface (AWS CLI)、または AWS API を使用してタスクを実行することもできません。IAM 管理者は、リソースで必要なアクションを実行するためのアクセス許可をユーザーに付与する IAM ポリシーを作成できます。その後、管理者はロールに IAM ポリシーを追加し、ユーザーはロールを引き継ぐことができます。

これらサンプルの JSON ポリシードキュメントを使用して、IAM アイデンティティベースのポリシーを作成する方法については、IAM ユーザーガイドの「[IAM ポリシーの作成](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS が定義するアクションとリソースタイプ (リソースタイプごとの ARN の形式を含む) の詳細については、「サービス認可リファレンス」の「[Amazon EMR on EKS のアクション、リソース、および条件キー](#)」を参照してください。

トピック

- [ポリシーのベストプラクティス](#)
- [Amazon EMR on EKS コンソールの使用](#)
- [自分の許可の表示をユーザーに許可する](#)

ポリシーのベストプラクティス

アイデンティティベースのポリシーは、アカウント内で誰かが Amazon EMR on EKS リソースを作成、アクセス、または削除できるかどうかを決定します。これらのアクションを実行すると、AWS アカウントに追加料金が発生する可能性があります。アイデンティティベースポリシーを作成したり編集したりする際には、以下のガイドラインと推奨事項に従ってください。

- AWS マネージドポリシーを使用して開始し、最小特権の許可に移行する – ユーザーとワークロードへの許可の付与を開始するには、多くの一般的なユースケースのために許可を付与する AWS マネージドポリシーを使用します。これらは AWS アカウントで使用できます。ユースケースに応じた AWS カスタマーマネージドポリシーを定義することで、許可をさらに減らすことをお勧めします。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[AWS マネージドポリシー](#)」または「[AWS ジョブ機能の管理ポリシー](#)」を参照してください。
- 最小特権を適用する – IAM ポリシーで許可を設定するときは、タスクの実行に必要な許可のみを付与します。これを行うには、特定の条件下で特定のリソースに対して実行できるアクションを定

義します。これは、最小特権アクセス許可とも呼ばれています。IAM を使用して許可を適用する方法の詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM でのポリシーとアクセス許可](#)」を参照してください。

- IAM ポリシーで条件を使用してアクセスをさらに制限する – ポリシーに条件を追加して、アクションやリソースへのアクセスを制限できます。例えば、ポリシー条件を記述して、すべてのリクエストを SSL を使用して送信するように指定することができます。また、AWS のサービスなどの特定の AWS CloudFormation を介して使用する場合、条件を使用してサービスアクションへのアクセスを許可することもできます。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM JSON policy elements: Condition](#)」(IAM JSON ポリシー要素 : 条件) を参照してください。
- IAM Access Analyzer を使用して IAM ポリシーを検証し、安全で機能的な許可を確保する - IAM Access Analyzer は、新規および既存のポリシーを検証して、ポリシーが IAM ポリシー言語 (JSON) および IAM のベストプラクティスに準拠するようにします。IAM Access Analyzer は 100 を超えるポリシーチェックと実用的な推奨事項を提供し、安全で機能的なポリシーを作成できるようサポートします。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM Access Analyzer ポリシーの検証](#)」を参照してください。
- 多要素認証 (MFA) を要求する – AWS アカウントで IAM ユーザーまたはルートユーザーを要求するシナリオがある場合は、セキュリティを強化するために MFA をオンにします。API オペレーションが呼び出されるときに MFA を必須にするには、ポリシーに MFA 条件を追加します。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[MFA 保護 API アクセスの設定](#)」を参照してください。

IAM でのベストプラクティスの詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM でのセキュリティのベストプラクティス](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS コンソールの使用

Amazon EMR on EKS コンソールにアクセスするには、一連の最小限のアクセス許可が必要です。これらのアクセス許可により、AWS アカウント アカウントの Amazon EMR on EKS リソースの詳細をリストおよび表示することを許可する必要があります。最小限必要な許可よりも制限が厳しいアイデンティティベースのポリシーを作成すると、そのポリシーを持つエンティティ (ユーザーまたはロール) に対してコンソールが意図したとおりに機能しません。

AWS CLI または AWS API のみを呼び出すユーザーには、最小限のコンソール許可を付与する必要はありません。代わりに、実行しようとしている API オペレーションに一致するアクションのみへのアクセスが許可されます。

ユーザーとロールが引き続き Amazon EMR on EKS コンソールを使用できるようにするには、エンティティに Amazon EMR on EKS ConsoleAccess または ReadOnly AWS 管理ポリシーもアタッ

ちします。詳細については、IAM ユーザーガイドの「[ユーザーへの許可の追加](#)」を参照してください。

自分の許可の表示をユーザーに許可する

この例では、ユーザーアイデンティティに添付されたインラインおよびマネージドポリシーの表示を IAM ユーザーに許可するポリシーを作成する方法を示します。このポリシーには、コンソールで、または AWS CLI が AWS API を使用してプログラマ的に、このアクションを完了するアクセス許可が含まれています。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Sid": "ViewOwnUserInfo",
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "iam:GetUserPolicy",
        "iam:ListGroupForUser",
        "iam:ListAttachedUserPolicies",
        "iam:ListUserPolicies",
        "iam:GetUser"
      ],
      "Resource": ["arn:aws:iam::*:user/${aws:username}"]
    },
    {
      "Sid": "NavigateInConsole",
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "iam:GetGroupPolicy",
        "iam:GetPolicyVersion",
        "iam:GetPolicy",
        "iam:ListAttachedGroupPolicies",
        "iam:ListGroupPolicies",
        "iam:ListPolicyVersions",
        "iam:ListPolicies",
        "iam:ListUsers"
      ],
      "Resource": "*"
    }
  ]
}
```

タグベースのアクセスコントロールのポリシー

アイデンティティベースのポリシーで条件を使用し、タグに基づいて仮想クラスターおよびジョブ実行へのアクセスを制御できます。タグ付けの詳細については、「[Amazon EMR on EKS リソースのタグ付け](#)」を参照してください。

次の例では、Amazon EMR on EKS 条件キーで条件演算子を使用するさまざまなシナリオと方法について説明しています。これらの IAM ポリシーステートメントは、デモンストレーションのみを目的としており、本稼働環境で使用しないでください。要件に応じて、アクセス権限を付与または拒否するようにポリシーステートメントを組み合わせる複数の方法があります。IAM ポリシーの計画およびテストの詳細については、「[IAM ユーザーガイド](#)」を参照してください。

Important

アクションをタグ付けするための権限を明示的に拒否することは重要な考慮事項です。これにより、ユーザーがリソースをタグ付けして意図せずにアクセス許可を付与することを防ぎます。リソースのタグ付けアクションが拒否されない場合、ユーザーはタグを変更して、タグベースのポリシーの意図を回避できます。タグ付けアクションを拒否するポリシーの例については、「[タグを追加および削除するためのアクセス権限を拒否する](#)」を参照してください。

以下の例では、Amazon EMR on EKS 仮想クラスターで許可されるアクションを制御するために使用するアイデンティティベースの許可ポリシーを説明しています。

特定のタグの値があるリソースでのみアクションを許可する

次のポリシーの例では、StringEquals 条件演算子は、dev をタグ department の値と一致させるように試みます。タグ department が仮想クラスターに追加されていない、またはタグ department に値 dev が含まれていない場合は、ポリシーは適用されず、このアクションはポリシーによって許可されません。アクションを許可するポリシーステートメントが他にない場合は、ユーザーはこの値が含まれたこのタグのある仮想クラスターでのみ作業できます。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
```



```
{
  "Effect": "Allow",
  "Action": [
    "emr-containers:DescribeVirtualCluster"
  ],
  "Resource": "*",
  "Condition": {
    "StringEquals": {
      "aws:ResourceTag/department": "dev"
    }
  }
}
```

条件付き演算子を使用して複数のタグ値を指定できます。例えば、department タグに値 dev または test が含まれた仮想クラスターでアクションを許可するには、以下のように、前術の例の条件ブロックを置き換えることができます。

```
"Condition": {
  "StringEquals": {
    "aws:ResourceTag/department": ["dev", "test"]
  }
}
```

リソースの作成時にタグ付けを要求する

次の例では、仮想クラスターの作成時にタグを適用する必要があります。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": [
        "emr-containers:CreateVirtualCluster"
      ],
      "Resource": "*",
      "Condition": {
        "StringEquals": {
          "aws:RequestTag/department": "dev"
        }
      }
    }
  ]
}
```

```
    }  
  }  
]  
}
```

次のポリシーステートメントは、任意の値を含めることができる department タグがクラスターにある場合にのみ、ユーザーに仮想クラスターの作成を許可します。

```
{  
  "Version": "2012-10-17",  
  "Statement": [  
    {  
      "Effect": "Allow",  
      "Action": [  
        "emr-containers:CreateVirtualCluster"  
      ],  
      "Resource": "*",  
      "Condition": {  
        "Null": {  
          "aws:RequestTag/department": "false"  
        }  
      }  
    }  
  ]  
}
```

タグを追加および削除するためのアクセス権限を拒否する

このポリシーの効果は、department 値が含まれる dev タグでタグ付けされる仮想クラスターに任意のタグを追加または削除するアクセス許可を、ユーザーに対して拒否することにあります。

```
{  
  "Version": "2012-10-17",  
  "Statement": [  
    {  
      "Effect": "Deny",  
      "Action": [  
        "emr-containers:TagResource",  
        "emr-containers:UntagResource"  
      ],  
      "Resource": "*",  
      "Condition": {
```

```
    "StringNotEquals": {
      "aws:ResourceTag/department": "dev"
    }
  }
}
]
```

Amazon EMR on EKS の ID とアクセスのトラブルシューティング

以下の情報は、Amazon EMR on EKS と IAM の使用時に発生する可能性がある一般的な問題の診断や修正に役立ちます。

トピック

- [Amazon EMR on EKS でアクションを実行する認可がない](#)
- [iam:PassRole を実行することが認可されていません](#)
- [AWS アカウント以外のユーザーに Amazon EMR on EKS リソースへのアクセスを許可したい](#)

Amazon EMR on EKS でアクションを実行する認可がない

AWS Management Console から、アクションを実行することが認可されていないと通知された場合、管理者に問い合わせ、サポートを依頼する必要があります。担当の管理者はお客様のユーザー名とパスワードを発行した人です。

以下のエラー例は、mateojackson ユーザーがコンソールを使用して架空の *my-example-widget* リソースに関する詳細情報を表示しようとしているが、架空の `emr-containers:GetWidget` 許可がないという場合に発生します。

```
User: arn:aws:iam::123456789012:user/mateojackson is not authorized to perform: emr-containers:GetWidget on resource: my-example-widget
```

この場合、Mateo は、`emr-containers:GetWidget` アクションを使用して *my-example-widget* リソースへのアクセスが許可されるように、管理者にポリシーの更新を依頼します。

iam:PassRole を実行することが認可されていません

`iam:PassRole` アクションを実行する権限がないというエラーが表示された場合は、ポリシーを更新して Amazon EMR on EKS にロールを渡せるようにする必要があります。

一部の AWS のサービスでは、新しいサービスロールまたはサービスにリンクされたロールを作成せずに、既存のロールをサービスに渡すことが許可されています。そのためには、サービスにロールを渡す許可が必要です。

以下の例のエラーは、marymajor という IAM ユーザーがコンソールを使用して Amazon EMR on EKS でアクションを実行しようとする場合に発生します。ただし、このアクションをサービスが実行するには、サービスロールから付与されたアクセス許可が必要です。Mary には、ロールをサービスに渡す許可がありません。

```
User: arn:aws:iam::123456789012:user/marymajor is not authorized to perform:
iam:PassRole
```

この場合、メアリーのポリシーを更新してメアリーに iam:PassRole アクションの実行を許可する必要があります。

サポートが必要な場合は、AWS 管理者にお問い合わせください。サインイン資格情報を提供した担当者が管理者です。

AWS アカウント以外のユーザーに Amazon EMR on EKS リソースへのアクセスを許可したい

他のアカウントのユーザーや組織外のユーザーが、リソースにアクセスするために使用できるロールを作成できます。ロールの引き受けを委託するユーザーを指定することができます。リソースベースのポリシーまたはアクセス制御リスト (ACL) をサポートするサービスの場合、それらのポリシーを使用して、リソースへのアクセスを付与できます。

詳細については、以下を参照してください。

- Amazon EMR on EKS がこれらの機能をサポートしているかどうかについては、「[Amazon EMR on EKS で IAM を使用する方法](#)」を参照してください。
- 所有している AWS アカウント 全体のリソースへのアクセス権を提供する方法については、「IAM ユーザーガイド」の「[所有している別の AWS アカウント アカウントへのアクセス権を IAM ユーザーに提供](#)」を参照してください。
- サードパーティーの AWS アカウント にリソースへのアクセス権を提供する方法については、「IAM ユーザーガイド」の「[第三者が所有する AWS アカウント へのアクセス権を付与する](#)」を参照してください。
- ID フェデレーションを介してアクセスを提供する方法については、「IAM ユーザーガイド」の「[外部で認証されたユーザー \(ID フェデレーション\) へのアクセスの許可](#)」を参照してください。

- クロスアカウントアクセスでのロールとリソースベースのポリシーの使用の違いの詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ロールとリソースベースのポリシーとの相違点](#)」を参照してください。

ログ記録とモニタリング

インシデントを検出し、インシデントの発生時にアラートを受け取り、それらのアラートに対応するには、以下のオプションを Amazon EMR on EKS で使用します。

- Amazon EMR on EKS を AWS CloudTrail で監視する - [AWS CloudTrail](#) は、Amazon EMR on EKS でユーザー、ロール、または AWS サービスによって実行されたアクションのレコードを提供します。Amazon EMR コンソールからの呼び出しと Amazon EMR on EKS API オペレーションへのコード呼び出しがイベントとしてキャプチャされます。これにより、Amazon EMR on EKS に対するリクエスト、リクエスト元の IP アドレス、リクエストの実行者、リクエスト日時などの詳細を把握できます。詳細については、「[AWS CloudTrail を使用した Amazon EMR on EKS API コールのログ記録](#)」を参照してください。
- Amazon EMR on EKS で CloudWatch Events を使用する - CloudWatch Events は、AWS リソースでの変更を説明するシステムイベントのほぼリアルタイムのストリーミングを提供します。CloudWatch Events は、運用上の変更が生じると同時にそれらを認識して対応し、環境に応答するためのメッセージを送信する、機能をアクティブ化する、変更を行う、および状態情報を収集することによって、必要に即した是正措置を講じます。Amazon EMR on EKS で CloudWatch Events を使用するには、CloudTrail 経由で Amazon EMR on EKS API コールでトリガーされるルールを作成します。詳細については、「[Amazon CloudWatch Events でジョブをモニタリングする](#)」を参照してください。

AWS CloudTrail を使用した Amazon EMR on EKS API コールのログ記録

Amazon EMR on EKS は AWS CloudTrail と統合されています。このサービスにより、Amazon EMR on EKS でユーザー、ロールまたは AWS のサービスによって実行されたアクションを記録します。CloudTrail は、Amazon EMR on EKS に対するすべての API コールをイベントとしてキャプチャします。キャプチャされる呼び出しには、Amazon EMR on EKS コンソールからの呼び出しと、Amazon EMR on EKS API オペレーションへのコード呼び出しが含まれます。証跡を作成する場合は、Amazon EMR on EKS のイベントなど、Amazon S3 バケットへの CloudTrail イベントの継続的な配信を有効にすることができます。追跡を設定しない場合でも、CloudTrail コンソールの [Event history] (イベント履歴) で最新のイベントを表示できます。CloudTrail で収集された情報を使

用して、Amazon EMR on EKS に対するリクエスト、リクエスト元の IP アドレス、リクエストを行った人、リクエスト日時などの詳細を確認できます。

CloudTrail の詳細については、[AWS CloudTrail ユーザーガイド](#)を参照してください。

CloudTrail の Amazon EMR on EKS 情報

AWS アカウントを作成すると、そのアカウントに対して CloudTrail が有効になります。Amazon EMR on EKS でアクティビティが発生すると、そのアクティビティは [イベント履歴] の他の AWS のサービスのイベントと共に CloudTrail イベントに記録されます。AWS アカウントで最近のイベントを表示、検索、ダウンロードできます。詳細については、「[CloudTrail イベント履歴でのイベントの表示](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS のイベントなど、AWS アカウントのイベントを継続的に記録するには、証跡を作成します。追跡により、CloudTrail はログファイルを Amazon S3 バケットに配信できます。デフォルトでは、コンソールで追跡を作成するときに、追跡がすべての AWS リージョンに適用されます。追跡は、AWSパーティションのすべてのリージョンからのイベントをログに記録し、指定した Amazon S3 バケットにログファイルを配信します。さらに、CloudTrail ログで収集したイベントデータをより詳細に分析し、それに基づく対応するためにその他の AWS のサービスを設定できます。詳細については、次を参照してください。

- [「追跡を作成するための概要」](#)
- [CloudTrail がサポートされているサービスと統合](#)
- [CloudTrail の Amazon SNS 通知の設定](#)
- [複数のリージョンから CloudTrail ログファイルを受け取るおよび複数のアカウントから CloudTrail ログファイルを受け取る](#)

すべての Amazon EMR on EKS アクションは、CloudTrail が記録します。これらの説明については、「[Amazon EMR on EKS API リファレンス](#)」を参照してください。例えば、CreateVirtualCluster、StartJobRun、ListJobRunsの各アクションを呼び出すと、CloudTrail ログファイルにエントリが生成されます。

各イベントまたはログエントリには、誰がリクエストを生成したかという情報が含まれます。アイデンティティ情報は、以下を判別するのに役立ちます。

- リクエストが、ルート認証情報と AWS Identity and Access Management (IAM) ユーザー認証情報のどちらを使用して送信されたか。

- リクエストがロールまたはフェデレーテッドユーザーのテンポラリなセキュリティ認証情報を使用して行われたかどうか。
- リクエストが、別の AWS のサービスによって送信されたかどうか。

詳細については、「[CloudTrail userIdentity エlement](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS ログファイルエントリの理解

「トレイル」は、指定した Simple Storage Service (Amazon S3) バケットにイベントをログファイルとして配信するように設定できます。CloudTrail のログファイルには、単一か複数のログエントリがあります。イベントはあらゆるソースからの単一のリクエストを表し、リクエストされたアクション、アクションの日時、リクエストのパラメータなどの情報が含まれます。CloudTrail ログファイルは、パブリック API コールの順序付けられたスタックトレースではないため、特定の順序では表示されません。

次の例は、[ListJobRuns](#) アクションを示す CloudTrail ログエントリです。

```
{
  "eventVersion": "1.05",
  "userIdentity": {
    "type": "AssumedRole",
    "principalId": "AIDACKCEVSQ6C2EXAMPLE:admin",
    "arn": "arn:aws:sts::012345678910:assumed-role/Admin/admin",
    "accountId": "012345678910",
    "accessKeyId": "AKIAIOSFODNN7EXAMPLE",
    "sessionContext": {
      "sessionIssuer": {
        "type": "Role",
        "principalId": "AIDACKCEVSQ6C2EXAMPLE",
        "arn": "arn:aws:iam::012345678910:role/Admin",
        "accountId": "012345678910",
        "userName": "Admin"
      },
      "webIdFederationData": {},
      "attributes": {
        "mfaAuthenticated": "false",
        "creationDate": "2020-11-04T21:49:36Z"
      }
    }
  },
  "eventTime": "2020-11-04T21:52:58Z",
```

```
"eventSource": "emr-containers.amazonaws.com",
"eventName": "ListJobRuns",
"awsRegion": "us-east-1",
"sourceIPAddress": "203.0.113.1",
"userAgent": "aws-cli/1.11.167 Python/2.7.10 Darwin/16.7.0 botocore/1.7.25",
"requestParameters": {
  "virtualClusterId": "1K48XXXXXXHCB"
},
"responseElements": null,
"requestID": "890b8639-e51f-11e7-b038-EXAMPLE",
"eventID": "874f89fa-70fc-4798-bc00-EXAMPLE",
"readOnly": true,
"eventType": "AwsApiCall",
"recipientAccountId": "012345678910"
}
```

Amazon EMR on EKS のコンプライアンス検証

Amazon EMR on EKS のセキュリティとコンプライアンスは、複数の AWS コンプライアンスプログラムの一環として、サードパーティー監査機関によって評価されます。これらのプログラムには、SOC、PCI、FedRAMP、HIPAA などが含まれます。

Amazon EMR on EKS の耐障害性

AWS のグローバルインフラストラクチャは AWS リージョンとアベイラビリティゾーンを中心に構築されます。AWS リージョンには、低レイテンシー、高いスループット、そして高度の冗長ネットワークで Connect されている複数の物理的に独立・隔離されたアベイラビリティゾーンがあります。アベイラビリティゾーンでは、ゾーン間で中断することなく自動的にフェイルオーバーするアプリケーションとデータベースを設計および運用することができます。アベイラビリティゾーンは、従来の単一または複数のデータセンターインフラストラクチャよりも可用性、耐障害性、および拡張性が優れています。

AWS リージョンとアベイラビリティゾーンの詳細については、「[AWS グローバルインフラストラクチャ](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS では、AWS グローバルインフラストラクチャに加えて、データの耐障害性とバックアップのニーズに対応できるように、EMRFS による Amazon S3 との統合を提供しています。

Amazon EMR on EKS でのインフラストラクチャセキュリティ

マネージドサービスである Amazon EMR on EKS は、「[Amazon Web Services: セキュリティプロセスの概要](#)」ホワイトペーパーで説明されている AWS グローバルネットワークセキュリティ手順で保護されています。

ユーザーは、AWS が公開している API コールを使用し、ネットワーク経由で Amazon EMR on EKS にアクセスします。クライアントで Transport Layer Security (TLS) 1.0 以降がサポートされている必要があります。TLS 1.2 以降が推奨されています。また、Ephemeral Diffie-Hellman (DHE) や Elliptic Curve Ephemeral Diffie-Hellman (ECDHE) などの Perfect Forward Secrecy (PFS) を使用した暗号スイートもクライアントでサポートされている必要があります。これらのモードは、Java 7 以降など、最近のほとんどのシステムでサポートされています。

また、リクエストは、アクセスキー ID と、IAM プリンシパルに関連付けられているシークレットアクセスキーを使用して署名する必要があります。または、[AWS Security Token Service \(AWS STS\)](#) を使用して、一時的なセキュリティ認証情報を生成し、リクエストに署名することもできます。

構成と脆弱性の分析

AWS は、ゲストオペレーティングシステム (OS) やデータベースへのパッチ適用、ファイアウォール設定、災害対策などの基本的なセキュリティタスクを処理します。これらの手順は適切な第三者によって確認され、証明されています。詳細については、以下のリソースを参照してください。

- [Amazon EMR on EKS のコンプライアンス検証](#)
- [責任共有モデル](#)
- [Amazon Web Services: セキュリティプロセスの概要](#) (ホワイトペーパー)

インターフェイス VPC エンドポイントを使用して Amazon EMR on EKS に接続する

インターネット経由で接続するのではなく、Virtual Private Cloud (VPC) の[インターフェイス VPC エンドポイント \(AWS PrivateLink\)](#) を使用して Amazon EMR on EKS に直接接続できます。インターフェイス VPC エンドポイントを使用すると、VPC と Amazon EMR on EKS の間の通信は完全に AWS ネットワーク内で実施されます。各 VPC エンドポイントは、VPC サブネット内のプライベート IP アドレスを持つ 1 つ以上の [Elastic Network Interfaces \(ENI\)](#) で表されます。

インターフェイス VPC エンドポイントは、インターネットゲートウェイ、NAT デバイス、VPN 接続、または AWS Direct Connect 接続を使用せずに、VPC を Amazon EMR on EKS に直接接続します。VPC のインスタンスは、パブリック IP アドレスがなくても Amazon EMR on EKS API と通信できます。

インターフェイス VPC エンドポイントを作成し、AWS Management Console か AWS Command Line Interface (AWS CLI) コマンドのいずれかを使用して Amazon EMR on EKS に接続できます。詳細については、[インターフェイスエンドポイントの作成](#)を参照してください。

インターフェイス VPC エンドポイントを作成した後、エンドポイントのプライベート DNS ホスト名を有効にすると、デフォルトの Amazon EMR on EKS エンドポイントはお客様の VPC エンドポイントに解決されます。Amazon EMR on EKS のデフォルトのサービス名エンドポイントは、次の形式です。

```
emr-containers.Region.amazonaws.com
```

プライベート DNS ホスト名を有効にしない場合は、Amazon VPC が以下の形式で利用できる DNS エンドポイント名を提供します。

```
VPC_Endpoint_ID.emr-containers.Region.vpce.amazonaws.com
```

詳細については、「Amazon VPC ユーザーガイド」の「[インターフェイス VPC エンドポイント \(AWS PrivateLink\)](#)」を参照してください。Amazon EMR on EKS は、VPC 内のすべての [API アクション](#)への呼び出しをサポートしています。

VPC エンドポイントポリシーを VPC エンドポイントにアタッチして、IAM プリンシパルのアクセスを制御できます。また、セキュリティグループを VPC エンドポイントに関連付けて、ネットワークトラフィックの送信元と送信先 (IP アドレスの範囲など) に基づいてインバウンドとアウトバウンドのアクセスを制御することもできます。詳細については、「[VPC エンドポイントによるサービスのアクセスコントロール](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS の VPC エンドポイントポリシーの作成

Amazon EMR on EKS の Amazon VPC エンドポイントに対するポリシーを作成して、以下を指定することができます。

- アクションを実行できるプリンシパルまたは実行できないプリンシパル
- 実行可能なアクション

- アクションを実行できるリソース

詳細については、「Amazon VPC ユーザーガイド」の「[VPC エンドポイントでサービスへのアクセスを制御する](#)」を参照してください。

Example 指定した AWS アカウントからのすべてのアクセスを拒否する VPC エンドポイントポリシー

次の VPC エンドポイントポリシーは、AWS アカウント **123456789012** がエンドポイントを使用するリソースへのすべてのアクセスを拒否します。

```
{
  "Statement": [
    {
      "Action": "*",
      "Effect": "Allow",
      "Resource": "*",
      "Principal": "*"
    },
    {
      "Action": "*",
      "Effect": "Deny",
      "Resource": "*",
      "Principal": {
        "AWS": [
          "123456789012"
        ]
      }
    }
  ]
}
```

Example 指定した IAM プリンシパル (ユーザー) への VPC アクセスのみを許可する VPC エンドポイントポリシー

次の VPC エンドポイントポリシーは、AWS アカウント **123456789012** の IAM ユーザー **lijuan** にのみフルアクセスを許可します。他のすべての IAM プリンシパルは、エンドポイントを使用したアクセスを拒否されます。

```
{
  "Statement": [
```

```
{
  "Action": "*",
  "Effect": "Allow",
  "Resource": "*",
  "Principal": {
    "AWS": [
      "arn:aws:iam::123456789012:user/lijuan"
    ]
  }
}
```

Example 読み取り専用の Amazon EMR on EKS オペレーションを許可する VPC エンドポイントポリシー

次の VPC エンドポイントポリシーは、AWS アカウント **123456789012** にのみ、指定された Amazon EMR on EKS アクションの実行を許可します。

指定されたアクションは、Amazon EMR on EKS の読み取り専用アクセスに相当します。指定されたアカウントでは、VPC 上の他のすべてのアクションが拒否されます。他のすべてのアカウントは、すべてのアクセスを拒否されます。Amazon EMR on EKS アクションのリストについては、[「Amazon EMR on EKS のアクション、リソース、および条件キー」](#)を参照してください。

```
{
  "Statement": [
    {
      "Action": [
        "emr-containers:DescribeJobRun",
        "emr-containers:DescribeVirtualCluster",
        "emr-containers:ListJobRuns",
        "emr-containers:ListTagsForResource",
        "emr-containers:ListVirtualClusters"
      ],
      "Effect": "Allow",
      "Resource": "*",
      "Principal": {
        "AWS": [
          "123456789012"
        ]
      }
    }
  ]
}
```

```
]
}
```

Example 指定した仮想クラスターへのアクセスを拒否する VPC エンドポイントポリシー

次の VPC エンドポイントポリシーは、すべてのアカウントとプリンシパルにフルアクセスを許可しますが、AWS アカウント **123456789012** には、クラスター ID **A1B2CD34EF5G** を持つ仮想クラスターで実行されるアクションに対するすべてのアクセスを拒否します。仮想クラスターのリソースレベルのアクセス許可をサポートしないその他の Amazon EMR on EKS アクションは、引き続き許可されます。Amazon EMR on EKS アクションのリストとそれに対応するリソースタイプについては、「AWS Identity and Access Management ユーザーガイド」の「[Amazon EMR on EKS のアクション、リソース、および条件キー](#)」を参照してください。

```
{
  "Statement": [
    {
      "Action": "*",
      "Effect": "Allow",
      "Resource": "*",
      "Principal": "*"
    },
    {
      "Action": "*",
      "Effect": "Deny",
      "Resource": "arn:aws:emr-containers:us-west-2:123456789012:/virtualclusters/A1B2CD34EF5G",
      "Principal": {
        "AWS": [
          "123456789012"
        ]
      }
    }
  ]
}
```

Amazon EMR on EKS のクロスアカウントアクセスを設定する

Amazon EMR on EKS のクロスアカウントアクセスを設定できます。クロスアカウントアクセスを使用すると、ある AWS アカウントのユーザーが Amazon EMR on EKS ジョブを実行し、別の AWS アカウントに属する基盤となるデータにアクセスできます。

前提条件

Amazon EMR on EKS のクロスアカウントアクセスを設定するには、以下の AWS アカウントにサインインしている間にタスクを完了します。

- AccountA - Amazon EMR を EKS クラスタ上の名前空間に登録して Amazon EMR on EKS 仮想クラスタを作成した AWS アカウント。
- AccountB - Amazon EMR on EKS ジョブがアクセスする Amazon S3 バケットまたは DynamoDB テーブルが含まれている AWS アカウント。

クロスアカウントアクセスを設定する前に、AWS アカウントで以下を準備する必要があります。

- ジョブを実行する、AccountA 内の Amazon EMR on EKS 仮想クラスタ。
- 仮想クラスタでジョブを実行するために必要な許可を持つ、AccountA 内のジョブ実行ロール。詳細については、[ジョブ実行ロールを作成する](#) および [Amazon EMR on EKS でのジョブ実行ロールの使用](#) を参照してください。

クロスアカウントの Amazon S3 バケットまたは DynamoDB テーブルにアクセスする方法

Amazon EMR on EKS のクロスアカウントアクセスを設定するには、次の手順を実行します。

1. Amazon S3 バケット `cross-account-bucket` を AccountB に作成します。詳細については、「[バケットの作成](#)」を参照してください。DynamoDB へのクロスアカウントアクセスが必要な場合は、AccountB で DynamoDB テーブルを作成することもできます。詳細については、「[DynamoDB テーブルの作成](#)」を参照してください。
2. AccountB に、`cross-account-bucket` にアクセスできる `Cross-Account-Role-B` IAM ロールを作成します。
 1. IAM コンソールにサインインします。
 2. [ロール] を選択し、新しいロール `Cross-Account-Role-B` を作成します。IAM ロールの作成方法の詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[IAM ロールの作成](#)」を参照してください。
 3. 以下のポリシーステートメントに示すように、`cross-account-bucket` S3 バケットにアクセスするための `Cross-Account-Role-B` の許可を指定する IAM ポリシーを作成しま

す。IAM ポリシーを Cross-Account-Role-B にアタッチします。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[新しいポリシーの作成](#)」を参照してください。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "s3:*",
      "Resource": [
        "arn:aws:s3:::cross-account-bucket",
        "arn:aws:s3:::cross-account-bucket/*"
      ]
    }
  ]
}
```

DynamoDB アクセスが必要な場合は、クロスアカウントの DynamoDB テーブルにアクセスするための許可を指定する IAM ポリシーを作成します。IAM ポリシーを Cross-Account-Role-B にアタッチします。詳細については、「IAM ユーザーガイド」の「[DynamoDB テーブルの作成](#)」を参照してください。

DynamoDB テーブル CrossAccountTable にアクセスするためのポリシーを以下に示します。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "dynamodb:*",
      "Resource": "arn:aws:dynamodb:MyRegion:AccountB:table/
CrossAccountTable"
    }
  ]
}
```

3. Cross-Account-Role-B ロールの信頼関係を編集します。

1. ロールの信頼関係を設定するには、IAM コンソールで、ステップ 2 で作成したロール Cross-Account-Role-B の [信頼関係] タブを選択します。

2. [信頼関係の編集] を選択します。
3. 以下のポリシードキュメントを追加します。これにより、AccountA 内の Job-Execution-Role-A にこの Cross-Account-Role-B ロールを引き受けることを許可します。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Principal": {
        "AWS": "arn:aws:iam::AccountA:role/Job-Execution-Role-A"
      },
      "Action": "sts:AssumeRole"
    }
  ]
}
```

4. Cross-Account-Role-B を引き受けるように、STS ロール引き受け許可を使用して AccountA 内で Job-Execution-Role-A を付与します。
 1. AWS アカウント AccountA の IAM コンソールで、Job-Execution-Role-A を選択します。
 2. 次のポリシーステートメントを Job-Execution-Role-A に追加して、Cross-Account-Role-B ロールに対して AssumeRole アクションを許可します。

```
{
  "Version": "2012-10-17",
  "Statement": [
    {
      "Effect": "Allow",
      "Action": "sts:AssumeRole",
      "Resource": "arn:aws:iam::AccountB:role/Cross-Account-Role-B"
    }
  ]
}
```

5. Amazon S3 アクセスの場合、Amazon EMR on EKS にジョブを送信するときに、以下の spark-submit パラメータ (spark conf) を設定します。

Note

デフォルトでは、EMRFS はジョブ実行ロールを使用して、ジョブから S3 バケットにアクセスします。ただし、`customAWSCredentialsProvider` が `AssumeRoleAWSCredentialsProvider` に設定されている場合、EMRFS は、Amazon S3 アクセスに `Job-Execution-Role-A` ではなく `ASSUME_ROLE_CREDENTIALS_ROLE_ARN` で指定された対応するロールを使用します。

- `--conf spark.hadoop.fs.s3.customAWSCredentialsProvider=com.amazonaws.emr.AssumeRoleAWSCredentialsProvider`
- `--conf spark.kubernetes.driverEnv.ASSUME_ROLE_CREDENTIALS_ROLE_ARN=arn:aws:iam::AccountA:role/Cross-Account-Role-B \`
- `--conf spark.executorEnv.ASSUME_ROLE_CREDENTIALS_ROLE_ARN=arn:aws:iam::AccountB:role/Cross-Account-Role-B \`

Note

ジョブの Spark 設定で、エグゼキューターとドライバーの両方の env に `ASSUME_ROLE_CREDENTIALS_ROLE_ARN` を設定する必要があります。

DynamoDB のクロスアカウントアクセスの場合、`--conf spark.dynamodb.customAWSCredentialsProvider=com.amazonaws.emr.AssumeRoleAWSCredentialsProvider` を設定する必要があります。

6. 次の例に示すように、クロスアカウントアクセスを使用して Amazon EMR on EKS ジョブを実行します。

```
aws emr-containers start-job-run \
--virtual-cluster-id 123456 \
--name myjob \
--execution-role-arn execution-role-arn \
--release-label emr-6.2.0-latest \
```

```
--job-driver '{"sparkSubmitJobDriver": {"entryPoint": "entryPoint_location",
"entryPointArguments": ["arguments_list"], "sparkSubmitParameters": "--class
<main_class> --conf spark.executor.instances=2 --conf spark.executor.memory=2G
--conf spark.executor.cores=2 --conf spark.driver.cores=1 --conf
spark.hadoop.fs.s3.customAWSCredentialsProvider=com.amazonaws.emr.AssumeRoleAWSCredentials
--conf
spark.kubernetes.driverEnv.ASSUME_ROLE_CREDENTIALS_ROLE_ARN=arn:aws:iam::AccountB:role/
Cross-Account-Role-B --conf
spark.executorEnv.ASSUME_ROLE_CREDENTIALS_ROLE_ARN=arn:aws:iam::AccountB:role/
Cross-Account-Role-B"}} ' \
--configuration-overrides '{"applicationConfiguration": [{"classification":
"spark-defaults", "properties": {"spark.driver.memory": "2G"}}],
"monitoringConfiguration": {"cloudWatchMonitoringConfiguration":
{"logGroupName": "log_group_name", "logStreamNamePrefix": "log_stream_prefix"},
"persistentAppUI": "ENABLED", "s3MonitoringConfiguration": {"logUri": "s3://
my_s3_log_location" }}}
```

Amazon EMR on EKS リソースのタグ付け

Amazon EMR on EKS リソースを管理しやすくするために、タグを使用して各リソースに独自のメタデータを割り当てることができます。このトピックでは、タグ機能の概要とタグの作成方法について説明します。

トピック

- [タグの基本](#)
- [リソースのタグ付け](#)
- [タグの制限](#)
- [AWS CLI および Amazon EMR on EKS API を使用してタグを処理する](#)

タグの基本

タグとは、AWS リソースに付けるラベルです。タグはそれぞれ、1つのキーとオプションの1つの値で設定されており、どちらもお客様側が定義します。

タグを使用すると、AWS リソースを目的、所有者、環境などで分類できます。同じ型のリソースが多い場合に、割り当てたタグに基づいて特定のリソースをすばやく識別できます。例えば、Amazon EMR on EKS クラスターに一連のタグを定義して、各クラスターの所有者とスタックレベルを追跡できます。リソースタイプごとに一貫した一連のタグキーを考案することをお勧めします。追加したタグに基づいてリソースを検索およびフィルタリングできます。

タグは自動的にリソースに割り当てられません。タグを追加したら、いつでもタグキーと値は編集でき、タグはリソースからいつでも削除できます。リソースを削除すると、リソースのタグも削除されます。

タグには Amazon EMR on EKS に関する意味論的な意味はなく、完全に文字列として解釈されます。

タグの値を空の文字列にすることはできますが、null にすることはできません。タグキーを空の文字列にすることはできません。そのリソースの既存のタグと同じキーを持つタグを追加した場合、古い値は新しい値によって上書きされます。

AWS Identity and Access Management (IAM) を使用すると、AWS アカウント内のどのユーザーがタグを管理するアクセス許可を持っているかを制御できます。

タグベースのアクセスコントロールポリシーの例については、「[タグベースのアクセスコントロールのポリシー](#)」を参照してください。

リソースのタグ付け

新規または既存の仮想クラスター、およびアクティブな状態のジョブ実行にタグ付けできます。ジョブ実行のアクティブな状態は、PENDING、SUBMITTED、RUNNING、CANCEL_PENDING などです。仮想クラスターのアクティブな状態は、RUNNING、TERMINATING、ARRESTED などです。詳細については、[ジョブ実行状態](#) および [仮想クラスターの状態](#) を参照してください。

仮想クラスターが終了すると、タグは消去され、アクセスできなくなります。

Amazon EMR on EKS API、AWS CLI、または AWS SDK を使用している場合、関連する API アクションのタグパラメータを使用して、新しいリソースにタグを適用できます。TagResource API アクションを使用して既存のリソースにタグを適用することもできます。

リソースの作成時に、リソースのタグを指定するためのいくつかのリソース作成アクションを使用できます。その場合、リソースの作成中にタグを適用できないときは、リソースの作成は失敗します。これにより、作成時にタグ付けしたリソースが、指定したタグで作成されているか、まったく作成されていないかが確認できます。作成時にリソースにタグ付けを行う場合、リソースの作成後にカスタムタグ付けスクリプトを実行する必要はありません。

次の表には、タグ付け可能な Amazon EMR on EKS リソースが示されています。

リソース	タグをサポート	タグの伝播をサポート	作成時のタグ付けのサポート (Amazon EMR on EKS API、AWS CLI、AWS SDK)	作成時の API (作成時にタグを追加可能)
仮想クラスター	Yes	いいえ。仮想クラスターに関連付けられたタグは、その仮想クラスターに送信されたジョブ実行には反映されません。	Yes	CreateVirtualCluster

リソース	タグをサポート	タグの伝播をサポート	作成時のタグ付けのサポート (Amazon EMR on EKS API、AWS CLI、AWS SDK)	作成時の API (作成時にタグを追加可能)
ジョブ実行	Yes	いいえ	Yes	StartJobRun

タグの制限

タグには以下のような基本制限があります。

- リソースあたりのタグの最大数 - 50 件
- タグキーは、リソースごとにそれぞれ一意である必要があります。また、各タグキーに設定できる値は 1 つのみです。
- キーの最大長 - UTF-8 の 128 Unicode 文字
- 値の最大長 - UTF-8 の 256 Unicode 文字
- 複数の AWS サービス間およびリソース間でタグ付けスキーマを使用する場合、他のサービスでも許可される文字に制限が適用されることがあるのでご注意ください。一般的に使用が許可される文字は、UTF-8 で表現できる文字、数字、スペース、および +、-、=、.、_、:、/、@。
- タグのキーと値は大文字と小文字が区別されます。
- タグの値を空の文字列にすることはできますが、null にすることはできません。タグキーを空の文字列にすることはできません。
- キーまたは値のプレフィックスとして、aws:、AWS:、またはその大文字または小文字の組み合わせたものを使用しないでください。これらは AWS 使用のためにのみ予約されています。

AWS CLI および Amazon EMR on EKS API を使用してタグを処理する

リソースのタグの追加、更新、リスト表示、および削除には、次の AWS CLI コマンドまたは Amazon EMR on EKS API オペレーションを使用します。

タスク	AWS CLI	API アクション
1 つ以上のタグを追加、または上書きします	タグリソース	TagResource
リソースのタグを一覧表示します	list-tags-for-resource	ListTagsForResource
1 つ以上のタグを削除します	タグなしリソース	UntagResource

以下の例では、AWS CLIを使用して、リソースに対してタグ付けまたはタグ削除する方法を示しています。

例 1: 既存仮想クラスターへのタグ付け

次のコマンドは既存の仮想クラスターにタグ付けします。

```
aws emr-containers tag-resource --resource-arn resource_ARN --tags team=devs
```

例 2: 既存仮想クラスターでのタグ削除

次のコマンドは既存の仮想クラスターからタグを削除します。

```
aws emr-containers untag-resource --resource-arn resource_ARN --tag-keys tag_key
```

例 3: リソースのタグのリスト取得

次のコマンドは、既存のリソースに関連付けられているタグのリストを取得します。

```
aws emr-containers list-tags-for-resource --resource-arn resource_ARN
```

Amazon EMR on EKS に関するトラブルシューティング

このセクションでは、Amazon EMR on EKS に関する問題をトラブルシューティングする方法について説明します。Amazon EMR に関する一般的な問題をトラブルシューティングする方法については、「Amazon EMR 管理ガイド」の「[Troubleshoot a cluster](#)」を参照してください。

トピック

- [PersistentVolumeClaims \(PVC\) を使用するジョブのトラブルシューティング](#)
- [Amazon EMR on EKS 垂直自動スケーリングのトラブルシューティング](#)
- [Amazon EMR on EKS Spark オペレータのトラブルシューティング](#)

PersistentVolumeClaims (PVC) を使用するジョブのトラブルシューティング

ジョブの PersistentVolumeClaims (PVC) を作成、リスト、または削除する必要があるにもかかわらず、デフォルトの Kubernetes ロール `emr-containers` に PVC 権限を追加しなかった場合、ジョブの送信が失敗します。PVC 権限がないと、`emr-containers` ロールでは Spark ドライバーや Spark クライアントに必要なロールを作成できません。エラーメッセージに従って、Spark ドライバーや Spark クライアントのロールに権限を追加するだけでは不十分です。`emr-containers` プライマリロールにも、必要な権限を含める必要があります。このセクションでは、必要な権限を `emr-containers` プライマリロールに追加する方法について説明します。

検証

`emr-containers` ロールに必要な権限があるかどうかを確認するには、`NAMESPACE` 変数に独自の値を設定してから、次のコマンドを実行します。

```
export NAMESPACE=YOUR_VALUE
kubectl describe role emr-containers -n ${NAMESPACE}
```

また、必要な権限が Spark ロールとクライアントロールにあるかどうかを確認するには、次のコマンドを実行します。

```
kubectl describe role emr-containers-role-spark-driver -n ${NAMESPACE}
kubectl describe role emr-containers-role-spark-client -n ${NAMESPACE}
```

必要な権限がない場合は、次のようにパッチを適用して続行します。

パッチ

1. 必要な権限がないジョブを現在実行している場合は、そのジョブを停止します。
2. 次のように、RBAC_Patch.py という名前でファイルを作成します。

```
import os
import subprocess as sp
import tempfile as temp
import json
import argparse
import uuid

def delete_if_exists(dictionary: dict, key: str):
    if dictionary.get(key, None) is not None:
        del dictionary[key]

def doTerminalCmd(cmd):
    with temp.TemporaryFile() as f:
        process = sp.Popen(cmd, stdout=f, stderr=f)
        process.wait()
        f.seek(0)
        msg = f.read().decode()
    return msg

def patchRole(roleName, namespace, extraRules, skipConfirmation=False):
    cmd = f"kubectl get role {roleName} -n {namespace} --output json".split(" ")
    msg = doTerminalCmd(cmd)
    if "(NotFound)" in msg and "Error" in msg:
        print(msg)
        return False
    role = json.loads(msg)
    rules = role["rules"]
    rulesToAssign = extraRules[::]
    passedRules = []
    for rule in rules:
        apiGroups = set(rule["apiGroups"])
        resources = set(rule["resources"])
        verbs = set(rule["verbs"])
        for extraRule in extraRules:
            passes = 0
            apiGroupsExtra = set(extraRule["apiGroups"])
```



```

        resourcesExtra = set(extraRule["resources"])
        verbsExtra = set(extraRule["verbs"])
        passes += len(apiGroupsExtra.intersection(apiGroups)) >=
len(apiGroupsExtra)
        passes += len(resourcesExtra.intersection(resources)) >=
len(resourcesExtra)
        passes += len(verbsExtra.intersection(verbs)) >= len(verbsExtra)
        if passes >= 3:
            if extraRule not in passedRules:
                passedRules.append(extraRule)
                if extraRule in rulesToAssign:
                    rulesToAssign.remove(extraRule)
            break
    prompt_text = "Apply Changes?"
    if len(rulesToAssign) == 0:
        print(f"The role {roleName} seems to already have the necessary
permissions!")
        prompt_text = "Proceed anyways?"
    for ruleToAssign in rulesToAssign:
        role["rules"].append(ruleToAssign)
    delete_if_exists(role, "creationTimestamp")
    delete_if_exists(role, "resourceVersion")
    delete_if_exists(role, "uid")
    new_role = json.dumps(role, indent=3)
    uid = uuid.uuid4()
    filename = f"Role-{roleName}-New_Permissions-{uid}-TemporaryFile.json"
    try:
        with open(filename, "w+") as f:
            f.write(new_role)
            f.flush()
        prompt = "y"
        if not skipConfirmation:
            prompt = input(
                doTerminalCmd(f"kubectl diff -f {filename}".split(" ")) +
f"\n{prompt_text} y/n: "
                ).lower().strip()
            while prompt != "y" and prompt != "n":
                prompt = input("Please make a valid selection. y/n:
").lower().strip()
            if prompt == "y":
                print(doTerminalCmd(f"kubectl apply -f {filename}".split(" ")))
    except Exception as e:
        print(e)
    os.remove(f"./{filename}")

```

```
if __name__ == '__main__':
    parser = argparse.ArgumentParser()
    parser.add_argument("-n", "--namespace",
                        help="Namespace of the Role. By default its the
VirtualCluster's namespace",
                        required=True,
                        dest="namespace"
                        )

    parser.add_argument("-p", "--no-prompt",
                        help="Applies the patches without asking first",
                        dest="no_prompt",
                        default=False,
                        action="store_true"
                        )
    args = parser.parse_args()

    emrRoleRules = [
        {
            "apiGroups": [""],
            "resources": ["persistentvolumeclaims"],
            "verbs": ["list", "create", "delete"]
        }
    ]

    driverRoleRules = [
        {
            "apiGroups": [""],
            "resources": ["persistentvolumeclaims"],
            "verbs": ["list", "create", "delete"]
        },
        {
            "apiGroups": [""],
            "resources": ["services"],
            "verbs": ["get", "list", "describe", "create", "delete", "watch"]
        }
    ]

    clientRoleRules = [
        {
            "apiGroups": [""],
            "resources": ["persistentvolumeclaims"],
```

```
        "verbs": ["list", "create", "delete"]
    }
]

patchRole("emr-containers", args.namespace, emrRoleRules, args.no_prompt)
patchRole("emr-containers-role-spark-driver", args.namespace, driverRoleRules,
args.no_prompt)
patchRole("emr-containers-role-spark-client", args.namespace, clientRoleRules,
args.no_prompt)
```

3. Python スクリプトを実行します。

```
python3 RBAC_Patch.py -n ${NAMESPACE}
```

4. kubectl による新しい権限と古い権限の違いが表示されます。y を押すと、ロールにパッチが適用されます。

5. 以下を実行して、3 つのロールに権限が追加されていることを確認します。

```
kubectl describe role -n ${NAMESPACE}
```

6. python スクリプトを実行します。

```
python3 RBAC_Patch.py -n ${NAMESPACE}
```

7. このコマンドを実行すると、kubectl による新しい権限と古い権限の違いが表示されます。y を押すと、ロールにパッチが適用されます。

8. 3 つのロールに権限が追加されていることを確認します。

```
kubectl describe role -n ${NAMESPACE}
```

9. ジョブを再度送信します。

手動パッチ

アプリケーションに必要な権限が PVC ルール以外に適用される場合、必要に応じて Amazon EMR 仮想クラスターに対する Kubernetes 権限を手動で追加できます。

Note

emr-containers ロールはプライマリロールです。つまり、基盤となるドライバーロールやクライアントロールを変更する場合は、その操作に必要なすべての権限をこのプライマリロールで提供する必要があります。

1. 次のコマンドを実行して、現在の権限を yaml ファイルにダウンロードします。

```
kubectl get role -n ${NAMESPACE} emr-containers -o yaml >> emr-containers-role-patch.yaml
kubectl get role -n ${NAMESPACE} emr-containers-role-spark-driver -o yaml >> driver-role-patch.yaml
kubectl get role -n ${NAMESPACE} emr-containers-role-spark-client -o yaml >> client-role-patch.yaml
```

2. アプリケーションに必要な権限に基づいて、各ファイルを編集し、次のようなさらに別のルールを追加します。

- emr-containers-role-patch.yaml

```
- apiGroups:
  - ""
  resources:
  - persistentvolumeclaims
  verbs:
  - list
  - create
  - delete
```

- driver-role-patch.yaml

```
- apiGroups:
  - ""
  resources:
  - persistentvolumeclaims
  verbs:
  - list
  - create
  - delete
- apiGroups:
  - ""
```

```
resources:
- services
verbs:
- get
- list
- describe
- create
- delete
- watch
```

- client-role-patch.yaml

```
- apiGroups:
- ""
resources:
- persistentvolumeclaims
verbs:
- list
- create
- delete
```

3. 次の属性をその値と共に削除します。更新を適用するために必要な操作です。

- creationTimestamp
- resourceVersion
- uid

4. 最後に、パッチを実行します。

```
kubectl apply -f emr-containers-role-patch.yaml
kubectl apply -f driver-role-patch.yaml
kubectl apply -f client-role-patch.yaml
```

Amazon EMR on EKS 垂直自動スケーリングのトラブルシューティング

Operator Lifecycle Manager で Amazon EKS クラスターに Amazon EMR on EKS 垂直自動スケーリングオペレータをセットアップするときに問題が発生した場合は、次のセクションを参照してください。インストールを完了する手順などの詳細については、「[Amazon EMR Spark ジョブで垂直的自動スケーリングを使用する](#)」を参照してください。

403 Forbidden エラー

「[Amazon EKS クラスターに Operator Lifecycle Manager \(OLM\) をインストールする](#)」のステップに従って `olm status` コマンドを実行した結果、次のような 403 Forbidden エラーが返された場合は、オペレータ用に Amazon ECR リポジトリの認証トークンを取得していない可能性があります。

この問題を解決するには、「[Amazon EMR on EKS の垂直的自動スケーリング演算子をインストールする](#)」のステップを繰り返して、トークンを取得します。次に、インストールをもう一度試します。

```
Error: FATA[0002] Failed to run bundle: pull bundle image: error pulling image IMAGE.
error resolving name : unexpected status code [manifests latest]: 403 Forbidden
```

Kubernetes 名前空間が見つからない

Amazon EKS クラスターに [Amazon EMR on EKS 垂直自動スケーリングオペレータをセットアップする](#) ときに、次のような `namespaces not found` エラーが発生する場合があります。

```
FATA[0020] Failed to run bundle: create catalog: error creating catalog source:
namespaces "NAME" not found.
```

指定した名前空間が存在しない場合、OLM は垂直自動スケーリングオペレータをインストールしません。この問題を解決するには、次のコマンドを使用して名前空間を作成します。次に、インストールをもう一度試します。

```
kubectl create namespace NAME
```

Docker 認証情報の保存中のエラー

[垂直自動スケーリングをセットアップする](#) には、Amazon EMR on EKS 垂直自動スケーリング関連の Docker イメージを認証して取得する必要があります。これを行う際に、Docker が実行されていないと、次のようなエラーが発生する場合があります。

```
aws ecr get-login-password \
  --region $REGION | docker login \
  --username AWS \
  --password-stdin $ACCOUNT_ID.dkr.ecr.$REGION.amazonaws.com
```

```
Error saving credentials: error storing credentials - err: exit status 1
out: 'Post "http://ipc/registry/credstore-updated": dial unix backend.sock: connect: no
such file or directory'
```

この問題を解決するには、Docker が実行されていることを確認するか、Docker Desktop を開きます。次に、認証情報をもう一度保存してみます。

Amazon EMR on EKS Spark オペレータのトラブルシューティング

Amazon EMR on EKS Spark オペレータに関する問題が発生した場合は、次のセクションを参照してください。インストールを完了する手順などの詳細については、「[Spark 演算子を使用して Spark ジョブを実行する](#)」を参照してください。

Helm チャートのインストール時のエラー

「[Spark 演算子をインストールする](#)」のステップに従って Helm チャートをインストールまたは検証しようとした結果、次のような INSTALLATION FAILED エラーが返された場合は、オペレータ用に Amazon ECR リポジトリの認証トークンを取得していない可能性があります。

この問題を解決するには、「[Spark 演算子をインストールする](#)」のステップを繰り返して、Amazon ECR レジストリに照らして Helm クライアントを認証します。次に、インストール手順をもう一度試みます。

```
Error: INSTALLATION FAILED: Kubernetes cluster unreachable: the server has asked for
the client to provide credentials
```

UnsupportedFileSystemException: No FileSystem for scheme "s3"

スレッド「main」で次の例外が発生することがあります。

```
org.apache.hadoop.fs.UnsupportedFileSystemException: No FileSystem for scheme "s3"
```

このような場合は、SparkApplication 仕様に次の例外を追加します。

```
hadoopConf:
  # EMRFS filesystem
  fs.s3.customAWSCredentialsProvider:
    com.amazonaws.auth.WebIdentityTokenCredentialsProvider
```

```
fs.s3.impl: com.amazon.ws.emr.hadoop.fs.EmrFileSystem
fs.AbstractFileSystem.s3.impl: org.apache.hadoop.fs.s3.EMRFSDelegate
fs.s3.buffer.dir: /mnt/s3
fs.s3.getObject.initialSocketTimeoutMilliseconds: "2000"
mapreduce.fileoutputcommitter.algorithm.version.emr_internal_use_only.EmrFileSystem:
"2"
mapreduce.fileoutputcommitter.cleanup-
failures.ignored.emr_internal_use_only.EmrFileSystem: "true"
sparkConf:
  # Required for EMR Runtime
  spark.driver.extraClassPath: /usr/lib/hadoop-lzo/lib/*:/usr/lib/hadoop/hadoop-
aws.jar:/usr/share/aws/aws-java-sdk/*:/usr/share/aws/emr/emrfs/conf:/usr/share/aws/
emr/emrfs/lib/*:/usr/share/aws/emr/emrfs/auxlib/*:/usr/share/aws/emr/security/conf:/
usr/share/aws/emr/security/lib/*:/usr/share/aws/hmclient/lib/aws-glue-datacatalog-
spark-client.jar:/usr/share/java/Hive-JSON-Serde/hive-openx-serde.jar:/usr/share/aws/
sagemaker-spark-sdk/lib/sagemaker-spark-sdk.jar:/home/hadoop/extrajars/*
  spark.driver.extraLibraryPath: /usr/lib/hadoop/lib/native:/usr/lib/hadoop-lzo/lib/
native:/docker/usr/lib/hadoop/lib/native:/docker/usr/lib/hadoop-lzo/lib/native
  spark.executor.extraClassPath: /usr/lib/hadoop-lzo/lib/*:/usr/lib/hadoop/hadoop-
aws.jar:/usr/share/aws/aws-java-sdk/*:/usr/share/aws/emr/emrfs/conf:/usr/share/aws/
emr/emrfs/lib/*:/usr/share/aws/emr/emrfs/auxlib/*:/usr/share/aws/emr/security/conf:/
usr/share/aws/emr/security/lib/*:/usr/share/aws/hmclient/lib/aws-glue-datacatalog-
spark-client.jar:/usr/share/java/Hive-JSON-Serde/hive-openx-serde.jar:/usr/share/aws/
sagemaker-spark-sdk/lib/sagemaker-spark-sdk.jar:/home/hadoop/extrajars/*
  spark.executor.extraLibraryPath: /usr/lib/hadoop/lib/native:/usr/lib/hadoop-lzo/lib/
native:/docker/usr/lib/hadoop/lib/native:/docker/usr/lib/hadoop-lzo/lib/native
```


Amazon EMR on EKS サービスエンドポイントとサービスクォータ

Amazon EMR on EKS のサービスエンドポイントおよび Service Quotas を以下に示します。AWS のサービスにプログラムで接続するには、エンドポイントを使用します。標準の AWS エンドポイントに加えて、一部の AWS のサービスは選択されたリージョンで FIPS エンドポイントを提供します。詳細については、[AWS サービスエンドポイント](#) を参照してください。サービスクォータ (制限とも呼ばれます) は、AWS アカウントのサービスリソースまたはオペレーションの最大数です。詳細については、「[AWS のサービスクォータ](#)」を参照してください。

サービスエンドポイント

AWS リージョン 名	コード	エンドポイント	プロトコル
米国東部 (バージニア北部)	us-east-1	emr-containers.us-east-1.amazonaws.com	HTTPS
米国東部 (オハイオ)	us-east-2	emr-containers.us-east-2.amazonaws.com	HTTPS
米国西部 (北カリフォルニア)	us-west-1	emr-containers.us-west-1.amazonaws.com	HTTPS
米国西部 (オレゴン)	us-west-2	emr-containers.us-west-2.amazonaws.com	HTTPS
アジアパシフィック (東京)	ap-northeast-1	emr-containers.ap-northeast-1.amazonaws.com	HTTPS
アジアパシフィック (ソウル)	ap-northeast-2	emr-containers.ap-northeast-2.amazonaws.com	HTTPS
アジアパシフィック (ムンバイ)	ap-south-1	emr-containers.ap-south-1.amazonaws.com	HTTPS
アジアパシフィック (シンガポール)	ap-southeast-1	emr-containers.ap-southeast-1.amazonaws.com	HTTPS

AWS リージョン 名	コード	エンドポイント	プロトコル
アジアパシフィック (シドニー)	ap-southeast-2	emr-containers.ap-southeast-2.amazonaws.com	HTTPS
アジアパシフィック (香港)	ap-east-1	emr-containers.ap-east-1.amazonaws.com	HTTPS
カナダ (中部)	ca-central-1	emr-containers.ca-central-1.amazonaws.com	HTTPS
欧州 (フランクフルト)	eu-central-1	emr-containers.eu-central-1.amazonaws.com	HTTPS
ヨーロッパ (アイルランド)	eu-west-1	emr-containers.eu-west-1.amazonaws.com	HTTPS
欧州 (ロンドン)	eu-west-2	emr-containers.eu-west-2.amazonaws.com	HTTPS
欧州 (ストックホルム)	eu-north-1	emr-containers.eu-north-1.amazonaws.com	HTTPS
南米 (サンパウロ)	sa-east-1	emr-containers.sa-east-1.amazonaws.com	HTTPS
中東 (バーレーン)	me-south-1	emr-containers.me-south-1.amazonaws.com	HTTPS
AWS GovCloud (米国 東部)	us-gov-east-1	emr-containers.us-gov-east-1.amazonaws.com	HTTPS
AWS GovCloud (米国 西部)	us-gov-west-1	emr-containers.us-gov-west-1.amazonaws.com	HTTPS

Service Quotas

Amazon EMR on EKS は、各 リージョンごとに、各 AWS アカウントについて次の API リクエストをスロットリングします。スロットルの適用方法の詳細については、Amazon EC2 API リファレン

スの [API リクエストのロットリング](#)を参照してください。AWS アカウントの API スロットリングクォータの引き上げをリクエストできます。

API アクション	バケットの最大容量	バケットの補充レート/秒
CancelJobRun	25	1
CreateManagedEndpoint	25	1
CreateVirtualCluster	25	1
DeleteManagedEndpoint	25	1
DeleteVirtualCluster	25	1
DescribeJobRun	25	1
DescribeVirtualCluster	25	1
ListJobRun	25	1
ListManagedEndpoint	25	1
ListVirtualCluster	25	1
StartJobRun	25	1
At the AWS account level, the bucket maximum capacity and refill rate for the sum of all API actions listed in this table	50	7

Amazon EMR on EKS リリース

Amazon EMR リリースは、ビッグデータエコシステムからの一連のオープンソースのアプリケーションです。各リリースは異なるビッグデータアプリケーション、コンポーネント、および機能で構成され、ジョブを行うときに Amazon EMR on EKS でデプロイして設定することを選択します。

Amazon EMR リリース 5.32.0 および 6.2.0 以降で、Amazon EMR on EKS をデプロイできます。このデプロイオプションは、以前の Amazon EMR リリースバージョンでは使用できません。ジョブを送信するときに、サポートされているリリースバージョンを指定する必要があります。

Amazon EMR on EKSでは、次の形式のリリースラベルを使用します : `emr-x.x.x-latest` または `emr-x.x.x-yyyyymmdd` 特定のリリース日を指定します。例えば、`emr-6.14.0-latest`、`emr-6.14.0-20210129` などです。-latest サフィックスを使用すると、Amazon EMR のバージョンに常に最新のセキュリティアップデートが含まれるようになります。

Note

Amazon EMR on EKS と EC2 で実行されている Amazon EMR との比較については、AWS ウェブサイトで「[Amazon EMR に関するよくある質問](#)」を参照してください。

トピック

- [Amazon EMR on EKS 6.14.0 リリース](#)
- [Amazon EMR on EKS 6.13.0 リリース](#)
- [Amazon EMR on EKS 6.12.0 リリース](#)
- [Amazon EMR on EKS 6.11.0 リリース](#)
- [Amazon EMR on EKS 6.10.0 リリース](#)
- [Amazon EMR on EKS 6.9.0 リリース](#)
- [Amazon EMR on EKS 6.8.0 リリース](#)
- [Amazon EMR on EKS 6.7.0 リリース](#)
- [Amazon EMR on EKS 6.6.0 リリース](#)
- [Amazon EMR on EKS 6.5.0 リリース](#)
- [Amazon EMR on EKS 6.4.0 リリース](#)
- [Amazon EMR on EKS 6.3.0 リリース](#)
- [Amazon EMR on EKS 6.2.0 リリース](#)

- [Amazon EMR on EKS 5.36.0 リリース](#)
- [Amazon EMR on EKS 5.35.0 リリース](#)
- [Amazon EMR on EKS 5.34.0 リリース](#)
- [Amazon EMR on EKS 5.33.0 リリース](#)
- [Amazon EMR on EKS 5.32.0 リリース](#)

Amazon EMR on EKS 6.14.0 リリース

このページでは、Amazon EMR on EKS デプロイに固有の Amazon EMR の新しい機能と更新された機能について説明します。Amazon EC2 で実行されている Amazon EMR の詳細と Amazon EMR 6.14.0 リリース全般の詳細については、「Amazon EMR リリースガイド」の「[Amazon EMR 6.14.0](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS 6.14 リリース

Amazon EMR on EKS では、次の Amazon EMR 6.14.0 リリースが利用可能です。特定の emr-6.14.0-XXXX リリースを選択すると、関連するコンテナイメージタグなどの詳細が表示されます。

- [emr-6.14.0-latest](#)
- [emr-6.14.0-20231005](#)
- emr-6.14.0-spark-rapids-latest
- emr-6.14.0-spark-rapids-20231005
- emr-6.14.0-java11-latest
- emr-6.14.0-java11-20231005
- emr-6.14.0-java17-latest
- emr-6.14.0-java17-20231005
- emr-6.14.0-java17-al2023-latest
- emr-6.14.0-java17-al2023-20231005
- emr-6.14.0-spark-rapids-java17-latest
- emr-6.14.0-spark-rapids-java17-20231005
- emr-6.14.0-spark-rapids-java17-al2023-latest
- emr-6.14.0-spark-rapids-java17-al2023-20231005

- notebook-spark/emr-6.14.0-latest
- notebook-spark/emr-6.14.0-20231005
- notebook-spark/emr-6.14.0-spark-rapids-latest
- notebook-spark/emr-6.14.0-spark-rapids-20231005
- notebook-spark/emr-6.14.0-java11-latest
- notebook-spark/emr-6.14.0-java11-20231005
- notebook-spark/emr-6.14.0-java17-latest
- notebook-spark/emr-6.14.0-java17-20231005
- notebook-spark/emr-6.14.0-java17-al2023-latest
- notebook-spark/emr-6.14.0-java17-al2023-20231005
- notebook-python/emr-6.14.0-latest
- notebook-python/emr-6.14.0-20231005
- notebook-python/emr-6.14.0-spark-rapids-latest
- notebook-python/emr-6.14.0-spark-rapids-20231005
- notebook-python/emr-6.14.0-java11-latest
- notebook-python/emr-6.14.0-java11-20231005
- notebook-python/emr-6.14.0-java17-latest
- notebook-python/emr-6.14.0-java17-20231005
- notebook-python/emr-6.14.0-java17-al2023-latest
- notebook-python/emr-6.14.0-java17-al2023-20231005

リリースノート

Amazon EMR on EKS 6.14.0 のリリースノート

- サポートされているアプリケーション - AWS SDK for Java 1.12.543、Apache Spark 3.4.1-amzn-1、Apache Hudi 0.13.1-amzn-2、Apache Iceberg 1.3.0-amzn-0、Delta 2.4.0、Apache Spark RAPIDS 23.06.0-amzn-2、Jupyter Enterprise Gateway 2.7.0
- サポートされているコンポーネント - aws-sagemaker-spark-sdk、emr-ddb、emr-goodies、emr-s3-select、emrfs、hadoop-client、hudi、hudi-spark、iceberg、spark-kubernetes。
- サポートされている設定分類

[StartJobRun](#) API と [CreateManagedEndpoint](#) API で使用する 場合:

分類	説明
core-site	core-site.xml Hadoop ファイル内の値を変更します。
emrfs-site	EMRFS の設定を変更します。
spark-metrics	metrics.properties Spark ファイル内の値を変更します。
spark-defaults	spark-defaults.conf Spark ファイル内の値を変更します。
spark-env	Spark 環境の値を変更します。
spark-hive-site	hive-site.xml Spark ファイル内の値を変更します。
spark-log4j2	log4j2.properties Spark ファイル内の値を変更します。
emr-job-submitter	ジョブ送信者ポッドの設定 。

特に [CreateManagedEndpoint](#) API で使用する 場合:

分類	説明
jeg-config	Jupyter Enterprise Gateway jupyter_enterprise_gateway_config.py ファイルの値を変更します。
jupyter-kernel-overrides	Jupyter カーネル仕様ファイル内のカーネルイメージの値を変更します。

設定分類を使用すると、アプリケーションをカスタマイズできます。これらは多くの場合、spark-hive-site.xml などのアプリケーションの構成 XML ファイルに対応します。詳細については、「[アプリケーションの設定](#)」を参照してください。

注目すべき機能

Amazon EMR on EKS の 6.14 リリースには、以下の機能が含まれています。

- [Apache Livy](#) サポート - Amazon EMR on EKS では、spark-submit で Apache Livy をサポートするようになりました。

emr-6.14.0-latest

リリースノート: 現在 emr-6.14.0-latest が指しているのは emr-6.14.0-20231005 です。

リージョン: emr-6.14.0-latest は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-6.14.0:latest

emr-6.14.0-20231005

リリースノート: 6.14.0-20231005 は、2023 年 10 月 17 日にリリースされました。これは Amazon EMR 6.14.0 の初期リリースです。

リージョン: emr-6.14.0-20231005 は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-6.14.0:20231005

Amazon EMR on EKS 6.13.0 リリース

このページでは、Amazon EMR on EKS デプロイに固有の Amazon EMR の新しい機能と更新された機能について説明します。Amazon EC2 で実行されている Amazon EMR の詳細と Amazon

EMR 6.13.0 リリース全般の詳細については、「Amazon EMR リリースガイド」の「[Amazon EMR 6.13.0](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS 6.13 リリース

Amazon EMR on EKS では、次の Amazon EMR 6.13.0 リリースが利用可能です。特定の emr-6.13.0-XXXX リリースを選択すると、関連するコンテナイメージタグなどの詳細が表示されます。

- [emr-6.13.0-latest](#)
- [emr-6.13.0-20230814](#)
- emr-6.13.0-spark-rapids-latest
- emr-6.13.0-spark-rapids-20230814
- emr-6.13.0-java11-latest
- emr-6.13.0-java11-20230814
- emr-6.13.0-java17-latest
- emr-6.13.0-java17-20230814
- emr-6.13.0-java17-al2023-latest
- emr-6.13.0-java17-al2023-20230814
- emr-6.13.0-spark-rapids-java17-latest
- emr-6.13.0-spark-rapids-java17-20230814
- emr-6.13.0-spark-rapids-java17-al2023-latest
- emr-6.13.0-spark-rapids-java17-al2023-20230814
- notebook-spark/emr-6.13.0-latest
- notebook-spark/emr-6.13.0-20230814
- notebook-spark/emr-6.13.0-spark-rapids-latest
- notebook-spark/emr-6.13.0-spark-rapids-20230814
- notebook-spark/emr-6.13.0-java11-latest
- notebook-spark/emr-6.13.0-java11-20230814
- notebook-spark/emr-6.13.0-java17-latest
- notebook-spark/emr-6.13.0-java17-20230814
- notebook-spark/emr-6.13.0-java17-al2023-latest

- notebook-spark/emr-6.13.0-java17-al2023-20230814
- notebook-python/emr-6.13.0-latest
- notebook-python/emr-6.13.0-20230814
- notebook-python/emr-6.13.0-spark-rapids-latest
- notebook-python/emr-6.13.0-spark-rapids-20230814
- notebook-python/emr-6.13.0-java11-latest
- notebook-python/emr-6.13.0-java11-20230814
- notebook-python/emr-6.13.0-java17-latest
- notebook-python/emr-6.13.0-java17-20230814
- notebook-python/emr-6.13.0-java17-al2023-latest
- notebook-python/emr-6.13.0-java17-al2023-20230814

リリースノート

Amazon EMR on EKS 6.13.0 のリリースノート

- サポートされているアプリケーション - AWS SDK for Java 1.12.513、Apache Spark 3.4.1-amzn-0、Apache Hudi 0.13.1-amzn-0、Apache Iceberg 1.3.0-amzn-0、Delta 2.4.0、Apache Spark RAPIDS 23.06.0-amzn-1、Jupyter Enterprise Gateway 2.6.0.amzn
- サポートされているコンポーネント - aws-sagemaker-spark-sdk、emr-ddb、emr-goodies、emr-s3-select、emrfs、hadoop-client、hudi、hudi-spark、iceberg、spark-kubernetes。
- サポートされている設定分類

[StartJobRun](#) API と [CreateManagedEndpoint](#) API で使用する場合:

分類	説明
core-site	core-site.xml Hadoop ファイル内の値を変更します。
emrfs-site	EMRFS の設定を変更します。
spark-metrics	metrics.properties Spark ファイル内の値を変更します。

分類	説明
spark-defaults	spark-defaults.conf Spark ファイル内の値を変更します。
spark-env	Spark 環境の値を変更します。
spark-hive-site	hive-site.xml Spark ファイル内の値を変更します。
spark-log4j2	log4j2.properties Spark ファイル内の値を変更します。
emr-job-submitter	ジョブ送信者ポッドの設定 。

特に [CreateManagedEndpoint](#) API で使用する場合:

分類	説明
jeg-config	Jupyter Enterprise Gateway jupyter_enterprise_gateway_config.py ファイルの値を変更します。
jupyter-kernel-overrides	Jupyter カーネル仕様ファイル内のカーネルイメージの値を変更します。

設定分類を使用すると、アプリケーションをカスタマイズできます。これらは多くの場合、spark-hive-site.xml などのアプリケーションの構成 XML ファイルに対応します。詳細については、「[アプリケーションの設定](#)」を参照してください。

注目すべき機能

Amazon EMR on EKS の 6.13 リリースには、以下の機能が含まれています。

- Amazon Linux 2023 - Amazon EMR on EKS 6.13 以降では、AL2023 で Java 17 ランタイムと共に Spark をオペレーティングシステムとして起動できます。そのためには、名前に a12023 を含めたリリースラベルを使用します。例: emr-6.13.0-java17-a12023-latest。本番稼働用ワー

クロードを AL2023 と Java 17 に移行する前に、パフォーマンステストを検証して実行することをお勧めします。

- [Amazon EMR on EKS での Apache Flink の使用 \(パブリックプレビュー\)](#) - Amazon EMR on EKS は、リリース 6.13 以降、Apache Flink をサポートしており、パブリックプレビューで使用可能です。このリリースでは、Apache Flink ベースのアプリケーションを他のタイプのアプリケーションと共に同じ Amazon EKS クラスターで実行できます。これにより、リソース使用率が向上し、インフラストラクチャ管理が簡素化されます。Amazon EKS でビッグデータフレームワークを既に実行している場合は、Amazon EMR を使用してプロビジョニングと管理を自動化できるようになりました。

emr-6.13.0-latest

リリースノート: 現在 emr-6.13.0-latest が指しているのは emr-6.13.0-20230814 です。

リージョン: emr-6.13.0-latest は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-6.13.0:latest

emr-6.13.0-20230814

リリースノート: 6.13.0-20230814 は、2023 年 9 月 7 日にリリースされました。これは Amazon EMR 6.13.0 の初期リリースです。

リージョン: emr-6.13.0-20230814 は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-6.13.0:20230814

Amazon EMR on EKS 6.12.0 リリース

このページでは、Amazon EMR on EKS デプロイに固有の Amazon EMR の新しい機能と更新された機能について説明します。Amazon EC2 で実行されている Amazon EMR の詳細と Amazon EMR 6.12.0 リリース全般の詳細については、「Amazon EMR リリースガイド」の「[Amazon EMR 6.12.0](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS 6.12 リリース

Amazon EMR on EKS では、次の Amazon EMR 6.12.0 リリースが利用可能です。特定の emr-6.12.0-XXXX リリースを選択すると、関連するコンテナイメージタグなどの詳細が表示されます。

- [emr-6.12.0-latest](#)
- [emr-6.12.0-20230701](#)
- emr-6.12.0-spark-rapids-latest
- emr-6.12.0-spark-rapids-20230701
- emr-6.12.0-java11-latest
- emr-6.12.0-java11-20230701
- emr-6.12.0-java17-latest
- emr-6.12.0-java17-20230701
- emr-6.12.0-spark-rapids-java17-latest
- emr-6.12.0-spark-rapids-java17-20230701
- notebook-spark/emr-6.12.0-latest
- notebook-spark/emr-6.12.0-20230701
- notebook-spark/emr-6.12.0-spark-rapids-latest
- notebook-spark/emr-6.12.0-spark-rapids-20230701
- notebook-python/emr-6.12.0-latest
- notebook-python/emr-6.12.0-20230701
- notebook-python/emr-6.12.0-spark-rapids-latest
- notebook-python/emr-6.12.0-spark-rapids-20230701

リリースノート

Amazon EMR on EKS 6.12.0 のリリースノート

- サポートされているアプリケーション - AWS SDK for Java 1.12.490、Apache Spark 3.4.0-amzn-0、Apache Hudi 0.13.1-amzn-0、Apache Iceberg 1.3.0-amzn-0、Delta 2.4.0、Apache Spark RAPIDS 23.06.0-amzn-0、Jupyter Enterprise Gateway 2.6.0

- サポートされているコンポーネント - aws-sagemaker-spark-sdk、emr-ddb、emr-goodies、emr-s3-select、emrfs、hadoop-client、hudi、hudi-spark、iceberg、spark-kubernetes。
- サポートされている設定分類

[StartJobRun](#) API と [CreateManagedEndpoint](#) API で使用する場合:

分類	説明
core-site	core-site.xml Hadoop ファイル内の値を変更します。
emrfs-site	EMRFS の設定を変更します。
spark-metrics	metrics.properties Spark ファイル内の値を変更します。
spark-defaults	spark-defaults.conf Spark ファイル内の値を変更します。
spark-env	Spark 環境の値を変更します。
spark-hive-site	hive-site.xml Spark ファイル内の値を変更します。
spark-log4j2	log4j2.properties Spark ファイル内の値を変更します。
emr-job-submitter	ジョブ送信者ポッドの設定 。

特に [CreateManagedEndpoint](#) API で使用する場合:

分類	説明
jeg-config	Jupyter Enterprise Gateway jupyter_enterprise_gateway_config.py ファイルの値を変更します。

分類	説明
jupyter-kernel-overrides	Jupyter カーネル仕様ファイル内のカーネルイメージの値を変更します。

設定分類を使用すると、アプリケーションをカスタマイズできます。これらは多くの場合、spark-hive-site.xml などのアプリケーションの構成 XML ファイルに対応します。詳細については、「[アプリケーションの設定](#)」を参照してください。

注目すべき機能

Amazon EMR on EKS の 6.12 リリースには、以下の機能が含まれています。

- Java 17 - Amazon EMR on EKS 6.12 以降では、Spark を Java 17 ランタイムと共に起動できます。このためには、emr-6.12.0-java17-latest をリリースラベルとして渡します。本番稼働用ワークロードを以前のバージョンの Java イメージから Java 17 イメージに移行する前に、パフォーマンステストを検証して実行することをお勧めします。

emr-6.12.0-latest

リリースノート: 現在 emr-6.12.0-latest が指しているのは emr-6.12.0-20230701 です。

リージョン: emr-6.12.0-latest は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-6.12.0:latest

emr-6.12.0-20230701

リリースノート: 6.12.0-20230701 は、2023 年 7 月 1 日にリリースされました。これは Amazon EMR 6.12.0 の初期リリースです。

リージョン: emr-6.12.0-20230701 は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-6.12.0:20230701

Amazon EMR on EKS 6.11.0 リリース

このページでは、Amazon EMR on EKS デプロイに固有の Amazon EMR の新しい機能と更新された機能について説明します。Amazon EC2 で実行されている Amazon EMR の詳細と Amazon EMR 6.11.0 リリース全般の詳細については、「Amazon EMR リリースガイド」の「[Amazon EMR 6.11.0](#)」を参照してください。

Amazon EMR on EKS 6.11 リリース

Amazon EMR on EKS では、次の Amazon EMR 6.11.0 リリースが利用可能です。特定の emr-6.11.0-XXXX リリースを選択すると、関連するコンテナイメージタグなどの詳細が表示されます。

- [emr-6.11.0-latest](#)
- [emr-6.11.0-20230509](#)

- emr-6.11.0-spark-rapids-latest
- emr-6.11.0-spark-rapids-20230509
- emr-6.11.0-java11-latest
- emr-6.11.0-java11-20230509
- notebook-spark/emr-6.11.0-latest
- notebook-spark/emr-6.11.0-20230509
- notebook-python/emr-6.11.0-latest
- notebook-python/emr-6.11.0-20230509

リリースノート

Amazon EMR on EKS 6.11.0 のリリースノート

- サポートされているアプリケーション - AWS SDK for Java 1.12.446、Apache Spark 3.3.2-amzn-0、Apache Hudi 0.13.0-amzn-0、Apache Iceberg 1.2.0-amzn-0、Delta 2.2.0、Apache Spark RAPIDS 23.02.0-amzn-0、Jupyter Enterprise Gateway 2.6.0
- サポートされているコンポーネント - aws-sagemaker-spark-sdk、emr-ddb、emr-goodies、emr-s3-select、emrfs、hadoop-client、hudi、hudi-spark、iceberg、spark-kubernetes。

- サポートされている設定分類

[StartJobRun](#) API と [CreateManagedEndpoint](#) API で使用する場合:

分類	説明
core-site	core-site.xml Hadoop ファイル内の値を変更します。
emrfs-site	EMRFS の設定を変更します。
spark-metrics	metrics.properties Spark ファイル内の値を変更します。
spark-defaults	spark-defaults.conf Spark ファイル内の値を変更します。
spark-env	Spark 環境の値を変更します。
spark-hive-site	hive-site.xml Spark ファイル内の値を変更します。
spark-log4j	log4j.properties Spark ファイル内の値を変更します。

特に [CreateManagedEndpoint](#) API で使用する場合:

分類	説明
jeg-config	Jupyter Enterprise Gateway jupyter_enterprise_gateway_config.py ファイルの値を変更します。
jupyter-kernel-overrides	Jupyter カーネル仕様ファイル内のカーネルイメージの値を変更します。

設定分類を使用すると、アプリケーションをカスタマイズできます。これらは多くの場合、spark-hive-site.xml などのアプリケーションの構成 XML ファイルに対応します。詳細については、「[アプリケーションの設定](#)」を参照してください。

注目すべき機能

Amazon EMR on EKS の 6.11 リリースには、以下の機能が含まれています。

- [Amazon ECR Public Gallery 内の Amazon EMR on EKS ベースイメージ – カスタムイメージ機能](#)を使用する場合は、ベースイメージに用意されている必須の jar、設定、ライブラリを利用して、Amazon EMR on EKS とやり取りできます。ベースイメージは、[Amazon ECR Public Gallery](#) に収められるようになりました。
- [Spark コンテナログのローテーション](#) – Amazon EMR on EKS 6.11 は、Spark コンテナログのローテーションをサポートしています。この機能を有効にするには、StartJobRun API の MonitoringConfiguration オペレーション内で containerLogRotationConfiguration を使用します。rotationSize と maxFilestoKeep を設定すると、Amazon EMR on EKS の Spark ドライバーポッドとエグゼキューターポッドに保持されるログファイルの数とサイズを指定できます。詳細については、「[Spark コンテナログのローテーションを使用する](#)」を参照してください。
- Spark オペレータと spark-submit での Volcano サポート – Amazon EMR on EKS 6.11 では、[Spark オペレータ](#)と [spark-submit](#) で Volcano を Kubernetes カスタムスケジューラとして使用して、Spark ジョブを実行できます。ギャングスケジューリング、キュー管理、プリエンプション、フェアシェアスケジューリングなどの機能を使用すると、スケジューリングのスループットを高め、キャパシティを最適化できます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS で Apache Spark のカスタムスケジューラとして Volcano を使用する方法](#)」を参照してください。

emr-6.11.0-latest

リリースノート：現在 emr-6.11.0-latest が指しているのは emr-20230509 です。

リージョン: emr-6.11.0-latest は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-6.11.0:latest

emr-6.11.0-20230509

リリースノート: 6.11.0-20230509 は、2023 年 5 月 9 日にリリースされました。これは Amazon EMR 6.11.0 の初期リリースです。

リージョン: emr-6.11.0-20230509 は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-6.11.0:20230509

Amazon EMR on EKS 6.10.0 リリース

Amazon EMR on EKS では、次の Amazon EMR 6.10.0 リリースが利用可能です。特定の emr-6.10.0-XXXX リリースを選択すると、関連するコンテナイメージタグなどの詳細が表示されます。

- [emr-6.10.0-latest](#)
- [emr-6.10.0-20230624](#)
- [emr-6.10.0-20230421](#)
- [emr-6.10.0-20230403](#)
- [emr-6.10.0-20230220](#)
- emr-6.10.0-spark-rapids-latest
- emr-6.10.0-spark-rapids-20230624
- emr-6.10.0-spark-rapids-20230220
- emr-6.10.0-java11-latest
- emr-6.10.0-java11-20230624
- emr-6.10.0-java11-20230220
- notebook-spark/emr-6.10.0-latest
- notebook-spark/emr-6.10.0-20230624
- notebook-spark/emr-6.10.0-20230220
- notebook-python/emr-6.10.0-latest
- notebook-python/emr-6.10.0-20230624
- notebook-python/emr-6.10.0-20230220

Amazon EMR 6.10.0 のリリースノート

- サポートされているアプリケーション - AWS SDK for Java 1.12.397、Spark 3.3.1-amzn-0、Hudi 0.12.2-amzn-0、Iceberg 1.1.0-amzn-0、Delta 2.2.0
- サポートされているコンポーネント - aws-sagemaker-spark-sdk、emr-ddb、emr-goodies、emr-s3-select、emrfs、hadoop-client、hudi、hudi-spark、iceberg、spark-kubernetes。
- サポートされている設定分類：

[StartJobRun](#) API と [CreateManagedEndpoint](#) API で使用する場合:

分類	説明
core-site	Hadoop の core-site.xml ファイル内の値を変更します。
emrfs-site	EMRFS の設定を変更します。
spark-metrics	Spark の metrics.properties ファイル内の値を変更します
spark-defaults	Spark の spark-defaults.conf ファイル内の値を変更します
spark-env	Spark 環境の値を変更します。
spark-hive-site	Spark の hive-site.xml ファイル内の値を変更します
spark-log4j	Spark の log4j.properties ファイル内の値を変更します

特に [CreateManagedEndpoint](#) API で使用する場合:

分類	説明
jeg-config	Jupyter Enterprise Gateway <code>jupyter_enterprise_gateway_config.py</code> ファイルの値を変更します。
jupyter-kernel-overrides	Jupyter カーネル仕様ファイル内のカーネルイメージの値を変更します。

設定分類を使用すると、アプリケーションをカスタマイズできます。これらは多くの場合、`spark-hive-site.xml` などのアプリケーションの構成 XML ファイルに対応します。詳細については、「[アプリケーションの設定](#)」を参照してください。

注目すべき機能

- Spark オペレータ - Amazon EMR on EKS 6.10.0 以降では、Apache Spark の Kubernetes オペレータ (Spark オペレータ) を使用して、Spark アプリケーションを Amazon EMR リリースランタイムと共に独自の Amazon EKS クラスターにデプロイして管理できます。詳細については、「[Spark 演算子を使用して Spark ジョブを実行する](#)」を参照してください。
- Java 11 - Amazon EMR on EKS 6.10 以降では、Spark を Java 11 ランタイムと共に起動できます。このためには、`emr-6.10.0-java11-latest` をリリースラベルとして渡します。本番稼働用ワークロードを Java 8 イメージから Java 11 イメージに移行する前に、パフォーマンステストを検証して実行することをお勧めします。
- Amazon Redshift integration for Apache Spark の場合、Amazon EMR on EKS 6.10.0 は `minimal-json.jar` への依存をなくし、Spark に必要な `spark-redshift` 関連の jar (`spark-redshift.jar`、`spark-avro.jar`、`RedshiftJDBC.jar`) をエグゼキュタークラスパスに自動的に追加します。

変更

- EMRFS S3 に最適化されたコミッターを parquet、ORC、テキストベースの形式 (CSV や JSON など) でデフォルトで使用できるようになりました。

emr-6.10.0-latest

リリースノート: 現在 `emr-6.10.0-latest` が指しているのは `emr-6.10.0-20230624` です。

リージョン: `emr-6.10.0-latest` は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-6.10.0:latest`

emr-6.10.0-20230624

リリースノート: `6.10.0-20230624` は、2023 年 7 月 7 日にリリースされました。前回のリリースと比較すると、このバージョンは先ごろ更新された Amazon Linux パッケージと重要な修正で更新されています。

リージョン: `emr-6.10.0-20230624` は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-6.10.0:20230624`

emr-6.10.0-20230421

リリースノート: `6.10.0-20230421` は、2023 年 4 月 28 日にリリースされました。前回のリリースと比較すると、このバージョンは先ごろ更新された Amazon Linux パッケージと重要な修正で更新されています。

リージョン: `emr-6.10.0-20230421` は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-6.10.0:20230421`

emr-6.10.0-20230403

リリースノート: `6.10.0-20230403` は、2023 年 4 月 12 日にリリースされました。前回のリリースと比較すると、このバージョンは先ごろ更新された Amazon Linux パッケージと重要な修正で更新されています。

リージョン: `emr-6.10.0-20230403` は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-6.10.0:20230403`

emr-6.10.0-20230220

リリースノート: `emr-6.10.0-20230220` は、2023 年 2 月 20 日にリリースされました。これは Amazon EMR 6.10.0 の初期リリースです。

リージョン: `emr-6.10.0-20230220` は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-6.10.0:20230220`

Amazon EMR on EKS 6.9.0 リリース

Amazon EMR on EKS では、次の Amazon EMR 6.9.0 リリースが利用可能です。特定の `emr-6.9.0-XXXX` リリースを選択すると、関連するコンテナイメージタグなどの詳細が表示されます。

- [emr-6.9.0-latest](#)
- [emr-6.9.0-20221108](#)
- [emr-6.9.0-20221108](#)
- `emr-6.9.0-spark-rapids-latest`
- `emr-6.9.0-spark-rapids-20230624`
- `emr-6.9.0-spark-rapids-20221108`
- `notebook-spark/emr-6.9.0-latest`
- `notebook-spark/emr-6.9.0-20230624`
- `notebook-spark/emr-6.9.0-20221108`
- `notebook-python/emr-6.9.0-latest`
- `notebook-python/emr-6.9.0-20230624`
- `notebook-python/emr-6.9.0-20221108`

Amazon EMR 6.9.0 のリリースノート

- サポートされているアプリケーション - AWS SDK for Java 1.12.331、Spark 3.3.0-amzn-1、Hudi 0.12.1-amzn-0、Iceberg 0.14.1-amzn-0、Delta 2.1.0
- サポートされているコンポーネント - aws-sagemaker-spark-sdk、emr-ddb、emr-goodies、emr-s3-select、emrfs、hadoop-client、hudi、hudi-spark、iceberg、spark-kubernetes。
- サポートされている設定分類：

[StartJobRun](#) API と [CreateManagedEndpoint](#) API で使用する場合：

分類	説明
core-site	Hadoop の core-site.xml ファイルの値を変更します。
emrfs-site	EMRFS の設定を変更します。
spark-metrics	Spark の metrics.properties ファイルの値を変更します。
spark-defaults	Spark の spark-defaults.conf ファイルの値を変更します。
spark-env	Spark 環境の値を変更します。
spark-hive-site	Spark の hive-site.xml ファイルの値を変更します
spark-log4j	Spark の log4j.properties ファイルの値を変更します。

特に [CreateManagedEndpoint](#) API で使用する場合：

分類	説明
jeg-config	Jupyter Enterprise Gateway jupyter_enterprise_gateway_config.py ファイルの値を変更します。

分類	説明
jupyter-kernel-overrides	Jupyter カーネル仕様ファイル内のカーネルイメージの値を変更します。

設定分類を使用すると、アプリケーションをカスタマイズできます。これらは多くの場合、spark-hive-site.xml などのアプリケーションの構成 XML ファイルに対応します。詳細については、「[アプリケーションの設定](#)」を参照してください。

注目すべき機能

- Nvidia RAPIDS Accelerator for Apache Spark - Amazon EMR on EKS では、EC2 グラフィック処理ユニット (GPU) インスタンスタイプを使用して、Spark を加速化できます。RAPIDS Accelerator で Spark イメージを使用するには、リリースラベルとして emr-6.9.0-spark-rapids-latest を指定します。詳細については、[ドキュメントページ](#)を参照してください。
- Spark-Redshift コネクタ - Amazon Redshift integration for Apache Spark は、Amazon EMR リリース 6.9.0 以降に含まれています。以前はオープンソースツールであったこのネイティブインテグレーションは Spark コネクタと呼ばれるもので、これを使用して Apache Spark アプリケーションを構築することで、Amazon Redshift と Amazon Redshift Serverless 内のデータを読み書きできます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS での Amazon Redshift integration for Apache Spark の使用](#)」を参照してください。
- Delta Lake - [Delta Lake](#) は、オープンソースのストレージ形式であり、一貫性のあるトランザクション、一貫性のあるデータセット定義、スキーマ進化の変更、データミューテーションのサポートを備えたデータレイクを構築できます。詳細については、「[Using Delta Lake](#)」を参照してください。
- PySpark パラメータの変更 - インタラクティブエンドポイントでは、EMR Studio Jupyter Notebook で PySpark セッションに関連付けられている Spark パラメータを変更できるようになりました。詳細については、「[Modifying PySpark session parameters](#)」を参照してください。

解決された問題

- Spark on Amazon EMR バージョン 6.6.0、6.7.0、6.8.0 で DynamoDB コネクタを使用すると、テーブルから何を読み込んでも空の結果が返されます。この状況は、入力分割が空でないデータを参照している場合でも変わりません。Amazon EMR リリース 6.9.0 では、この問題が修正されています。

- Amazon EMR on EKS 6.8.0 では、[Apache Spark](#) を使用して生成された Parquet ファイルのメタデータにビルドハッシュが誤って入力されます。この問題のため、Amazon EMR on EKS 6.8.0 が生成した Parquet ファイルのメタデータバージョン文字列をツールで解析しようとする、ツールが失敗する場合があります。

既知の問題

- Amazon Redshift integration for Apache Spark を使用している場合に、time、timetz、timestamp、timestampz のいずれかにマイクロ秒の精度を Parquet 形式で設定していると、コネクタがその時間値を最も近いミリ秒値に四捨五入します。回避策として、テキストアンロード形式 unload_s3_format パラメータを使用してください。

emr-6.9.0-latest

リリースノート: 現在 emr-6.9.0-latest が指しているのは emr-6.9.0-20230624 です。

リージョン: emr-6.9.0-latest は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-6.9.0:latest

emr-6.9.0-20230624

リリースノート: emr-6.9.0-20230624 は、2023 年 7 月 7 日にリリースされました。これは Amazon EMR 6.9.0 の初期リリースです。

リージョン: emr-6.9.0-20230624 は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-6.9.0:20230624

emr-6.9.0-20221108

リリースノート: emr-6.9.0-20221108 は、2022 年 12 月 8 日にリリースされました。これは Amazon EMR 6.9.0 の初期リリースです。

リリース: `emr-6.9.0-20221108` は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリリースをご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-6.9.0:20221108`

Amazon EMR on EKS 6.8.0 リリース

Amazon EMR on EKS では、次の Amazon EMR 6.8.0 リリースが利用可能です。特定の `emr-6.8.0-XXXX` リリースを選択すると、関連するコンテナイメージタグなどの詳細が表示されます。

- [emr-6.8.0-latest](#)
- [emr-6.8.0-20230624](#)
- [emr-6.8.0-20221219](#)
- [emr-6.8.0-20220802](#)

Amazon EMR 6.8.0 のリリースノート

- サポートされているアプリケーション - AWS SDK for Java 1.12.170、Spark 3.3.0-amzn-0、Hudi 0.11.1-amzn-0、Iceberg 0.14.0-amzn-0。
- サポートされているコンポーネント - `aws-sagemaker-spark-sdk`、`emr-ddb`、`emr-goodies`、`emr-s3-select`、`emrfs`、`hadoop-client`、`hudi`、`hudi-spark`、`iceberg`、`spark-kubernetes`。
- サポートされている設定分類：

分類	説明
<code>core-site</code>	Hadoop の <code>core-site.xml</code> ファイルの値を変更します。
<code>emrfs-site</code>	EMRFS の設定を変更します。
<code>spark-metrics</code>	Spark の <code>metrics.properties</code> ファイルの値を変更します。
<code>spark-defaults</code>	Spark の <code>spark-defaults.conf</code> ファイルの値を変更します。

分類	説明
spark-env	Spark 環境の値を変更します。
spark-hive-site	Spark の hive-site.xml ファイルの値を変更します
spark-log4j	Spark の log4j.properties ファイルの値を変更します。

設定分類を使用すると、アプリケーションをカスタマイズできます。これらは多くの場合、spark-hive-site.xml などのアプリケーションの構成 XML ファイルに対応します。詳細については、「[アプリケーションの設定](#)」を参照してください。

注目すべき機能

- Spark3.3.0 - Amazon EMR on EKS 6.8 には、Spark 3.3.0 が含まれています。これにより、Spark ドライバーエグゼキュターポッドに個別のノードセクターラベルを使用できるようになりました。こうした新しいラベルを使用すると、ポッドテンプレートを使用しなくても StartJobRun API でドライバーポッドとエグゼキュターポッドのノードタイプを個別に定義できます。
- ドライバーノードセクタープロパティ: spark.kubernetes.driver.node.selector.[ラベルキー]
- エグゼキュターノードセクタープロパティ: spark.kubernetes.executor.node.selector.[ラベルキー]
- ジョブ失敗メッセージの充実 - このリリースでは、設定 spark.stage.extraDetailsOnFetchFailures.enabled と spark.stage.extraDetailsOnFetchFailures.maxFailuresToInclude が導入され、ユーザーコードによるタスク失敗を追跡できるようになりました。こうした設定の詳細な情報を使用すると、シャッフルフェッチの失敗によってステージが中止されたときにドライバーログに表示される失敗メッセージを充実させることができます。

プロパティ名	デフォルト値	意味	バージョン以降
spark.stage.extraDetailsOnFetchFailures	false	true に設定すると、このプロパティを使用して、シャッフルフェッチの失敗に	emr-6.8

プロパティ名	デフォルト値	意味	バージョン以降
<code>etchFailures.enabled</code>		<p>よってステージが中止されたときにドライバーログに表示されるジョブ失敗メッセージを充実させることができます。デフォルトでは、ユーザーコードによるタスク失敗のうち直近5件が追跡され、失敗エラーメッセージがドライバーログに追加されます。</p> <p>ユーザー例外で追跡できるタスク失敗の数を増やすには、設定 <code>spark.stage.extraDetailsOnFailure</code>、<code>etchFailures.maxFailuresToInclude</code> を参照してください。</p>	

プロパティ名	デフォルト値	意味	バージョン以降
spark.stage.extraDetailsOnFetchFailures.maxFailuresToInclude	5	<p>ステージおよび試行ごとに追跡できるタスク失敗の数。このプロパティを使用すると、シャッフルフェッチの失敗によってステージが中止されたときにドライバーログに表示されるジョブ失敗メッセージをユーザー例外で充実させることができます。</p> <p>このプロパティは、設定 spark.stage.extraDetailsOnFetchFailures.enabled が true に設定されている場合にのみ機能します。</p>	emr-6.8

詳細については、「[Apache Spark の設定ドキュメント](#)」を参照してください。

既知の問題

- Amazon EMR on EKS 6.8.0 では、[Apache Spark](#) を使用して生成された Parquet ファイルのメタデータにビルドハッシュが誤って入力されます。この問題のため、Amazon EMR on EKS 6.8.0 が生成した Parquet ファイルのメタデータバージョン文字列をツールで解析しようとする、ツールが失敗する場合があります。Parquet メタデータからバージョン文字列を解析し、ビルドハッシュに依存するお客様は、別の Amazon EMR バージョンに切り替えて、Parquet ファイルを書き換える必要があります。

解決された問題

- pySpark カーネルのカーネル割り込み機能 - ノートブックでセルを実行することでトリガーされるインタラクティブワークロードが進行中の場合、Interrupt Kernel 機能を使用して停止できます。pySpark カーネルに対してこの機能が動作するように修正が施されました。これは、「[PySpark Kubernetes カーネルの割り込み処理に関する変更 #1115](#)」でオープンソースでも使用可能です。

emr-6.8.0-latest

リリースノート: 現在 emr-6.8.0-latest が指しているのは emr-6.8.0-20230624 です。

リージョン: emr-6.8.0-latest は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-6.8.0:latest

emr-6.8.0-20230624

リリースノート: emr-6.8.0-20230624 は、2023 年 7 月 7 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンは先ごろ更新された Amazon Linux パッケージと重大な修正で更新されています。

リージョン: emr-6.8.0-20230624 は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンで使用可能です。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-6.8.0:20230624

emr-6.8.0-20221219

リリースノート: emr-6.8.0-20221219 は、2023 年 1 月 19 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンは先ごろ更新された Amazon Linux パッケージと重大な修正で更新されています。

リージョン: emr-6.8.0-20221219 は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンで使用可能です。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-6.8.0:20221219

emr-6.8.0-20220802

リリースノート: `emr-6.8.0-20220802` は、2022 年 9 月 27 日にリリースされました。これは Amazon EMR 6.8.0 の初期リリースです。

リージョン: `emr-6.8.0-20220802` は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-6.8.0:20220802`

Amazon EMR on EKS 6.7.0 リリース

Amazon EMR on EKS では、次の Amazon EMR 6.7.0 リリースが利用可能です。特定の `emr-6.7.0-XXXX` リリースを選択すると、関連するコンテナイメージタグなどの詳細が表示されます。

- [emr-6.7.0-latest](#)
- [emr-6.7.0-20230624](#)
- [emr-6.7.0-20221219](#)
- [emr-6.7.0-20220630](#)

Amazon EMR 6.7.0 のリリースノート

- サポートされているアプリケーション - Spark 3.2.1-amzn-0、Jupyter Enterprise Gateway 2.6、Hudi 0.11-amzn-0、Iceberg 0.13.1。
- サポートされるコンポーネント-aws-hm-client (Glue コネクタ)、aws-sagemaker-spark-sdk、emr-s3-select、emrfs、emr-ddb、hudi-spark。
- JEG 2.6 へのアップグレードにより、カーネル管理が非同期になりました。つまり、カーネルの起動中、JEG はトランザクションをブロックしません。この結果、以下の機能が利用できるようになり、ユーザーエクスペリエンスが大幅に向上しています。
 - 他のカーネルが起動中のときに現在実行中のノートブックでコマンドを実行できる機能
 - 既に実行中のカーネルに影響を与えることなく複数のカーネルを同時に起動できる機能
- サポートされている設定分類：

分類	説明
core-site	Hadoop core-site.xml ファイル内の値を変更します。
emrfs-site	EMRFS の設定を変更します。
spark-metrics	Spark metrics.properties ファイル内の値を変更します。
spark-defaults	Spark spark-defaults.conf ファイル内の値を変更します。
spark-env	Spark 環境の値を変更します。
spark-hive-site	Spark hive-site.xml ファイル内の値を変更します。
spark-log4j	Spark log4j.properties ファイル内の値を変更します。

設定分類を使用すると、アプリケーションをカスタマイズできます。これらは多くの場合、spark-hive-site.xml などのアプリケーションの構成 XML ファイルに対応します。詳細については、「[アプリケーションの設定](#)」を参照してください。

解決された問題

- Amazon EMR on EKS 6.7 では、インタラクティブエンドポイントで Apache Spark のポッドテンプレート機能を使用すると発生していた 6.6 の問題を修正しています。Amazon EMR on EKS リリース 6.4、6.5、6.6 でも、同じ問題が発生していました。インタラクティブエンドポイントを使用してインタラクティブな分析を実行するときに、ポッドテンプレートを使用して Spark ドライバーポッドとエグゼキューターポッドをどのように起動するかを定義できるようになりました。
- 以前の Amazon EMR on EKS リリースでは、カーネルの起動中は Jupyter Enterprise Gateway がトランザクションをブロックしていたため、現在実行中のノートブックセッションが阻害されていました。他のカーネルが起動中のときに、現在実行中のノートブックでコマンドを実行できるようになりました。

になりました。また、既に実行中のカーネルとの接続を失うことなく、複数のカーネルを同時に起動することもできます。

emr-6.7.0-latest

リリースノート: 現在 `emr-6.7.0-latest` が指しているのは `emr-6.7.0-20230624` です。

リージョン: `emr-6.7.0-latest` は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-6.7.0:latest`

emr-6.7.0-20230624

リリースノート: `emr-6.7.0-20230624` は、2023 年 7 月 7 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンは先ごろ更新された Amazon Linux パッケージと重大な修正で更新されています。

リージョン: `emr-6.7.0-20230624` は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-6.7.0:20230624`

emr-6.7.0-20221219

リリースノート: `emr-6.7.0-20221219` は、2023 年 1 月 19 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンは先ごろ更新された Amazon Linux パッケージと重大な修正で更新されています。

リージョン: `emr-6.7.0-20221219` は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-6.7.0:20221219`

emr-6.7.0-20220630

リリースノート: `emr-6.7.0-20220630` は、2022 年 7 月 12 日にリリースされました。これは Amazon EMR 6.7.0 の初期リリースです。

リリース: `emr-6.7.0-20220630` は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリリースをご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-6.7.0:20220630`

Amazon EMR on EKS 6.6.0 リリース

Amazon EMR on EKS では、次の Amazon EMR 6.6.0 リリースが利用可能です。特定の `emr-6.6.0-XXXX` リリースを選択すると、関連するコンテナイメージタグなどの詳細が表示されます。

- [emr-6.6.0-latest](#)
- [emr-6.6.0-20230624](#)
- [emr-6.6.0-20221219](#)
- [emr-6.6.0-20220411](#)

Amazon EMR 6.6.0 のリリースノート

- サポートされているアプリケーション - Spark 3.2.0-amzn-0、Jupyter Enterprise Gateway (エンドポイント、パブリックプレビュー)、Hudi 0.10.1-amzn-0、Iceberg 0.13.1。
- サポートされるコンポーネント-aws-hm-client (Glue コネクタ)、aws-sagemaker-spark-sdk、emr-s3-select、emrfs、emr-ddb、hudi-spark。
- サポートされている設定分類：

分類	説明
core-site	Hadoop の core-site.xml ファイルの値を変更します。
emrfs-site	EMRFS の設定を変更します。
spark-metrics	Spark の metrics.properties ファイルの値を変更します。
spark-defaults	Spark の spark-defaults.conf ファイルの値を変更します。

分類	説明
spark-env	Spark 環境の値を変更します。
spark-hive-site	Spark の hive-site.xml ファイルの値を変更します
spark-log4j	Spark の log4j.properties ファイルの値を変更します。

設定分類を使用すると、アプリケーションをカスタマイズできます。これらは多くの場合、spark-hive-site.xml などのアプリケーションの構成 XML ファイルに対応します。詳細については、「[アプリケーションの設定](#)」を参照してください。

既知の問題

- Amazon EMR on EKS リリース 6.4、6.5、6.6 では、インタラクティブエンドポイントで Spark ポッドテンプレート機能を使用できません。

解決された問題

- インタラクティブエンドポイントログが、Cloudwatch と S3 にアップロードされます。

emr-6.6.0-latest

リリースノート: 現在 emr-6.6.0-latest が指しているのは emr-6.6.0-20230624 です。

リージョン: emr-6.6.0-latest は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-6.6.0:latest

emr-6.6.0-20230624

リリースノート: emr-6.6.0-20230624 は、2023 年 1 月 27 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンは先ごろ更新された Amazon Linux パッケージと重大な修正で更新されています。

リリース: `emr-6.6.0-20230624` は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリリースをご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-6.6.0:20230624`

emr-6.6.0-20221219

リリースノート: `emr-6.6.0-20221219` は、2023 年 1 月 27 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンは先ごろ更新された Amazon Linux パッケージと重大な修正で更新されています。

リリース: `emr-6.6.0-20221219` は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリリースをご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-6.6.0:20221219`

emr-6.6.0-20220411

リリースノート: `emr-6.6.0-20220411` は、2022 年 5 月 20 日にリリースされました。これは Amazon EMR 6.6.0 の初期リリースです。

リリース: `emr-6.6.0-20220411` は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリリースをご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-6.6.0:20220411`

Amazon EMR on EKS 6.5.0 リリース

Amazon EMR on EKS では、次の Amazon EMR 6.5.0 リリースが利用可能です。特定の `emr-6.5.0-XXXX` リリースを選択すると、関連するコンテナイメージタグなどの詳細が表示されます。

- [emr-6.5.0-latest](#)
- [emr-6.5.0-20221219](#)
- [emr-6.5.0-20220802](#)
- [emr-6.5.0-20211119](#)

Amazon EMR 6.5.0 のリリースノート

- サポートされているアプリケーション - Spark 3.1.2-amzn-1、Jupyter Enterprise Gateway (エンドポイント、パブリックプレビュー)。
- サポートされるコンポーネント-aws-hm-client (Glue コネクタ)、aws-sagemaker-spark-sdk、emr-s3-select、emrfs、emr-ddb、hudi-spark。
- サポートされている設定分類：

分類	説明
core-site	Hadoop の core-site.xml ファイルの値を変更します。
emrfs-site	EMRFS の設定を変更します。
spark-metrics	Spark の metrics.properties ファイルの値を変更します。
spark-defaults	Spark の spark-defaults.conf ファイルの値を変更します。
spark-env	Spark 環境の値を変更します。
spark-hive-site	Spark の hive-site.xml ファイルの値を変更します
spark-log4j	Spark の log4j.properties ファイルの値を変更します。

設定分類を使用すると、アプリケーションをカスタマイズできます。これらは多くの場合、spark-hive-site.xml などのアプリケーションの構成 XML ファイルに対応します。詳細については、「[アプリケーションの設定](#)」を参照してください。

既知の問題

- Amazon EMR on EKS リリース 6.4 と 6.5 では、インタラクティブエンドポイントで Spark ポッドテンプレート機能を使用できません。

emr-6.5.0-latest

リリースノート: 現在 `emr-6.5.0-latest` が指しているのは `emr-6.5.0-20221219` です。

リージョン: `emr-6.5.0-latest` は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-6.5.0:latest`

emr-6.5.0-20221219

リリースノート: `emr-6.5.0-20221219` は、2023 年 1 月 19 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンは先ごろ更新された Amazon Linux パッケージと重大な修正で更新されています。

リージョン: `emr-6.5.0-20221219` は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-6.5.0:20221219`

emr-6.5.0-20220802

リリースノート: `emr-6.5.0-20220802` は、2022 年 8 月 24 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンは先ごろ更新された Amazon Linux パッケージで更新されています。

リージョン: `emr-6.5.0-20220802` は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-6.5.0:20220802`

emr-6.5.0-20211119

リリースノート: `emr-6.5.0-20211119` は、2022 年 1 月 20 日にリリースされました。これは Amazon EMR 6.5.0 の初期リリースです。

リージョン: `emr-6.5.0-20211119` は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-6.5.0:20211119`

Amazon EMR on EKS 6.4.0 リリース

Amazon EMR on EKS では、次の Amazon EMR 6.4.0 リリースが利用可能です。特定の `emr-6.4.0-XXXX` リリースを選択すると、関連するコンテナイメージタグなどの詳細が表示されます。

- [emr-6.4.0-latest](#)
- [emr-6.4.0-20221219](#)
- [emr-6.4.0-20210830](#)

Amazon EMR 6.4.0 のリリースノート

- サポートされているアプリケーション - Spark 3.1.2-amzn-0、Jupyter Enterprise Gateway (エンドポイント、パブリックプレビュー)。
- サポートされるコンポーネント-aws-hm-client (Glue コネクタ)、aws-sagemaker-spark-sdk、emr-s3-select、emrfs、emr-ddb、hudi-spark。
- サポートされている設定分類：

分類	説明
core-site	Hadoop の core-site.xml ファイルの値を変更します。
emrfs-site	EMRFS の設定を変更します。
spark-metrics	Spark の metrics.properties ファイルの値を変更します。
spark-defaults	Spark の spark-defaults.conf ファイルの値を変更します。
spark-env	Spark 環境の値を変更します。
spark-hive-site	Spark の hive-site.xml ファイルの値を変更します

分類	説明
spark-log4j	Spark の log4j.properties ファイルの値を変更します。

設定分類を使用すると、アプリケーションをカスタマイズできます。これらは多くの場合、spark-hive-site.xml などのアプリケーションの構成 XML ファイルに対応します。詳細については、「[アプリケーションの設定](#)」を参照してください。

既知の問題

- Amazon EMR on EKS リリース 6.4 では、インタラクティブエンドポイントで Spark ポッドテンプレート機能を使用できません。

emr-6.4.0-latest

リリースノート：現在 emr-6.4.0-latest が指しているのは emr-6.4.0-20221219 です。

リージョン: emr-6.4.0-latest は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-6.4.0:latest

emr-6.4.0-20221219

リリースノート: emr-6.4.0-20221219 は、2023 年 1 月 27 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンは先ごろ追加された Amazon Linux パッケージで更新されています。

リージョン: emr-6.4.0-20221219 は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-6.4.0:20221219

emr-6.4.0-20210830

リリースノート: `emr-6.4.0-20210830` は、2021 年 12 月 9 日にリリースされました。これは Amazon EMR 6.4.0 の初期リリースです。

リージョン: `emr-6.4.0-20210830` は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-6.4.0:20210830`

Amazon EMR on EKS 6.3.0 リリース

Amazon EMR on EKS では、次の Amazon EMR 6.3.0 リリースが利用可能です。特定の `emr-6.3.0-XXXX` リリースを選択すると、関連するコンテナイメージタグなどの詳細が表示されます。

- [emr-6.3.0-最新](#)
- [emr-6.3.0-20220802](#)
- [emr-6.3.0-20211008](#)
- [emr-6.3.0-20210802](#)
- [emr-6.3.0-20210429](#)

Amazon EMR 6.3.0 のリリースノート

- 新機能-6.x リリースシリーズの Amazon EMR 6.3.0 以降、Amazon EMR on EKS は Spark のポッドテンプレート機能をサポートしています。Amazon EMR on EKS の Spark イベントログローテーション機能をオンにすることもできます。詳細については、[ポッドテンプレートの使用](#) および [Spark イベントログのローテーションを使用する](#) を参照してください。
- サポートされているアプリケーション-Spark 3.1.1-amzn-0、Jupyter エンタープライズゲートウェイ (エンドポイント、パブリックプレビュー)。
- サポートされるコンポーネント-aws-hm-client (Glue コネクタ)、aws-sagemaker-spark-sdk、emr-s3-select、emrfs、emr-ddb、hudi-spark。
- サポートされている設定分類：

分類	説明
core-site	Hadoop の core-site.xml ファイルの値を変更します。
emrfs-site	EMRFS の設定を変更します。
spark-metrics	Spark の metrics.properties ファイルの値を変更します。
spark-defaults	Spark の spark-defaults.conf ファイルの値を変更します。
spark-env	Spark 環境の値を変更します。
spark-hive-site	Spark の hive-site.xml ファイルの値を変更します。
spark-log4j	Spark の log4j.properties ファイルの値を変更します。

設定分類を使用すると、アプリケーションをカスタマイズできます。これらは多くの場合、spark-hive-site.xml などのアプリケーションの構成 XML ファイルに対応します。詳細については、「[アプリケーションの設定](#)」を参照してください。

emr-6.3.0-最新

リリースノート: 現在 emr-6.3.0-latest が指しているのは emr-6.3.0-20220802 です。

リージョン: emr-6.3.0-latest は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-6.3.0:latest

emr-6.3.0-20220802

リリースノート: emr-6.3.0-20220802 は、2022 年 9 月 27 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンは先ごろ更新された Amazon Linux パッケージで更新されています。

リージョン: emr-6.3.0-20220802 は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-6.3.0:20220802

emr-6.3.0-20211008

リリースノート: emr-6.3.0-20211008 は、2021 年 12 月 9 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンには問題の修正とセキュリティ更新プログラムが含まれています。

リージョン: emr-6.3.0-20211008 は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-6.3.0:20211008

emr-6.3.0-20210802

リリースノート: emr-6.3.0-20210802 は、2021 年 8 月 2 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンには問題の修正とセキュリティ更新プログラムが含まれています。

リージョン: emr-6.3.0-20210802 は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-6.3.0:20210802

emr-6.3.0-20210429

リリースノート: emr-6.3.0-20210429 は2021 年 4 月 29 日にリリースされました。これは Amazon EMR 6.3.0 の初期リリースです。

リリース: `emr-6.3.0-20210429` は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリリースをご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-6.3.0:20210429`

Amazon EMR on EKS 6.2.0 リリース

Amazon EMR on EKS では、次の Amazon EMR 6.2.0 リリースが利用可能です。特定の `emr-6.2.0-XXXX` リリースを選択すると、関連するコンテナイメージタグなどの詳細が表示されます。

- [emr-6.2.0-最新](#)
- [emr-6.2.0-20220802](#)
- [emr-6.2.0-20211008](#)
- [emr-6.2.0-20210802](#)
- [emr-6.2.0-20210615](#)
- [emr-6.2.0-20210129](#)
- [emr-6.2.0-20201218](#)
- [emr-6.2.0-20201201](#)

Amazon EMR 6.2.0 のリリースノート

- サポートされているアプリケーション-Spark 3.0.1-amzn-0、Jupyter エンタープライズゲートウェイ (エンドポイント、パブリックプレビュー)。
- サポートされるコンポーネント-aws-hm-client (Glue コネクタ)、aws-sagemaker-spark-sdk、emr-s3-select、emrfs、emr-ddb、hudi-spark。
- サポートされている設定分類：

分類	説明
core-site	Hadoop の core-site.xml ファイルの値を変更します。
emrfs-site	EMRFS の設定を変更します。

分類	説明
spark-metrics	Spark の metrics.properties ファイルの値を変更します。
spark-defaults	Spark の spark-defaults.conf ファイルの値を変更します。
spark-env	Spark 環境の値を変更します。
spark-hive-site	Spark の hive-site.xml ファイルの値を変更します
spark-log4j	Spark の log4j.properties ファイルの値を変更します。

設定分類を使用すると、アプリケーションをカスタマイズできます。これらは多くの場合、spark-hive-site.xml などのアプリケーションの構成 XML ファイルに対応します。詳細については、「[アプリケーションの設定](#)」を参照してください。

emr-6.2.0-最新

リリースノート: 現在 emr-6.2.0-latest が指しているのは emr-6.2.0-20220802 です。

リージョン: emr-6.2.0-latest は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンで使用可能です。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-6.2.0:20220802

emr-6.2.0-20220802

リリースノート: emr-6.2.0-20220802 は、2022 年 9 月 27 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンは先ごろ更新された Amazon Linux パッケージで更新されています。

リージョン: emr-6.2.0-20220802 は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンで使用可能です。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-6.2.0:20220802`

emr-6.2.0-20211008

リリースノート: `emr-6.2.0-20211008` は、2021 年 12 月 9 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンには問題の修正とセキュリティ更新プログラムが含まれています。

リージョン: `emr-6.2.0-20211008` は、米国東部 (バージニア北部)、米国西部 (オレゴン)、アジアパシフィック (東京)、欧州 (アイルランド)、南米 (サンパウロ) の各リージョンでご利用いただけます。

コンテナイメージタグ: `emr-6.2.0:20211008`

emr-6.2.0-20210802

リリースノート: `emr-6.2.0-20210802` は、2021 年 8 月 2 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンには問題の修正とセキュリティ更新プログラムが含まれています。

リージョン: `emr-6.2.0-20210802` は、米国東部 (バージニア北部)、米国西部 (オレゴン)、アジアパシフィック (東京)、欧州 (アイルランド)、南米 (サンパウロ) の各リージョンでご利用いただけます。

コンテナイメージタグ: `emr-6.2.0:20210802`

emr-6.2.0-20210615

リリースノート: `emr-6.2.0-20210615` は、2021 年 6 月 15 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンには問題の修正とセキュリティ更新プログラムが含まれています。

リージョン: `emr-6.2.0-20210615` は、米国東部 (バージニア北部)、米国西部 (オレゴン)、アジアパシフィック (東京)、欧州 (アイルランド)、南米 (サンパウロ) の各リージョンでご利用いただけます。

コンテナイメージタグ: `emr-6.2.0:20210615`

emr-6.2.0-20210129

リリースノート : emr-6.2.0-20210129 2021 年 1 月 29 日にリリースされました。emr-6.2.0-20201218 と比較すると、このバージョンには問題の修正とセキュリティ更新プログラムが含まれています。

リージョン : emr-6.2.0-20210129 は、米国東部 (バージニア北部)、米国西部 (オレゴン)、アジアパシフィック (東京)、欧州 (アイルランド)、南米 (サンパウロ) の各リージョンでご利用いただけます。

コンテナイメージタグ: emr-6.2.0-20210129

emr-6.2.0-20201218

リリースノート : emr-6.2.0-20201218 は 2020 年 12 月 18 日にリリースされました。emr-6.2.0-20201201 と比較すると、このバージョンには問題の修正とセキュリティ更新プログラムが含まれています。

リージョン : emr-6.2.0-20201218 は、米国東部 (バージニア北部)、米国西部 (オレゴン)、アジアパシフィック (東京)、欧州 (アイルランド)、南米 (サンパウロ) の各リージョンでご利用いただけます。

コンテナイメージタグ: emr-6.2.0-20201218

emr-6.2.0-20201201

リリースノート : emr-6.2.0-20201201 2020 年 12 月 1 日にリリースされました。これは Amazon EMR 6.2.0 の初期リリースです。

リージョン : emr-6.2.0-20201201 は、米国東部 (バージニア北部)、米国西部 (オレゴン)、アジアパシフィック (東京)、欧州 (アイルランド)、南米 (サンパウロ) の各リージョンでご利用いただけます。

コンテナイメージタグ: emr-6.2.0-20201201

Amazon EMR on EKS 5.36.0 リリース

Amazon EMR on EKS では、次の Amazon EMR 5.36.0 リリースが利用可能です。特定の emr-5.36.0-XXXX リリースを選択すると、関連するコンテナイメージタグなどの詳細が表示されません。

- [emr-5.36.0-latest](#)
- [emr-5.36.0-20221219](#)
- [emr-5.36.0-20220620](#)
- [emr-5.36.0-20220525](#)

Amazon EMR 5.36.0 のリリースノート

- log4j2 のセキュリティ問題が修正されました。
- サポートされているアプリケーション - Spark 2.4.8-amzn-2、Jupyter Enterprise Gateway (エンドポイント、パブリックプレビュー、Scala カーネルはサポート対象外)、livy-0.7.1、fluentd-4.0.0。
- サポートされているコンポーネント - aws-hm-client、aws-sagemaker-spark-sdk、emr-ddb、emr-goodies、emr-kinesis、kerberos-server。
- サポートされている設定分類：

分類	説明
core-site	Hadoop の core-site.xml ファイルの値を変更します。
emrfs-site	EMRFS の設定を変更します。
spark-metrics	Spark の metrics.properties ファイルの値を変更します。
spark-defaults	Spark の spark-defaults.conf ファイルの値を変更します。
spark-env	Spark 環境の値を変更します。
spark-hive-site	Spark の hive-site.xml ファイルの値を変更します
spark-log4j	Spark の log4j.properties ファイルの値を変更します。

設定分類を使用すると、アプリケーションをカスタマイズできます。これらは多くの場合、spark-hive-site.xml などのアプリケーションの構成 XML ファイルに対応します。詳細については、「[アプリケーションの設定](#)」を参照してください。

emr-5.36.0-latest

リリースノート: 現在 emr-5.36.0-latest が指しているのは emr-5.36.0-20221219 です。

リージョン: emr-5.36.0-latest は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-5.36.0:latest

emr-5.36.0-20221219

リリースノート: emr-5.36.0-20221219 は、2023 年 1 月 27 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンは先ごろ更新された Amazon Linux パッケージで更新されています。

リージョン: emr-5.36.0-20221219 は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-5.36.0:20221219

emr-5.36.0-20220620

リリースノート: emr-5.36.0-20220620 は、2022 年 7 月 27 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンは先ごろ更新された Amazon Linux パッケージで更新されています。

リージョン: emr-5.36.0-20220620 は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-5.36.0:20220620

emr-5.36.0-20220525

リリースノート: `emr-5.36.0-20220525` は、2022 年 6 月 16 日にリリースされました。これは Amazon EMR 5.36.0 の初期リリースです。

リージョン: `emr-5.36.0-20220525` は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-5.36.0:20220525`

Amazon EMR on EKS 5.35.0 リリース

Amazon EMR on EKS では、次の Amazon EMR 5.35.0 リリースが利用可能です。特定の `emr-5.35.0-XXXX` リリースを選択すると、関連するコンテナイメージタグなどの詳細が表示されません。

- [emr-5.35.0-latest](#)
- [emr-5.35.0-20221219](#)
- [emr-5.35.0-20220802](#)
- [emr-5.35.0-20220307](#)

Amazon EMR 5.35.0 のリリースノート

- `log4j2` のセキュリティ問題が修正されました。
- サポートされているアプリケーション - Spark 2.4.8-amzn-1、Hudi 0.9.0-amzn-2、Jupyter Enterprise Gateway (エンドポイント、パブリックプレビュー、Scala カーネルはサポート対象外)。
- サポートされているコンポーネント - `aws-hm-client` (Glue コネクタ)、`aws-sagemaker-spark-sdk`、`emr-s3-select`、`emrfs`、`emr-ddb`、`hudi-spark`。
- サポートされている設定分類：

分類	説明
<code>core-site</code>	Hadoop の <code>core-site.xml</code> ファイルの値を変更します。

分類	説明
emrfs-site	EMRFS の設定を変更します。
spark-metrics	Spark の metrics.properties ファイルの値を変更します。
spark-defaults	Spark の spark-defaults.conf ファイルの値を変更します。
spark-env	Spark 環境の値を変更します。
spark-hive-site	Spark の hive-site.xml ファイルの値を変更します
spark-log4j	Spark の log4j.properties ファイルの値を変更します。

設定分類を使用すると、アプリケーションをカスタマイズできます。これらは多くの場合、spark-hive-site.xml などのアプリケーションの構成 XML ファイルに対応します。詳細については、「[アプリケーションの設定](#)」を参照してください。

emr-5.35.0-latest

リリースノート: 現在 emr-5.35.0-latest が指しているのは emr-5.35.0-20221219 です。

リージョン: emr-5.35.0-latest は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-5.35.0:latest

emr-5.35.0-20221219

リリースノート: emr-5.35.0-20221219 は、2023 年 1 月 27 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンは先ごろ更新された Amazon Linux パッケージで更新されています。

リリースノート: `emr-5.35.0-20221219` は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-5.35.0:20221219`

`emr-5.35.0-20220802`

リリースノート: `emr-5.35.0-20220802` は、2022 年 9 月 27 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンは先ごろ更新された Amazon Linux パッケージで更新されています。

リリースノート: `emr-5.35.0-20220802` は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-5.35.0:20220802`

`emr-5.35.0-20220307`

リリースノート: `emr-5.35.0-20220307` は、2022 年 3 月 30 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンは先ごろ更新された Amazon Linux パッケージで更新されています。

リリースノート: `emr-5.35.0-20220307` は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-5.35.0:20220307`

Amazon EMR on EKS 5.34.0 リリース

Amazon EMR on EKS では、次の Amazon EMR 5.34.0 リリースが利用可能です。特定の `emr-5.34.0-XXXX` リリースを選択すると、関連するコンテナイメージタグなどの詳細が表示されません。

- [emr-5.34.0-latest](#)
- [emr-5.34.0-20220802](#)

Amazon EMR 5.34.0 のリリースノート

- サポートされているアプリケーション - Spark 2.4.8-amzn-0、Jupyter Enterprise Gateway (エンドポイント、パブリックプレビュー、Scala カーネルはサポート対象外)。
- サポートされるコンポーネント-aws-hm-client (Glue コネクタ)、aws-sagemaker-spark-sdk、emr-s3-select、emrfs、emr-ddb、hudi-spark。
- サポートされている設定分類：

分類	説明
core-site	Hadoop の core-site.xml ファイルの値を変更します。
emrfs-site	EMRFS の設定を変更します。
spark-metrics	Spark の metrics.properties ファイルの値を変更します。
spark-defaults	Spark の spark-defaults.conf ファイルの値を変更します。
spark-env	Spark 環境の値を変更します。
spark-hive-site	Spark の hive-site.xml ファイルの値を変更します
spark-log4j	Spark の log4j.properties ファイルの値を変更します。

設定分類を使用すると、アプリケーションをカスタマイズできます。これらは多くの場合、spark-hive-site.xml などのアプリケーションの構成 XML ファイルに対応します。詳細については、「[アプリケーションの設定](#)」を参照してください。

emr-5.34.0-latest

リリースノート：現在 emr-5.34.0-latest が指しているのは emr-5.34.0-20220802 です。

リリース: `emr-5.34.0-latest` は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリリースをご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-5.34.0:latest`

emr-5.34.0-20220802

リリースノート: `emr-5.34.0-20220802` は、2022 年 8 月 24 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンは先ごろ更新された Amazon Linux パッケージで更新されています。

リリース: `emr-5.34.0-20220802` は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリリースをご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-5.34.0:20220802`

emr-5.34.0-20211208

リリースノート: `emr-5.34.0-20211208` は、2022 年 1 月 20 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンは先ごろ更新された Amazon Linux パッケージで更新されています。

リリース: `emr-5.34.0-20211208` は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリリースをご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-5.34.0:20211208`

Amazon EMR on EKS 5.33.0 リリース

Amazon EMR on EKS では、次の Amazon EMR 5.33.0 リリースが利用可能です。特定の `emr-5.33.0-XXXX` リリースを選択すると、関連するコンテナイメージタグなどの詳細が表示されません。

- [emr-5.33.0-最新](#)
- [emr-5.33.0-20221219](#)
- [emr-5.33.0-20220802](#)

- [emr-5.33.0-20211008](#)
- [emr-5.33.0-20210802](#)
- [emr-5.33.0-20210615](#)
- [emr-5.33.0-20210323](#)

Amazon EMR 5.33.0 のリリースノート

- 新機能-5.x リリースシリーズの Amazon EMR 5.33.0 以降、Amazon EMR on EKS は Spark のポッドテンプレート機能をサポートしています。詳細については、「[ポッドテンプレートの使用](#)」を参照してください。
- サポートされているアプリケーション - Spark 2.4.7-amzn-1、Jupyter Enterprise Gateway (エンドポイント、パブリックプレビュー、Scala カーネルはサポート対象外)。
- サポートされるコンポーネント-aws-hm-client (Glue コネクタ)、aws-sagemaker-spark-sdk、emr-s3-select、emrfs、emr-ddb、hudi-spark。
- サポートされている設定分類：

分類	説明
core-site	Hadoop の core-site.xml ファイルの値を変更します。
emrfs-site	EMRFS の設定を変更します。
spark-metrics	Spark の metrics.properties ファイルの値を変更します。
spark-defaults	Spark の spark-defaults.conf ファイルの値を変更します。
spark-env	Spark 環境の値を変更します。
spark-hive-site	Spark の hive-site.xml ファイルの値を変更します
spark-log4j	Spark の log4j.properties ファイルの値を変更します。

設定分類を使用すると、アプリケーションをカスタマイズできます。これらは多くの場合、spark-hive-site.xml などのアプリケーションの構成 XML ファイルに対応します。詳細については、「[アプリケーションの設定](#)」を参照してください。

emr-5.33.0-最新

リリースノート：現在 emr-5.33.0-latest が指しているのは emr-5.33.0-20221219 です。

リージョン: emr-5.33.0-latest は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-5.33.0:latest

emr-5.33.0-20221219

リリースノート: emr-5.33.0-20221219 は、2023 年 1 月 19 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンは先ごろ更新された Amazon Linux パッケージと重大な修正で更新されています。

リージョン: emr-5.33.0-20221219 は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-5.33.0:20221219

emr-5.33.0-20220802

リリースノート: emr-5.33.0-20220802 は、2022 年 8 月 24 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンは先ごろ更新された Amazon Linux パッケージで更新されています。

リージョン: emr-5.33.0-20220802 は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-5.33.0:20220802

emr-5.33.0-20211008

リリースノート: emr-5.33.0-20211008 は、2021 年 12 月 9 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンには問題の修正とセキュリティ更新プログラムが含まれています。

リージョン: emr-5.33.0-20211008 は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-5.33.0:20211008

emr-5.33.0-20210802

リリースノート: emr-5.33.0-20210802 は、2021 年 8 月 2 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンには問題の修正とセキュリティ更新プログラムが含まれています。

リージョン: emr-5.33.0-20210802 は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-5.33.0:20210802

emr-5.33.0-20210615

リリースノート: emr-5.33.0-20210615 は、2021 年 6 月 15 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンには問題の修正とセキュリティ更新プログラムが含まれています。

リージョン: emr-5.33.0-20210615 は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-5.33.0:20210615

emr-5.33.0-20210323

リリースノート: emr-5.33.0-20210323 は、2021 年 3 月 23 日にリリースされました。これは Amazon EMR 5.33.0 の初期リリースです。

リージョン: `emr-5.33.0-20210323` は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンでご利用いただけます。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-5.33.0-20210323`

Amazon EMR on EKS 5.32.0 リリース

Amazon EMR on EKS では、次の Amazon EMR 5.32.0 リリースが利用可能です。特定の `emr-5.32.0-XXXX` リリースを選択すると、関連するコンテナイメージタグなどの詳細が表示されます。

- [emr-5.32.0-最新](#)
- [emr-5.32.0-20220802](#)
- [emr-5.32.0-20211008](#)
- [emr-5.32.0-20210802](#)
- [emr-5.32.0-20210615](#)
- [emr-5.32.0-20210129](#)
- [emr-5.32.0-20201218](#)
- [emr-5.32.0-20201201](#)

Amazon EMR 5.32.0 のリリースノート

- サポートされているアプリケーション - Spark 2.4.7-amzn-0、Jupyter Enterprise Gateway (エンドポイント、パブリックプレビュー、Scala カーネルはサポート対象外)。
- サポートされるコンポーネント-aws-hm-client (Glue コネクタ)、aws-sagemaker-spark-sdk、emr-s3-select、emrfs、emr-ddb、hudi-spark。
- サポートされている設定分類：

分類	説明
core-site	Hadoop の core-site.xml ファイルの値を変更します。
emrfs-site	EMRFS の設定を変更します。

分類	説明
spark-metrics	Spark の metrics.properties ファイルの値を変更します。
spark-defaults	Spark の spark-defaults.conf ファイルの値を変更します。
spark-env	Spark 環境の値を変更します。
spark-hive-site	Spark の hive-site.xml ファイルの値を変更します
spark-log4j	Spark の log4j.properties ファイルの値を変更します。

設定分類を使用すると、アプリケーションをカスタマイズできます。これらは多くの場合、spark-hive-site.xml などのアプリケーションの構成 XML ファイルに対応します。詳細については、「[アプリケーションの設定](#)」を参照してください。

emr-5.32.0-最新

リリースノート: 現在 emr-5.32.0-latest が指しているのは emr-5.32.0-20220802 です。

リージョン: emr-5.32.0-latest は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンで使用可能です。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: emr-5.32.0:latest

emr-5.32.0-20220802

リリースノート: emr-5.32.0-20220802 は、2022 年 8 月 24 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンは先ごろ更新された Amazon Linux パッケージで更新されています。

リージョン: emr-5.32.0-20220802 は、Amazon EMR で EKS でサポートされているすべてのリージョンで使用可能です。詳細については、「[Amazon EMR on EKS サービスエンドポイント](#)」を参照してください。

コンテナイメージタグ: `emr-5.32.0:20220802`

emr-5.32.0-20211008

リリースノート: `emr-5.32.0-20211008` は、2021 年 12 月 9 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンには問題の修正とセキュリティ更新プログラムが含まれています。

リージョン: `emr-5.32.0-20211008` は、米国東部 (バージニア北部)、米国西部 (オレゴン)、アジアパシフィック (東京)、欧州 (アイルランド)、南米 (サンパウロ) の各リージョンでご利用いただけます。

コンテナイメージタグ: `emr-5.32.0:20211008`

emr-5.32.0-20210802

リリースノート: `emr-5.32.0-20210802` は、2021 年 8 月 2 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンには問題の修正とセキュリティ更新プログラムが含まれています。

リージョン: `emr-5.32.0-20210802` は、米国東部 (バージニア北部)、米国西部 (オレゴン)、アジアパシフィック (東京)、欧州 (アイルランド)、南米 (サンパウロ) の各リージョンでご利用いただけます。

コンテナイメージタグ: `emr-5.32.0:20210802`

emr-5.32.0-20210615

リリースノート: `emr-5.32.0-20210615` は、2021 年 6 月 15 日にリリースされました。前回のバージョンと比較すると、このバージョンには問題の修正とセキュリティ更新プログラムが含まれています。

リージョン: `emr-5.32.0-20210615` は、米国東部 (バージニア北部)、米国西部 (オレゴン)、アジアパシフィック (東京)、欧州 (アイルランド)、南米 (サンパウロ) の各リージョンでご利用いただけます。

コンテナイメージタグ: `emr-5.32.0:20210615`

emr-5.32.0-20210129

リリースノート : emr-5.32.0-20210129 2021 年 1 月 29 日にリリースされました。emr-5.32.0-20201218 と比較すると、このバージョンには問題の修正とセキュリティ更新プログラムが含まれています。

リージョン : emr-5.32.0-20210129 は、米国東部 (バージニア北部)、米国西部 (オレゴン)、アジアパシフィック (東京)、欧州 (アイルランド)、南米 (サンパウロ) の各リージョンでご利用いただけます。

コンテナイメージタグ: emr-5.32.0-20210129

emr-5.32.0-20201218

リリースノート : 5.32.0-20201218 2020 年 12 月 18 日にリリースされました。5.32.0-20201201 と比較すると、このバージョンには問題の修正とセキュリティ更新プログラムが含まれています。

リージョン : emr-5.32.0-20201218 は、米国東部 (バージニア北部)、米国西部 (オレゴン)、アジアパシフィック (東京)、欧州 (アイルランド)、南米 (サンパウロ) の各リージョンでご利用いただけます。

コンテナイメージタグ: emr-5.32.0-20201218

emr-5.32.0-20201201

リリースノート : 5.32.0-20201201 2020 年 12 月 1 日にリリースされました。これは Amazon EMR 5.32.0 の初期リリースです。

リージョン : 5.32.0-20201201d は、米国東部 (バージニア北部)、米国西部 (オレゴン)、アジアパシフィック (東京)、欧州 (アイルランド)、南米 (サンパウロ) の各リージョンでご利用いただけます。

コンテナイメージタグ: emr-5.32.0-20201201

ドキュメント履歴

次の表に、EKS での Amazon EMR の前回のリリース以後に行われたドキュメントの重要な変更を示します。このドキュメントの更新情報は、RSS フィードに加入して取得できます。

変更	説明	日付
新規リリース	Amazon EMR on EKS 6.14.0 リリース 、および EKS での Amazon EMR を使用した Flink ジョブの実行 のパブリックプレビュードキュメント	2023 年 10 月 17 日
更新内容	「マネージドエンドポイント」の名前を インタラクティブエンドポイント、インタラクティブエンドポイントの一般提供に変更	2023 年 9 月 29 日
新規リリース	Amazon EMR on EKS 6.13.0 リリース 、および EKS での Amazon EMR を使用した Flink ジョブの実行 のパブリックプレビュードキュメント	2023 年 9 月 12 日
新規リリース	Amazon EMR on EKS 6.12.0 リリース	2023 年 7 月 21 日
新しいコンテンツ	「 Amazon EMR on EKS で Apache Spark のカスタムスケジューラとして Volcano を使用する方法 」を追加	2023 年 6 月 13 日
新しいコンテンツ	「 Amazon EMR on EKS で Apache Spark のカスタムスケジューラとして Volcano を使用する方法 」を追加	2023 年 6 月 13 日
新しいコンテンツ	「 Spark コンテナログのローテーションを使用する 」を追加	2023 年 6 月 12 日
更新内容	Amazon ECR Public Gallery でベースイメージ情報を検索するための カスタムイメージのドキュメント を更新しました。	2023 年 6 月 8 日

変更	説明	日付
新規リリース	Amazon EMR on EKS 6.11.0 リリース	2023 年 6 月 8 日
新しいコンテンツ	Amazon EMR on EKS でのジョブの実行に Spark 演算子を使用して Spark ジョブを実行する を追加し、「Job Runs」セクション再編成しました。	2023 年 6 月 5 日
新しいコンテンツ	「 Amazon EMR Spark ジョブで垂直的自動スケーリングを使用する 」セクションと「 セルフホスト型 Jupyter Notebook を使用する 」セクションを追加しました。	2023 年 5 月 4 日
ドキュメント履歴ページ	EKS での Amazon EMR のドキュメント履歴ページを作成しました。	2023 年 3 月 13 日
マネージドポリシーのページ	EKS での Amazon EMR のマネージドポリシーのページを作成しました。	2023 年 3 月 13 日